

コズミックプリキュアS

k—suke

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

pixivで投稿していました作品で、コズミックプリキュア及びそのAfter Storyの続編です。

コズミックプリキュアのおかげで平和になった世界ですが、密かに何かが動き始めていました。

そして、そこには新たな光もまた…

いろんな特撮やヒーローが混じっていますのでよかつたら探して見てください。

目次

第1話	新たなる闇 (前編)	1
第2話	新たなる闇 (後編)	15
第3話	大逆転!! プリキュア復活 (前編)	25
第4話	大逆転!! プリキュア復活 (後編)	34
第5話	誕生 光の新戦士 (前編)	48
第6話	誕生 光の新戦士 (後編)	61
第7話	その名に思いを (前編)	71
第8話	その名に思いを (後編)	83
第9話	強さの意味 (前編)	92
第10話	強さの意味 (後編)	104
第11話	新必殺ブレストフラッシャー (前編)	117
第12話	新必殺ブレストフラッシャー (後編)	127
第13話	スクラップの反乱 (前編)	137
第14話	スクラップの反乱 (後編)	150
第15話	誕生、ストレス女王 (前編)	160
第16話	誕生、ストレス女王 (後編)	173
第17話	灼熱の冬 (前編)	190
第18話	灼熱の冬 (後編)	198
第19話	まさに奇跡!! 魔法との幸福? な出会い (前編)	211
第20話	まさに奇跡!! 魔法との幸福? な出会い (後編)	223
第21話	蘇る悪夢、プリキュア絶体絶命 (前編)	234
第22話	蘇る悪夢、プリキュア絶体絶命 (後編)	248
第23話	繋がる絆と受け継ぐ思い (前編)	257
第24話	繋がる絆と受け継ぐ思い (後編)	269

第25話	輝け!!	シャイニーダイヤモンド(前編)	278
第26話	輝け!!	シャイニーダイヤモンド(後編)	287
第27話	暗黒学習教室(前編)		304
第28話	暗黒学習教室(後編)		314
第29話	太陽が消える日(前編)		328
第30話	太陽が消える日(後編)		339
第31話	絶望からの大逆転(前編)		348
第32話	絶望からの大逆転(後編)		356
第33話	死を招くメロデー(前編)		373
第34話	死を招くメロデー(後編)		384
第35話	強く、気高く、恐ろしく(前編)		394
第36話	強く、気高く、恐ろしく(後編)		407
第37話	ライバル大激突(前編)		418
第38話	ライバル大激突(後編)		428
最終話	闇の滅ぶ日		443

第1話 新たなる闇（前編）

カナダ 某研究所

「この主任研究員が上司と話し合っていた。

「…それではやっぱりこれの開発は中止、ということですか」

「うむ。いろいろと掛け合ってはみたものの、君の父上が開発したものをうまく応用したほうが、コスト面その他効率がいいということになった」

「それはわかります。今や父の作ったあれは世界中で配備されようかという話が出ています。レスキュー用のみならず治安維持を目的として警察にも配備を検討する話も出ていることも知っていますから…」

「そうだ。それにこいつはあまりいい目で見られていないのだよ。なんせ、二年前に一度あいつらに奪われたものだろう。残っていたデータからここまで再開発し、試作機を作成できた君の力には感心するが、やはりね…」

「…わかりました。ただなんせ外見がこれですので、ただ廃棄するかえって問題になりそうです。処分は私に一任させていただけますか？」

「うむ、任せる。じゃあ頼むよ、遠藤央介くん」

「そう言い残して出て行った上司を見送ると、その主任研究者 遠藤央介は目の前の大型カプセルに横たわっていたものに優しく語りか

けた。

央介「…ごめんな。私達の都合で作っておいて、今また私達の都合で一度も目覚めることなく廃棄することになるとは…」

悲しげにそう謝ると、ふとあることを思いついた。

央介「そうだ。廃棄するんじゃないでなくて、何かの形で役立ててもらおう。そうだよ、父さんなら変なことに使わないだろう。なんせ、あの子達を作って世界を救った立役者なんだから…」

彼、遠藤央介が語りかけていたカプセルに横たわっていたもの。

それは、透けるような白い肌をしたプラチナブロンドのロングヘアといった姿の、中学生ぐらいの年齢の少女だった…

日本 某県 甲子市 童夢小学校

平凡で退屈な、それでいてそれなりに幸せな、ごくごく普通の日が今日も終わりを告げ、多くの生徒達が下校し始めていた。

そんな中、息急ぎ切って走る一人の少年がいた。

この少年の名は速田^{そくだ} 豪^{ごう}

この童夢小学校の六年生である。

豪は、前を歩いている少女を呼びながら駆け寄った。

豪「あつ、おいラン!! 待ってくれよ」

ラン「あら豪。何よ」

この少女は遠藤^{えんどう} ラン。

この二人は同学年のいとこ同士なのである。

豪「何じゃねえよ。頼むよ、宿題教えてくれよ。算数苦手なんだよ」
手を合わせて必死に頼みこんでいた豪だが、

ラン「いやよ。そう言っただけでも結局私の答えを写すだけじゃない。たまにはきちんと自分でやんなさい」

けんもほろろに断られてしまった。

豪「う… そりやそうだけど、頼むよ今度のサッカーの試合の練習があるからさ時間ねえんだ。なっこの通り」

ラン「だーめ。それならなおさらよ。サッカーの試合なんて自分の決めた目標なんだから、自分の力で精一杯努力しなさい。リーフさんやダイーダさんに恥ずかしくないの」

豪「うぐ…」

リーフとダイーダ

二年前、この世界にやってきた精霊の国の特別警備隊員コズミック
プリキュア

この世界を暗黒に染めあげようとした次元皇帝パーフェクトの一味と戦った戦士である。

当時共に戦い、刑事や医者になるという将来の目標のきっかけにもなったこの二人にとって、その名前は最後通牒に等しいものであり、それを出されてしまった豪はぐうの音も出なくなった。

その後、遠方でサイレンの音がけたたましく響いたのが二人の耳に届いた。

ラン「何？ またなの」

豪「行ってみようぜ」

現場には、パトカーや救急車・消防車が駆けつけ、パワードスーツのようなものを着込んだ救助隊員が、建物の中に閉じ込められた人の救助に当たるとともに、消火作業に当たっていた。

そしてそんなビルの周りは野次馬で溢れており、皆がざわざわと話し合っていた。

「ビルのオーナーがバラバラの死体で見つかったってな」

「なんでもこのビルのオーナー、借金で首が回らなかつたらしいから自殺じゃないかって」

「でもだからって、それでガス爆発での自殺なんてするか？ それにこれで今月になってもう3件目だぜ」

ラン「また爆発事故… なんか変よね」

豪「うん。こないだは子供が交通事故で死んだ人で… その前は公園のホームレス。自殺しそうな人だったというのはわかるけど…」

「確かにな。ただの自殺ならわからなくもないが、爆発自殺ってのが気になってな」

ラン「あっ」

豪「河内警部」

後ろでした声に振り向くとそこには、一人の中年の刑事が立っていた。

この河内警部はこの二人 正確には二人の祖父とちよつとした因縁がある刑事であり、彼もまたコズミックプリキユアと共に戦ってくれた一人である。

河内「二人とも元気そうだな」

豪「ええ、まあ」

ラン「おかげさまでね」

どこがつっけんどんな二人にもめげず、河内警部は二人に尋ねた。

河内「なあおい。遠藤博士は研究所にいるのか？」

その言葉にランは敏感に反応した。

ラン「何よ。また何か用なの!!」

河内「落ち着け、変なことじゃない。ちよつと内密に話をしたいことがあるんだ」

ラン「…でも、ちよつと今日は…」

豪「…だよなあ」

どうにも歯切れの悪いこの二人に、河内警部は首を傾げた。

河内「ん？ 何か都合が悪いのか？」

ラン「んゝまあ、河内警部なら事情は知ってるし… じゃあお互い

内密にということなら」

豪「まあいいよな」

河内「そ、そうか約束しよう。二人とも俺の車に乗れ。送ってやる」
そうして話がまとまったとき、一人の若い女刑事が息を切らせてやってきた。

「警部どの、また勝手な行動を…。きちんと報告を行ってからにしてください」

そんな彼女を見て、河内警部はうつとおしそうに顔をしかめた。

河内「いちいち細かいな。刑事なんてもんは現場の判断最優先だ。上の命令を聞いてからじゃ手遅れになることが多いと俺の感が言っている」

「そういうことではありません!! ただでさえ最近では警察に対する風当たりがキツイんですから。あまり無茶なことをしてはマスコミに叩かれます!! 大体なんですか、事件の最中に子供と行動をしようなんて!! そんなことで本当に警察官としての職務が務まると…」

河内「あーもう、だったらお前も一緒に来い。それで告げ口でもなんでもしろ」

一連のやりとりを見て、豪が河内警部に素朴な疑問をぶつけた。

豪「ねえ、この女の人も刑事さん?」

河内「ああ、満根まんね 志夜しや。一応俺の後輩にあたるが、体のいいお目付役だ」

ラン「そりやいいじゃない!! ぴったりだわ」

ランは手を叩いて喜んだが、河内警部は不満げだった。

河内「俺の身にもなれ。いちいちやることなすこと口うるさく言われるんだぞ、面倒くさくてたまらん」

志夜「何言ってるんです!! 警察官とは立派な公務員、国民の皆さんの収めた税金で活動しているのですから、その取り扱いや行動は極めて厳格かつルールに則って…」

くどくどと説教くさいことをしゃべりまくる志夜に豪もひきつっていた。

豪「確かにめんどくさいね、こりゃ…」

同市内にある海に面した崖の上。どこかおかしなデザインをした、少し大きめの一軒家が建っていた。

ここがランの自宅でもある、遠藤平和科学研究所である。

「だからして……ここにこう配線したから……するとここのプログラムを…」

その研究所内で一人の初老の男性がタブレットを操作しつつ、ブツブツとつぶやいていた。

この人がランと豪の祖父でもあり、この研究所の唯一の所員にして所長、遠藤 博 博士である。

遠藤「ふーむ、また爆発事故か… 妙なことの前兆でなければいいんじゃないかな…」

つけていたテレビのニュース速報に一抹の不安を抱えながらも、再びタブレットを操作し、何かの機械のデータの調整を行っていた。

ラン「おじいちゃんただいま」

豪「ヤッホーじいちゃん」

そんな中、ランが帰宅し、豪が元気良く入ってきた。

遠藤「おお、ラン帰ったか。豪も一緒か」

ラン「あ… うん… 私たちだけじゃないけど…」

遠藤「あん？」

言いにくそうにしていたランの後ろから、河内警部がヌーッと顔を出してきた。

河内「遠藤博士、邪魔するぞ」

遠藤「げっ… 河内。何の用じゃ」

いやそうに顔をしかめた遠藤博士に、河内警部も気分が悪そうに返した。

河内「何だその嫌そうな顔は？ まさか、またなんかまずいことをごまかしたりやせんだろうな!!」

河内警部のその言葉に、志夜は敏感に反応した。

志夜「なんですすって!?! 警部どの、どうして放置しておくんですか？ 直ちに任意同行の上、場合によっては令状を…」

遠藤「人聞きの悪いことを言うな!! まるでわしが前科者みたいに聞こえるではないか!! そっちの人もじゃ、わしは世間に顔向け出来んようなことは金輪際ないぞ!!」

河内「よく言う。結果的に犯罪にならなくて済んだというだけだろうが。パワードスーツの特許をとってかなりの金を稼げてるようだが、前みたいにならんようきちんと税理士でも雇ったらどうです？
いつまでも一人でやっとならんと」

そう、先ほど災害現場で活躍していたパワードスーツはこの遠藤博士の設計であり、それによりかなりの額が特許使用料として遠藤博士には入ってきている。

無論、本来それに伴い税理士などを雇うべきなのだろうが…

ラン「…それ言わないでよ。この家やら何やらの税金もすごいし、借金も返さなくちやいけないし、何よりおじいちゃんが無駄遣いするからあんまり前と生活レベル変わんないのよ。とてもじゃないけどプロになんて頼めないわ」

がつくりと肩を落としながらランがそう答えた。

豪「たまくに、ここで働きたいって人も来るけど、じいちゃんについてけなくてすぐやめちゃうし。三日持ったのが最長記録だっけ」
それに乗っかるように豪もまた小馬鹿にするように続けた。

遠藤「コラーツ!! お主らそれが自分の祖父に対する言葉か!! わしを何だと思つとるんじゃ!!」

河内「その程度ということなんでしょうな。全く、身内からもまともな尊敬されんとは、これが世界を救った科学者かね」

呆れたような河内警部の言葉に、遠藤博士は怒鳴り散らした。

遠藤「やかましい!! だいたいお主はいったい何の用できたんじや!?!」

河内「ああ、そうだった。実はだ…」

遠藤博士の叫びに、本来の目的を思い出した河内警部が真剣な顔つきで話し始めた。

河内「あんたのあのパワードスーツ。コズミックプリキュアのボディがベースなのは知ってるが、戦闘用に改修したりすることはできるのか？ あの二人が戦えたように」

遠藤「何!？」

ラン「えっ!？」

豪「どういうこと？」

河内「あ、いや、うーむ。いや実はな」

志夜「何を言い出すつもりですか!! それは極秘事項としてくれぐれも他言無用にと…」

ガミガミやり始めた志夜を手で制止して河内警部は続けた。

河内「俺は何も話さん。これから独り言を言うだけだ、聞こえなかつたらそれでいい」

豪「はあ…」

そう言いおいて河内警部は話し始めた。

河内「今月に入つてすでに3件爆発事故が起こっているが、ただの爆発事故や自殺じゃないらしいんでな、独り言だが…」

遠藤「何い？」

河内「現場検証の結果、爆発したのが被害者本人というのがわかったが、死体の状況からだどう考えても被害者の内部から爆発してい

るとのことだ」

豪「えっ？ そんなことテレビで言ってたっけ？」

遠藤「おそらく妙な事態ということで、報道管制を敷いとるんじゃない。おそらく警察内部でも他言無用にと言われとるんじゃないやろうな。独り言じゃが」

河内「はつきり言つて人間業とは思えん。何らかのトリックだというやつもいるが、俺はどうも臭いと睨んでる。常識はずれの行動、人の命を命とも思わんやつ。嫌な予感がするんでな」

豪「まさか、D r. フライがまたなんか企んでるっての？ でもあいつ捕まってるんじゃない？ ああ、俺も独り言ね」

D r. フライ 遠藤博士の旧友であり、かつて次元皇帝パーフェクトと手を組み地球全土を暗黒世界に染め上げようとしたマッドサイエンティストである。

ゴズミックプリキュアに敗れ、どことも知れぬ場所に幽閉されているらしいが、詳細については今なお公式発表されていない。

河内「いや、D r. フライの処遇は公表されていないが、その心配だけは無用と上司から太鼓判を押されている。多少怪しい気もするが… これも独り言だが」

ラン「何よ、このクソ面倒くさい会話」

ランは眼の前で繰り広げられる「独り言」の言い合いに呆れたような感想を漏らした。

遠藤「つまるところ、フライのやつ以外に妙なことを企んどるやつがいるかもしれんと誰かさんは考えとるわけか。それももしかしたら、そいつが人間ではないかもしれないとな」

河内「ああ、あのワードスーツが最近じゃ機動隊なんか配備しようかという話が出るのは知ってるが、もしかたあのパーフェクトとかいうやつみたいなのが出てきた時に、戦うことができるかと言われれば不安だ」

豪「ははあ、それで」

ラン「リーフさんやダイーダさんみたいに戦えるような人ができないかってわけね」

納得したようにうなずきながら、豪とランは部屋の隅に置いてある二組のカプセルのようなものを見遣った。

そこには、ほんわかした感じのするショートヘアの少女と、どこかきつそうな目つきをしたポニーテールの少女が眠っていた。

この二人が先ほどから話題になっているリーフとダイーダ。

正確に言えば、精霊の国の特別警備隊員だった二人が宿り使用していた、遠藤博士謹製のレスキュー用アンドロイドである。

全てが終わった後、この二人のボディをもとにレスキュー用のワードスーツが製作 量産され今日に至っているのである。

河内「そういうことだ。今はかろうじて平和だが、それを安易に貪るほど俺はのんきじゃない。おまけにこの平和も悲しいかな俺たちだけで勝ち取ったものじゃないからな。いざという時に何もできませんでしたじゃ、あまりにも彼女達に情けない」

河内警部は忸怩たる思いを語り、豪とランも悔しそうに顔を歪めた。

確かに当時、自分たちもコスミックプリキュアと一緒に戦ったと胸を張って言えるだけの自信はある。

ただ、彼女たちのやったことに比べると自分たちのしたことは、全体の1%にすら満たないという思いもまた確かにあるのだ。

志夜「警部どの、お気持ちはわかりますが、上層部とて馬鹿ではありません。その程度のことにはきちんと考えています。そういったことはその方面に任せて、我々は我々の領分をわきまえたことを…」

河内「わかつとらん!! 上に任せっぱなしだと碌なことにならないというのも、その時に学んだんだ。むろん信用していないわけではないが、こつちもこつちでできることをやるんだ!!」

そう一喝すると、遠藤博士に改めて向き合った。

河内「で、どうなんだ? できそうか?」

遠藤「ふーむ、なるほどな。それに関してはわしも同じ気持ちじゃ。じゃがな、リーフやダイーダの性能のものを量産するとなると当然コスト面が天文学的な数字になる。なんせあいつらのボディは採算度外視で性能面のみを追求したからな。もともと量産するつもりもなかったしのう」

河内「じゃあ、不可能だというのか? 戦闘用のものを作るということが」

遠藤「そうは言うたらん。まずは新型の高出力バッテリーなどの実験を今しとる最中じゃ。見てみるか?」

遠藤「あ、ああ。是非とも頼む」

遠藤「よし、着いて来い」

そう言つて、遠藤博士は本棚の本を一冊取り出すと、その裏にあったボタンを押した。

するとその本棚は横にスライドし隠し階段が現れた。

ラン「ちよつとおじいちゃん」

豪「本当にいいの？ 河内警部連れて行つて」

遠藤「なに構わん。なんやかんやでこやつは信用できるからな」

河内「お褒めの言葉どうも。しかしわざわざ地下に研究室を作らんでも。モグラじゃあるまいし、カビが生えても知らんぞ」

遠藤「ふん。大きなお世話じゃ」

憎まれ口を叩き合いながら地下の研究室に向かって降りて行つた二人に、小さくため息をつきながら、豪とランに志夜もまた、その二人を追つて階段を降りて行つた。

その直後、一つの光の玉がゆつくりと研究所内に入り込み、保管されていたリーフとダイーダのボディを確認するかのようにその周りを飛び回つた。

そして、ランの飼い猫でもあるヒットがじゃれつくど、それとしばらく遊ぶように飛び交い、やがて遠藤博士達の後を追うように地下の研究室へと向かつていった。

第1話 終

第2話 新たなる闇（後編）

階段を下り、地下の研究室についた遠藤博士は電灯のスイッチを入れながら、さてというように話し始めた。

遠藤「よし、まあまずはこれの話から始めるか…」

河内「う… ん!? こ、こいつは!!」

突然明るくなったことで、少しくらんだ河内警部だったが、目が慣れてきた瞬間そこにいた存在に驚きの声をあげた。

豪「まあ、驚くよね」

ラン「…私たちもそうだったもの」

そこにいたのは、透けるような白い肌をしたプラチナブロンドのロングヘアの少女であり、その特徴的な容姿にはここにいる全員に見覚えがあった。

河内「四季… ゆう… な、なんでこいつがここにいるんだ!？」

四季ゆう

遠藤博士の息子で、ランの父親でもある遠藤央介が作った治安維持用戦闘型アンドロイド。

ランの妹を自称していた彼女だが、完成直後D r. フライに強奪。プログラムを改造されてプリキュアの死神を名乗り幾度となく戦うことになった。

だが、その純粋さから徐々にD r. フライやパーフェクトの一味からも疎まれるようになり、最終的には用済みとして別の世界に放逐さ

れた存在である。

豪「落ち着いてよ河内警部。この人、ゆう姉ちゃんそっくりだけど、違う人だから」

河内「何？ いやしかしこいつは…」

ラン「ゆうさんって、お父さんが作ったロボットでしょ。だからこの人は…」

遠藤「うむ。央介が言うにはDr.フライに奪われた後、残されていたデータから再開発された量産試作機じゃそうじゃ」

志夜「こ、これがロボット!? 人間そっくりじゃないですか!?!」

戸惑う二人に対して、皆が事情を説明し始めた。

遠藤「もともと、ゆうは理論実証機ともでもいうべき実験機でな。とりあえずコスト度外視でできる限りのものを作ったというのが実情じゃ」

豪「そういう意味だと姉ちゃんたちと同じだね」

遠藤「うむ、そしてそのデータをもとに量産することを前提にした試作機がこいつだそうじゃ。まあもつとも、その計画は完全に廃案になりこいつも本来は廃棄される予定だったらしいがな」

遠藤博士は、どこか悲しそうな顔をしながらそう続けた。

河内「廃棄!? なんでもまたそんな?」

ラン「おじいちゃんのパワードスーツができたからよ。そっちの方が色々便利だったことになったの。ただお父さんも廃棄するのに忍びないって、うちに送ってきたの。一週間前よ」

豪「おじさんってば、ただじいちゃんに押し付けただけって気もす

るけどね」

とりあえずの事情を理解した河内警部は、ふむふむと頷きつつ

河内「なるほど。で、今こいつを使って色々テストしてるとい
うことか」

遠藤「…まあな。あんまりいじくり回すのも忍びないが、せめても
の供養にと思ってな。我ながら身勝手だとは思うが…」

豪「だよね…」

ラン「うん…」

このロボットの顔は、央介の母親　つまり遠藤博士の今は亡き妻の
顔がベースになっている。

肌や髪の色 of せい で与えられる印象はまるで違うが、ゆうのことも
相まってやはりイマイチ割り切れないところが遠藤博士を始めラン
や豪にもあるらしかった。

河内「まあ、気持ちはわかるがな。で、新型のバッテリーってやつ
の性能の方は？　確か今のパワードスーツが6時間の充電で実働約
15分というところだったが…」

遠藤「ああ、そいつはさつきバッテリーの組み込みとプログラムの
調整が終わっただけじゃ。性能チェックは充電してからじゃな」

河内「…おい。その充電にはどのぐらいかかるんだ？」

不吉な予感がした河内警部は、なんとなくオチが読めたかのように
尋ねた。

遠藤「まあ明日の昼というところじゃろうな」

その答えに対して、河内警部は当然のように怒鳴り散らした。

河内「馬鹿野郎!!　もう日が沈むころだぞ!!　充電に丸一日もか
かってたらいざという時に間に合わんだらう!?!　全く相変わらずど

こかズレとる男だな」

遠藤「ふつつつつつ、このわしがそんないい加減なものを作ると思
うか？ 日が沈んだからこそ明日まで待たねばならんのだ。なぜな
らばこいつに組み込んだるのはただのバッテリーではない。その名
も…」

遠藤博士が自慢げにバッテリーの説明をしようとしたところで、先
ほどの光の玉が地下室に入ってきた。

遠藤「ん？ なんじゃこりや？」

豪「えっ？」

ラン「まさかこれって!？」

突然のことに、まさかというように思いでいた一同の目の前で、そ
の光の玉はアンドロイドに吸い込まれるように消えて行き、突如光輝
き始めた。

豪「う、うそだろ!？」

今の目の前の光景に誰よりも見覚えがあつた豪が驚きの声をあげ
た瞬間だった。

アンドロイドを包んでいた光は一際激しく輝き始め、ついには爆発
を引き起こしたのである。

河内「うおおおっ!!」

志夜「あああああっ!!」

ラン「キヤアアア!!」

豪「うわあああ!!」

遠藤「のわああああ!!!」

そしてその爆発に一同は悲鳴とともに吹っ飛ばされる羽目になった。

ラン「ゲホゲホ。なんなのよ一体!?!」

河内「何がどうなったんだ?」

ぶつけた体をさすりながらも何とか気を取り直した一同は、目の前の爆煙が晴れていくとともに、目を丸くした。

「a p、a p e o f p… d i、d i a s d a p f w q@w…」

当のアンドロイドも当然ひっくり返っていたが、わけのわからない言葉を話しながら全身をさすりつつ、感覚を確かめるように軽く肩を回し始めたからである。

志夜「う、動き出した…」

遠藤「馬鹿な… AIなんて簡単な動作をできる程度にしかプログラムしとらんのに…」

ラン「ね、ねえ… もしかしたら…」

豪「う、うん。あん時と一緒だぜ…」

河内「ま、まさか…」

キョトキョトと辺りを見回していたアンドロイドは、遠藤博士の方にルビーのように真っ赤な両目を向けると、ニツパリと微笑んで駆け寄ってきた。

「うっわーっ!! あなたが遠藤博士ですよ、この世界でいつちばん立派な人だっという」

突然持ち上げられた遠藤博士は一瞬戸惑ったが、すぐに自慢げに胸

を張った。

遠藤「おお、その通りじゃ!! 実に正直かつ人を見る目があるのう」

「わあありがとうございます。さすが立派な博士ですね!!」

その喜びの声とともに手を握ったところで、遠藤博士は悲鳴をあげた。

遠藤「ギャエオー!! 手がく 手がく!!」

ラン「もうおじいちゃんつてば、調子にのるからよ。それよりあなたまさか…」

握りつぶされかけ真っ赤に腫らした手にフーフーと息を吹きかけながら半泣き状態になっていた遠藤博士に呆れながらも、ランはまさかというような問いかけを行った。

「あ、あなたたちが遠藤ランさんに、速田豪さん。それと河内警部ですね。先輩から話は聞いてました」

しかし、当の相手は全く話を聞こうともせずに興奮気味かつ一方的に喋りまくっていた。

「本当に会えたんだ。大感激!! すっごーい!!」

河内「なんなんだこの子は? なんかやかましい子だな」

豪「ほんとだよ。俺たちのこと知ってるみたいだけど… わっランドセルがぐつちやぐつちや。あれ、宿題のプリントは…」

河内警部が顔をしかめる一方、なんとか起き上がった豪だが、今の

爆発でランドセルの中身が飛び散り宿題のプリントが見当たらないことに気がついた。

豪「やった!! これで宿題やんなくて済むぜ!!」

ラン「何バカ言ってるの。ほらここにあるじゃない」

呆れたようにランが足元から拾い上げた宿題のプリントだが、当然かなりグシャグシャになっていた。

豪「なこと言っちゃって、こんなんじやどの道まともに…」

そこまで言ったところで、件のアンドロイドが突然そのプリントをひったくるように手に取った。

「まっかせてください。こんなものなど、この私がちょちょいのちょいで…」

するとその言葉通り、目にも留まらぬ猛烈なスピードで大量の計算問題を次々と解いていった。

「「おおーっ!!」」

一同が感心する中、得意満面の顔で全ての答えを埋めたプリントを差し出してきた。

「はいできました!!」

豪「スッゲー!! 全部できてる」

感心すると同時に大喜びした豪だったが

遠藤「うむ、確かにすごい。全部間違つとる」

ラン「おまけにこれ、ボールペンで書いてあるから消せないわよ」

河内「宿題は自分でやれってことだな坊主」

ニコニコしながらその光景を見ていたアンドロイドをよそに、それを聞いた豪は無表情にプリントを投げ捨てた。

遠藤「で、お主は一体なんなんじゃ？　なんでわしらのことを知っておる？」

ドタバタが一段落し、ようやく遠藤博士は肝心の質問をすることができた。

「あ、はい。先輩から聞きました。この世界は本当に素晴らしい世界で、ものすごく立派な人たちがいたって」

河内「せ、先輩だあ!?　まさかそいつは…」

「はい、リーフ先輩とダイーダ先輩です。いろいろと教えてもらったんです」

ラン「やっぱり…」

豪「ん？　でもさ姉ちゃんたちの後輩ってことは…」

「はい!!　私も特別警備隊員、プリキュアです!!」

志夜「プリキュア!?　噂には聞いてきましたが、本当に警部どのと知り合いだったんですね」

プリキュア

その言葉を聞いて、一同は目を丸くすると同時に警戒を解いたがすぐにあることに気がついた。

遠藤「ん、待てよ。お主がプリキュアで、この世界にまたやってきたということとは…まさか!!」

嫌な予感がした直後、河内警部の携帯が鳴った。

河内「俺だ、どうした？ なにい!? わかったすぐに向かう!!」

真剣な顔で連絡を受けていた河内警部は、苦虫を噛み潰したような顔で話し始めた。

河内「今、連絡が入った。巨大な怪物が市街地で暴れているとな」

それを聞いた一同は、驚愕の表情と共に絶句するしかなかった。

ラン「そ、そんな…」

豪「またなのかよ…」

そんな豪とランの方に手を置き、優しく微笑みかける存在があった。

「心配しないで、そのために私がこうしてきたんだから」

その言葉に豪とランはもちろん、遠藤博士も励まされた。

遠藤「うむ。すまんがまたプリキュアに頼まねばならんな。どうかよろしく頼む」

河内「俺からも願います。力を貸してくれ」

柄にもなく丁寧な頭を下げた河内警部に、胸を叩いての答えが返ってきた。

「もちろんですとも、こちらこそよろしくお願いします。あ、申し遅れました私ゴズミックプリキュアの新メンバー、ソーラと申します」

第2話 終

第3話 大逆転!! プリキュア復活（前編）

甲子市 市街地

この甲子市は中堅規模の街であり、それなりに人口も多く、発展もしている。

日が沈み、街灯に火がつき始めた頃、その市街地のど真ん中に、突然巨大な馬のような怪物が出現して暴れまくっていた。

当然、ビルは破壊され帰宅しようかとしていた人々は悲鳴とともに逃げ惑っていた。

そして、パワードスーツを装着したレスキューチームもまた駆けつけていたが、ビルの瓦礫に押しつぶされた人々を救助したり、避難誘導の手伝いをしたりするだけで手一杯であり、とてもではないがその怪物に対処することなどできる状況ではなかった。

そんな大混乱の状況でも、たくましくレポートをするレポーターがいた。

「テレビの前の皆様ご覧ください。つかの間の平和を破り、突如として出現した謎の巨大怪物。これはまさか、かの次元皇帝パーフェクトと名乗る者たちの再来なのでしょう。果たして我々は一体どうなってしまうのでしょうか？」

カメラマン「ちよ、ちよっと。そろそろやばいってせつちちゃん。俺たちも避難しないと!!」

このせつちやんと呼ばれたレポーターは、突撃レポーターとして有名な甲斐節子。

もともと、そのキャラクターから人気のあったレポーターだが、D・フライの衝撃の真実を突き止め、プリキュアとも関わる事があつたということで今やかなりの人気レポーターとなっていた。

もつとも、かなり無茶なレポートをするのは相変わらずのようで

節子「ぶあか!! 危険だからって逃げるようなマスコミがいるか!! 最後の最後まで命をかけて真実を報道するってプライドがないのか!! それでなくても最近キャラの被った後輩が出てきて私の仕事奪い始めてるってのに… ほら行くぞ!!」

マスコミとしてある意味正しく、かなり危険な発言をしてカメラマンを引っ張り回していた。

そして案の定そんな彼女たちに対して、馬の怪物の攻撃で崩れてきたビルの瓦礫が飛んできた。

節子「へっ?」

突然のことにさしもの節子も一瞬ぼかんとしてしまい、逃げ出すのが遅れてしまった。

カメラマン「せつちやん!!」

そしてカメラマンの叫びに、瓦礫が彼女を押しつぶそうとしたころでようやくそのことに気がついたが、すでに逃げられる状態ではなかった。

「あつぶな〜〜い!!」

しかし押しつぶされる直前、何かが飛び込んできたことで、何とか潰されずに済んだ。

節子「あ、あいたたた… な、何なのよ。 あん？」

結果的に助かったとはいえ、思い切り突き飛ばされる格好になり全身を強く打ちつけてしまった節子は、痛みに顔をしかめながら起き上がった。

気を取り直したところで辺りを見回した節子だったが、そこで瓦礫に頭から埋まってしまっていた少女の姿が目に入った。

「s j o — s j o — a ; d l a @ たくすくけくてく」

節子「つたく、しょうがない。ちよつと我慢しなさい、よ」

どこかみつともない格好で埋まってしまっていた状況に呆れながらも、仕方ないというように節子はその少女の足を掴んで引っ張り出した。

ソーラ「ぶつは〜っ!! おかげで助かりました。おめでとうござい
ます」

節子「はあ? つたく、なんなのよあんた。とりあえず助けてもらったんだからありがとうでしょ。まあこっちもありがとうだけど」
そのトンチンカンな挨拶に、節子は訳がわからんというような表情と共に一応礼を言ったが、それを聞いたソーラははたと気がついたよ

うに真剣な顔になった。

ソーラ「ああそうだった、早く逃げてください。あの怪物は私が、このプリキュアがなんとかします!!」

その言葉に節子もまた食いついた。

節子「プ、プリキュア!? あんたが!? ってそういえばあんた、プリキュアにそっくりじゃない!! よーし頑張ってください!!」

一応プリキュアの一人だった四季ゆうにそっくりのソーラを見た節子は、彼女のことを信用し、そう言って送り出した。

もっとも

節子「よっしゃー!! 独占中継よ。プリキュア復活、カメラ回して早く!!」

自分の仕事を忘れないあたりさすがであった。

一方、市街地を破壊している馬型怪物の前に堂々立ったソーラは毅然とした態度で言い放った。

ソーラ「破壊と暗黒の怪物ドラフター!! これ以上の破壊はこのプリキュアが絶対に許さない!!」

節子「おおーっ!! テレビの前の皆さん、ご覧下さい。新たなプリキュアが今ここに敢然と怪物に立ち向かっていきます!!」

節子の興奮気味のレポートの中、ソーラは馬型怪物 ドラフターへと飛び掛った。

ソーラ「タアアアア!!」

威勢のいい掛け声とともに大ジャンプしたソーラだったが、馬型怪物は首を一振りしてそれを跳ね飛ばした。

ソーラ「ふんぎやー!!」

結果、情けない悲鳴とともに、大きく弾き飛ばされたソーラはそのままビルに叩きつけられ瓦礫の中に埋まってしまった。

節子「あ、あれ?」

あまりにもあつさり跳ね飛ばされてしまったソーラに、思わずきよとんとしたような声をあげた節子の横に、車でソーラを送り届けてきた河内警部も呆れ顔で頭をかきむしっていた。

河内「つたく一体何をやつとるんだ」

志夜「あれが本当にプリキュアなんですか?　なんか違うような...」

節子「あら、河内警部」

河内「オオあんたか。すまんが話は後だ。あいつを助けてやらにや」

跳ね飛ばされてしまったソーラを助けようと駆け出していった河内警部達を見て、節子もまた仕方ないとばかりに駆け出していった。

ソーラ「ふっ、やってくれるじゃないのさ…」
なんとか瓦礫から這い出したソーラは、負けじと強がりを書いていたが

河内「本当に大丈夫かよ…」
節子「しっかりとよね…」

ぴよぴよと目を回しながらの言葉には、不安以外存在していなかった。

ソーラ「大丈夫に決まってるじゃない。プリキュアだって無敵じゃないんだもの。はじめはやられたりするものなのよ…」

体の埃をパタパタと払いながら立ち上がったソーラは、再びファイティングポーズを取り馬型怪物に対して言い放った。

ソーラ「よくもやってくれたわね。倍にして返してあげるわ!!」

だがそんなソーラのことなど知ったことかというように、馬型怪物は巨大な蹄で彼女を踏み潰そうとしてきた。

ソーラ「なんの!!」

それをかなりギリギリとはいえなんとかかわし、怪物の懐に入り込むことに成功したソーラは、不敵に笑いながら大ジャンプした。

ソーラ「くらえ、悪魔め!! この私の正義の鉄拳を!!」

そして、ソーラの渾身のパンチが馬型怪物に対して炸裂した。

ポクン…

ソーラ「…あれ？」

ソーラのパンチは情けない音を上げ、怪物を倒すどころかダメージにすらなっていなかった。

そんなソーラの攻撃が鬱陶しく感じたか、馬型怪物は怒りに満ちたような雄叫びをあげると、ソーラを地面に叩きつけた。

ソーラ「きゃあああ!! ぶべ!!」

おかしな悲鳴とともにダメージを受けたソーラはなんとか立ち上がろうとしたが、馬型怪物はそんな彼女を再び踏み潰そうとしてきた。

ソーラ「くっ!!」

避けきれないと判断したソーラはなんとか蹄を受け止めようとしたが、そんなものは抵抗にもならずあっさり踏み潰された。

さらに間髪入れず、ソーラは馬型怪物に蹴り飛ばされボールのように弾んで行った。

ソーラ「な、なんで…?」

ボロボロになって転がり意識が遠のいていく中、うわごとのようにソーラはそうつぶやいた。

遠藤平和科学研究所

この研究所の奥には極秘の司令室のようなものが今なお常備されており、一連の戦いは、ソーラのアイカメラを通じてこの研究所にも一部始終が通信されていた。

とはいえ、あまりといえばあまりなソーラの戦いぶりに一同は呆れるやら慌てるやらであった。

ラン「な、なにあれ!? ものすごく強いじゃないあの怪物」

豪「いや、ありやどつちかかっていうと姉ちゃんの方が弱いんじゃない?」

遠藤「ええい、見捨てるわけにもいかん!! 豪、アンチマイナーガンの準備をしろ!! わしらも助太刀に行くぞ!!」

アンチマイナーガン

かつての戦いの中、遠藤博士の製作した対怪物用のビームガンであり、殺傷能力及び物理破壊能力はないがマイナスエネルギーを簡易的に浄化できる優れたものである。

豪「よ、よしわかった!!」

遠藤博士の言葉に二つ返事で頷き、アンチマイナーガンの準備をしようとしたところ、研究所の居間の方からガラスが割れる音が響いて

きた。

ラン「な、何？ 泥棒？」

豪「なんだよこんな時に!!」

遠藤「ええい、次から次に厄介なことを!!」

ひっきりなしに起きる面倒ごとに、多少憤慨しつつ居間に向かったところ一同は目を見開いた。

ラン「ああっ!!」

豪「こ、これって!!」

遠藤「まさか!?!」

そこに大切に保管されていたもの、この研究所にとっての最大の宝がカプセルから姿を消していたからである。

おまけに近くの窓ガラスは、部屋の中から何かが飛び出しているように割れていた。

第3話 終

第4話 大逆転!! プリキュア復活（後編）

甲子市 市街地

散々にソーラをいたぶった馬型怪物は、完全に興味をなくしたかのようにソーラを放り捨てた。

そして嘶きをあげると、再び市街地を破壊すべく走り出そうとした。

が

ソーラ「ぐうつ… さ、させるもんか…」

ボロボロになったソーラがそうはさせじと、必死に怪物の足を掴んだため、バランスを崩して小さく躓いてしまった。

出鼻をくじかれる格好になった馬型怪物は、イラついたようにそんなソーラを睨むと足を軽く一振りして振り払った。

ソーラ「うああっ…」

ボロクズのように転がっていったソーラだったが、その時何かが手元に転がってきた。

ソーラ「これ… 腰の左右についてた飾り… 棒になるんだ…」

これは特殊電磁警棒であり、治安維持用として開発されていたソーラのボディにあらかじめ取り付けてあった数少ない武装である。

まだ戦える

それを確信したソーラは電磁警棒を手に立ち上がった。

ソーラ「終わってない… あんたたちみたいなのに光に満ちた世界を暗黒の闇に覆わせたりしない!!」

そうやって必死に自分を鼓舞しながら、警棒の電撃スイッチを入れて声にもならない雄叫びと共に馬型怪物に殴りかかった。

すると今度は電撃も相まって多少はダメージになったらしく、馬型怪物は悲鳴をあげると共に軽く膝を折った。

もっともその一撃で警棒はひん曲がり、ソーラも殴りかかった勢いで着地をミスリ、もんどりうって倒れてしまったが。

そんなソーラを見た馬型怪物の侵攻上にいた人々は、気遣うように声をかけてきた。

「だ、大丈夫ですか？」

「し、しっかり!! お姉ちゃん」

だがソーラはよろめきながら立ち上がると、そんな人たちを背に怪物に向き合い、必死に避難を促していた。

ソーラ「だ、大丈夫…です… 早く… 逃げて…」

それを見た人々は後ろ髪引かれる思いはあったものの、再び向かってきた馬型怪物を見て、やむをえないと逃げていった。

そしてそんなソーラにトドメを刺そうとでもしたのか、馬型怪物は口の中に強力な火炎を溜め始めた。

ソーラ「!!」

もはや避ける余力も無かったソーラだったが、泣き言も命乞いも決してしようとせず、なおも必死に立ち向かおうとしていた。

節子「ああっ!!」

河内「いかん!!」

目の前の光景に叫び声をあげたこの二人だったが、直後頭上を赤と白の二つの影が横切った。

そしてその影は馬型怪物の顎に飛び蹴りを放ち、その首をへし折ったことで、発射寸前だった火炎の方向を変えることに成功し、そのままくるくると華麗に回転しながら地面に降り立った。

その一つはボリウムのある濃いピンクの髪に、フリルのついた赤を基調にしたドレスのようなコスチュームの少女。

今一つは腰まで伸びた五本の金色のポニーテールの、フリルのついた純白を基調にしたドレスのようなコスチュームの少女。

そんな二人は怪物に対して凜とした態度とともに名乗りを上げた。

「闇を吹き消す光の使者 キュア・リリーフ!!」

「悪を蹴散らす光の使者 キュア・ダイダー!!」

リリーフ・ダイダー「ピンチ一発、大逆転! コズミックプリキュア!!」

河内「あ、あれは…」

節子「コズミックプリキュア…」

もう二度と会うことがないと思っていたこの世界の救世主。

それを目の当たりにしたこの二人は、驚きのあまり言葉も出なかった。

コズミックプリキュアの一撃で首をへし折られてしまった馬型怪物だったが、信じられない回復力でそれを元に戻し、今度は彼女たちに目掛けて突進していった。

ダイダー「行くわよ、チェンジハンド・タイプレッド!!」

その掛け声とともにダイダーの両腕は一回り大きなゴツゴツした赤い腕に変わった。

そしてその突進を片手であっさり受け止めると、自身の重数倍の重さがあるであろう怪物を大きく振り回して投げ飛ばした。

地面に叩きつけられ、ダメージを受けた馬型怪物だったが、二人を睨みつけるようにして立ち上がりお返しとばかりに火炎を放つてきた。

ダイダー「甘い。チェンジハンド・タイプグリーン!!」

だが、ダイダーは全く慌てることなく両腕を何かの噴射口のようなもののついた緑色の腕に換装した。

ダイダー「超低温冷凍ガス発射!!」

そのまま左腕を前に差し出すと、真っ白いガスが吹き出し、たちまちのうちに怪物の放った火炎を相殺してしまい、ついでに多少なりとも全身を凍りつかせてしまった。

そうして動きが鈍ったことを確認すると、今度はリリーフが両腕を稲妻模様の走った青い腕に換装した。

リリーフ「チェンジハンド・タイプブルー!! エレキ光線発射!!」

その掛け声とともにその青い腕を怪物に向けてかざすと、稲妻のごとく電撃が放たれていった。

動きが鈍っていた状態では電撃をまともに浴びることになり、怪物は苦悶の悲鳴をあげた。

リリーフ「うん。突然持ち出すことになっちゃったけど、この体もマルチハンドの性能も前と変わらないね」

赤いドレスを着た少女、キュア・リリーフは体の感触を確かめるように満足げにそう言った。

ダイダー「油断しないで。あいつはメイジャーとは違う、急いで浄化しないと… 一気に行くわよ!!」

そんなリリーフをたしなめた純白のドレスの少女、キュア・ダイダーは一刻の猶予もないとばかりに光のスティックを取り出した。

リリーフ「うん、わかった!! いくよ」

リリーフも頷くと少し距離を取り、虹色の玉を手に輝かせ大きく振りかぶった。

リリーフ「ダイダーちゃん!!」

そしてそのまま、その虹色の玉をダイダーに向けて亜音速で投げつけた。

ダイダー「任せなさい!! ダアリアア!!」

するとダイダーは、リリーフの投げしてきた玉を、スティックを一振りして怪物に向けて打ち返した。

そうして打ち返された虹色の玉はひとまわり大きくなり、馬型怪物に直撃すると全体を包み込んだ。

リリーフ・ダイダー「プリキュア・レインボー・ツインバスター!!」

そう二人が叫ぶと、怪物を包み込んだ光は目も眩まんばかりに激しく輝き始めた。

リリーフ・ダイダー「ゲームセット!!」

そのかけ声とともに、強烈な二人の合体必殺技の直撃を受けた怪物は、嘶きをあげるとともに大爆発を起こして木っ端微塵に吹き飛んだ。

そうして爆発が収まった後には、刺々しい金属の玉のようなものがゴトリと降ってきて地面に転がった。

河内「なんだありや? 金属の塊?」

河内警部が疑問に思っていると、その金属の塊は少しずつ溶けるように形を変えていき、最終的には一人のホームレスへと姿を変えていった。

それを確認したりリリーフとダイダーは、心底ほっとしたように胸をなでおろした。

ダイダー「やれやれ。無事浄化できたみたいね」

リリーフ「うん、間に合ってよかったよ。あの人も無事みたいだしね」

遠藤「あれは… 人が怪物に囚われとった… いや、怪物にされとったのか？」

節子「ん？ ああ遠藤博士。あんたも来たの… って、しまったー！！」

車を飛ばしてようやく到着したらしい遠藤博士に声をかけた節子だったが、

節子「完全にレポートを忘れてたー！！ くうっ、一生の不覚！！」

仕事が完全に頭から飛んでいたことに気がつき、悔しがっていた。

豪「つか… あの人も相変わらず。でもそれより…」

変わっていない節子に呆れていた豪だったが、そんなことよりもっと興味のあることがあった。

ラン「うん。リーフさん… ダイーダさん… よね」

どこか確かめるように話しかけると、リリーフとダイダーはにっこりと微笑みながら変身を解除した。

リーフ「豪くん、ランちゃん。久しぶりだね」

ダイーダ「遠藤博士、それに河内警部。またお世話になります」

その言葉に一同は喜びの笑みを浮かべて駆け寄った。

豪「ねえちやーん!!」

遠藤「ホッホッホッ、久しぶりじゃのう!!」

河内「うむ。元気そうで何よりだ」

そうやって笑いあっていた一同だが、途端にリーフとダイーダは真剣な顔になった。

リーフ「本当に久しぶりです。でも…」

ダイーダ「ええ、まず何よりも…」

遠藤「ん？ なんじゃ？」

そのままキツと睨みつけるように振り向き怒鳴りつけた。

リーフ・ダイーダ「ソーラ!!」

その怒鳴り声に一同が驚いてその先に目をやると、こそこそと隠れようとしていたソーラが目に入った。

そんなソーラは怒鳴られたことでギクウツという音が聞こえてくるほどにびくりと肩を震わせると、乾いた笑いを浮かべてギギギと振り返った。

ソーラ「あ、あは… あは… せ、先輩… お、お早いですね…」

ダイーダ「誰のせいだと思ってるの!!」

リーフ「まったく… いつの間にか居なくなってたからどれだけ慌てたか…」

珍しく声を荒げてソーラを怒鳴りつけるリーフとダイーダに一同は目を丸くしていた。

豪「め、珍しいね… 姉ちゃんたちがあんなに怒るなんて…」

ラン「ホント… ずっと一緒だったけど初めて見たわ…」

遠藤「あくまあ落ち着け、とりあえずうちに一度帰ろう。話はそこでゆつくりとな。いろいろと聞きたいことがあるしな」

遠藤博士の提案にとりあえずリーフとダイーダも納得したか、ソーラへの矛を収めた。

リーフ「わかりました…」

ダイーダ「さっ、ソーラも行くわよ」

河内「…しかしあの格好じゃ、連れてくつていうより完全に犯人の連行だな」

志夜「ですね。本当に仲間なんでしょうか」

リーフとダイーダに両腕をがちり固められ、がつくりとうなだれていたソーラを見て、河内警部達は多少引きつりながらポツリとそう漏らした。

豪「ひいゝ… やつと静かになった…」
ラン「あんなに怒鳴るなんてちよつとびつくり…」

研究所に引き上げてきて早々始まったリーフとダイーダの嵐のよ
うな説教がようやく終わり、ソーラは先の戦いのダメージもあってソ
ファでぐったりとしてしまっていた。

帰ってきたときには夕飯をという時間だったにもかかわらず、すで
にテレビドラマでも見ようかという時間なのだから無理もないのだ
が。

河内「いやまあ、気持ちはわかるがな。俺も昔勝手なことをして
先輩に怒鳴られたもんだ」

そんなソーラを見て、河内警部はどこか遠い目をしつつ懐かしむよ
うにウンウンと頷いていた。

志夜「今でも全く変わってませんけどね」

ダイーダ「まったく… ソーラ!!」
ソーラ「は、はい!!」

ダイーダの再度の呼びかけに、ソーラは反射的に姿勢を正してソ
ファに座り直した。

ダイーダ「もう一度確認します。あなたの役職は!？」

ソーラ「はい… 特別警備隊見習い隊員です…」

リーフ「そうだよね。しかも訓練がようやく終わって私たちのチー
ムに研修で来たばかりだったよね。なのにどうして勝手な行動を
して、プリキユアまで名乗ったのかなあ?」

ソーラ「そ、それは… その…」

河内「あく、もう説教はそのぐらいにして、本題に入ってくれ。
さっきの怪物のことから頼む」

完全に取り調べ状態だったソーラを見るに見かねたか、とりあえず聞きたいことが山積みだった河内警部が半ば無理やりに話を切り替えさせた。

ダイーダ「ああ、はい。えーつと、あの怪物はドラフターつて言います。パーフェクトの一味が作ったメイジャー同様マイナスエネルギーの怪物です」

ラン「ま、まさか… パーフェクトが蘇ったてことなの？」

不安そうな声をあげたランに対して、リーフとダイーダは困ったように顔をしかめた。

リーフ「…それなら、まだいいんだけどね」
ダイーダ「そうね… パーフェクトだったらまだ戦い方がわかってるしね」

豪「じゃあ、まったく新しい敵ってこと？」

リーフ「…でも、ないというか」
河内「ええい歯ぎれの悪い。はっきりと説明してくれ!!」
なんとなくはつきりしない答えをするリーフとダイーダに、河内警部がイラついたように告げた。

ダイーダ「はい。以前この世界に侵攻して私たちが戦ったパーフェクトなんですが、突然変異で生まれたマイナスエネルギーの塊みたいな奴だと思っていたんですが、そうじゃなかったんです」

遠藤「な、何？」

リーフ「その後、幾つかの世界で戦っていてわかったんですが、実はパーフェクトは一つの端末でしかなかったんです」

ダイーダ「多くの世界を暗黒のマイナスエネルギーに染めるためにあちこちに放たれた一つのマイナスエネルギーの結晶体。それがあいつだったんです」

節子「ちよ、ちよつと待って。ということは、またその端末というのが侵攻してきたっていうの？」

リーフ「いえ、はつきり言ってそれよりひどいと思います。この世界に来たのはおそらく、いえ間違いなくその本体です」

遠藤「何い!!!」

甲子市上空 静止衛星軌道上

小さな円盤のようなものが浮遊しており、暗闇に覆われたその円盤の中で、モニターのようなものだけがぼんやりと光り地上での一部始終を再生していた。

「チッ!!」 最初の三人をうまく加減をつかめず死なせてしまったのが痛かったな。連中が来る前にドラフターを究極成長させようと思っただが、予想より早く追ってきたな」

「ああ、コズミックプリキュア。 面倒極まりないやつらだ。この世界がああのおかげで暗黒に染めやすい下地が整えられているとはいえ、邪魔をする奴らがいるのは厄介だ」

コズミックプリキュアの戦いぶりを見て、面倒そうになったと舌打ちをしている骨と皮だけのようにガリガリの男と風船玉のように太った男。

ただどちらも頭のとっぺんからつま先まで真っ黒であり、モニターからのぼんやりとした光と鋭くそして醜悪に輝く瞳がなければ、完全に周辺の闇に溶け込んでしまっていたであろう。

そのうちガリガリの男が提案するように太った男に話しかけた。

「おいセーリ。まだダーククリスタルには余裕があったな」

「? ああ、貴重なものとはいえ相応にはな。だがどういうつもりだパーリ、なぜそんなことを… まさか!？」

ガリガリの男 パーリから突然の振られた話に一瞬意図が読めなかった太った男 セーリは一瞬戸惑ったがすぐに気がついた。

パーリ「そういうことだセーリ。邪魔者は早いうちに消しておくに限る。たとえば貴重なダーククリスタルを浪費することになってもな」

セーリ「それもそうか。ただ、できるだけ離れた場所に出現させかつ可能な限り時間差を設けないとな。ドラフター同士食い合うことにでもなったら面倒だ」

作戦の細かいところの不安を口にしたセーリだったがパーリは心配無用とばかりにモニターを操作した。

パーリ「心配するな。場所については目星をつけてあるところがあ。露払いが地均しして肥料まで巻いてくれたところがな。ほら

「ここだ」

そのモニターに映った雄大な山を見てセーリも納得した。
セーリ「なるほどここか。確かにプリキュアの最期の場所にふさわしいな。よし、ならば早速作戦に適したマイナスエネルギーの種を探すとするか」

そうして頷きあうと、セーリとパーリは黒光りのする宝石をそれぞれの手を持ち、小さな円盤　ブルペノンから姿を消した。

第4話 終

第5話 誕生 光の新戦士（前編）

遠藤平和科学研究所

居間に巨大なガラクタのようなものが積み上げられ、遠藤博士と豪がそれを組み合わせて何かの装置を作り上げていた。

遠藤「よし、豪そこをつないでくれ。あとは、こいつを取り付ければ： 完成じゃ!!」

豪「ふーっ、一度作ったものだけどまた作り直すと結構大変だね」

遠藤「まあな。しかしマイナスエネルギー検知器をもう一度作り直す日が来るとは思わなかったわい」

マイナスエネルギー検知器

その名の通り、巨大なマイナスエネルギーを検知することのできる装置であり、かつての戦いでも使用し、検知範囲を広げれば地球全土をカバー可能という優れものである。

パーフェクトの一味が壊滅したこともあり解体していたものだが、再び戦いが始まるということで急遽組み立て直していたのだ。

この装置の唯一の欠点としては

ラン「ほーんと。このガラクタが今をもう一度占拠することになるとは思わなかったわ。せっかく作り直すんだから見た目もう少し何とかならないの」

ランの愚痴通り、この検知器はどう見てもガラクタのつぎはぎに裸電球がつないであるものでしかなく、はつきり言って居間に置いてお

きたいものではない。

遠藤「愚痴るな。見てくれ重視は不幸の元、不格好でも実用重視じゃ。見た目などに気を使つとる間に連中が行動したらどうする？」

豪「そうだけ、姉ちゃんたちの話が本当だったら前の時よりもすぐに敵のことがわかるようにしないは大変じゃねえか」

ラン「あんたはいいわよ、自分の家じゃないんだから。言いたいことはわかるけど居間にガラクタが置いてあるこつちの身にもなつてよ」

そうしてまたランがため息混じりの愚痴を口にしたところ、リーフとダイーダが地下の作業室から出てきた。

リーフ「ふふっ、変わらないねランちゃんも」

ダイーダ「ごめんなさいね。また迷惑かけることになつちやつて」

ラン「え？ あ、いやリーフさんたちのせいじゃないわよ。気にしないで」

慌てて取り繕ったランを見て、くつくつと笑った豪だがすぐに気を取り直した。

豪「それより姉ちゃんたち。そっちも組み立て終わったの？」

ダイーダ「ええ、バツチリよ。ライナージェットいつでも発進オーケーよ」

遠藤「すまんわ。いろいろめんどうなしながらみがあつてな、三冠号を用意することができんのでな」

サーフボードのように乗ることができる小型ジェット機　ライナージェットとコンコルドにも似た超音速ジェット機　三冠号。

どちらもかつて彼女たちが先の戦いで移動用として使用していたものである。

最終決戦で大破してしまいそれっきりになってしまっていたが、この二人が三日がかりで修復していたのである。

リーフ「大丈夫です。ライナージェットがあれば必殺技も使えますし、移動の足には困りませんから。それにそんなに遠くに行く必要も今回はないと思いますし…」

遠藤「そうか、そう言ってもらえると助かる」

ホツとしたような声をあげた遠藤博士だが、ランは不安そうに呟いた。

ラン「だけど、そのことだけど本当に公表しなくてよかったのかしら？ 人が怪物にされてるって…」

豪「いや、それより本当なの？ 今度のやつは人を怪物にすることが目的だったの…」

その言葉に研究所の中は一気に空気が重くなった。

ダイーダ「…悔しいけど事実よ。大きなマイナスエネルギーを抱えたような人間を狙って特殊なマイナスエネルギーを取り付ける。すると…」

遠藤「そのマイナスエネルギー、果てはストレスの元になったような姿と力を宿した怪物 ドラフターというものに変えるということか」

この前二年ぶりに出現した馬の怪物。

河内警部によるとあの怪物の核にされていた人物は、かつて競馬で身を持ち崩した人物だったらしい。

ホームレスになった後も性懲りもなく手を出していき、ホームレス仲間からもかなり疎まれていたそうだ。

一応あの後、警察が極秘に精密検査を行い異常がないことを確認した上で解放。

なぜかギャンブルの依存症も治り、頑張つて職を探すと張り切つていたらしい。

リーフ「取り付けた人の内包していたマイナスエネルギーがドラフトの主なエネルギーですからね。浄化できればその元になったストレスもなくなるんです。それはいいんですけど一番厄介なのは……」
豪「時間が経つにつれてだんだん成長して行つて、ついには世界中にマイナスエネルギーを撒き散らすものになつちやうつてんでしょ。最終決戦でのデビルの塔みたいにさ」

ダイーダ「そういうこと。だから連中が行動しだしたらすぐに対処しないとね。幸い、連中の狙いがこの近辺になりそうなのが救いだわ」

リーフ「うん。あの時に完成しかけたデビルの塔の影響が一番強いから、この辺がドラフトを育てやすい環境になつてるんだよね」

ため息混じりに告げられた言葉に、ランがポツリと提案した。

ラン「ねえ。だったらなおさらそのこと全部公表したほうが……」

遠藤「いや、河内も言つとつたが詳細の公表はやめたほうがいい。ストレスを抱えた人が怪物になるなどという話が表沙汰になると、下手をすれば魔女狩りのようなパニックが起こりかねんからな」

その提案を遠藤博士は真剣な言葉で否定した。

豪「どういうこと？」

遠藤「つまりじゃ。人というものは大なり小なり皆ストレスを抱えて生きとる。いくら外的要因によるものだとしても、人がいつ怪物に変えられるかわからんなれば、恐怖のあまりパニックになる。果て

は自分が恐怖から逃れるために恐怖を与える側になろうとする、要するにありもせん噂を流すこともありうる。隣の人は怪物だとか。そうなったらそれこそ人間社会は機能停止じゃ」

ラン「そつか… ありそうね…」

ダイーダ「元気出して。そうならないために頑張るの!!」
リーフ「一緒に頑張ろう。ねっ!？」

二人の言葉に勇気付けられたランはこくりとうなずいた。

豪「俺もだぜ。前みたい全力でサポートする!!」

遠藤「うむ、世界平和のためじゃ。わしも全力で頑張るぞ!! しかしじゃ、その前に…」

綺麗に盛り上がったところで、遠藤博士がチロリと庭の方に目をやった。

遠藤「あれを真つ先になんとかしてくれんか? 気になってしょうがない」

その言葉に庭の方に目をやると、そこで大きなため息を一同がついた。

そこにはソーラがいじけたように石を蹴り続けていたからである。

豪「こつちに帰ってきて以来、ずーつあの調子だもんね」

ラン「本当。三日間ずっと雨が降ってたからさず濡れなのに中に入ろうともしないで」

豪とランの言葉にがつくりと肩を落としながらダイーダとリーフも眩いた。

ダイーダ「あの子つてば… 私たちのところに見習い配属された時から不安だったのよね…」

リーフ「うん。ずっとプリキュアになりたかったから夢が叶ったって言つて、はしやぎつばなしで… 特別警備隊員もプリキュアも遊びじゃないし、真剣にしないと自分はもちろん何も守れないって何度も言つて聞かせただけど…」

遠藤「で、その過程でわしらのこともいろいろ話したわけか」

リーフ「はい。自分たちの世界平和のために一生懸命頑張つてた人たちがいたから、あなたもそんな人たちに恥ずかしくないように頑張りなさいって」

ダイーダ「そしたら、どこをどう曲解したのか、この世界に行けば立派なプリキュアになれるとか思っちゃったみたいで… で、おまけにそのタイミングでこの世界に連中が侵攻し始めたから至急向かえつてことになって…」

ラン「それで、ソーラさんだけが先走つてここに來たつてことね…」
呆れたようなランの言葉に、リーフとダイーダは申し訳なさそうに頭を下げた。

リーフ「ごめんなさい」

ダイーダ「私たちの監督不行き届きです」

ラン「い、いやいいわよ。頭あげてよ二人とも」

豪「でもさあ。現実問題、ソーラ姉ちゃんはどうすんのさ。あの

怪物には全く歯が立たなかったみたいだけど…」

ラン「そうよね。なんであんなにリーフさん達との力の差があるのかしら？」

リーフ「ん〜、まあ経験もあると思うけど…」

ダイーダ「なんやかんやですつと色んな世界で戦ってたからね。私たちのほうがあの子より力が強いのだよ」

遠藤「あとそれと、使つとるボディの性能の問題もあるじゃろうな。いうならばリーフもダイーダもコスト度外視で作ったワンオフ機じゃからな。量産を目標にして機能を大きくオミットしてあるソーラのボディとは性能差がある。それにお前さん達の光の力の差が加われば、性能差は推して知るべしじゃ。強いて二人より優れる点があるとすれば自力で飛べるくらいじゃな」

遠藤博士の冷静な分析に、リーフとダイーダはさらに頭を抱えることになった。

ダイーダ「丁寧な解説ありがとうございます。まああの子の一生懸命さはかっていますし、見習いとはいえ特別警備隊員としての精神的資質は認めますけど…」

リーフ「正直な話、前線に出てきたらただじゃすまないよね。こないだだってやられかけてたし… 戦いは私たちがやるとして、なんとかサポートに徹してもらおうよう説得するしかないか…」

ため息混じりにソーラの説得に向かったリーフとダイーダだったが、多少残酷なその物言いにランと豪はソーラに同情した。

ラン「なんかかわいそうね、ソーラさん」

豪「あんなにボロボロにやられても、ちゃんと人のことを守ろうとしてたし、最後まで逃げたりしようとしなかったのにさ…」

遠藤「しかし、二人のいうことにも一理ある。わしだってお前らが

無理押しで怪物と戦うなどと言い出したら必死に止めるぞ。リー
フもダイーダもソーラのことを思つてのことじゃろう」

遠藤博士のその言葉に豪とランは何も言えなくなつてしまった。

遠藤「まあ、あやつが本当に戦えないかどうかはもう少し確認する
必要があるじゃろう。とりあえずひん曲がつた警棒 クロムス
ティックは修理しておいてやったし、何より新型バッテリーのテスト
もできとらんからな」

その言葉に豪とランは思い出したように尋ねた。

豪「そーいや言つてたね。新型バッテリーがああのボディには搭載し
てあるつて」

ラン「あれからずっとそのことについて何にも言わないから忘れて
たけど、一体どうなつてるの?」

二人の孫の疑問に、遠藤博士は頬をかきながら返事をした。

遠藤「あく、マイナスエネルギー検知器の復元に忙しくてな。それ
にここんところずっと雨じゃったからどうせ実験できんと思つてな」

豪「どういうこと? 雨だったからなんだつていうの?」

ラン「もしかして、そのバッテリーつて…」

その途端、組み上げられたばかりのマイナスエネルギー検知器が約
二年ぶりにけたたましい音を上げた。

遠藤「なんと!! いきなり来たか!!」

豪「えーつと、テレビテレビ」

ラン「何か情報は…」

久しぶりのことは言え、彼らにとっては慣れたことである。

多少うるさげに顔をしかめたものの、慌てることなく豪はテレビをザッピングしニュース速報を確認し、ランは携帯からSNSを探り情報の収集を始めた。

すると1分もかからず二人は同時に声をあげた。

豪「嘘だろ!？」

ラン「これって!？」

そこにリーフとダイーダが何とか説得したらしいソーラを連れて駆け込んできた。

リーフ「どうしたの？」

ダイーダ「ついにあいつらが!？」

遠藤「うむ。こいつを見てくれ」

遠藤博士の示したモニターにリーフとダイーダは目を見開いた。

リーフ「こ、これは!？」

ダイーダ「そんな!!」

そのモニターにはかつての最終決戦の場、富士山頂が映し出されていたが、まともな状態でないのは火を見るより明らかだった。

何しろ青く雄大な姿をしていた富士山の山頂には、巨大な人食い植物といった紅色の花が咲いていたからである。

その口には鋭い牙が並び、火炎の玉を吐いて近づこうとするヘリヤ

自衛隊機を攻撃していた。

ダイーダ「間違いなくドラフター…でもまずいわね、あそこにはまだ平均値を上回る量のマイナスエネルギーが残留してる可能性があるわ。その分成長度合いも早いかも」

遠藤「なるほど!! それを見越してここに出現させおったな!! ならば急がんと!!」

リーフ「うん、行こうダイーダちゃん。ソーラもいい?」

真剣な表情でそう促したリーフだったが、ソーラはいじけたような返事を返した。

ソーラ「私が行っても何にもできませんよくだ…」

ダイーダ「あーもう、腐らないで」

そうやってたしなめたものの、完全にソーラはやる気がなくなってしまうようだった。

すると、見かねたように遠藤博士が助け舟を出した。

遠藤「リーフ、ダイーダ。お主らはライナー Jets の準備をしてこい」

それを聞いた二人は、黙って部屋を出て行った。

遠藤「…ソーラ、お主はプリキュアに憧れとったんじゃないな」

二人が出て行ったことを確認すると、遠藤博士はソーラに対してゆっくりと問いかけた。

ソーラ「はい。ずっと昔から憧れてて、一生懸命努力してやっと見習いにまでなれたのに…こんなんじゃないかも…あんなかつこい

い先輩たちの手伝いだって…」

豪「そりや俺だつてそうだよ。姉ちゃんたちが怪物と戦ってるの見て、どんだけ悔しかったか」

ラン「私なんか尚更よ。帰ってくるのを無事に祈るぐらいしかできないんだもの。心配で何にも手につかなかつたこと、一度や二度じゃないわ」

ソーラ「えっ?」

予想外の言葉にソーラは驚きの声をあげた。

先輩であるリーフとダイーダの言葉から、てつきりともに戦い活躍したのだと思っていたからだ。

遠藤「わしもそうじゃ。三冠号を始め様々なものを発明してともに戦ってきたと言えるだけの自負はあるが、あやつらのやったことの一万分の一にも満たんじやろうな」

かつての戦いを思い出し、今更ながらに自分の無力さを思い返したように静かに話を始めた。

ソーラ「そんな…」

遠藤「でもな、だからと言ってあいつらに任せて何もせんという選択だけは絶対にしないつもりじゃ。そもそもこの世界はわしらが自分で守らねばならんものじゃからな。それをあいつらだけに守ってもらうなんぞとんでもない話じゃ」

豪「姉ちゃんたちに甘えっぱなしなんて情けないもんね」

ラン「リーフさんもダイーダさんも大切な家族。なんでも都合よく戦ってくれる便利屋みたいな扱いはしたくないわ」

ソーラ「わ、私だつてそうだよ。見習いとはいえ特別警備隊員の一

人だもの。先輩たちに頼りっぱなしなんて嫌だよ!!」

皆の言葉を聞いて、ソーラも自分の思いの丈を叫んだ。

遠藤「ならばそれでよかろう。悩むことはない、そうすればよいではないか」

当然というようにそう語った遠藤博士だったが、ソーラの表情は暗いままだった。

ソーラ「だけど… あんなに負けちゃって… 次だってどうせ…」

遠藤「一度負けたぐらいなんじゃ。おぬしの憧れたプリキュアはちよつと失敗したぐらいで放り出すような無責任なものなのか？ わしも何度も失敗しとるが諦めたことなど一度もないぞ」

その言葉にソーラはハツと顔を上げ、真剣な顔で頷いた。

ソーラ「そうですね。こんな簡単にくじけちゃ、それこそプリキュア失格ですもんね」

遠藤「うむ、その意気じゃ!!」

豪「たまくにいいこと言うね」

ラン「ただおじいちゃんの場合、諦めないっていうより懲りないって言った方が正しいかしらね」

孫二人のその評価に、遠藤博士はずっこけた。

遠藤「話の腰を折るんじゃない!! せっかく決まっつったのに」

そこまで話が進んだとき、リーフとダイーダが部屋に戻ってきた。

ダイーダ「準備できたわ。ソーラもいいわね」

ソーラ「はい!! 精一杯頑張りますので改めてよろしくお願いしま
す!!」

リーフ「よし、出動!!」

遠藤「よし、頼むぞ三人とも」

豪「ちえっ、これじゃ俺は行けないか」

ラン「愚痴らないの、空気を読みなさいって。留守を守るのも大
切なのよ」

かくて、リーフとダイーダはライナージェットをサーフボードのよ
うに操りながら、ソーラはそんな二人に多少遅れをとりながらも現地
へと飛んで行った。

続く

第6話 誕生 光の新戦士（後編）

雄大かつ荘厳な姿をたたえていた名実ともに日本一の山、富士山。

かつての最終決戦の地となったこの山は、当時魔の山と言う単語がぴつたりくる醜悪かつ不気味な姿となっていたが、現在のそれは輪をかけて異常な光景となっていた。

まるで山頂が植木鉢であるかのように、巨大な紅色の人食い花といったものが咲いており、醜悪な雄叫びをあげていたからである。

そして、雨上がりとはいえ未だに空を覆う厚い黒雲が雰囲気に拍車をかけていた。

一般人ならば目を背けたくなるようなその醜い花を、満足そうに眺める骨と皮だけのようにガリガリの真っ黒な男がいた。

パーリ「よしよし、なかなかいい調子だ。程よい肥料があつたからよくドラフターが育つ」

そんなパーリの耳に、風を切り裂いて何かが飛んでくる音が聞こえてきた。

パーリ「ふふ。来たなコズミックプリキュア。迎撃しろドラフター！！」

その命令に従い人食い花ドラフターはカッとその巨大な口を開き、接近してくるライナージェットに向かって火炎弾を乱射した。

リーフ「あ、危なかった…」

次々に飛んでくる火の玉だったが、ライナージェットをサーフィンのように右に左にと操りそれをかわすことに成功した。

ダイーダ「油断してたわ、いきなり攻撃してくるとはね… ソーラ、大丈夫？」

真正面から突っ込もうとしていたことを反省しつつ、ダイーダは振り返り自分たちの後方を飛行していたソーラを気遣った。

ソーラ「は、はい、大丈夫です。 それよりこのまま真正面から行くのは危険です。私がかまくらになりますからその隙に…」

必死になってなんとか回避に成功したソーラはそう提案したが、ダイーダは一蹴した。

ダイーダ「馬鹿なこと言わないで!! 囿ってというのはすごく危険なことなのよ」

ソーラ「で、でも… 私なんかそれぐらいしか…」

リーフ「ダイーダちゃんの言う通りだよ。 それに自分をあんまり小さく考えちゃダメ。 あなたは自分で気がついてないかもしれないけど、立派な才能が…」

そんな話をしている間にも第二波が到来した。

ダイーダ「くっ!! キリがない。 空中戦は不利だわ」

ダイーダの言う通りライナージェットの動きはどうしても直線的なものになり、機敏に小回りの効く飛行ということができないのである。

リーフ「山のでっぺんに降りて戦おう。ソーラもいい？」
ソーラ「は、はい」

ダイーダ「よし、行くわよ!!」

リーフ・ダイーダ「ゴー!!」

その掛け声とともに、二人はジャンプしてトンボを切りライナー
ジェットから飛び降りた。

その瞬間、二人の体は光に包まれ、着地した時には姿が大きく変
わっていた。

ショートカットだったリーフは、ボリユームのある濃いピンクの髪
に変化し、着用している服も、ごく普通の服からフリルのついた赤を
基調にしたドレスのようなものになっていた。

ダイーダのポニーテールは、一本から五本にまで増え、背中にかか
るかかからないかだったそれも、腰まで伸びて金色になっていた。

そしてリーフ同様のデザインの純白を基調にしたフリルのついた
ドレスを着用していた。

そして人食い花ドラフターをキツと睨むと二人は名乗りをあげた。

リーフ「闇を吹き消す光の使者 キュア・リリーフ!!」
ダイーダ「悪を蹴散らす光の使者 キュア・ダイーダ!!」

リーフ・ダイーダ「ピンチ一発、大逆転！ コズミックプリキュ
ア!!」

ソーラ「コスミックプリキュア： やっぱりかつこいいい：」

変身すると同時に地上から一気に人食い花ドラフターに接近していったリリーフとダイダーだが、そんな彼女たちを目がけて火炎弾が次々と飛んできた。

それを華麗なフットワークでかわしつつ、接近していったダイダーは大ジャンプしてドラフターの頭上を取り、両腕を何かの噴射口のようなものをついた緑色の腕に換装した。

ダイダー「あんなんだろうと花なら根こそぎ焼き尽くすまで。

チエンジハンド・タイプグリーン!! 超高熱プラズマ火炎発射!!」

その掛け声とともにかざされた右手から超高熱の火炎を噴射され、一発でドラフターを焼き尽くして灰にした。

ソーラ「ダイーダ先輩、すごいですね」

一瞬でドラフターを焼き尽くしたダイーダにソーラは羨望と尊敬の眼差しを向けて駆け寄ったが、当の本人は険しい顔を崩さなかった。

ダイダー「気を抜かないで、何か変よ」

その言葉通り、黒い煙が火口から吹き上がったかと思うと、雄叫びとともに焼き尽くされたはずの人食い花ドラフターが復活してきた。

ソーラ「そんな…」

リリーフ「やっぱりね。核を浄化してないのに変だと思った」
ダイダー「でもまずいわね。早くなんとかしないと…」

ドラフターを一刻も早く処置しなければ、どんどんと成長していき、最終的にはそれだけで世界が暗黒に覆い尽くされてしまう。

彼女たちの顔に焦りが浮かぶ中、研究所から緊急通信が入ってきた。

遠藤『三人とも聞こえるか。大変なことになったぞ!!』

リリーフ「どうしたんですか？」

遠藤『街中に巨大な重機のような怪物が出現して、破壊活動を行うとる。警察も対処に向かっとなるが、間違いなくこいつも…』

ソーラ「そんな!? ドラフターが二体も!!」

ダイダー「落ち着きなさい、騒いでも何にもならないわ。リーフ!!」
予想だにしていなかった状況に悲鳴のような叫びをあげたソーラをたしなめると、ダイダーは冷静にリリーフに呼びかけ

リリーフ「わかった、街の方は私がなんとかする。ライナー
ジェット!!」

わかっているというように返事をすると即座にライナージェットを呼び寄せた。

風を切り裂いて飛来したそれに飛び乗ろうと大ジャンプしたりリーフだったが、人食い花ドラフターに突然二つ目の花が咲き、彼女を狙って火炎弾を発射した。

リリーフ「えっ!？」

突然のことに回避行動を取るのが遅れ火炎弾が直撃しようとした瞬間、ソーラがリリーフを押し飛ばした。

そのためリリーフには何とか火炎弾が直撃しなかったが、射線上にあったライナージェットは爆散してしまい、ついでにどんよりと曇っていた空の雲まで一部散らした。

ダイダー「ソーラ!!」

リリーフ「いたた： ライナージェットが： あっ、しっかりして!!」

リリーフは今の攻撃でライナージェットが爆散したことを視界の隅に入れながらも、火炎弾がかすめたことで地面に叩きつけられたソーラに駆け寄った。

ソーラ「せ、先輩： 無事で： よかった：」

リリーフ「馬鹿!! 何であんな無茶したの!？」

うわごとのように自分の無事を喜ぶソーラを助け起こしたりリリーフに、ソーラは途切れ途切れになりながらも、自分の思いを語った。

ソーラ「だって： 私は未熟で： 怒られてばかりで： でも先輩が無事ならきつとこの世界は：」

ダイダー「何言ってるの!! それであなたに何かあったら意味がないじゃない!! リーフ、速攻で決めるわよ。こいつをぶっ倒して、

急いで戻ってもう一体のドラフターを倒して…」

リリーフ「うん!! ソーラを治してあげないと!! ちょっとだけ辛抱しててね」

そんなソーラを必死に励ましつつ、そつと寝かせるとリリーフとダイダーは敢然と人食い花ドラフターに向かっていった。

リリーフ「チェンジハンド・タイプブルー!! エレキ光線発射!!」
その掛け声とともにかざした稲妻模様の青い腕から放たれた電撃は、人食い花ドラフターを感電させ、一撃で焼き尽くした。

しかし次の瞬間には再び雄叫びをあげ、さらに多くの花となって復活した。

リリーフ「くっ!! これじゃきりがないよ」

このドラフターそのものの耐久力は大したことがないのだが、倒しても即座に復活し、しかも増殖してしまう。

ダイダー「まずいわね。ライナージェットが破壊された分、移動する時間も考慮しないとイケないのに…」

そしてそんな彼女たちを目がけて巨大な火炎の玉が次から次に発射されてきたため、再び距離を取らざるをえなくなっていた。

苦虫を噛み潰したような顔をしているプリキュアを見て、パーリは満足そうに口元を歪めた。

パーリ「ふふ、想像以上に作戦は順調だ。育てていた花が枯れたせ

いで、いつまでも咲く花が欲しいなどという歪んだマイナスエネルギーを抱えたやつを見つけたのは苦勞したが、その価値はあったな」

ソーラ「う… 先輩…」

ボロボロの体を必死に持ち上げるようにして立ち上がったソーラだったが、目の前で苦戦しているリリーフとダイダーを見て自分の無力さを恨んでいた。

ソーラ（力が欲しい… 力を、誰でも何でもいい。あいつらと戦える力を!!）

その時、先ほどの人食い花ドラフターの砲撃でできた雲の切れ間から太陽が顔を出し、暖かな光がソーラに降り注いだ。

そしてそれとともにプラチナブロンドの髪がぼんやりと光り始めた。

ソーラ「な、何… 力が、湧いてくる…」

先ほどまでボロボロだったソーラのボディは少しずつ修復を始め、自分自身でもわかるほど力がみなぎり始めていた。

そして力強く拳を握り締めると、大ジャンプとともに人食い花ドラフターに向かっていった。

ソーラ「ハアアア!!」

気合いのこもった言葉とともに放たれたソーラの飛び蹴りは人食い花ドラフターに直撃し、大きな悲鳴をあげさせた。

ダイダー「ソ、ソーラ？」
リリーフ「だ、大丈夫なの？」

心配そうに声をかけた二人だったが、ソーラは興奮気味に胸を叩いて言い放った。

ソーラ「はい。すごく力が湧いてくるんです。一体どうして…」

ソーラ自身も疑問に思っていた時、遠藤博士から通信が入った。

遠藤『ようやく起動したようじゃな。わしの新型太陽電池が』

遠藤平和科学研究所

この一連の状況を司令室で確認しつつ出動準備を整えていた豪とランは、突然のソーラのパワーアップに驚いていた。

豪「な、なんでいきなりボロボロだった体も治っちゃってるわけ!？」

遠藤「うむ。ソーラに取り付けてあるバッテリーとはナノマシンサイズの太陽電池でな。それをあの髪の毛の繊維に混ぜて取り付けたのじゃ」

ラン「じゃあさっきの太陽の光が…」

遠藤博士の解説にランも状況を理解し、納得したような声をあげた。

遠藤「うむ。エネルギーのみならず、ボディの修復まで瞬時に行うとは。計算上既存のバッテリーより性能を大きく上回っておったが、あのボディにソーラが取り付いたことでリーフやダイーダ同様さらに大幅に機能がアップしていたようじゃな。これはもしかすると…」

富士山頂

遠藤博士の言葉通り、ソーラはみなぎってくる力にある期待を込めていた。

ソーラ「体が軽い。力がどんどん噴き出してくるみたい。よし……」

ソーラはさらに日の当たるところに移動すると、両腕を頭の上でクロスさせ力の限り叫んだ。

ソーラ「モードプリキュア、ウェイクアアップ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りのするドレスのようなコスチュームに変身していた。

そしてルビーのような真っ赤な瞳で、ドラフターを一睨みすると堂々たる名乗りを上げた。

「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

続く

第7話 その名に思いを（前編）

富士山頂

リリーフとダイダーは、雄叫びとともに発射されてきた人食い花ドラフターの火炎弾を避けつつ攻撃する隙を窺っていた。

ソーラー「先輩、大丈夫ですか!? 私も一緒に戦います」

太陽の光を浴び、全身の修復とともにキュア・ソーラーに変身できたこともあり、そう言い放ったが

リリーフ「私たちなら大丈夫。あなたは行きなさいソーラ」

ダイダー「街で暴れているもう一体のドラフターをお願い。あなたは単体で飛行できる。急いで、ドラフターが究極成長する前に!!」

二人にそう言われて、ハッと現状のもう一つの危機を思い出した。

ソーラー「わかりました。任せてください!!」

堂々と胸をたたくと、ライナージェットを上回るスピードで街の方へと向かって飛んでいった。

そんなソーラーを見届けたリリーフとダイダーは、力強く頷き合った。

ダイダー「これで心置きなく戦えるわ」

リリーフ「うん、あいつの弱点をなんとか探ってみるよ」

だが、そんな二人をパーリは嘲笑った。

パーリ「無駄だ、貴様らといえどもこのドラフターを倒すことはできない。そしてセーリのやつが作ったドラフターは貴様らでなければまず倒せまい」

ダイダー「なんですすって!？」

甲子市内

リリーフとダイダーが富士山頂で人食い花ドラフターと戦い始めた頃、突如としてブルドーザーやショベルカーにクレーンなどをごちゃ混ぜにしたような超巨大な重機が街を破壊して回っていた。

そんな中人々は悲鳴とともに逃げ惑いパニック状態になっていた。

河内「さあ皆さん!! 避難して!!」

志夜「慌てないで、足元に十分注意してください!!」

そんな群衆を警察が避難誘導にあたり、パワードスーツを装着したレスキューチームもまた駆けつけていたが

「く、くそ!! 避難の遅れた人を助けるので手一杯だ!!」

「おまけにこのスーツじゃそもそも戦うことなんて…」

救助に手一杯になる中、自分たちの無力さに歯噛みをするしかなかった。

節子「再び現れた巨大怪物。しかも現在もう一体の怪物が富士山頂に出現しています。我々の抵抗など無力だと言いたげに暴れまわる

この怪物たちに、我々はなすすべなくやられてしまうのでしょうか？
いえ、そんなことはありません。我々は決して闇に屈することはあり
りません!!」

その節子の力強いレポート通り、何人かのパワードスーツ員は重機
ドラフターに立ち向かつてはいたものの、返り討ちにあつて吹っ飛ば
されるのがオチであった。

セーリ「よしよし、いい調子だ。パリーの方を片付けるには連中も
相当の時間がかかるはず。このままこいつが究極成長すればよし。
仮に連中が来ても既にこいつと戦えるだけの力は残ってはいまい」
重機ドラフターの破壊力に、セーリは首尾は上々というように頷い
ていた。

そんな中、上空から光の矢のようなものが地面に向けて突っ込んで
きた。

轟音とともにもうもうと巻き上がる土煙の中、大きなクレーターの
中心で一人の少女がみつともない格好でひっくり返っていた。

ソーラー「ちや、着地失敗…でもなんのこれしき…」

節子「えっ？ あ、あれって…」

砂埃を払いながら多少バツが悪そうに立ち上がったソーラーは、改
めて重機ドラフターをビシッと指差した。

ソーラー「ドラフター!! これ以上勝手な真似は、この私が…」
そこまで言った途端、重機ドラフターがクレーンについていた巨大

な鉄球を振り回して、ソーラーに攻撃を仕掛けてきた。

ソーラー「うわっとと」

なんとかそれを受け止めて、投げ返したソーラーは多少不満げに怒鳴りつけた。

ソーラー「ええい、人がせつかくかつこよく決めてるのに!! まあいいわ、こないだとは違うっていうのを見せてあげる!!」

ソーラーは両腰にセットされていた電磁警棒を取り外すと、伸長させて構えた。

ソーラー「いづくぞー!! クロムスティック!!」

そんなソーラーに対して、重機ドラフターは大きなシヨベルアームを振り下ろしてきた。

ソーラー「ふんっ!!」

スティックをクロスさせるような格好でそれを受け止めたソーラーだが、十数メートルものサイズのドラフターとでは体格差もあつてじりじりと押されていった。

ソーラー「ググググ… だあっ!!」

押しつぶされそうになる直前、なんとか力任せにシヨベルを払いのけたソーラーは一旦距離をとった。

ソーラー「なかなかのパワーね。なら」

ソーラーは自信満々に大ジャンプすると、ドロップキックを放った。

ソーラーがかなりの気合を込めて放っただけあり、空気との摩擦で足先が赤熱するほどであった。

ソーラー「タアアアア!!」

気合とともに炸裂したドロップキックは、重機ドラフターに相応のダメージを与えることには成功した。

もつとも装甲をぶち破るまでには至らず、横に跳ね飛ばすので精一杯だったが、それがまずかった。

当然ソーラー自身も小さく跳ね飛ばされる格好になり、ドロップキックはそのまま近くにあったビルに鈍い音とともに突き刺さった。

ソーラー「うう… ととと… あ、足が抜けない…」

両足がビルの外壁に突き刺さり宙ぶらりんになってしまい、慌ててジタバタしていたソーラーに対して、体勢を立て直してきた重機ドラフターは再びショベルアームを振るってきた。

ソーラー「キヤアアア!! むにゅ!!」

身動き取れない状態だったソーラーは、ビルの壁が破壊されるとともに大ダメージを受けて地面に不自然な格好で激突し、変な悲鳴をあげた。

ソーラー「あいたたた… はっ!!」

なんとか立ち上がったソーラーの真っ赤な両目に、ドラフターの攻撃の余波で崩れかけていた瓦礫と、その下で避難活動をしていた志夜が目に入った。

ソーラー「あぶなーい!!」

志夜「よし、これで避難は大体終わった。私も避難しないと…」
そこまでつぶやいた時に聞こえてきたソーラーの叫びに慌てて見上げた時にはすでに手遅れだった。

志夜「はっ!! キャアアア!!」

河内「志夜!!」

崩れてきた瓦礫にとつきに身構え、押しつぶされることを覚悟した志夜だったが、すんでのところで猛スピードで飛び込んできたソーラーに助けられた。

ソーラー「大丈夫ですか？」

志夜「は、はい… って、え？」

ソーラーに背負われるような格好になっていた志夜だが、礼を言うと同時に気がついた。

志夜「あ、あの、前見てください!! ビルが!! 壁が!!」

自分を背負ったまま、ソーラーがものすごいスピードでビルの壁に向かって一直線に突っ込もうとしていたからである。

ソーラー「わかってます!! いくら私だってそれぐらいは…」

慌てたようなソーラーの言葉に、志夜はさらに大慌てで叫んだ。

志夜「止まってー!!」

ソーラー「止まんなーい!!」

その叫びとともに、ソーラーは案の定ビルの壁に激突してぶち破り、突っ込んでいった中のオフィスもめっちゃめっちゃにする羽目になった。

もつとも、そのおかげでブレーキがかかり、ひっくり返りつつもなんとかなんとかソーラーは止まることができた。

ソーラー「は、はひいゝ…」

目を回しながらぶっ倒れてしまったソーラーに、投げ出される格好になった志夜は不安げに声をかけた。

志夜「あなたこの間の子よね。前は全然戦えなかったのに、今度はどうしたのよ？」

ソーラー「へ、変身できるようになってパワーも上がったけど…コ、コントロールがまるで効かない…」

そんなソーラーの耳にリリーフの声が聞こえてきた。

リリーフ『ソーラ聞こえる?』

ソーラー「ほえ? 先輩? ど、どこですか?」

不意に聞こえてきたその声に、あたりをキョロキョロと見回したがどこにもリリーフの姿はなかった。

ダイダー『緊急通信システムで連絡を入れているの。そっちの状況も聞いてたから大体事態は飲み込めてるわ』

ソーラー「ほ、ほんとですか?」

リリーフ『あなたは無駄な動きが多いんだよ。だから隙も多くなる』

ソーラー「は、はい…」

その言葉にソーラーは少し小さくなった。

ダイダー『いい、指示するからその通りもう一度やってみなさい』
ソーラー「はい!!」

その言葉に励まされ、ソーラーは改めて重機ドラフターへと立ち向かっていった。

ソーラー「よ、よろし。どっからでも来なさい!!」

言葉だけは勇ましいが、ソーラーは自分のパワーがイマイチ理解しきれておらず、どことなくへっぴり腰になっていた。

そんな彼女を恐るるに足らずと判断したか、重機ドラフターはシヨベルアームの先をドリルに変形させて、一気に振り下ろして来た。

ソーラー「!! 来る!!」

とつさにバックステップでそれを避けようとしたソーラーだが、そこにリリーフの声が響いて来た。

リリーフ『後ろはダメ!! 前に逃げて!!』

ソーラー「えっ? は、はい!!」

その声に反射的にソーラーは前にでて攻撃をかわした。

ダイダー『そのままパンチ!!』

続けざまの有無を言わさぬダイダーの声に言われるがままにソーラーは拳を突き出し、結果かなり強力なパンチが重機ドラフターのボディに炸裂し、体勢を崩すことに成功した。

リリーフ『続けてジャンプして!!』

もはや疑いもせずにソーラーは大ジャンプした。

ダイダー『キツク!!』

間髪入れず放たれたソーラーの蹴りに、バランスを崩していた重機ドラフターはそのままひっくり返ってしまった。

ソーラー「す、すごい… さすが…」

遠方からの簡単な指示だけで、自分をここまで完璧に指導できるリリーフとダイダーの技量にソーラーは改めて舌を巻いていた。

富士山頂

リリーフ・ダイダー「キャアアア!!」

一方、ソーラーに通信を送りつつ人食い花ドラフターと戦っていたリリーフとダイダーだが、倒しても倒しても復活して増殖していく相手になすすべなくじわじわと追い詰められていた。

パーリ「ハツハツハツ。どうした、噂に聞くコスミックプリキュアも大したことはないな」

人食い花ドラフターの連射して来る火炎弾をやつとの思いで避け続け、岩陰に身を寄せてようやく一息ついたところで、響いて来た

パールの嘲笑うかのような声にダイダーが舌打ちをした。

ダイダー「まずいわね、このまま戦っていたらあのドラフターが究極成長をしてしまう。早くなんとかしないと…」

リリーフ「イエローハンドのセンサーアイで調べてみたけど、あのドラフターの中心核は溶岩の中だよ。それが根っこみたいになる」

ダイダー「…ということは、あの花と戦っても意味はないってことね。全くもってタチの悪い」

リリーフ「でも、早く浄化しないとこの世界が暗黒に染められてしまう… なら…」

リリーフはそう呟くと真剣な顔で黙りこくってしまった。

ダイダー「リリーフ、何を考えてるの？」

リリーフ「ふふつ。ダイーダちゃんと同じこと」

不安げな質問にいたずらっぽく笑いながら答えたリリーフに、ダイダーもまたフツと笑った。

ダイダー「行きましようか。ソーラは立派な後輩になってくれたわ」

リリーフ「うん。大丈夫だよね、あの子なら!!」

力強く頷きあうと、二人は岩陰から飛び出し少し距離をとった。

パール「ふつ、死にに来たかプリキュア!!」

リリーフ「ダイダーちゃん!!」

リリーフは大きく振りかぶり、手の中に輝かせた虹色の玉をダイダーに向けて亜音速で投げつけた。

ダイダー「任せなさい!! ダアリアア!!」

するとダイダーは、リリーフの投げてきた玉を、取り出した光のステイックを一振りして人食い花ドラフターに向けて打ち返した。

そうして打ち返された虹色の玉はひとまわり大きくなり、直撃すると同時に全体を包み込んだ。

リリーフ・ダイダー「プリキュア・レインボー・ツインバスター!!」

その掛け声とともに、噴火口に大量に咲き乱れていた人食い花ドラフターは全て光になって消滅していった。

パारी「何度やっても無駄だ。核を破壊しない限りドラフターは何度でも復元される。貴様らに勝ち目はない!!」

何度目かになる人食い花ドラフターの消滅にもかかわらず、全く余裕を崩さないパारीに対して、リリーフとダイダーは即座にマルチハンドを換装した。

リリーフ「チェンジハンド・タイプブルー!! エレキ光線発射!!」
ダイダー「チェンジハンド・タイプグリーン!! 超高温プラズマ火炎発射!!」

突然放たれた電撃光線とプラズマジェット火炎にパारीは思わぬダメージを受けてしまった。

ダイダー「よし!!」

リリーフ「いまだ!!」

パーリ「ぐうつ… だがこんな程度で… 何!？」

ある程度のダメージは受けたもののまだまだ余裕のあったパーリの目に、信じられない光景が飛び込んできた。

黒い煙が火口から吹き上がり、人食い花ドラフター再生復活をしようとする直前、リリーフとダイダーが火口へと飛び込んでいったのだ。

リリーフ・ダイダー「タアアアア!!」

続く

第8話 その名に思いを（後編）

甲子市内

ソーラー「くっ!! このこの!!」

重機ドラフターの上に飛び乗り、何発も拳を振り下ろしていたキュア・ソーラーだが、その装甲はとてつもなく強靱であり傷ひとつまもにつかなかった。

ソーラー「くっ、なんて丈夫なのよ。これじゃどうにもこうにも…でも早くなんとかしないと…」

早くしなければドラフターが究極成長し、世界が暗黒に染め上げられてしまう。

焦って攻撃を繰り返すものの、全く状況が好転せず、それがさらに焦りを生み攻撃が雑になっていき…

ソーラーの戦いは負のスパイラルをたどっていた。

重機ドラフターはそんなソーラーを振り落とすと、旋回してキヤタピラで押しつぶしてきた。

ソーラー「キヤアアア!!」

そんなソーラーの悲鳴を聞いて、セーリは口元を歪めた。

セーリ「ふふ。多少はマシになっていたようだが、あのドラフターに踏み潰されたのでは耐えきれまい」

しかし、重機ドラフターの下で少しずつ何かがうごめいたかと思うと、その巨体を押しつけるようにして這い出してきた。

ソーラー「ま、まだまだ…」

セーリ「チツ!! 潰されていないとはな。腐ってもプリキュア、しぶとい」

なんとか押しつぶされないよう踏ん張ったソーラーだが、本当になんとかかといった感じだった。

ソーラー「クツソク。パワーのコントロールがうまくいかないから派手に動けないし。いくら変身できてパワーが上がってもこれじゃうまく戦えないよ」

ようやく憧れのプリキュアになれたというのに、理想通りにいかない事にソーラーは悔しがっていた。

ソーラー「つて言ったつて、変身を解いたらそれこそ手も足も出ない。一体どうすれば…」

その時、多少雑音混じりにリリーフとダイダーの通信が届いた。

リリーフ『ソーラ、…最後…コーチを…るよ』

ダイダー『どん…相手…も、必…弱点…ある。それ…見極め…、それ…つきな…い!!』

ソーラー「弱点… そうか!! あいつにだってどこかに必ず!!」

河内「いかん!! プリキュアがかなり苦戦してる、助けねば!!」

志夜「警部どの、落ち着いてください。レスキュー隊の装備でも無理なのに、今我々にあるのは通常の拳銃のみ。とても太刀打ちできるとは…」

志夜の言う通り、今彼らの所持している武器といえば通常の拳銃のみ。

これで立ち向かうのは、はつきり言って蟻螂の斧もいいところである。

河内「馬鹿野郎!! 無力は百も承知。しかしだからと言って何もせん理由にはならん!!」

志夜「勇気と無謀を履き違えないでください!! 今我々ができることは応援を要請し到着を待つこと…」

河内「そんな悠長なことが、この状況で言ってられるか!! もういい、俺は行くぞ!!」

志夜「待つてください!! そもそも上からの命令で我々は避難誘導等裏方に徹しろと…」

この場合、どっちが正しいかは意見の分かれるところであろうが、兎にも角にも河内警部は部下兼お目付役である志夜の制止を振り切って、拳銃を片手に飛び出した。

ソーラー「うがあっ!!」

リリーフとダイダーに言われた通り弱点を探していたもののそう簡単にわかれば苦労はせず、攻め手を欠いてしまったソーラーは重機ドラフターの繰り出してくるシヨベルアームの攻撃にいいように捌られていた。

ソーラー「く、くそ…負けてたまるか…」

河内「プリキュア、援護するぞ!!」

そんなソーラーを援護せんと河内警部は銃を手に飛び出し、重機ドラフターに対して何発か発砲した。

当然、それらはドラフターの装甲にかすり傷一つつけられなかったが、その内の一発がたまたまクレーンの可動部に入り込み、一時的にだが動きを鈍らせる事に成功した。

そのため、ソーラーはどうかだが危機を脱することができた。

もつとも、その攻撃を仕掛けた河内警部は、直後ドラフターの怒ったような攻撃に吹き飛ばされたが。

ソーラー「河内警部!!」

慌てて駆け寄ったソーラーに、河内警部は檄を飛ばした。

河内「俺は大丈夫だ。それよりこいつ、装甲は丈夫だが駆動部分の強度はそれほどでもないぞ。この銃で傷つくぐらいだ」

ソーラー「駆動部分…」

それを聞いたソーラーは重機ドラフターの全身を改めてじっくり見回すと、キャタピラの上にある先回用の駆動部分を見つけた。

ソーラー「すると…一番大きなあそこが弱点だ!!」

ソーラーがそれに気がつくと同時に、重機ドラフターは雄叫びのようなものあげて少しずつ大きくなり始めた。

ソーラー「いけない!! これ以上成長させたら…もう時間がない

!!」

時間がないことに気がつく、ソーラーはクロムステイックを一本構えてステイック部分に電撃を纏わせると同時に、グリップを強く握りしめ光のエネルギーを注入した。

それによりクロムステイックはただの電磁警棒から光輝くステイックへと変化した。

ソーラー「一撃でブチ抜くしかない!! じっくりぞく!!」

そのステイックを手に、重機ドラフターのシヨベルアームの攻撃を大ジャンプでかわすと同時に一気に懐に入り込んだ。

ソーラー「うおおおりやああ!!」

そしてそのままステイックを胴体の駆動部分に力の限り突き刺した。

すると重機ドラフターは、ステイックを突き刺されたところから光の火花を飛び散らして苦悶の叫びをあげた。

セーリ「何!?! ドラフター、そんなものは振り払え!!」

その慌てたようなセーリの命令に応えるように、重機ドラフターは力を振り絞るように小型アームでソーラーに殴りかかってきた。

ソーラー「ぐっ…ああ、あ…」

かなりのダメージを負った中、駄目押しのような攻撃を受け苦悶の表情を浮かべたソーラーだが、最後の力でそれを振り払った。

ソーラー「く!! 負ける、かー!!!」

その気合を込めた言葉と同時にもう一本のステイックを取り外し同じように光り輝かせて突き刺した。

この二連攻撃には流石に参ったか、重機ドラフターは突き刺された場所だけでなく、その反対側からも押し出されるように火花を吹き出し始め。ひととき大きな悲鳴をあげた。

セーリ「チツ!! まさかあんなやつに倒されるとはな」

もはやここまでと悟ったセーリは悔しそうに引き上げて行った。

ソーラーが突き刺した二本のステイックを引き抜くと、重機ドラフターは吹き出した火花を全身に浴びながら倒れこみ、大爆発を起こして木っ端微塵に吹き飛んだ。

そうして爆発が収まった後には、刺々しい金属の玉のようなものがゴトリと降ってきて地面に転がった。

その金属の塊は少しずつ溶けるように形を変えていき、最終的には一人の中年男性へと姿を変えていった。

河内「やれやれ。どうにか勝ったみたいだな」

志夜「結果論じゃないですか。勝手な行動をした挙句、発砲までして。理由書をきちんと書いてくださいよ」

河内「全くガミガミとやかましいな。少し先輩を立てろ」

うるさそうに顔をしかめた河内警部をよそに、志夜はドラフターに変えられていた男性の介抱を始めた。

志夜「この人は確か、日中建設の社長… 最近業績が落ちているそうですね…」

河内「なるほどな… それに目をつけられたか…」

一方エネルギーを使い果たし、へたり込んでしまっていたソーラーだが、ようやく勝利の実感が湧き始めた。

ソーラー「か、勝った… 立派にやったんだ！」

それを自覚すると、ガッツポーズを取って立ち上がった。

ソーラー「ワーツハツハツ!! どくどく!! 私の実力を見たか!!」

そこに遠藤博士の必死の叫びが届いた。

遠藤『喜んどの場合ではなーい!!』

ソーラー「へっ?」

遠藤『非常事態じゃ、至急リーフとダイダーのところへ行け!!』

ソーラー「先輩… そうだ、確か最後って…」

豪『姉ちゃんたち、火口に飛び込んだんだよ。早く行って!!』

ソーラー「何ですって!?!」

すると、そこにリーフとダイダーの声が今にも途切れそうに弱々しく聞こえてきた。

リーフ『大丈夫…です。ドラ…ターにされ…いた人は浄化完…しま…た…』

ダイダー『これ…らこの人を最後…力で地上ま…運び…す。何と

か光…力で保護で…まし…から…』

ソーラー「何でそんな!! 先輩達も早く脱出を!!」

遠藤『そうじゃ!! いくらお前らでも溶岩の中では長くもたん』

ラン『リーフさん!! ダイーダさん!!』

皆が悲痛な叫びをあげたが、リーフとダイダーの声は小さくなつていく一方だった。

リーフ『そ…した…んだけど、溶岩…流さ…ちや…て…』

ソーラー「先輩達が言ったじゃないですか!! 私に何かあつたら意味がないって!! 自分の言ったことも守れないんですか!!」

ダイダー『見くび…ないで!! 私たち…こんな…とでやら…たり…ない。必…帰つ…くる。だか…それ…で、あな…がこの世…をあい…らから守…の』

ソーラー「わ、私…が…」

リーフ『あなた…らできるよ。遠藤…士、豪く…、ラン…やん。私…ちの後輩を、キュア・ソーラー…よろ…くお…いし…す…』

ダイダー『頑張…なさ…ね。あな…もプリキュアの一…なんだ…ら…』

ソーラー「先輩…センパイ!!」

悲しみに満ちた叫びも虚しく、その言葉を最後にリーフとダイダーの通信はぶつつりと途切れた。

豪『ね、ねえちゃん!!』

ラン『リーフさん!! ダイーダさん!!』

皆が悲しみにくれる中、ソーラーは改めて自分の姿を確認すると真剣な顔で空を見上げた。

ソーラー「頑張ります、私。キュア・ソーラーっていうプリキュアの名前に恥じないように」

世界を死守したキュア・リリーフとキュア・ダイダーは、溶岩の中に消えていった。

その思いを継いだ戦士、キュア・ソーラーの本当の戦いがこれから始まっていく…

続く

第9話 強さの意味（前編）

警視庁 剣道場

ソーラ「きゃあああ!!」

防具をつけて竹刀を持ったソーラが悲鳴とともにみつともない格好で吹っ飛ばされていた。

志夜「あなたは力はありませんが無駄な動きが多すぎるんです。大きく動くとその分隙ができるし、次の動作に移るのにも時間がかかるんです。もっと小さく動かないと」

ソーラを竹刀で吹っ飛ばした張本人である志夜が、面を外しながら呆れたように告げた。

ソーラ「は、はい… くうう、先輩と同じこと言われたなあ…」

豪「あの人つええ…」

ラン「ホント… ソーラさんって変身してなくてもものすごく強いのに…」

豪やランの驚愕の言葉通り、ソーラの身体能力は普通の人間など十分凌駕している。

そんなソーラを手玉にとる志夜刑事の実力に二人は舌を巻いていた。

河内「ま、警察官にとって剣道や格闘技は必須だからな。パワーがありや強いってもんじゃない。お前も刑事を目指すなら覚えておけ」

皆が見守る中、気を取り直して立ち上がったソーラは、改めて竹刀を構えた。

ソーラ「よーし、もう一度お願いします!!」

そうやって何度も立ち上がっていくソーラを見て、ランと遠藤博士はポツリと漏らした。

ラン「ソーラさん、やる気満々ね。こないだまであんなこと言っていたのに…」

遠藤「いい経験になったんじゃないだろうな。こないだの戦いが…」

一週間前

遠藤平和科学研究所

ソーラ「だから、なんでなんですか!? 一刻も早く私は強くならなくちやいけないんですよ!!」

ソーラがものすごい剣幕で遠藤博士に食ってかかっていた。

遠藤「あまああ少し落ち着け。 焦る気持ちはわかるがな、物事は順序というものがある。ただパワーアップすればいいというものではないんじゃない」

そんなソーラを必死になだめながら、遠藤博士は説明を始めた。

遠藤「いいか。ただ出力をアップさせたり、武器を作ったりして
もじゃ、それを扱えなければ何にもならんじやろうが。実際問題お前
さんはまだ変身した時にその体のコントロールがうまくいかんのじ
やろう」

丁寧に噛んで含めるように正論を伝えたが、興奮しているソーラに
は逆効果だった。

ソーラ「だったらそれをちゃんと扱えるように改造してください!!
先輩があんなことになっちゃって、いつあいつらが仕掛けてくるか
わからないのに。あまり呑気にしてられないですよ!!」

ソーラの言い分も尤もであり、今現在この地上で唯一と言っていい
戦力が彼女である以上、一刻も早く戦えるようにする必要があるのは
確かなのだ。

遠藤「それもわかつとる。だからこそまず初めにお前さんが一体ど
の程度のことができるのかをきちんと分析してからじゃな…」

ソーラ「もういいです!! 自分でなんとかしますから!!」
イラついたようにそう怒鳴ると、ソーラは足早に研究所から飛び出
して行った。

ラン「ソーラさん、相当焦ってるみたいね」

遠藤「まあな、無理もなからう。リーフもダイーダもいなくなつて
しまつて、わしら以上に不安やら重圧やらに苛まれておるのじやろ
う」

先日の戦いで富士山の火口に飛び込み、リーフとダイーダは行方不

明になってしまった。

皆は悲しみにくれたが、いつまでもそうしているわけにはいかないともわかっていた。

なぜならばそれは敵陣営も承知していることであり、この隙を狙って行動を開始してくることは容易に想像がついていたからである。

豪「でもさ。ソーラ姉ちゃんのパワーアップってそんなに難しいことなの？」

豪の素朴な疑問に、遠藤博士はあっけらかんと返した。

遠藤「うんにゃ、強化そのものは割と簡単じゃ。そもそもあやつ今のボディは量産を前提に設計されとるからな。色々な武装をオプション的に取り付けられるように作ってあるからの」

ラン「だったらなんですぐにそうしてあげないのよ。リーフさんもダイーダさんもいないのに私たちだって不安よ」

遠藤「そうしたいのは山々じゃがな、今の状態では何をつけても意味がない」

豪「どういうこと？」

豪の質問に遠藤博士はため息とともに答え始めた。

遠藤「つまりじゃ、今のソーラのボディはわしの開発した太陽電池のソーラーエネルギーと光の精霊の力のハイブリット方式になるわけじゃ。はつきり言えばそのパワーは測定不能レベルになつてる」

ラン「うん」

遠藤「しかしじゃ。その体をコントロールしとるソーラ自身がまだまだ素人レベルでしかないからな」

豪「え〜つと、つまり…」

豪の頭の上にハテナマークが浮かんでいることを察した遠藤博士は、もう一度説明をしなおした。

遠藤「もう少し簡単にいうとじゃ、免許取り立ての若葉マークをF1マシンに乗せとるような状態なんじゃ。そんな状態でどんな武器をつけたってまともに使いこなせん。高性能な制御装置を組み込んだにしても乗り手がソーラであり、あいつ自身がコントロール仕切れるほど未熟な以上限度があるわい」

ラン「そつか… あんまりそんな感じしなかったけど、リーフさんもダイーダさんも結構なベテランだったのね」

今の説明でランと豪は状況を納得したのだが、

遠藤「おんなじことをあやつにも説明したんじゃがな。何よりもまずあやつ自身があの体を使いこなせるようにせんと何にもならんと… 気ばかり焦ってしまっておる状態じゃ。変なことにならないければいいんじゃが…」

かつて焦って結果ばかりを追い求め、最後には暗黒に堕ちた友人のことを知っているだけに遠藤博士は不安げな表情を浮かべた。

甲子市内 某公園

ソーラ「何よ、そりや私だってまだまだ未熟だっていうのはわかってるけど、だからこそ早く強くならなきゃいけないのに…」

公園内の木の下で砂を蹴りながらぶつぶつとソーラは一人愚痴っていた。

ソーラ「先輩もいない今、私がプリキュアの名前に恥じないように頑張らないと： グズグズしてられない、何か手っ取り早い方法を：今の私に足りないものは：」

木にもたれかかりながら口元に手を当てて考え込んでいると、パラパラと砂や葉っぱが降ってきた。

ソーラ「ん？ なに？」

ふと疑問に思うと、続けて悲鳴とともに少年が降ってきた。

ソーラ「あ、危ない!!」

とつさに飛び出して受け止めたものの、足がもつれてしまいそのままソーラも倒れ込んでしまった。

ソーラ「イタタ： ヤダもう：」

「す、すみません。大丈夫ですか？」

ソーラ「あ、ああ。私は平気。それよりあなた怪我はない？」

「あ、はい。俺もこいつも無事です」

見るとその少年の腕の中には、一匹の子猫が呑気そうにニャアと泣いていた。

ソーラ「可愛いわね。あなたの？」

「ううん、野良猫。でも木の上から降りられなくなってたから：」

ソーラ「そっか、あなた優しいのね」

ソーラのボディはかなりの色白の美少女であり、十人が十人とも綺

麗と評するであろう顔立ちである。

そんなソーラに優しく微笑まれたその少年は真っ赤になって俯いてしまった。

「い、いえそんな… 僕なんて弱虫でよくからかわれて…」

ソーラ「ううん、そんなことないわよ。そうやって困ってる子を助けてあげられるってすごく強いことだと思うわ」

「あ、ありがとうございます!!」

ソーラ「うんうん。あっそうだあなた名前は？ あなたみたいな強い子の名前覚えておきたいの」

「えっ、あっ、比野 ひの太っていいいます」

ソーラ「ひの太くんか。覚えとくよ」

そうして猫を抱いて帰って行ったひの太を見送ると、ソーラは顔を引き締めた。

ソーラ「いけないいけない。考え事に夢中になってて助けを求める声が聞こえなかったなんて、プリキュア失格」

そう呟きながら、自分の頭を軽く殴って戒めた。

ソーラ「よ、よろし。あんな子を守るようにするためにも、何か必殺技を考えないとな…」

殴った力が強すぎたのか、ピヨピヨとひよこを頭の周りに飛ばしながらソーラは決意を新たにした。

そのまま公園で一晩を明かしたソーラは、ぶつぶつと呟きながら地面にステイックでガリガリと絵を描いていた。

ソーラ「うーんと、ステイックは二本あるんだからこういう使い方だつてできるし： それに変身した時すごく早く走れたことをうまく利用して： それと調べてみて見つけたあの機能も使えそうだし：」

彼女なりに一生懸命どういう戦い方をするべきかを徹夜で色々と考えており、そういう意味では十分に立派な戦士であった。

ソーラ「ふつつつつ、やっぱ私はすごいんだ。そうだよこの体の改造なんて考えなくても、こんなに強い技を考え付くんだもの。さあいつでも来なさいドラフター!!」

ただし、この調子に乗りやすい性格を除いて、である。

ひの太「うわぁーっ!!」

そんな彼女の耳に、悲鳴らしきものが聞こえて来た。

ソーラ「この声、昨日の： 何かあったのかしら？」

通常ならば、聞き取れるかどうかとも怪しいぐらいの距離からの声だが、腐つてもソーラのボディの耳は普通の人間の数十倍の感度を持っていた。

その叫びを耳にして慌てて駆け出していくと、昨日の少年 ひの太が上級生らしき少年に突き飛ばされて道路に尻餅をついていた。

ひの太「か、返してよ。そのお金は猫の餌のために：」

「猫の餌だあ？ 俺様も腹が減ってるんだよ。猫と俺様とどっちが大

切なんだよ、ああ?」

ひの太「う…」

財布を取り上げられ千円札を抜き取られてしまい、必死にすがったひの太だったが、相手の凄みに何も言えなくなってしまった。

「へっ、ひの太のくせに生意気なんだよ。じゃあな」

そんな光景を見たソーラは、許せないとばかりに拳を振り上げて向かって行った。

ソーラ「こらく、そのあなた!!」

「げっ、やべ」

そんなソーラに気がついたか、上級生は一目散に逃げていき、あつという間に見えなくなってしまった。

まあ駆け出したソーラが石に躓いて転んでしまったというのもあるのだが。

ソーラ「くっ逃げ足の速い。私でも追いつけないなんて…」

見栄を張るかのように、悔しそうに舌打ちをしたソーラだったが、尻餅をついていたひの太に向かってにこりと笑って手を差し出した。

ソーラ「大丈夫?」

しかしひの太はその手を取ろうともせず、のろのろと立ち上がった。

ソーラ「どうしたの? どこかに怪我でもした?」

心配そうにそう尋ねたソーラだったが、ひの太は俯いたまま返事をしようともしなかった。

ひの太「俺やっぱりだめだよ。何にもできなかった… 昨日の猫の

ためにお小遣い全部持ってきたのに取り上げられちゃって…」

ソーラ「そ、そんなことないよ。昨日も言ったじゃない、そうやって頑張れるのはあなたが強いからだって…」

なんとかしてひの太を励まそうとしたソーラだったが、あまりこういうことに慣れていなかったため、ありきたりの言葉しか出てこなかった。

ひの太「強くなんかない!! あんなやつに言いようにされて、守りたかったものも守れなくて!! 俺はただの弱虫なんだ!!」

そのため、ひの太がそう怒鳴り散らして泣きながら走っていても止めることさえできなかった。

ソーラ「どう言ってあげればよかったのかな… 力がないから弱いなんて私だってそうだし…」

ひの太を引き止められなかった後、公園のベンチに腰掛けたソーラはしばらくの間、空を見上げて遠い目をしていた。

ソーラ「先輩たちならなんて言ったのかなあ。こんなことならもっと真面目に先輩たちの話を聞いてくんだった…」

志夜「ここにいたんですね、ソーラさん」

ソーラ「あつ、刑事さん。どうしてここに？」

志夜「遠藤博士から連絡があつて探してたんですよ。見た目中学生の女の子が公園で一夜を明かしたなんてことになれば通報ぐらい入ります」

その言葉にソーラは感心したように声をあげた。

ソーラ「へえ〜っ、すごいんですね」

志夜「呑気な人ね、全く…これが本当にプリキュアなのかしら？」

その志夜の言葉にソーラは急に暗くなった。

ソーラ「そうなりたいたいですけどね。強いプリキュアにはまだまだ遠いなって… やっぱ強い武器や力がないといけないんだなあって」

志夜「…そういうものでもないと思いますけどね」

ソーラ「なんでですか？ 刑事さんだって強い武器を持ってるんですよ。それにドラフターと戦うためにもっと強くなれたらって思わないんですか？」

志夜「そりゃ、拳銃は持ってますけど、それのおかげで強いわけじゃないですよ。強くなるために格闘技の訓練はやってますし、その銃だって射撃訓練があります。ただ強い武器があれば強いってわけじゃないですよ。やたら銃を撃つわけにも行きませんしね」

ソーラ「うーん。みんな同じようなこと言うなあ… さっきの子もそうだけど力がないと強いって言えないんじゃないの？」

同じようなことを何度も聞かされたものの、それでもひの太の事もあって未だにどこか釈然としないソーラは、首を傾げていた。

志夜「えーつとですね… どう言えば…」

どう言えばソーラを納得させられるか真剣に考えることになった志夜だが、すぐにその思考は中断することになった。

志夜「何!?! ビルが倒壊した!?!」

遠方でビルが轟音とともに倒壊していったのが確認できたからである。

ソーラ「!! この気配、ドラーフター!？」

続く

第10話 強さの意味（後編）

今を遡ること一週間前

ひの太「ちきしょう… もっと俺にも力があればなあ… あんな奴をぶっとばせるだけの力があれば…」

ソーラと志夜刑事が出会う少し前のこと、悔し涙を流しながら歩いていたひの太だったが、突然ドスの効いた男の声が響いてきた。

セーリ「力が欲しいか？」

その声に顔を上げると、風船玉のように太った真っ黒な男がいた。

見るからに不審人物であることに加え、その男の醸し出す得体の知れない空気に、ひの太は本能的に危険を感じ取っていた。

ひの太「う、うあ…」

セーリ「怖がることはない。俺が君の望みを叶えてやる。君が許せない奴と戦うための力だ」

そう言いながら、セーリは黒光りのするクリスタルを取り出した。

セーリ「このダーククリスタルを持っていくといい。君に望み通りの力が手に入る」

その言葉にひの太は恐る恐る手を伸ばして水晶に触れた。

すると、そのクリスタルはボオツと黒く光り、溶け込んでいくようにひの太の手の中に消えていった。

ひの太「えっ？ 消えた？」

セーリ「このクリスタルが君を受け入れたんだ。君に今大きな力が加わった。その石を拾ってみたまえ」

セーリの言葉に、ひの太は足元に落ちていた石を拾い上げようとしたが、その石はなんの抵抗もなく握りつぶされ、手の中でパラパラと砂になっていった。

ひの太「す、すごい……」

セーリ「それが君の力だ。その力で望み通りにしたまえ」

そう言い残してセーリは姿を消し、ひの太は一人残されたのだが、やがて小刻みに震えだした。

ひの太「やった…… やったぞ!! 力が手に入ったんだ!! みてろよ
く!!」

そうしてひの太は先ほどの上級生の元に常軌を逸した速度で駆け出していった。

セーリ「ふふ、これでよし。新しいプリキュア、キュア・ソーラーか。奴はパワーはあるようだが、まだまだ機敏に動けるほど戦い慣れはしていない。それが付け入る隙よ」

そんなひの太のことを、近くのビルの屋上から見下ろしながらセーリは満足そうに笑みを浮かべた。

そして、案の定ひの太は超感覚で先ほどの上級生の居場所を察知し、問答無用でそれを叩きのめしていた。

上級生「な、なんなんだよ、お前は？　もう勘弁してくれよ〜」

ひの太「俺から盗んだ金も返さないで何言ってるんだ？　すぐに返せばよかったのに」

上級生「だ、だからもう使っちゃったんだ。明日持ってくるから!!」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら、必死に許しを乞うていた上級生だが、先ほどとは完全に立場が逆転していたひの太は手を緩めなかった。

ひの太「そんな上手いこと言っでごまかせると思うか!!　返せないなら死んじまえ!!」

トドメとばかりに大きく拳を振り上げ力の限り殴りつけると、上級生はトラックにでも跳ね飛ばされたかのように何回転もしながら吹っ飛んでいった。

ひの太「すごい…　これだけの力があれば怖いモノなんてない!!」

俺ハ強イ、オレはツヨイン田…」

自分の強さに打ち震えていたひの太だが、だんだんと口調がおかしくなっていく、それに従って全身から黒い蒸気のようなものが噴き出し始めた。

ひの太「オレハサイキョーダー!!」

その叫びとともに、全身が完全に蒸気に覆い尽くされ、黒い火花のようなものがスパークすると同時に、巨大な猫のドラフターが誕生した。

ひの太の変身した猫ドラフターは、自分の強さを誇示するかのよう
に爪を振りかざしてビルを破壊しはじめた。

ソーラ「あのドラフター、昨日ひの太くんが助けてたのとおんなじ
模様… まさか!!」

暴れまわる猫ドラフターの模様を見たソーラは、一体誰がドラフ
ターにされてしまったのか即座に推測した。

ソーラ「やめなさい!! こんなことをしても何にもならないよ!!」
必死に訴えかけたソーラだが、ドラフターと化してしまっていたひ
の太に言葉が通じるはずもなかった。

ソーラ「うわああああ!!」
雄叫びをあげて振るってきた猫ドラフターの爪にソーラは吹っ飛
ばされてしまった。

志夜「大丈夫ですか!？」

ソーラ「え、ええ。それより周りの避難を頼みます」

心配して駆け寄ってきた志夜に周囲の避難を頼むと、ソーラは空を
仰いだ。

ソーラ「太陽は出てる… よーし、いっくぞー!!」

太陽光線が降り注いだソーラのプラチナブロンドの髪はぼんやり
と光り始め、彼女にも力がみなぎり始めていた。

それを確認するかのように拳を握り締めると両腕を頭の上でクロスさせ力の限り叫んだ。

ソーラー「モードプリキュア、ウェイクアップ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラーの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りのするドレスのようなコスチュームに変身していた。

そしてルビーのような真っ赤な瞳で、ドラフターを一睨みすると堂々たる名乗りを上げた。

ソーラー「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

ソーラーは変身完了するとともに腰の左右のクロムスティックを取り外した。

そのまま二本のスティックを柄の部分でくっつけて、一本の棒のようになると力を込めるようにしてスティック部分に光を纏わせた。

ソーラー「行くよ!! 徹夜で考えた新技、クロムスティック・ブーメラン!!」

そうして投げつけたスティックは、光輪のようになって飛んでいき猫ドラフターの体を見事に切り裂いた。

「ギャアア!!」

「ギャイン!!」

この二つの悲鳴の種明かしをすると前者が猫ドラフター、後者がソーラーである。

光輪となって飛んで行ったステイツクは確かに猫ドラフターの体を切り裂きダメージを与えることには成功した。

しかしブーメランとなって戻ってきたときに、ソーラー自身にもそれをキャッチすることができず脳天に突き刺さってしまったのである。

結果、頸動脈のあたりを切り裂かれ真つ黒な煙を蒸気のように噴き出しながら苦しんでいる猫ドラフターをよそに、ソーラーも頭を押さえてフラフラになることになった。

ソーラー「お、おく… キャッチ失敗… でもまだまだ…」

なんとかソーラーが正気に戻り立ち直ったのと、猫ドラフターが気を取り戻したのはほぼ同時だった。

ソーラー「ひの太くん、今元に戻してあげるからね」

ソーラーは目の前で両腕を組むと、全身に力を溜め始めた。するとソーラーの全身は輝き始め、やがて光の塊になった。

ソーラー「受けて見なさい、さつき考えた必殺技。プリキユア・フラッシュダツシユ!!」

その掛け声とともにソーラーは猫ドラフターに向かって猛スピードで突っ込んで行った。

しかし、猫ドラフターは猫特有の俊敏さを持っておりその体当たりはあっさりかわされ、ソーラーは近くに乗り捨ててあったトラックにまともに激突することになった。

そして当然そのトラックは大爆発を起こし、ソーラーは吹っ飛ばされる羽目になった。

ソーラー「あ… ぐう…」

トラックの爆発に巻き込まれた… というより爆発を引き起こしたソーラーは相当のダメージを受けてしまっていた。

そんなソーラー目掛けて、猫ドラフターは獲物を狙う獣の目で牙と爪を振りかざして襲いかかっていった。

ソーラー「そ、そうはいくか… モードデイヴィジョン!!」

その掛け声とともにソーラーは四人に分身した。

ソーラー「こ、これで、少しは時間を…」

攪乱して時間を稼げると思ったソーラーだが、その期待は見事に裏切られ、猫ドラフターの攻撃に本体が吹っ飛ばされ、分身も消滅した。

ソーラー「なんで本物がわかったのく!?!」

情けない悲鳴とともに吹っ飛んでいったソーラーを上空から見て、セーリは嘲るような呆れたような感想を漏らしてた。

セーリ「バカかあいつは? あれだけ色が違っていれば誰でも見分けがつくだろうが」

この感想通り、四人になったソーラーの髪の色は、本体が銀、後の三人がそれぞれ赤と青と黒である。

しかもロングヘアであるため、子供でも一発で見分けがつかうと言
うものである。

これは立体映像投影装置として搭載されていたシステムであるが、
もともと実験用であったため動きの確認用にわざと色が違って投影
されているのである。

まあこれに気がつかなかったソーラーの方にも問題があるのだが。

先ほどから自爆に近い形でダメージを受け続けたソーラーはボロ
ボロになってしまっており、猫ドラフターは自分の力を確かめるよう
に彼女を爪で鬺り始めた。

ソーラー「うあっ… があっ…」

まさに猫にいたぶられるネズミのような格好になってしまい、傍目
にもわかるほど弱り切ってしまっており、今にも機能が停止しそ
うだった。

セーリ「フツ、歯ごたえのないやつだ。これであいつが消えればド
ラフターの究極成長も、この世界を暗黒に染めるのも容易い」

そんなソーラーを見て、セーリは作戦の成功を確信していた。

志夜「危ない!!」

ソーラーをいたぶるのにも飽きたかトドメを刺そうとした猫ドラフターに対して、避難誘導をある程度終えた志夜が何発か発砲した。

無論、当然倒すまでには至らなかったが弾丸は皮膚を貫通し、それなりに痛かったらしくドラフターも悲鳴をあげていた。

ソーラー「あ、ありがとうございます。よし…」

一時的に攻撃が止んだため、なんとか体勢を立て直せたソーラーは志夜に感謝しつつ転がるようにして一旦距離をとった。

しかし、猫ドラフターの俊敏さは相当なものであり、ダメージが回復したかと思うとすぐさま突進してきた。

ソーラー「くっ、まずい。避けられない」

避ける余力などもはやなく、身構えたソーラーだったが突然猫ドラフターの動きが止まった。

ソーラー「…えっ？」

志夜「止まった…？」

セーリ「？ どうした？」

突然のことに皆が疑問に思う中、猫ドラフターは苦しそうに呻き声を出し始めた。

志夜「あの怪物、ミラービルに映った自分の姿に戸惑ってる…？」

志夜のポツリとつぶやいた言葉が聞こえたのか、ソーラーは事態を理解した。

ソーラー「そうか!! ひの太くん、思い出して!! あなたが強くなりたかったのは、守りたかったものがあつたからでしょう!! こんな風に何かを壊したかつたんじゃないはずよ!!」

そのソーラーの言葉に猫ドラフターは一層苦しみ出し、先ほど投げたスティックにより傷ついた部分から再び黒い煙を噴き出し始めた。

ソーラー「よし、今だ!!」

ソーラーはクロムスティックを一本構えてスティック部分に電撃を纏わせると同時に、グリップを強く握りしめ光のエネルギーを注ぎ込んだ。

それによりクロムスティックはただの電磁警棒から光輝くスティックへと変化した。

ソーラー「やああああ!!」

そしてそのまま大ジャンプしてスティックを首元の傷に力の限り突き立てた。

すると猫ドラフターは、スティックを突き刺されたところから光の火花を飛び散らして断末魔の悲鳴をあげた。

そしてソーラーがスティックを引き抜くと、猫ドラフターは吹き出した火花を全身に浴びながら倒れこみ、大爆発を起こして木っ端微塵に吹き飛んだ。

セーリ「くそっ!! ここまでできて失敗か」

失敗に終わったことを悟ったセーリは舌打ちとともに引き上げて行った。

ソーラー「痛た!! たたた…」

爆発に吹き飛ばされ地面に叩きつけられたソーラーの目の前に、刺々しい金属の玉のようなものがゴトリと降ってきて地面に転がった。

その金属の塊は少しずつ溶けるように形を変えていき、最終的には元どおりひの太の姿へとなって行った。

ソーラー「よかった… 元に戻ったんだ…」

そして一週間後　つまり現在

ソーラー「こないだの戦いで身に染みたよ。強くなるのにただ力があればいいってわけじゃない。ちゃんと自分の力で強くならなきゃ意味がないんだって」

志夜「そういうことです。だからこそ私たちだって日々訓練してるんですから」

あの戦いの後、ソーラーはまず体の動かし方を覚えるべきだと反省し、志夜に色々相談した。

そして志夜の勧めで、時間を見ては色々と武術のトレーニングをし
てもらっている。

河内「まあ、そういうことだな。つと、今日のところはそろそろ切
り上げろ。あんまり詰め込み過ぎても意味はないからな」

遠藤「うむ、日々コツコツと己を鍛え上げていく。学問に王道なし
と言うが、それは運動の面でも同じことじゃ」

志夜「じゃあまた四日後ね。お疲れ様でした」

ソーラ「はい、ありがとうございます」

そうしてソーラを含め、遠藤博士たちが研究所へ引き上げる中、回
復したひの太を見かけた。

もつとも以前の上級生とは違う他のだれかに絡まれているところ
だったが。

「だーかーらー、ちよつと金貸してくれていってんだ」

ひの太「やだ!! これは猫のエサ代なんだ。おまえなんかに貸すお
金じゃない!!」

堂々言い放ったひの太に、上級生は一瞬ひるんだが

「生意気言ってんじゃねえよ!!」

イラついたようにひの太に殴りかかった。

遠藤「コラ、やめんか!!」

ソーラ「いい加減にしなさい!!」

そういつて駆け込んできた遠藤博士とソーラを見て、やばいというように上級生は逃げ出して行った。

ひの太「イタタ…」

殴られたところが多少痛むのか、顔を顰めていたひの太にランは心配そうに声をかけた。

ラン「大丈夫？ んもう無理するから…」

ひの太「平気さこれぐらい。力なんかなくても、逃げたりしないって決めたから」

ひの太の言葉を聞いて、ソーラは嬉しそうに微笑んだ。

ソーラ「そうだよね。簡単な方向に逃げないで、精一杯頑張り続けられることが強さなのかもね。私も頑張るから、一緒に頑張ろう!!」

続く

第1話 新必殺ブレストフラッシュャー（前編）

日本 某県 甲子市 童夢小学校

豪「ぷっはく、食った食った」

生徒1「相変わらずいい食いつぶりだね、お前」

給食をペロリと平らげ、さらに大量のおかわりまでもして満足げな顔を浮かべていた豪は鼻の下をこすりながら得意げに告げた。

豪「へへっ。こんなうまいものいくらでも食べられるぜ」

そんな豪を見て、周りの生徒はもちろん担任の先生も気分が良かった。

担任「ウンウン。あんなに美味しそうに食べるのを見ると、こっちも気分がいいわね」

生徒2「ですね。でも…」

ちらつと見た視界の端には、未だにほとんど給食に手つかずのまま手を合わせている一際小さな女生徒がいた。

「ごちそうさまでした…」

担任「水原さん、またこんなに残して。ちゃんと食べないと体に悪いわよ」

水原という名の女生徒は担任にたしなめられたものの、聞く耳は持たないといった感じだった。

水原「だってお腹いっぱいなんです。無理して食べたら余計に体に悪いですよ」

担任「そんなわけないでしょ。パンもおかずもほとんど一口ずつしか食べてないじゃないの」

水原「だからいいんですってば。別に少しぐらい食べなくたって関係ないし」

豪「あ、待て待て。もったいねえよ食わねえんなら俺が…」

名乗り出ようとした豪だったが、担任に止められた。

担任「待ちなさい。いい、水原さん。私たちはこうして今ご飯が当たり前のように食べられるけど、二年前の騒ぎから復興仕切れてない場所だってあるし世の中大変なところも多いの。最近の騒ぎで食料が届かないところだって近くにあるのよ」

水原「はい、知ってます。それが何か？」

担任「そんな場所じゃ非常食だってまともにならないことだってあるの。食べ物を粗末にして、そんな人たちに申し訳ないと思わないの？」

水原「そんなの日々の蓄えがいい加減だっただけじゃないですか。それにここで食べ物を大切にしたらからってその人たちがどうなるわけでもなし。なんだったらこれこそこの人たちに持ってった方がよっぽどいいですよ」

机の上の手つかずの給食を指差して、そう言い捨てると彼女は席を立った。

生徒3「水原さんって、一年生の時から給食を全部食べたことない

んじゃないかしら」

生徒4「毎年おんなじようなことやってるわよね」

担任「はあ。食べ物のありがたみを知らないとは飽食の時代の弊害かしら。無駄かもしれないけど一応お家の方に連絡しておきましょう」

遠藤平和科学研究所

「この地下研究室でソーラの太陽電池の改良が朝から行われていた。」

遠藤「よし。これで蓄電効率が上がったから、太陽電池のエネルギーをある程度なら蓄えておける。フルチャージにしておけば曇りの日ぐらいなら変身も可能じゃろう」

ソーラ「ありがとうございます。これで効率よくあいつらとも戦えます」

遠藤「なーに、この改造プランは真っ先に考えとったことじゃしな。夜や雨の日に戦えないではたまらん」

もともと太陽電池のエネルギーを貯めておくシステムは改良プランとして考えていたことではあるが、出力が上がりすぎることでまともなソーラが扱えない可能性が高いということもあって、先送りになっていたのだ。

ソーラ「ケンドーとかジュードーとか色々教えてもらってこの体の

動かし方もだいぶわかってきたし、きちんと戦えると思います。でも…」

遠藤「確かにな。ただ戦えればいいというわけではないんじゃないかな。あのドラフターを浄化できんことには何にもならんのじゃから…」

これまで二回ドラフターを倒してはきているが、なんとか弱点をついたり相手が自滅したりといった要素が強く、次もうまくいくとは限らない。

それを痛感していたソーラはなんとか必殺技らしきものを身につけようとしているのだが…

ソーラ「このクロムスティックで突き刺すのも相手の弱点を突かないといけないし、何かもつといい案は…」

遠藤「フォーム。ライナージェットを修復しても、もともとリーフとダイーダが二人で使うことを想定しとった武器じゃからな。今のお主では荷が重すぎるじゃろうし…」

それを聞いて、ふとソーラは引っかかった。

ソーラ「そういえば先輩たちの必殺技ってどんなだったんです？」

遠藤「ああ、ライナージェットは小型ジェット機でもあると同時にプラスチックエネルギーを照射するキャノン砲にもなっておつてな。あの二人のプラスチックエネルギーを圧縮して一斉照射する技があった」

ソーラ「ふむ、エネルギーの照射か… だったら… よし、エネルギーをフルチャージにしたら一度試してみようかな」

豪「へーっ、ソーラ姉ちゃんがパワーアップするんだ」

いつの間にやら研究室に入ってきていた豪が感心したように声をあげていた。

ソーラ「あつ豪くん。そうだよ、太陽エネルギーをたっぷり吸収できるとなったからね。あとできちんと蓄えないと…」

その言葉を聞いて、豪はウンウンと頷いていた。

豪「そーだよねー。なにをするにしてもエネルギーをしつかりとらないと」

遠藤「ん？ なんぞ学校であつたのか？」

豪「いや実はさ…」

豪が給食の時間にあつた出来事を簡単に話すと、遠藤博士ももつともだというように頷いた。

遠藤「フーム、贅沢な時代になったもんじゃ。出された食事を残すなんざ、わしが子供の頃には考えられなかったがな」

ソーラ「ご飯食べないと元気が出ないんじゃないの？ テレビっていうのでやってたよ。お腹空いてる人に顔をちぎって食べさせてる人がそう言ってた」

豪「まあ、そうだけどね…（ここら辺はリーフ姉ちゃんやダイーダ姉ちゃんと変わんないな）」

ソーラの言葉に豪が多少ひきつっていると、ランが怒鳴り声をあげて入ってきた。

ラン「おじいちゃん!!」

遠藤「おう、ランも帰つとたか」

ラン「帰ったかじゃないわよ!! なによあの台所は!？」

遠藤「なによとはなんじゃ?」

ランの怒声にきよとんとした遠藤博士だったが、続けざまにランが
がなり立てた。

ラン「あんな勿体無いお昼の食べ方して。食べ物を捨てたりしないで
ちゃんと最後まで処理してよ」

遠藤「なーにを言っちよるか。ちゃーんと綺麗に残さず食べとる
じやろうが」

心外だというように返した遠藤博士だったが、ランも負けなかつ
た。

ラン「どこがよ？ 鮭の骨はあとで味噌汁の出汁取りに使えるし、
大根の葉っぱは切り刻んでサラダにできるし、漬物の汁は戻してまた
使えるでしょ。お米のとぎ汁だって掃除に使ったり色々使い道があ
るのに全部捨てちゃって、それにね…」

遠藤「食い物が勿体無いという話から掛け離れていっとるな。さす
がにそこまでせんでよかろう…」

同時刻 水原家

水原「ただいま」

件の少女 水原 静香もまた自宅に帰っていたが、おかえりの言葉
の代わりに母親からの説教が待っていた。

水原母「ただいまじゃないわよ。あなたまた給食残したんですつ
て。先生から連絡があつたわよ」

水原「なんだ、また連絡があつたの？ もういいじゃない」
うんざりしたように答えを返したが、母親の怒りは収まらなかった。

水原母「よくありません。いつつも給食費無駄にして。家でもほとんどご飯は食べないし、もうすぐ成長期だっていうのに、大きくなれませんか」

母親の言う通り、彼女の身長はクラスはもちろん学年でも最も小さい方であり、彼女にとってのコンプレックスでもあった。

水原「うるさいなあ。いいじゃない、小さい方がご飯も少なくて済むし」

口答えをしながら居間に行きテーブルの上の皿を見た途端、彼女は思わずブータレた。

水原「あつ、あの子豚のクッキーどうしたの？ あれ好きだったのに!! 帰ったら食べようと思って楽しみにしてたのよ!!」

その一言に、母親も堪忍袋の尾が切れた。

水原母「いい加減にきなさい!! そう言うつもりならご飯は食べなくて結構!!」

しかし

水原「いいわよ別に。お小遣いぐらいあるし、お店で食べることだってできるもの」

その、全くわかっていない回答とともに遊びに出かけた娘にがつくりと肩を落とすしかなかった。

水原「全く、一体ママも先生も何をプリプリしてるのよ!! 私がお飯食べないことで誰が迷惑するってのよ!! えーい腹立たしい!! なんてこんなにならねなきやいけないの!?!」

一応本人にしてみればかなり理不尽なことで怒られていると言う認識のため、あちこちの石を蹴ったりとかなり不機嫌そうに街を歩いていた。

水原「あの子豚クツキーだって楽しみにしてたのに、ママってば勝手に食べた挙句に、訳のわからないことでごまかすなんて!!」

そうイラつきながら蹴った小石は、目の前にいた黒ずくめのガリガリの男に当たった。

水原「あわわ!! す、すみません!!」

慌てて誤った彼女に、目の前の男はにつこりと笑いながら近寄って行った。

パーリ「気にすることは無い。何か気に入らないことがあったのだろうか?」

水原「あつ、はい。実は…」

目の前の男にどこか得体の知れない空気を一瞬感じた彼女だが、にこやかな態度と石をぶつけてしまった負い目もあり、事情を簡単に説明してしまった。

パーリ「それはそれは。だったら、君の主張が正しいことを証明して見なさい。私は君のような人間を探していたのだよ」

水原「えっ?」

笑顔とともに語られたどこか妙な言葉に戸惑う暇もなく、パーリはダーククリスタルを取り出し、彼女の額に押し付けた。

パリー「さあ。君の望み通り、食べ物の不必要さを証明するがいい!!」

水原「あぁーっ!!」

その悲鳴とともに、彼女の体は全身から吹き出した真つ黒な蒸気に覆い尽くされ、黒い火花のようなものがスパークすると同時に、二階建ての家ぐらいのサイズの子豚ドラフターが誕生した。

その子豚ドラフターは、雄叫びを一つあげると近くのスーパーマーケットに向かって突進していき、その食料を貪り食い始めた。

パリー「ふふっ、あいつはなかなか面白いドラフターになってくれた。キュア・ソーラー、お前の攻撃も奴には通じまい」

その言葉に呼応するかのようには、子豚ドラフターは食料を平らげると一回り巨大になっており、それを喜ぶかのように一鳴きすると、次の食料を求めて走り出した。

遠藤平和科学研究所

マイナスエネルギー検知器がけたたましく鳴り響く中、テレビの報道で状況を察したソーラーが出勤準備を整えていた。

豪「よし、準備完了。今回は俺も行くよ」

変装用兼防御用のヘルメットを目深に被り、アンチマイナーガン改めアンチドラフターガンを手にした豪も勇ましくそう告げた。

遠藤「あのドラフターの進路はこのまま行くと、ここの食品加工工

場じやろう。ここの倉庫には大量の備蓄品があるじやろうし、ここをやられたらかなりの打撃になる。頼んだぞ」

ソーラ「はい。エネルギーのチャージも終わったところだしね。豪くん、しっかりつかまっててよ」

そう言ったソーラにぎゅっと抱きしめられる格好になった豪は顔を真っ赤にしながらせわしなく頷いた。

ラン「なーに赤くなってるのよ。このバカ!!」

豪「う、うるせえ!! さすがにちよつと恥ずかしいんだよ」

そのセリフにソーラはちよつと不安げな顔をした。

ソーラ「えっ? これダメなの?」

豪「あ、いやそうじゃねえから。さつ、行こう行こう」

そうやって豪に促されたソーラは、豪を抱きしめて現地へと飛び立って行った。

ラン「何よ、にやけちやって」

遠藤「? お前は何をイラついとる?」

ラン「っさい!!」

続く

第12話 新必殺ブレストフラッシュャー（後編）

食品加工工場

大量の食料を貪り食い、ちよつとした小学校レベルのサイズになった子豚ドラフターは、そのサイズの体を維持するためにさらに大量に工場や倉庫の食料を食べさらに巨大になる…、といったことでますます手に負えないようになっていってしまっていた。

従業員「うわーっ、逃げろーっ!!」

従業員「助けてー!!」

そんな子豚ドラフターに、工場の従業員は恐れおののき取るものもとりあえず逃げ出していた。

そうして、食料を食い漁っていた子豚ドラフターだが、だんだんと飽きてきたのか、近くで腰を抜かしていた倉庫の警備員を見つけると、ぼたぼたとヨダレを垂らし始めた。

警備員「よ、よせ!! や、やめろ!!」

自分がどういいう目にあうのかを悟った警備員は、腰を抜かしつつも必死に這いずって逃げ出そうとしていたが、子豚ドラフターの蹄に捕まってしまった。

そして大きく開けた口を警備員に近づけていったところで、どこからか飛んできた光線に、子豚ドラフターは悲鳴をあげることになった。

豪「大丈夫? 早く逃げるよ」

豪の撃ったアンチドラフターガンはマイナスエネルギーを簡易的

に浄化できる機能を持った光線銃で、物理的破壊力こそないものの並みの拳銃よりはドラフターにもダメージになっていた。

子豚ドラフターが痺れているかのようになっていた隙に、豪は腰を抜かしていた警備員に肩を貸して避難していった。

ソーラ「豪くん、そっちは頼んだよ」

警備員が無事に逃げられそうだったことを確認し、ひとまずホツとしたソーラは、ルビーのように真つ赤な瞳でドラフターを睨み付けると両腕を頭の上でクロスさせ力の限り叫んだ。

ソーラ「ソーラーエネルギー全開!! モードプリキュア、ウエイクアップ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りするドレスのようなコスチュームに変身していた。

ソーラー「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

ソーラー「クロムステイツク!! ヤアアアア!!」

ソーラーは電磁警棒を取り外し、伸長させて子豚ドラフターに殴りかかった。

しかし、すでに全長20メートルを超えるサイズに巨大化した子豚ドラフターは、全身が厚い脂肪で覆われており、スティックの打撃を全く受け付けず、それどころかその弾力で跳ね返してしまった。

ソーラー「なっ!? 効かない!?!」

跳ね返されつつもなんとか体勢を整えて着地したソーラーを見て、豪は感心半分焦り半分といったところだった。

豪「ソーラ姉ちゃん。最近の特訓の成果が出るみたいだけど、あれじゃどうしようも…」

むろん、その心配はソーラーが一番しており、かなり険しい表情をしていた。

ソーラー「よしこうなったら… とうっ!!」

ソーラーは大ジャンプすると、気合とエネルギーを込めてドロップキックを放った。

足先が空気との摩擦とソーラーのエネルギーとの相乗効果で赤く発光しており、素人目にも相当の破壊力があるのがわかるほどであった。

が

ソーラー「う、うわーっ!!」

以前ビルの壁を軽く貫き、今ならばそれをはるかに上回るであろう威力のキックも子豚ドラフターを貫くことはできなかった。

それどころか、ゴムのような弾力の子豚ドラフターに対して中途半端に高い威力の攻撃をしたことで、さっきよりも派手にソーラーは跳ね飛ばされることになった。

その結果、工場内の建物の壁に頭から突っ込んでいく羽目になってしまった。

ソーラー「ハラホレ、ヒレハレ：」

豪「姉ちゃん危ない!!」

ビルの壁に派手に頭をぶつけ、目を回してしまっていたソーラーだったが、突如聞こえてきた豪の叫びと地響きに正気に戻った。

ソーラーの目前には、丸い玉のような姿に変化した子豚ドラフターが、自分を押しつぶそうと転がりながら突進してきたからである。

ソーラー「じよ、冗談じゃない!!」

自分の視界いっぱいに広がった子豚ドラフターの突進を、ヘッドスライディングの要領で泥だらけになりながらもなんとかかわしたソーラーだが、その結果ドラフターが突っ込んだ建物は押しつぶされるように倒壊した。

ソーラー「げげっ：」

驚きの声をあげたのも束の間、建物を押しつぶして動きの止まっていた子豚ドラフターは転進して再び転がり始めてきた。

ソーラー「わっわっわっ!!」

ソーラーはダッシュ力を駆使して逃げ惑ったが、もともとサイズ差がありすぎていることと相まって、ついに潰されてしまった。

ソーラー「ギヤアアア!!!」

パリー「仕留めた!!」

ソーラーが子豚ドラフターに押しつぶされ、悲鳴をあげたのを聞いて

た。パリーは勝利を確信した。

ソーラー「ぐ… まだだよ…」

ソーラーはすんでのところでなんとか子豚ドラフターを両腕を広げて受け止めていた。

パリー「ええいしぶとい!! だがあと一息だ、行け!!」

パリーの言葉通り、ソーラーの両足は子豚ドラフターの下敷きになっており、逃げ出すことが不可能な状態の中じわじわと押されていって、最後の抵抗というのがぴったりくる状態だった。

ソーラー「う、あ… ああ…」

豪「ね、姉ちゃん!!」

今にも押しつぶされそうな中、ソーラーの頭は超高速で回転していた。

ソーラー「よ、よし。こ、こうなったら…」

先ほど豪がうったビームガンが多少なりとも効果があったことを思い出したソーラーは、全身にエネルギーを集中し始めた。

ソーラー「プ、プリキュア…」

そして、ついに押しつぶされたと同時に、ソーラーは力の限り叫んだ。

ソーラー「ブレストフラッシュャー!!!」

その叫びとともに、ソーラーの上半身と横いっぱいには伸ばした腕から目も眩むような閃光とともに強烈なビームが発射され、子豚ドラフターを飲み込んで行き大爆発を起こした。

豪「う、うわーっ!!」

その閃光と爆発に豪はとっさに目をつぶって身構えた。

そして閃光が収まったのを確認するように恐る恐る目を開いていくと、驚きのあまり目を見開いた。

豪「す、すげえ… あの巨大なのが一発で吹っ飛んだ…」

パーリ「覚えておけプリキュア。この借りは必ず返す」
そしてその声を最後にパーリも姿を消していた。

ソーラ「あ、ぐ… なんとかやったか…」

全エネルギーを照射した結果、変身解除してしまい地面に大の字になって倒れてしまっていたソーラのところに豪が心配そうに駆け寄ってきた。

豪「姉ちゃん大丈夫!？」

ソーラ「な、なんとか… エネルギーが空っぽになっちゃって動けないけど… それより、あの人を…」

やっとというように言葉を発したソーラだが、それでもドラフターにされていた人のことを心配していた。

豪「えっ、あ、ああ」

子豚ドラフターのいた場所に転がった金属の塊は、少しづつ溶けるように形を変えていき、最終的には一人の見慣れた少女へと姿を変えていった。

豪「あ、あいつ… 水原…」

ソーラ「さつき話してた子か… でも、無事でよかったよ…」

嬉しそうに微笑んだソーラだったが、豪は浮かない顔をしていた。

豪「いや、まあ、確かにドラフターは倒したし、あいつも大した怪我はなさそうだけどさ…」

ソーラ「？ 何？」

キョトンとしつつ尋ねたソーラに豪は、力なく前方を指差した。

豪「つ、ついでに… 倉庫も、工場も…」

ソーラ「へっ？」

その豪の言葉に改めて前を見ると、先ほど自分の放ったビームで工場や倉庫までもが瓦礫のかけらすらなく消し飛んでいた。

ソーラ「…や、やりすぎた…」

遠藤『…なるほどな。あやつのエネルギーは太陽電池のソーラーエネルギーと光の精霊の力のハイブリット。プラスエネルギーだけを照射するというわけにはいかんということか』

ラン『感心してないで… どうするのこれ…』

研究所のモニターで状況を確認していた遠藤博士とランもこの惨状にはひきつるしかなかった。

遠藤『まあ、ドラフターによつて半壊状態じゃったからな。実質的被害はほとんど無かろう… それが唯一の救いじゃな…』

水原「あく、お腹すいたー!!」

豪「ほらもうすぐうちだろ。頑張れよ」

あの後、とりあえず正気に戻った水原さんを豪とソーラはうちまで送ることにした。

しかし、ドラフターにされていたことかなり消耗してしまっていたらしく、どうにかこうにかたどり着いた時にはすでにあたりは真っ暗になってしまっていた。

豪「しっかし、あんなに食つてたのになんでこいつ自身は腹が減つてんだ？」

ソーラ「多分、エネルギーの大半がドラフターの成長に使われてたんだよ。それに核になつてる人もエネルギーを多く消費されるから…」

そうやって解説しているソーラも、エネルギーを使い果たし両足が半分潰されていたためかなり歩き方がへろへろになっていた。

おまけに陽が沈んでしまったせいで回復もできないといった有様

だった。

豪「やれやれ。ほら着いたぜ」

水原「あ、ありがとう。ただいまー!! ご飯!!」

もう待ちきれないというように家に飛び込んでいったが、そこには怒りの形相で仁王立ちした母親が待っていた。

水原母「こんな時間までどこにいったの!! ピアノのお稽古もサボって!!」

水原「ご、ごめんなさい!! ちよつと色々あつて私も何が何だか……」
その怒鳴り声の前にしどろもどろになりながらも説明を始めた水原さんだが、大きく腹の虫がなった。

水原「お、お説教なら後できちんと聞くから。それより、ご飯」

両手でお腹を押さえながらそう訴えたが、母親の怒りは収まらなかった。

水原母「そんなものにつくに片付けちゃいました。そうでなくても食品工場が襲われて食べ物がほとんどないの!! まともに食べもしないんだから食べなくて結構!! もう寝なさい!!」

そう言い捨てると、母親は家の中に引っ込んでいった。

水原「そんなく!!」

情けない声とともに玄関先でへたり込んでしまった水原さんを、豪とソーラは必死に慰めた。

豪「元氣出せよ。でも元はと言えばお前が悪いんだし、一食ぐらい我慢しな」

水原「うゝ… そうだけど…」

ソーラ「いいのいいの。エネルギー補給の大切さがわかれば安いもんだよ。うん」

水原「でも…」

水原さんは自分の行いを反省し、ヘロヘロになっているソーラを見て、それを実感したものの、どこか納得いかない声をあげることになった。

続く

第13話 スクラップの反乱（前編）

甲子市

とある休日、ソーラはランの頼みで買い物に付き合っていた。

ラン「これで大体買うものは買ったかしらね。ごめんなさいソーラさん荷物持ってもらって」

ソーラ「いいっていいって。私だって色々遠藤博士にはお世話になってるし、外を歩いてれば太陽電池の充電だってできるしね」

両手いっぱい荷物を抱えたソーラに申し訳なさそうに言ったランだが、当の本人はまるで気にすることなく明るい笑みを返した。

その明るい笑顔を見て、ランはふと思いを馳せた。

自分の妹として作られた治安維持用ロボットにもかかわらず、敵に奪われプリキュアを破壊することだけを目的としたものに改造され、ついには分かりあえずじまいになってしまった存在、四季ゆう。

いつも冷たい表情をしていた彼女と瓜二つの容姿を持つ（同型のロボットだから当たり前だが）ソーラの笑顔は、ランにとって嬉しいような悲しいようななんとも言えない思いがするものであった。

ラン（別の次元に放逐されたってリーフさんとダイーダさんは言っていたけど、一体どういふところに行っちゃったのかしら？）

ソーラ「でもさ。こんなにいっぱい食べ物買って、博士やランちゃんもすぐエネルギーがいるんだね」

先日の戦いでのことを思い返し、なんとなく尋ねたソーラだったが、ランはため息で返した。

ラン「そうじゃないわよ。おじいちゃんてば何か発明しては失敗するもんだから、家計が圧迫されてるのよ。借金も返したりしなくちゃいけないしね。どうして年収が億の単位である人がスーパーの特売で買占めしなきゃいけないのかしら」

実際問題、遠藤博士が特許を取っている災害救助用パワードスーツのおかげで、年に十数億円の特許使用料が入ってきてはいる。

ただし、そこから税金で引かれる分と借金の返済額、その他諸々を差つ引くと、結果的に平均的な家庭より多少ましといったレベルの収入しか残らない。

にもかかわらず、実質浪費に近い状況になっている遠藤博士の各種実験や発明のおかげで、家計は赤字ぎりぎりといったラインであった。

ソーラ「そんなに失敗してるの？ 先輩たちは博士は立派な博士だって聞いてたし、実際先輩たちの体や私の太陽電池だって博士が作ったんだよね？」

キョトンとしたソーラにランはがっくりと肩を落とした。

ラン「それが例外的なのよ。必ずお皿の割れる食器洗い機とか、ゴミ吹き出す掃除機とかの方が多いんだから……」

そうして商店街を歩いていると、おもちゃ屋から大量のカードやらゲーム機やらを抱えた少年が出てきた。

「えーつと、このカードは持つてるからもういらないし。こつちのゲームも特典だけでいいし、こつちは… おつといけない持つてるものまで買っちゃったよ」

そんなことを呟き、持っていたものの半分以上を近くのゴミ箱に放り込むと、ランに気がついたように声をかけて来た。

「やあ、遠藤さんじゃないか。そつちの綺麗な人はお姉さんかい」

多少気障ったらしい言い回しをしたこの少年にランは露骨に不快な顔をして見せた。

ラン「ええまあそんなものよ」

「そうかい、しかしまた君も大量に買い込んだものだね。やはり裕福なものどうしどこか似かよるものだね」

ラン「それは残念ね。私は安売りの買占めよ。無駄遣いなんてできる身分じゃないの」

「はっはっはっ、謙遜などしなくてもいいのに。それに僕は無駄遣いなんてしていないよ。新しいカードが出たり、ゲームの特典を手に入るために買いに来ただけさ。それにそろそろ新しいテレビなんかも買わないとね、新しい機能がついたのが販売されるらしいし」

その言葉にソーラは軽く首をかしげた。

ソーラ「それが無駄っていうんじゃないの？ そこに捨ててたものだって使えるし、今のままでも特に問題ないんだよね」

「おかしなことを言うね。なんでも新しいものもいいに決まっているだろう。おもちゃだけじゃない、家電やパソコンだって、少しでも古くなったら捨てて、新しいものを買う。そうやって経済は回っていくんだよ。だからリサイクル法なんて馬鹿なもののおかげで、無駄な金が出ていく一方さ」

そうやって高笑いをしながらその少年は立ち去っていった。

ソーラ「ねえ、今の子誰？」

さすがのソーラも顔をしかめ、少年の後ろ姿にアカンベーをしているランに尋ねた。

ラン「私のクラスの肉山ってやつよ。家が金持ちでさ、それを鼻にかけてくるやーなやつ!!」

遠藤平和科学研究所

豪「ああ、肉山だろ。俺のクラスでも噂になってるよ。何でもかんでもすぐに新しいものや無駄に高いもの買って見せびらかしてくるやつだろ。フランス製の高級文房具とか、ブランドものの服だとか特注の上履きとか」

ラン「そつ、前の戦いの時に色々壊された街の復興作業とかで儲けた成金野郎よ。それより何より頭にくるのが、席が隣になったおかげかなんか知らないけど、私まで同類だとか思い込んでしょつちゆう絡んでくること」

遠藤「まあ、その少年のいうことにも一理あるが、ものを大切にせんというのは感心せんな。もつたいたいお化けが出るぞ」

研究所に帰って来て早々始まったランの肉山くんに対する愚痴に、遊びに来ていた豪はもちろん遠藤博士もあまりいい感想を返さなかった。

ソーラ「もつたいたいなお化けって？ ドラフターの親戚？」

ラン「似たようなもんよ。いっぺん痛い目にあつたほうがいいわ」
そう吐き捨てたランに、ソーラは詰め寄った。

ソーラ「何言ってるの!! ドラフターに襲われでもしたら大変なのに、そんなこと言っちゃダメ!!」

ラン「いやそういう意味じゃなくてね。えーっとどう言えば…」

肉山家

肉山「やれやれ、遠藤くんも困ったものだ。彼女ぐらい裕福ならば僕の気持ちも理解できるはずなのに。むしろ僕ぐらいでなければ彼女を理解できないだろうさ」

実に自分本位なことを呟きながら、周りの家と比べても一際大きな自宅の門をくぐった肉山くんだが、広い庭に止めてある自分の自転車を見て大きいため息をついた。

肉山「やれやれ、こないだ雨が降ったからかな。塗装が少しはげてるじゃないか。せつかくの高級自転車が台無しだ」

彼のいう通り、目の前の自転車は十段変速機能のつきで、サドルやハンドルなども彼に合わせて作られたカスタムメイドであり、お値段十万円と言ったものである。

そんなものを庭に置いて雨ざらしにするのもどうかと思うが、多少サビが浮かび塗装もはげていた。

普通なら気にするまでもないレベルのものだが、彼にとっては気に入らないものだった。

肉山「これじゃみつともなくて乗れやしないじゃないか。仕方ない、パパに頼んで新しいのを買ってもらうおう」

そうして買ってからまだ数週間、片手で数えられるほどしか乗ったことのない自転車を庭の隅のゴミ置き場へと押していき、汚いもの

ように放り投げた。

甲子市内 ゴミ捨て場

大量に捨てられている粗大ゴミを産廃業者が処理している中、大きなため息をついていた。

業者「なんでこんなに捨てちゃうかねえ。まだまだ使えそうなものばかりじゃねえか」

そうして見つけた一台のテレビを見て、さらにやるせない思いになつていった。

業者「こいつなんか、俺の使ってるやつより綺麗で新しいじゃねえか。世も末だねえ」

セーリ「全くもつてその通り、ならばこの世の中は暗黒になつてしまうのがふさわしい」

突然響いて来たドスの効いた声に慌てて振り返った産廃業者は、見るからに怪しい雰囲気醸し出している風船玉のように太った男がいつの間にかうしろにたつていることに気がついた。

業者「な、なんだ？ お前は？ 突然何を言い出すんだ？」

慌てふためき戸惑う産廃業者をよそに、セーリはダーククリスタルを取り出した。

セーリ「なんでもいいさ。この世が暗黒に染まるならばな」

そう言つてクリスタルを産廃業者に押し付けると、どす黒い光が発生して彼を包み込んだ。

業者「うわあーっ!!」

深夜 肉山家

見るからに高級そうなふかふかのベッドですやすやと眠っていた肉山くんだが、妙な物音に目を覚ました。

肉山「なんだよ。こんな真夜中にガタガタと…」

安眠を妨害されたことで不機嫌そうに寝ぼけ眼をこすっていたが、その物音を立てていたものに一発で眠気が吹っ飛んだ。

肉山「な、なんだ？ 昼間捨てた自転車にゲーム？ 一体なんでこんなゴミが今更僕の部屋に？」

昼間捨てたはずのものが自分の部屋にいることにも驚いたが、それがまるで生き物のようにカタカタと動き出したことに、彼は叫び声ひとつあげられなかった。

あんぐりと口を開け絶句している中、目の前の自転車やゲームがぼんやりと光り始めたかと思うと、直後肉山くんの姿は消えていた。

翌日

ラン「全く、なんで私が連絡のプリントを届けなきゃいけないのよ。席が隣だっただけなのに…」

欠席した肉山くんのプリントを帰りに届けるよう先生に言われたランは、ブツブツと文句を言いながら道を歩いていた。

ラン「そりやまあ、帰り道をちよつとそれるだけだけど、先生だつて勝手なんだから… さつさと届けてさつさと帰ろう」

ランも基本的に善人ではあるが人の好き嫌いは割と激しい方である。

肉山くん自身の性格もあるのだろうが、正直ランは彼を毛嫌いしていた。

手早く用事だけ済ませて帰ろうと思い、彼の家の前まで行くと見慣れた車が止まっていた。

ラン「これ、河内警部の覆面パトカーじゃ… 何かあったのかしら」

その頃屋敷の中では、河内警部と志夜刑事が母親に事情を聞いていた。

河内「では、昨夜間違いなくお子さんは自室に入ったわけですか」
肉山母「はい、10時頃でしょうか。僕ちゃんがパジャマで部屋に入るのを確認しましたので…」

志夜「窓の鍵は閉まったまま。靴やサンダルもきちんと揃っていましたが、自分から外出したとは考えにくい。やはり誘拐でしょうか…」

河内「そう決めつけるのも早い。この家、セキュリティはしっかりしてるんだろ。作動した様子もなし、外から侵入したとは考えにくいな…」

肉山母「あの、ボクちゃんは無事なんでしょうか。パパの会社がお金持ちですからさらわれたのだと思います。お金ならいくらでも出しますから…」

河内「ああ、奥さん落ち着いてください。まだ誘拐と決まったわけでは…」

志夜「ええ、あまりにも不可解な点が多すぎます。もう一度近隣の調査を…」

真つ青な顔をしていた母親を必死になだめていた河内警部と志夜刑事だったが、そこに恐る恐るといった感じの聲がした。

ラン「あのくすみません、今日休んでた肉山くんの分のプリントを届けにきたんですけど、空いてたものだから」

肉山母「あ、あら。どうもありがとう。ごめんなさいね今ちよつと立て込んで…」

ラン「あ、いえ。お気遣いなく。忙しいようでしたらすぐ帰ります。それじゃ…」

そうしてプリントを渡して足早に去って行ったランだったが、門のところの後を追いかけてきた河内警部に呼び止められた。

河内「待て待て待て。ちよつと頼みがある」

ラン「なんですか？ あんまり私が立ち入らない方がいいと思ったんですが…」

河内「いや、ここだけの話だが…」

志夜「警部殿!! 民間人のしかも少女にそんな話を!! ここの奥さんからも事態をくれぐれも大事にしないでくれと」

ランに内密の話をし始めた河内警部に、志夜は仰天して止めたが、それより先にランが話をさえぎった。

ラン「…ようするに一番話を聞かせたい、というより相談したいのは私じゃないですね」

なんとなく事情を察したランは、携帯を取り出した。

数分後、屋根の上をジャンプに次ぐジャンプでソーラがやってきた。

ソーラ「どうしたのランちゃん？ あいつらの手がかりが見つかったの？」

実は昨夜マイナスエネルギー検知器が微弱ながら反応があった。

ほんの一瞬の事だったため、記録に気がついたのが今朝だったのだが、何か起きていることだけは確かだと遠藤博士も判断した。

そのためソーラは朝から市内を飛び回って調べていたのだが、検知器の反応も特になく現在に至っていたのだ。

ラン「多分何か関係あると思う。だから私に相談するんですよ」

遠藤「ああ、まあな……」

妙に物分かりのいいランに多少引きつりながらも河内警部は事情を話し始めた。

河内「実はな、この子が行方不明になってるのはなんとなくわかってると思うが、それだけじゃない」

ラン「えっ？」

志夜「老若男女無差別に今朝から行方不明になってるの。この家ですでに二十軒目よ」

真剣な顔と小さな声で事情を話し始めた河内警部と志夜刑事にソーラもああというように頷いた。

ソーラ「それでなんかピリピリしてたんだね。怖い顔した人が街中にいっぱいいたよ」

河内「まあ同時多発失踪事件だからな。誘拐のことも視野に入れて

内密に捜査しとるんだが、問題はそこじゃない。全員ここの子みたい
に家の中で突然消えとるんだ」

ラン「なんですって!?!」

河内「誰かが出入りした形跡も本人が出て行った様子もなし、人間
業とは思えん。だから…」

事情を聞いたランも驚くと同時に難しい顔をした。

ラン「あいつらの仕業かもってこと？ いなくなった人に共通点と
かなかったの？」

志夜「それが全く。でもだからって、奴らの仕業と判断するのは早
計かと…」

ソーラ「ん？ 静かにして!!」

会話の進む中、ソーラが突然そう言った。

河内「ん？ どうした」

ソーラ「聞こえる… 昨日のあの子の声が」

ラン「えっ？ どこ？ この近く？」

ソーラ「うん。すごく小さい声だけど、助けてって言ってる。こっ
ちから…」

志夜「こっちって… 庭の中ですか？」

人間の数十倍を誇るソーラの耳にもかすかにしか聞こえない声を
頼りに歩いて行き、皆も半信半疑ながらそれについてかなり広い庭の
中に入って行った。

ソーラ「この辺から… でも一体どこに？」

ラン「でも、自転車しかないじゃない」

ランの言う通り、たどり着いた先には放り捨てられた自転車しか
なく肉山くんらしき人影はどこにもなかった。

河内「小さな声というと… ものすごく小さくでもされとるのか？
おい、足元に気をつけろよ」

一見デタラメな発想にも聞こえるが、以前にもプリキュアと共に戦ったこともある河内警部は敵の理不尽さも重々理解しているための発言であり。それは全員が理解していた。

そのため、その忠告に従い足元にも十分注意を払いつつ辺りを見回してはみたものの、人の気配は全くなかった。

志夜「人の気配もまるでしないし… 本当にここから聞こえるんですか？」

志夜刑事の当然の疑問に、ソーラも多少自信なさげに返した。

ソーラ「さつきは聞こえたんだけどなあ。ますます小さくなってきてるような…」

その途端、放り捨てられたように横倒しになっていた自転車が起き上がりランに体当たりを仕掛けてきた。

ラン「えっ？」

ソーラ「危ない!!」

とつさにソーラがランをかばったため無事で済んだものの、予想外の事態に全員混乱していた。

志夜「何!? 自転車が勝手に!!」

驚く暇もなく、その自転車は自立して走り始め庭から猛スピードで飛び出していった。

ラン「ど、どうなってるのあれ？」

ソーラ「この気配は…とにかく追っかけなきゃ!!」
そしてソーラもまた猛スピードでその自転車を追いかけていき、

河内「よ、よし。俺たちも行くぞ!!」

志夜「はい!!」

ラン「え、えくつと、私も!!」

河内警部たちも覆面パトカーのサイレンを鳴らして、見失わないよう
う必死に後を追いかけていった。

続く

第14話 スクラップの反乱（後編）

ソーラ「ここは… ゴミでいっぱいだけど…」

河内「スクラップ置き場か… さっきの自転車はどこにいったんだ？」

自転車を追ってたどり着いたスクラップ置き場だが、一面に粗大ゴミが所狭しと並べられた場所のせいもあり見失ってしまった。

ラン「でもなんかもったいないわね。まだまだ使えそうなのこんな
にいっぱい捨てて…」

志夜「気をつけてください。何か異様な雰囲気です。ただのスクラップ置き場とは思えないほど…」

どこか圧迫感を感じた志夜刑事が警戒するように進言した瞬間、周囲のスクラップが一斉に飛びかかってきた。

河内「なあっ!？」

ソーラ「くっつ!! クロムスティック!!」

突然のことに河内警部たちは必死に顔を覆ったりして身を防ぎ、ソーラはクロムスティックを取り外してスクラップを叩き落としていった。

河内「くそっ!! ここは危険だ、一旦退避!!」

その判断には全員異論もなく、飛んでくるスクラップを必死にかわしかわし、なんとか逃げ出した。

すると今度はスクラップ置き場に捨ててあったスクラップ全てが、まるで意思を持ったようにうごめきだし、やがて一箇所に集まると巨大な人型の怪物へと変貌した。

ソーラ「くっ、ドラフター!! やっぱりあいつらの仕業ね!!」

舌打ちをする間も無く、スクラップドラフターはスクラップでできた巨大な拳を振り下ろしてきた。

河内「うおおお!!」

志夜「きやあああ!!」

ソーラ「あつ、刑事さん!! ランちゃん!! ぐずぐずしてられないか!!」

やるべきことをわかっていたソーラは、両腕を頭の上でクロスさせ力の限り叫んだ。

ソーラ「ソーラーエネルギー全開!! モードプリキュア、ウエイクアップ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りのするドレスのようなコスチュームに変身していた。

ソーラー「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

変身したソーラーは、スクラップドラフターの攻撃をかわして一気に懐に飛び込んだ。

ソーラー「こつちだつてね、特訓してるんだから。そうそう簡単には!!」

その言葉通り、急加速もブレーキも以前よりはるかにうまくできており、その姿を見た志夜刑事も嬉しそうだった。

志夜「やりますね、前はブレーキもろくに効かなかったのに。指導した甲斐がありました」

そうして懐に飛び込んだ勢いのままキックを炸裂させようとしたソーラーだったが

(助けて〜)

ソーラー「えっ!？」

目の前のドラフターから聞こえてきた弱々しくも助けを求める声に攻撃を躊躇してしまった。

無論、スクラップドラフターはその隙を見逃さずソーラーをはたき落した。

ソーラー「うわっ!!」

叩きつけたところを踏み潰さんとしてきたスクラップドラフターから、なんとか逃げたソーラーは耳の感度を最大にあげると同時に、ルビーのような赤い両目を光らせた。

ソーラー「このドラフター、何かおかしい。探って見ないと…」

ソーラーの目には、遠藤博士の改良により望遠、暗視機能の他、サー

モグラフアーなどが新たに追加されていた。

その機能と数十倍の聴覚をフルに使用したところ、ソーラーは驚くべきことに気がついた。

(助けてくれ!!)

(苦ししい!!)

(痛いよ!!)

(ここから出してくれ!!)

ソーラー「こ、このドラフター、全身のスクラップに生命反応がある… まさか!!」

そのソーラーの驚愕の声を聞いた河内警部たちも事情を察し絶句した。

河内「ま、まさか… 行方不明になった連中なのか?」

志夜「だ、だとしたら… 全身に人質を取ってるということに…」

ラン「そんな…」

皆が身じろぎひとつできないでいる中、スクラップドラフターは雄叫びをあげるとソーラーに殴りかかってきた。

ソーラー「う、うわっ!!」

スクラップドラフターの動きそのものは、その巨体と相まって鈍重であり、今のソーラーにしてみれば難なくかわせるもののだが、それ以上に厄介な状態になっているのを痛感していた。

ソーラー「まずい。迂闊に攻撃してスクラップを破壊したら取り込まれてる人達まで死んでしまう… これじゃブレस्तフラッシュャー

も撃てない…」

ソーラーの必殺技ブレストフラッシュャーは、破壊力こそ絶大だがエネルギー消費が激しすぎる上、何より威力そのものも大きすぎるという欠点がある。

実際、前の戦いで使用した際には半壊していたとはいえ工場を一つ吹っ飛ばしてしまい、避難が早かったおかげで人的被害が出なかったことが奇跡に近い状態であった。

そんな光線を撃てば、当然ドラフターもろともに人質のようにスクラップに取り込まれている人がどうなるかは推して知るべしである。

ソーラー「ええいまずい… このまま手を出せないとドラフターが究極成長しちゃう」

スクラップドラフターの攻撃を余裕を持って避け続けていたソーラーだが、実際に追い詰められているのは彼女の方であった。

ドラフターにしてみれば、ソーラーを倒すことができなくても時間を稼ぎ続けることができれば良いのであり。その危険性は彼女が一番よく知っていた。

ソーラー「何か、何か方法は…」

焦りつつもスクラップドラフターの全身を改めてサーチしたソーラーが、なかなか突破口を見出せない中、ランがあることに思い当たった。

ラン「待って… こいつの全身がスクラップなら、核にされた人はどうなってるの?」

それを聞き、ハッと気がついたソーラーは改めてスクラップドラフ

ターの全身をスキャンし始めた。

ソーラー「見つけた!! 核はあそこね。全身がスクラップなら核のまま変化してない。周りのスクラップさえどかせられれば……」

攻略法を見抜いたソーラーは気力を取り戻し、クロムスティックを両手に飛びかかった。

ソーラー「下手にスクラップを破壊すれば、中に捕らえられてる人が死んじゃう。攻撃は最小限にしないと……」

特訓の成果があつてか、ソーラーのスティック捌きは的確なものであり、ピンポイントで目標のスクラップだけを壊すことなく、うまく剥がして叩き落としていった。

しかし、当のスクラップドラフターがそんな状況で黙っているはずもなく、核の一部が露出したところで、ソーラーをはたき落した。

ソーラー「うわあっ!!」

はたき落とされたソーラーの目には、ドラフターがようやく露出させた核を再び覆おうとスクラップを引き寄せている光景が映った。

ソーラー「まずい!! 急いで核を取り除かないと!!」

ソーラーはクロムスティックを構えたものの、そこで一瞬考え込んだ。

ソーラー「…核だけを取り除くには、これしかない。でも、特訓はしたけど、こんなハードな技がうまく狙いをつけられるか……」

その逡巡の間にも、スクララップドラフターの核は刻一刻とスクラップに覆われ始めており、回復など時間の問題であった。

ソーラー「くっ!! やるしかない!!」

覚悟を決めたソーラーはスティックを両手に構えて高速きりもみ回転しながら突っ込んでいった。

ソーラー「喰らえ!! プリキュア・ドリルドライバー!!」

そのドリルのような攻撃でスクララップドラフターの核は見事にえぐり抜かれた。

志夜「や、やった…」

核を失ったことでスクラップドラフターは体を維持できなくなり、ガラガラと崩壊していった。

一方、あまりの高速回転で突っ込んでいったためか、ソーラーは姿勢制御がうまくできなくなり空中でバランスを崩した。

結果、えぐりとつた核を放り投げる格好になり、ソーラー自身もくるくると回転しながら地面に激突しそうになった。

ソーラー「な、なんの…!!」

それでもなんとか地面に激突寸前体勢を立て直して着地し、即座にスティックに力を込めて光のエネルギーを注入した。

ソーラー（くっ、無茶な姿勢で着地したから膝と腰が破損した。でも…）

そうして空中に放り出した核に狙いを定めると、痛みをこらえつつも雄叫びとともに大ジャンプしてスティックを突き刺した。

セーリ「チツ、まずいな。あいつもだんだんと強くなっている。戦略を少し見直すか」

敗北を確信したセーリは、結末も見届けず立ち去っていった。

事実、ステイツクを突き刺された核は光の火花を吹き出しており、その勢いが収まっていくと同時に、ゆつくりと元の産廃業者へと姿を変えていった。

当然、スクラップドラフターが浄化されたことで、スクラップに捕らえられていた人たちも無事に解放されることになった。

もつとも

河内「なんとかあったが…」

志夜「この飛び散ったスクラップの山の処理の方が大変そうですね…」

あたり一面に飛び散ったスクラップを見回し、引きつりながらそうつぶやくしかなかったが。

数日後 遠藤平和化学研究所

ラン「ただいま…」

なんとなくぐったりしたような声とともに帰宅したランを、遠藤博

士が心配そうに迎えた。

遠藤「おお帰ったか。どうした疲れたような声を出して」
ラン「え？ そりや疲れるわよ、あのバカ山のせいで!!」

ソーラー「えっ？ あの子また何かあったの？ ドラフターの力のせいで、どこか体に異常でも？」

無茶をした反動で破損したボディの修復がようやく完了したソーラーが、不安そうに尋ねると、ランは力なく返事をした。

ラン「それがさあ、自分が無駄に捨てたゴミに取り込まれたりなんかしたからか、あいつもさすがに反省したみたいで物を大切にすることを言い出したんだけど…」

遠藤「良いことではないか。その何がいかん？」

キョトンとした遠藤博士にランは大きなため息とともに続けた。

ラン「方向性が問題なのよ。壊れたシャーペンは何にも書く必要がない時に使えるとか、穴の空いた上履きを学校に行きたくない日に履けるとかわけわかんないこと言い出してそれを周りに押し付け出してさ…」

それを聞いたソーラーの不安は増したらしく、真剣な顔になっていた。

ソーラー「やっぱドリフターの力の影響かな。きちんと調べたほうがいいかも…」

ラン「心配することないわよ。根本的にズレてるやつなだけだから…」

その頃、自宅の庭で自転車を丁寧に扱っている肉山くんの姿があった。

肉山「よし、この少し塗装の剥げた自転車は自転車に乗りたくない時に使える。乗りたい時に使うための自転車はまた買って貰わなくっちゃ」

河内「あそこまで懲りん子供も珍しいな…」

志夜「全くです…」

事後の様子を確認して回っていたこの二人も、肉山くんの言動には呆れ顔でため息をつくしかなかった。

続く

第15話 誕生、ストレス女王（前編）

甲子市立病院

ここで勤務している一人の女医さんに遠藤博士とソーラが会いに来ていた。

「お久しぶりです。遠藤博士」

遠藤「京香先生久しぶりじゃな。連絡や紹介が遅れたがこつちが最近噂の…」

ソーラ「ソーラと言います。京香先生のごことはリーフ先輩から聞いてました。すぐく立派なお医者さんだつて」

この女医さんの名前は実じつ京香きょうか。

河内警部同様かつてリーフとダイーダの仲間だった人である。

京香「そんなにリーフさんから褒められてたなんて照れ臭いわね。それより、リーフさんやダイーダさんは…」

遠藤「うむ、まめに通信は送っているが未だに音信不通じゃ…」
新たな敵、ドラフターを倒すために火口に飛び込み消息不明となつてしまったことは京香先生も聞いている。

何もできない自分の無力さに唇を噛み締め、暗い表情で俯いてしまった二人だったが、ソーラが妙に明るい声を出して来た。

ソーラ「元気出してよ。先輩たちは死なないっていつてくれたもの。帰ってくるまで全力で頑張らなくっちゃ。落ち込んで、何もできずに負けちゃったらそれこそ怒られちゃいますよ」

京香「ふふっ。その通りね」

遠藤「うむ。お主だけに任せてはおけんしな。わしも全力でサポートするぞ」

そうして決意を新たにしていると、制服を着た一人の中学生が京香先生に話しかけてきた。

「あつ実先生。こんにちは」

京香「あら出来さん。お祖母さんの具合はどんな感じ?」

出来「はい、おかげさまでだいぶん良くなってきています。先生のおかげですよ」

それを聞いてソーラもウンウンと頷いていた。

ソーラ「やつぱり京香先生はすごいなあ。こんなに尊敬されてるんだもんなあ」

出来「えっと先生。この人たちも患者さんですか?」

京香「いえ、お友達よ。ソーラさん、遠藤博士。こちら出来 杉菜さん、おばあさんが入院していてね。よくお世話に来られてるの」

出来「初めまして。あの、遠藤博士ってまさかプリキュアの…」

遠藤「あまああな。今じゃしがない隠居ジジイじゃが」

世界を救った科学者と言うことで、当時一躍時の人になった遠藤博士だったが、その時マスコミがごった返したこともあり、あまりの面倒くささから今では積極的に表に出ることはなくなっていた。

それに、今現在の事態に関しても警察が戒厳令を敷きソーラのこと
も極秘扱いになっている。

そのため適当にお茶を濁した。

出来「そんなことないですよ。立派な人だつて聞いてます。私の尊
敬してる人です。自分のやりたいことをして世界を救ったんですか
ら」

ソーラ「ウンウン。そうだよ。博士は立派な人だよ」

出来「えつとあなたは？ お孫さんですか？」

ソーラ「あつ、私は遠藤博士のお手伝いをしてる… 遠田ソーラつ
て言います。よろしく」

そういつてにこやかに手を差し出してきたソーラに出来さんもま
た手を差し出してしつかりと握り締めた。

出来「はい、こちらこそよろしく。でもこんな立派な人のところ
でお手伝いしてるなんて、あなたもすごい人なんですわね」

ソーラ「いえ、私なんてまだまだ… 先輩たちの足元にも…」

なんとなく話がまずい方向に行きそうな事に気がついた京香先生
は、さりげなく話題を変えた。

京香「そんなに人のことばかり褒めなくても、あなたも立派じゃな
い。学校の成績はいつもトップで、クラス委員もしてるんですよ。そ
れに忙しいご両親の代わりに妹さんの世話までしてるとかで…」

出来「いえ、そんなこと… 私はやらなきゃいけないことをしてる
だけで…」

そこまで話した時、彼女はハッとある事に気がついた。

出来「あ、すみません。妹を保育園に迎えに行く時間なのでこれで」
京香「あら、こんな時間にもう?」

出来「はい。妹の夕飯の準備をした後、塾に行くんで。でない間に合わないんです」

遠藤「ほう、これから塾か。大変じゃのう」

出来「ええ、来年高校受験ですので。私立の高校に行くので頑張って勉強しないと」

感心したようにそう声をあげた遠藤博士にソーラはふと首をかしげた。

ソーラ「ジユクってなんですか? 話を聞いてると勉強するところみたいなんですけど、学校とは違うんですか?」

京香「えくつとね、学校の勉強だけでは足りないことを教わったり、より自分を高めるために通うところなの。私も学生の頃はよく通ったわ、どうしても医者になりたかったからね」

それを聞いて、ソーラも素直に感心した。

ソーラ「へえくすごいなあ。じゃああなたもなりたいものがあった、頑張ってるんだね」

だが、ふと出来さんは表情を曇らせた。

出来「え、ええ。それじゃ、時間がないので」

そうして足早に病院を出ていった出来さんを見送ると、京香先生はポツリとつぶやいた。

京香「あの子、一生懸命なのはいいけど、ちょっと気負いすぎみたいなよね。無理しないといいけど…」

ソーラ「でも、目標に一生懸命頑張ってるのはいいことですよ。私

だつてそうだもん」

ソーラはそう言ったが、遠藤博士もなんとなく不安そうに呟いた。遠藤「いやあ… どうもやりたい目標に向かって頑張つとると言う気がせんな。 変にストレスを溜め込まんといいいんだが…」

ソーラ「？ なんでやりたくもない目標に一生懸命になるんです？ したいことを頑張ればいいじゃないですか」

遠藤「そうは言うがな、そう簡単に行かんのが世の中というものじゃ」

遠藤博士ががっくりとため息をついたところで、京香先生がふと尋ねた。

京香「目標つて言えば、今あなたが戦つてる相手つてパーフェクトの言わば親玉なのよね」

ソーラ「はい、そうですけど…？」

質問の意図が読めず、キョトンとしたソーラに京香先生は続けた。京香「一体彼らの目的はなんなのかしら？ 世界を暗黒に染めると言っていたけれど、その先に一体どんな目的があるの？」

遠藤「ふむ。そう言えばそうじゃな。言われてみれば知らんかった」

そう言えばというように遠藤博士は頷いた。

ソーラ「はい、それは…」

ソーラの言葉に二人はゴクリと息を飲んだ。

ソーラ「…あれ？」

出来さんは妹を保育園に迎えに行った後、自宅のマンションで目まぐるしく動いていた。

出来「お姉ちゃん今日塾だからね。お母さんがパートから帰るまでいい子にしててね。お父さんもすぐに帰るからね」

そうやって洗濯物を取り込み、丁寧に畳んでタンスにしまいつつ、妹の夕飯をレンジで温めて用意し、自分は制服を脱ぎ捨ててハンガーにかけてつつ私服に着替え、カバンの中身を塾のテキストに入れ替えていた。

出来妹「わーい、今日も美味しそう。いただきまーす」

冷凍食品の簡単な夕飯を食べつつ、妹は保育園であったことを楽しそうに話し始めた。

出来妹「あのね、さやかちゃんのお弁当ね、キャッチューの絵が書いてあってとっても可愛かったの、私もあんなのがいいなあ」

ハタから聞いて入れれば、無邪気な子供のおねだりなのだが、妹の世話を一任されている出来さんからすれば、聞き流せることではなかった。

出来「ああわかったわかった。とりあえず考えとくから、人が来ても鍵開けちゃダメよ!!」

それだけ言い残すと、返事も聞かずに超特急で塾へ自転車を飛ばした。

自転車を飛ばしつつ、出来さんは焦っていた。

出来「まずい、今日テストなのに全然勉強する時間なかった。早

く行つてテキストを見直さない」と

その焦りから、さらにかなり危険な速度になるまで自転車を飛ばして行つた。

そうして勉強不足のまま臨んだテストに悪戦苦闘しつつも、なんとか全ての回答を埋めた彼女は講義を終えた後、ため息とともに帰路に着いた。

自宅に帰りついた時にはすでに10時を回っており、両親もとつくに帰宅していた。

出来父「遅かったな。今日は試験だったんだろ、どうだったんだ？」
低い声で父に尋ねられた出来さんは、恐る恐る国・数・英のテストを取り出した。

そこに書かれている点数は、全て90点台後半であり順位は当然一位である。

しかし、父は彼女をジロリと睨み付けると非難を始めた。

出来父「…なんでここまで出来て、後数点が取れないんだ？ 私立

のK高校の受験は大丈夫なんだろうな？」

出来「うん、それは… 先生も大丈夫だつて…」

その言葉に父はようやく納得した。

出来父「うむ、いいか。いい高校に行けばいい大学にも行きやすい。そうすればいい大学にも比較的入りやすく、いい会社にも入りやすく出世もしやすい。そうやってお父さんをリストラに追い込んだキャリアウーマンを見返してやれ」

数ヶ月前、出来さんの父はリストラにあっていた。

自分の部下だった女性社員に追い抜かれ、会社に居場所がなくなっただのである。

幸い、現在は再就職もできたため生活には困っていないが、かなり厳しい言動の裏にはそう言う事情があるのだ。

出来母「そうよ、そのためにお母さんもパート頑張ってるんだから。あっそうだ、明日も彩香（妹の名前）のお迎えお願いね」

出来「あ、うん…」

ぼんやりとした返事をしつつ、彼女は簡単にシャワーを浴びると部屋に向かって行った。

出来「あゝそうだ。キャラ弁作るんだっけ、明日早起きしないと…塾と学校の宿題は…それからにするか…」

どこかうわ言のようにぼんやりとつぶやきながらベッドに入ると、彼女は昼間のことを思い出していた。

出来「昼間のあの子、ソーラさんだっけ。プリキュアみたいにくすぐり綺麗な目をしてたな。ああいう子が主人公の物語を書くとなんて楽しそう…」

出来さんには親にも内緒の夢があった。

絵本作家になって子供達に夢を与えたい。

二年前、この世界を救った英雄プリキュアのことを知った時から漠然と考えていた夢である。

出来「プリキュアか…最近また戦ってるみたいだけど、一度会っ

てみたいなあ。多くの人に夢をくれた人だもん、私もあんな風になりたい…」

翌朝

妹のキヤラ弁を日も昇らないうちから作り始め、2時間近くの苦闘の果てようやく完成させ一息ついていた。

出来「ふう、ようやく完成。さて、宿題始めるか…」

出来さんは、昨夜やり損ねた宿題をやるうとしたところ母親が妹を連れて起きてきた。

出来母「あ、お弁当お弁当。私もう行くから。それと彩香の髪お願いね」

ありがたいの一言もないまま、台所の弁当箱を手にバタバタと出て行こうとした母を出来さんはギョツとして呼び止めた。

出来「ちよ、ちよつと髪って何?」

出来母「あら、言っただけで出た言った母親を、足元で嬉しそうがお団子ヘアにしてるの見て気に入っちゃったみたいなの。じゃお願いね」

有無を言わずそれだけ告げで出た言った母親を、足元で嬉しそうに急かしてくる妹のことなど気がつかないほどに呆然としながら出来さんは見送った。

出来「そんな… お団子なんて時間がかかるのに… 私の宿題…」

その後のろのろとながらも妹の髪をセットした出来さんは自分の髪を適当にゴムで止めると、妹を保育園へと送り自分も慌てて学校へと向かった。

そうして、なんとか授業が始まるまでの休み時間で宿題を終わらせると大きいため息をついた。

出来「はあ、そういえば朝ごはんまだだっけ… あくあ、絵本描きたい」

用意してきた日の丸弁当を少しだけ食べて、簡単に朝食を済ませたところで予鈴が鳴ったため慌てて教室へ向かって行った。

学級委員でもある彼女は、校内でも忙しい。

先生から様々なことを頼まれ、クラスメイトからの相談に乗りつつようやくホームルームを迎えていた。

出来「えーつともうすぐ毎年恒例の文化イベントですが、実行委員を決めようと思います。と言つても大した仕事もなく一ヶ月ほどの委員ですから、そんなに負担はないと思います。どなたかやっただけませんか」

議事進行をしていた出来さんだったが、誰も委員に立候補しようともせず、無言のまま時間だけが過ぎていった。

出来（あくもう。みんな暇そうじゃない。なによその早く終われみたいな雰囲気は。このパターンだと…）

イライラを必死に押さえ込むようにして、出来さんは言い放った。出来「わかりました。皆さんも忙しいようですので、私が引き受け

ます。これでホームルームは終了とします」

そうやって席に戻ったところで、隣の席の子が話しかけてきた。

「大丈夫？ 忙しいのに背負い込んじゃって」

出来「だって… 誰かがしないとイケないんだし…（そんなこというならなんで立候補を…）」

「そんなに苦労してたら、いつかハゲるよ」

「そうそう、息抜きしなきゃ」

そうやって気遣うような言葉も、今の彼女にはイラつきを与えるだけだった。

すると、ふと後ろの席の子が何かに気がついた。

「あれ、大変!! ほんとにハゲてる。10円ハゲ」

その言葉に頭に恐る恐る手をやり、本当だとわかると愕然とした。

出来「いや… いやあああ!!!」

絶叫を上げると、周りが止めるのも聞かず一人クラスを飛び出していった。

自宅に戻り、電気もつけないまま一人机で泣いていると両親が妹を連れて帰ってきた。

出来母「杉菜、一体どうしたの？」

出来「電気もつけずに、寝ているのか？」

出来「お、お母さ… お父さ…。わ、私…」

涙ながらに事情を訴えようとしたところ、両親がまくし立ててきた。

出来母「どうして彩香の迎えにいつてくれなかったの!? パート中なのに保育園から電話があつて、慌てて切り上げてきたのよ。ちゃんとしてくれないと困るじゃない!!」

出来父「全くだ。そんないい加減なことだからテストでも満点が取れないんだ!! それに何だ、こんな時間からグースカと!! 受験生の自覚があるのか!?!」

その言葉に、ついに堰が決壊した。

出来「もういや!!! もういやだあー!!! 私ちゃんとやってるのに!!! 委員だつてしたくないのに、誰もやらないから!!! なんておぼあちゃんの世話やみんなのお弁当まで私が作らなきゃ…」

出来母「ど、どうしたのよ!? ちよつと!!」

突然泣き叫びだした娘に母はオロオロするだけでなにも言えず、彼女の叫びは続いた。

出来「塾だつて、K高だつて別に行きたいなんて言ったことないのに!!! 一番とっても、満点じゃないって怒つて… なんでリストラされたお父さんのためなんか、キャリアアウーマンになんなきゃなんないのよ!!! そんなのなりたくも…」

出来父「な…」

彩香「お、お姉ちゃん…」

泣き叫ぶ自分を心配するように近寄ってきた妹を出来さんは突き飛ばして睨みつけた。

出来「だ、だいたい何よ。キャラ弁に、お団子の髪なんて… そんな

なの自分でやんなさいよ!! 私なんていつも…ゴムで止めるだけ
： 何もしないくせに勝手ばかり!!」

その怒声に泣き出した妹を一瞥もせず、両親が止めるのも聞かず、
出来さんは一人家を飛び出していった。

出来（もういや!! 家にもいたくない、学校も行きたくない!! 助
けて!!）

夜の街をあてどなく泣きながら走っていた彼女を見て、大半の通行
人はぎよつとした顔をしていたが、中には満足そうな笑みを浮かべる
ものもいた。

パ―リ「あの女、面白そうだな。ドラフターの作り方をいつもと少
し変えてみるか…」

続く

第16話 誕生、ストレス女王（後編）

遠藤平和科学研究所

ラン「京香先生、お久しぶりです。あつ、すぐお茶入れますね」

京香「ありがとうございますランちゃん。ここは変わりませんね」

今に備え付けられているガラクタ： マイナスエネルギー検知器を見て京香先生は懐かしそうに呟いた。

遠藤「ホッホッホッ、散らかっててお恥ずかしい。で、話とは…」
その質問に京香先生は真剣な顔で話し始めた。

京香「はい、この前会った出来さんなんですが、覚えてらっしゃいますか？」

ソーラ「うん、もっちりろん。一生懸命頑張ってる人だよな」

遠藤「うむ、わしも覚えとる。その子がどうしたんじゃ？」

京香「それが… ちょっと最近おかしいらしくて… 入院してるおばあさんの世話に来たお母さんから聞いたんですけど…」

なんでもこの十日ほど妙に情緒不安定なのだという。

やたら明るくハイテンションな朝を迎え、ニコニコしながら掃除や家族の弁当を作って、元気よく登校していく。

かと思ったら、だんだんと機嫌が悪くなって行き、ちょっと物音を

立てたりしたことでも周囲に当たり散らし、じゃれついて来た妹をひっぱたくこともある。

そうやってイライラがピークに達した頃、またハイテンションになる。

そういつたことを二、三日の周期で繰り返しているというのだ。

遠藤「なんじゃそれは…何かきっかけみたいなことでもあったのか？」

京香「ええ、それが突然飛び出していった日に帰って来てからだ。ただ何があったかは言わないみたいで。気晴らしの方法が見つかったというだけで…」

ソーラ「？ それならいいことだと思うけど、何かいけないの？」

キョトンとしたソーラに遠藤博士は難しい顔で話し始めた。

遠藤「…なんとなく親御さんや先生の心配しとる理由はわかる。

つまるところ変な薬に手を出しとるんじゃないかということじゃな」

京香「ええ、私も妙に思ってお母さんに頼んでこっそり彼女の髪をもらって調べて見たんです。髪の毛には兆候が出やすいので…」

ラン「結果は？」

京香「シロ…ということでしたが、検査に引っかかりにくいものもありますから一概にそうとは…」

遠藤「うーむ…」

皆がしかめっ面をしている中、どうも会話が理解できないソーラが手を挙げた。

ソーラ「しつもん。薬って体を治すためのものですよね。それで

なんでこんなに悩んでるんです？」

そのソーラのある意味正しい意見にどう答えるべきか頭を抱えることになった。

遠藤「あく、ややっこしい話じゃがな。確かに薬は本来体を治すためのものじゃし、今話しとる「薬」も元々は痛み止めや疲労防止のためのものじゃったんじゃがな……」

ソーラ「はあ……」

京香「でも、なんともない人が使うと、過剰に効果がありすぎて痛みを感じなくなるとか、妙に頭がすつきりしたりするといったことになってしまつて、それが快感になるのよ。そしてだんだんとその快感から抜け出せなくなつていくの」

ソーラ「ふんふん」

京香「でも、もともと体そのものは健康だから薬を大量に何度も取り込むと体にもよくないどころか、壊してしまうの。そしてその苦しみから逃げようとまた薬に手を出す。そんな悪循環でやがて完全に体がおかしくなつてしまうの」

遠藤「体だけならまだいいがな。副作用でだんだんと頭まですつきりするどころかおかしくなつていくこともある。やけに自分が偉くなつたように感じたりして、平気で悪いことをしたりな」

二人の簡単な説明を聞いて、ソーラは絶句した。

ソーラ「そんな…… そんな危ないものつてみんな知らないんですか？」

その言葉に情けないというようにため息をついた。

遠藤「みくんなわかつてはおるんじゃがな。人間なんて弱いもんじゃ、苦しみから逃げようと安易に手を出してしまうこともある……」

どんよりとしてしまった空気の中、ランが必死になつて話を切り替えた。

ラン「そ、そんなことよりも!! その出来さんだっけ、どうなったの?」

京香「あ、ああ。それなんだけどね。もしそんな薬に手を出してたりしてるなら、早く辞めさせてあげないと… 河内警部に相談しようかと思いましたが、警察沙汰にしてしまうというのも…」

遠藤「なるほどな。しかしそれが本当に本人のためになるかというとな…」

どうしたものかと考えていると、ソーラがポツリとつぶやいた。

ソーラ「でも、そのクスリつて変だね。ストレスを感じてる人をおかしくするってドラフターでも作ってるみたい…」

そこで全員がハツと思ひ当たった。

京香「まさか… この件にあの怪物が関係している!」

遠藤「わからん。しかし本当に薬に手を出しているとして、アルバイトもしたらん中学生が簡単に買える代物ではないはず… 誰かにもらうにしても見返りもなしに配るまい」

ラン「じゃ、じゃあ…」

遠藤「無論、確証はない。マイナスエネルギー検知器も反応したらんのかな。ただ、可能性は否定できん」

遠藤博士がそう言い放った途端、ソーラが勢いよく飛び出そうとした。

ソーラ「あの出来さんを探しに行きます。あいつら許せない、あん

な一生懸命な人を!!」

遠藤「待て、わしらも一緒に行く。放つては置けまい!!」

とりあえず車を飛ばして、出来さんの中学校まで行ってみた三人だったが、すでに時刻は夕方。

部活動の時間になっており、運動部で校庭はごった返していた。

遠藤「彼女の状況から勘案してクラブ活動などはしておらんじやろう。まだ学校にいるとして何かの委員会じやろうが…」

京香「事情を説明して校内に呼び出しをかけてもらいましょうか？ちよつと強引な理由をつける必要がありますが…」

自分たちは完全に部外者であり、校内に勝手に入っていくのはまずい。

なんとか理由を考えていたところ、

ソーラ「ねえねえ、ちよつと聞きたいんだけど…」

京香「ソーラさん!？」

遠藤「こういうところはあいづら譲りじやな、全く」

いつの間にやらソーラが堂々として行き、ランニングをしていた男子生徒に質問していた。

「は、はい。なんですか?」

ソーラ「あ、あのね… 出来さんって人探してるんだけど。知らない

いかなあ」

プラチナブロンドの髪に、透けるような白い肌。
ルビーのように光る赤い瞳。

こんな人間が学校に在籍して入れば嫌でもみんな知っている。

どう考えても部外者なことが丸分かりだったにもかかわらず、その男子生徒は多少顔を赤らめながらもペラペラと話し始めた。

「えっ、で、出来？ あ、ああ、俺、いや僕のクラスメイトなんですけど今日はもう帰りましたよ。なんかすごく機嫌が悪そうで委員会があるっていうのに、それも聞かずに飛び出して行きました。忙しいなら言ってくれたらよかったのに」

ソーラ「そう、どうもありがとう」

ニッコリと笑って礼を言ったソーラに、その男子生徒は元気よく答えた。

「い、いえ、どういたしまして!!」

そこに遠藤博士が慌てて飛び込んできてソーラの腕を引っ張り、学校から連れ出した。

遠藤「先走りすぎじゃ、あまり勝手にあちこち入ってはいかん」

ソーラ「でも出来さんはもうここにいないみたいですよ。大急ぎでどっかに行っちゃったって」

遠藤「ああ、わかった。とにかく街の中を探そう。彼女の自宅と学校を中心に、どちらからも徒歩で行ける範囲を重点的に」

とりあえず知りたかった情報は手に入ったため、遠藤博士は車を飛

ばした。

京香「でもよく簡単に話してくれましたね。部外者に対しては注意するようにと、最近では学校でも口を酸っぱくして言われてるでしょうに…」

遠藤「ソーラは鼻真目なしに見てもかなりの美少女じゃからな。思春期男子の悲しいサガ、これも人の弱さじゃよ」

京香先生の疑念に、遠藤博士はぽつりと呟いた。

出来「ハアハア… もう限界、早くあれをもらわないと、イライラで頭がおかしくなりそう…」

日も沈みかけた頃、街中の裏路地で出来さんは肩で息をしてよろめきながら、誰かを探していた。

出来「いつもここで、この時間にいるって言ってたのに… どこに行っただの…?」

獲物を探すケダモノのように血走った目をして、あたりを見回していた出来さんの前に、ガリガリの男がどこからともなく現れた。

パーリ「ふふふ、いい感じに育ってきているようだな」

怪しい笑みを浮かべていたパーリだったが、今の出来さんにそんなものはどうでもよかった。

出来「い、いた!! 早く、早くあの水晶を!! 頭がおかしくなりそう!!」

なりふり構わず、すぎるように飛びついてきた出来さんに、パーリは懐から真つ黒なクリスタルを取り出した。

パーリ「ほらこれだろう。相当ストレスが溜まっているようだね」
出来「そうですよ!! どいつもこいつも自分勝手ばかり!! 死んじまえばいいんだあんな奴ら!!」

吐き捨てるように危険なことを言い出した出来さんは、待ちきれないというようにパーリの差し出したクリスタルを手に取ろうとした。

出来「ああ、これでまた頭がスッキリする。これは本当にすごい…」

ソーラ「待ちなさい!!」

そこに凜とした声とともにソーラが飛び込んできた。

出来「え? あ、あなたは!？」

パーリ「貴様…」

遠藤「な、なんじゃお主は…」

京香「すごく嫌な雰囲気…」

あとを追ってきた遠藤博士と京香先生もパーリの醸し出すどこか得体の知れない感覚に、不快感を覚えていた。

ソーラ「あなた、出来さんに何をやるの?」

パーリ「どうもせん。ただ、ストレスを解消させてやる代わりに見返りをもらおうと思ってるな」

そう嘯くと、手にしていた黒いクリスタルを放り投げた。

出来「ああっ!!」

すると出来さんはボールを追いかける犬のように、転がっていったクリスタルを追いかけて行った。

遠藤「いかん!!」

京香「待ちなさい出来さん!!」

パーリ「ふん。人間なんぞ愚かなものだ」

ソーラ「黙りなさい!! このマイナスエネルギー… 私にだってわかる!! あなたがドラフターを!!」

パーリ「その通り。そして俺も知っているぞ、キュア・ソーラー!!」

そう叫ぶとパーリは飛びかかっていき、ソーラも負けじとクロムステイツクを取り出して応戦した。

クリスタルを追いかけて行った出来さんは、何度も躓きながらもようやくそれを捕まえることに成功し、宝物のようにそれを大切に持ち上げた。

出来「や、やった… これは私のものだ。これがあればもう私は苦しむことも…」

遠藤「よ、よせ!! それを捨てるんじゃない!! それは危険なものじゃない!!」

そんな出来さんに遠藤博士はクリスタルを捨てるよう促したが、聞く耳を持たなかった。

出来「嫌よ!!　これがあるから私は痛みも苦しみもなくなってまでもでいられる!!　ようやく私のものになったんだもの、誰が捨てるもんか!!」

京香「落ち着いて。ご家族も心配してるのよ、さあ帰りましょう」
凄まじい形相で叫んだ出来さんをなんとか説得しようと、家族を引き合いに出した。

「がそれは完全に逆効果だった。」

出来「何よ!!　勝手ばかりやった挙句、私の事さえ先生に押し付けたんでしょ!!　あんな奴らが私を心配してるって、召使がいなくなっただってぐらいのことでしょ!!」

その叫びとともに力強く握り締めた手の中のクリスタルは、そのまま手の中に消えて行った。

それと同時に出来さんの全身から黒い蒸気のようなものが噴き出し始め黒い火花のようなものがスパークすると同時に、巨大な絵本に手足の生えたようなドラフターが誕生した。

ソーラ「ハアツ!!」

ステイツクで殴りかかったソーラだが、パーリはそれを受け止めてしまった。

とはいえ、かなりの鏝迫り合いになっており、お互いに身動きが取れなくなってしまうた。

ソーラ「あなた!!　出来さんを元に戻しなさい!!」

遠方でドラフターが誕生してしまったことを感じ取ったソーラが

そう詰め寄ったが、パーリは涼しい顔で返した。

パーリ「無駄だ!! コツコツとダーククリスタルのマイナスエネルギーを与え続けていたからな。あいつはストレスを多く抱えていたから簡単に依存するようになった。愚かな奴だ!!」

その言葉にソーラは完全に堪忍袋の尾が切れた。

ソーラ「許さない!! あんなに一生懸命な人を踏みにじって!! うん、これまでも何人もの人を!! 先輩を!!」

怒りに任せてパーリを押し飛ばしたソーラだったが、パーリはニヤリと笑った。

パーリ「いいのか? 俺の相手などをしていて」

ソーラ「えっ?」

パーリ「あいつには少しずつマイナスエネルギーを与えていたと言ったはずだ。ドラフター化した今、すでに究極成長は目前だ。間も無くこの世界は暗黒に染まる!!」

そう高らかに宣言したパーリに、ソーラは慌てて雄叫びをあげている絵本ドラフターを見やった。

すると絵本ドラフターからは真っ黒な蒸気が溢れ出して周囲を闇で包み始めていた。

ソーラ「い、いけない!! 早くなんとかしないと!!」

それに気を取られたことで隙ができ、パーリはソーラを蹴り飛ばしつつ近くのビルの屋上へと大ジャンプした。

パーリ「さらばだプリキュア。俺たちの勝ちだな!!」

ソーラ「くっ、待ちなさい!! こんなことをして一体どうしようとするか!!」

そう問い詰めるも、パーリは高らかに笑いながら姿を消した。

ソーラ「まずい、早くなんとかしないと…」
焦りつつもソーラはチラリと空を見上げた。

一刻も早くドラフターを浄化しなければならない。それはわかっているのだが…

ソーラ「太陽電池のエネルギーはチャージしてあるけど… もう夜になつてるし…」

ソーラーエネルギーに不安があったソーラは飛び込むのに躊躇していたが、絵本ドラフターが一層大きな叫びをあげたことで覚悟を決めた。

ソーラ「く!! 迷つてる場合じゃない!!」

迷いを振り切るように拳を握り締めると両腕を頭の上でクロスさせ力の限り叫んだ。

ソーラ「モードプリキュア、ウェイクアップ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りのするドレスのようなコスチュームに変身していた。

遠藤「い、いかん!! マイナスエネルギーを辺りに撒き散らし始めると!! このままでは…」

絵本ドラフターから溢れ出るマイナスエネルギーの蒸気を見て、遠藤博士も慌て始めた。

京香「出来さん、お願い!! 正気に戻って!!」

だがすでに人としての意識が失われているのか、そんな言葉になど全く反応を返すことはなかった。

ソーラー「タアリアアア!!」

そこにソーラーが気合とともに放ったドロップキックが炸裂し、絵本ドラフターは大きく蹴り飛ばされた。

そしてうまく着地したソーラーは絵本ドラフターに向かって堂々と名乗りをあげた。

ソーラー「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

そんなソーラーに対して、イラついたように絵本ドラフターは猛烈なスピードで殴りかかってきた。

ソーラー「グアツ!!」

そのパンチは強烈で、ソーラーの体は一撃でアスファルトに埋まってしまった。

遠藤「ソーラー!!」

そうしてそんなソーラーに対して、何度となく絵本ドラフターはパンチを振り下ろしていった。

京香「一方的にやられている…なんて強さ…」

遠藤「いいいやソーラーの方にも問題がある。とつくに日は沈んだら、あやつの吐き出した黒い蒸気で周囲は真っ暗じゃ。これでは光線の、エネルギーの補充が効かん!!」

遠藤博士の懸念したことは、ソーラーが一番よくわかっていた。

ソーラー「まずい… なんとか変身できたけどとてもじゃないけど戦えるだけのエネルギーがない…」

事実、先ほど不意打ち気味に放ったキックでもいっばいっばいであり、次々と振り下ろされてくるパンチには耐えるだけがやっとだった。

ソーラー「でもなんとかしないと、世界が暗黒に… そうだ!! あいつが少しずつマイナスエネルギーを蓄積したなら…」

ソーラーは一か八かにかけて微動だにしないまま攻撃を耐え、少しずつ全身にエネルギーを溜めていった。

ソーラー「お願い、間に合って… 究極成長仕切る前に…」

防御すらしないうまま一方的に殴られ、踏み潰され、ソーラーはたちまちのうちにボロボロになっていったが、それでもエネルギーの集中を止めなかった。

そうしてソーラーを力任せに踏み潰すと、ついに絵本ドラフターが一際大きな雄叫びをあげ、一層巨大化し始めた。

京香「ああっ!!」

遠藤「いかん!!」

しかしそれと同時にソーラーのエネルギーもなんとかチャージが終わった。

ソーラー「く、喰らえ!! プリキュア・ブレストフラッシュャー!!!」

その叫びとともに、ソーラーの上半身と横いっぱいには伸ばした腕から目も眩むような閃光とともに強烈なビームが絵本ドラフターの足元から上空に向かって発射された。

そうしてその一撃には究極成長寸前だった絵本ドラフターも堪らず浄化されてしまった。

ソーラ「な、なんとかか… 間に合った…」

かろうじて勝利はしたものの、残されていたエネルギーを全て使い切ってしまったソーラもまた、変身解除してダウンしてしまった。

出来「あの… 私、帰ったって仕方ないんじゃないか…」

憑き物が落ちたように元の落ち着いた性格に戻った出来さんは、京香先生につれられて自宅の前まで来たものの、入りづらそうにしていた。

京香「心配しないで、ご家族も心配してたんだもの。さっ」

優しく家に入ることを促され、覚悟を決めてドアを開けたところ、父親の怒声が響いて来た。

出来父「いったいどこに行っていた!!」

出来「ヒイツ!!」

思わず縮み上がってしまった出来さんだが、両親は彼女を優しく抱きしめてくれた。

出来父「心配したんだぞ」

出来母「ごめんなさいね。あなたってばなんでもできるから、つい押し付けちゃって…」

出来妹「お姉ちゃんおかえり」

その温かい言葉に、出来さんも涙を流し始めた。

出来父「その、すまなかったな。つい、私の感情を押し付けてしまつて… リストラされてどこかイライラしてたんだな」

出来母「お父さんってば、昔から完璧主義者だから… あなたがそんなに辛かったなんて全然気づかなくて… ゆっくり話し合いましよう。これからどうするか…」

出来父「聞かせてくれないか。お前が本当にやりたいことを…」

出来「うん…」

そうして、京香先生や遠藤博士に丁寧に頭を下げ、出来さんたちは家の中に入って行った。

ソーラ「大丈夫かなあ… そもそもそのストレスの原因はあの家族なんですよね」

遠藤博士に負ぶわれたままそれを見送ったソーラは、不安そうに呟いた。

遠藤「まあ、円形脱毛症ができるぐらいに追い詰められとつたみたいじゃからな。わしも一抹の不安は確かにある」

ソーラ「じゃあ…」

京香「信じましょう。家族だからこそ支え合っていくことができる
と。信じあえる家族がいることが一番のストレスを解消する方法な
んだって…」

その未来を信じる言葉に、ソーラもまた力強く頷いた。

ソーラ「そっか… そうですよね!!」

続く

第17話 灼熱の冬（前編）

遠藤平和科学研究所

遠藤 「クツソク!! 一体今何度あるんじゃない?」

全身汗だくになり、額の汗をぬぐいながらうだるような声を遠藤博士は出した。

ラン「室内でも39℃よ。クーラーも今にもいかれそうだわ、なんせ外が外だから…」

現在、12月上旬。

タンスにしまっていた夏服を引っ張り出し、団扇で扇ぎながらになりしたような声をランは出した。

ソーラ「まずいな。早くあれをなんとかしないと…」

熱で煙を上げ始めているテレビでは、節子が耐熱服を着込んで単身突撃レポートを敢行しているシーンが映っていた。

節子『ご覧ください、この閑散とした街を。外を出歩こうという人は誰もいません。かく言う私も、この暑さの前には耐熱服越しでも気が遠くなりかけています』

事実、映されている街中は陽炎で揺らめき、アスファルトが溶け始めて妙な色の煙が漂い、街路樹もあまりの暑さで枯れ始めていた。

節子『このままでは世界はどうなってしまうのでしょうか? あの輝く悪魔の前に我々は屈するしかないのでしょうか?』

節子の見上げた先には、この地上を照りつける「二つ」の太陽があった。

数時間前

気象予報士『今日はかなり冷え込む日となるでしょう。それでは皆様、体にお気をつけて良い一日をお過ごしください』

朝一番の天気予報を見ながら、ランはぶつぶつと文句を言っていた。

ラン「よく言うわよ。ここんとこずっと当たったためしないじゃない。晴れるって言うから洗濯物出したら土砂降りだったし。寒くなるって言うから冬物出したら、全然あったかいし」

遠藤「まあまあ、そうそう愚痴るな。天気予報が当たらないことぐらいザラじゃろうが」

ラン「おじいちゃんはいいわよ!! どうせ地下室にこもりつきりなんだし、冷暖房はつけ放題なんだから!! 外をうろつく私の身にもなつてよ!! あったかいか寒いかだけでもはつきりして欲しいわ!!」

そうやって当たり散らすランにソーラもウンウンと納得していた。

ソーラ「そうだよね。突然雨に降られたりなんかしたら、私もエネルギーが充電できないもんね。ねえ博士、天気を自由にしたりするってできないんですか？」

ソーラとしては素朴に尋ねたつもりだったが、遠藤博士は珍しく声を荒げた。

遠藤「バカもん!! 良いか、いかに科学が発達しようとも大自然の力を乗り越えようなどと自惚れてはならん!! 人間の力と言うものは天然自然の一部でしかない、くれぐれもそこを間違えてはならんぞ!!」

ソーラ「は、はい…」

遠藤博士の勢いに、ソーラも思わず姿勢を正すことになった。

遠藤「まあ、それはそれとてじや。お主の太陽エネルギーの急速充電システムぐらいは用意した方が良くもしれんな」

ソーラ「そんなのできるんですか? 太陽電池の改造の余地が他にも!?!」

遠藤「うんにや。鏡やらなんやらを利用して太陽光線を効率的に集めるようにしたりするので、あとは以前に作った太陽光線と同じスペクトルの光を照射してみるぐらいじやな。(コズミックプリキュア1 2話参照)」

その答えにランは呆れることになった。

ラン「なんだ、大したことじゃないのね。大げさに言うから何かと思えば」

遠藤「何を言うか、本来科学とはこう言う地味なことの積み重ねじゃ。一足飛びに結果など出せんぞ。目標を据えてコツコツ努力し続ける。それが大事なんじや」

したり顔で言い放った遠藤博士は、そこでふと思い出したように続けた。

遠藤「そういえば目標で思い出したが、連中の最終目的をお主は本当に知らんのか？」

ソーラ「あ、はい。なんせあいつらとまともに話をしたのもこの間が初めてでしたし。先輩達なら何か知ってたかもしれませんけど…」

遠藤「そうか…それがわかれば対処の幅も広がるんじゃないかな…他にわかってそうなやつといえれば、あやつだけじゃしな…」

ラン「うん、Dr.フライだね…」

遠藤博士のどこか沈んだ言葉に、ランも表情が曇った。

ソーラ「私もその人のことは聞いてます。なんでも一度死んだのにマイナスエネルギーを取り付けられて生き帰らされたんですよ」

遠藤「うむ。ある意味でこの世界で一番闇の力を知つとるやつじゃないかな。話を聞ければいいんじゃないが、どこに幽閉されとるかわからんからなあ…あのバカもんが」

一度戦った相手とはいえ、かつては友人だった男である。

その末路を思い、遠藤博士は残念そうに呟いた。

遠藤「あの才能を無駄にしおって。一体なんのために天から授かったと思っておったんじゃない…」

ソーラ「まあなんにせよ。連中の目的がわからないなら、今度攻めてきたときに取っ組み合えてやりますよ!!」

力強く語られたソーラの言葉に、研究所内にも明るさが戻った。

遠藤「うむ。そうじゃなことここに至ってはそれが一番じゃ!!」
ラン「頼りにしてるわよ、ソーラさん」

ソーラ「オツケー!! まっかせなさい!!」
調子に乗りやすい性格のソーラだったが、この明るさは遠藤博士達にとってもありがたいものだった。

ラン「なんか不思議ね。ソーラさんを見ると明るくなってくる」
…って、いつけない遅刻しちゃう!!」

話し込んでいる間に、時間がかなり経ってしまったことに気がついたランは、慌ててランドセルを背負った。

ラン「じゃあ行ってきます。ソーラさん、おじいちゃんのお昼お願いね。あつためるだけだから」

ソーラ「うんわかった。行ってらっしゃい!!」
遠藤「車に気をつけるんじゃぞ」

そうやって見送られたランが、ドアを開けた瞬間だった。

ラン「!! あっちく!!」
冬だと言うのにサウナ風呂のような熱気が外から漂ってきたのだ。

遠藤「な、なんじゃこの暑さは!! 今12月じゃぞ!! 異常気象にもほどがある!!」

こんなはずはないとばかりに外へ飛び出した遠藤博士だったが飛び上がることになった。

遠藤「あちやちやちや!! 地面が焼けとる!!」

ラン「どうなってるのよ一体!! 太陽が二つあるみたい…」

その言葉にソーラがのんきそうな声をあげた。

ソーラ「わあランちゃんってすごい。ほら本当に太陽が二つも!!」

遠藤「何い!？」

ラン「嘘!!」

そんなバカなと空を見上げたところで、二人は目を疑った。

ラン「ほ、本当に太陽が二個ある…」

遠藤「こんなことが…」

そこで遅ればせながら、居間に備え付けてあるマイナスエネルギー検知器がけたたましい音を立てた。

ソーラ「!! まさかあの太陽!!」

遠藤「考えるまでもあるまい、ドラフターじゃ!!」

それに気がついた途端、二つ目の太陽は輝きを増しジリジリと照りつけてきた。

遠藤「とにかく家に!! 焼け死ぬぞ!!」

その日差しにたまらず家の中に逃げ込み、一息ついたところでソーラは真剣な顔つきになって空を睨んだ。

ソーラ「私行ってきます!! 早くあいつを倒さないと!!」

ラン「うん、お願い!!」

ランの頼みに自信満々に頷くと、ソーラは窓から飛び出して行っ

た。

ソーラ「あ、あづい… オーバーヒートしそうで帰ってきちゃった…」

飛び出して行つてわずか10秒。

あまりにも情けない声とともにへろへろになつて帰つてきたソーラに、ランも遠藤博士もズツこけた。

遠藤「と、とはいえ、あの太陽ドラフターじゃがまがい物とはいえ本物の太陽並みの熱気じゃ。迂闊に近づいたら熱で溶かされかねんか…」

今にも熱でやられそうになっているテレビでは、二つ目の太陽を撃墜せんと飛び立った自衛隊機が熱にやられて、ろくに攻撃もできないままに撤退する様が報道されていた。

ラン「でもなんとかしないと外にも出れないし、家の中でもいつまで持つか…」

実際問題、クーラーをガンガンにかけていても、温度計はうなぎのぼり。

だんだんと頭がぼーつとしてくるぐらいであった。

ソーラ「それに早くしないとあいつが究極成長しちゃう。急がないと…」

濡らしたタオルで体を冷やしながら不安そうな声を出したソーラに、遠藤博士も汗を滝のように流しながら答えた。

遠藤「よし、強力な耐熱スーツを作る。それを着込んで突撃し一撃で破壊するしかあるまい。しばらく待っちよれ……」

そうして耐熱スーツの製作に取り掛かった遠藤博士だったが、あまりの暑さに体力が奪われ、思考は停止し、作業が難航していたところで冒頭に戻る。

続く

第18話 灼熱の冬（後編）

遠藤「い、いかん… あまりの暑さで頭がクラクラし始めてきた… 作業がはかどらん…」

ラン「私ももうダメ… 耳鳴りがして気が遠くなってきた…」
ソーラ「ランちゃん、遠藤博士も、しっかりしてください!!」

作業を進めている間にも、太陽ドラフターはどんどん輝きを増していき、それとともに気温も上昇を続けていた。

過剰運転が祟ったクーラーはとつくの昔に機能停止してしまい、かろうじて回っている扇風機も熱気を引っ掻き回すだけでしか無くなっていった。

室内でこの調子であるため、屋外に至ってはすでに灼熱地獄であり、アスファルトはドロドロになり始め、川や池の水は茹だり蒸発し、砂漠が天国に思えるレベルの気温になっていた。

ソーラ「ええい、こうなったら。なんとかあの太陽ドラフターの機能を少しでも和らげてきます!!」

遠藤「ま、待てい… 下手に突っ込んだらドロドロに溶けてしまっぞ…」

立ち向かおうとしたソーラをへ口へ口になりながら呼び止めた遠藤博士だったが、ソーラは黙って首を振った。

ソーラ「放って置けません。できる限りのことはしてみます!!」
そうしてソーラは水で濡らしたタオルを大量に全身に巻きつけ（水

道水もほとんど沸騰寸前になっていたが、日傘をさして一直線に飛び出して行った。

ソーラー「くっすく、タオルもすぐに乾いちやったし…いくら太陽が欲しいたって、限度があるよもう」

太陽ドラフターに接近していったソーラーだが、そのあまりの熱に付け焼き刃の防御は気休めにしかならなかった。

それでも放つては置けないとばかりに、両腕を頭の上でクロスさせた。

ソーラー「モードプリキュア、ウェイクアップ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラーの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りのするドレスのようなコスチュームに変身していた。

ソーラー「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

変身完了するや否や、ソーラーは全身にエネルギーを集中し始めた。

ソーラー「一気に決めてやる!! 喰らえ、プリキュア・ブレスト…」

必殺光線を放とうとした瞬間、背後から黒い塊が飛んできてソーラーに直撃した。

ソーラー「キャアアア!!」

完全に意識の外にあった方向からの不意打ちを食らったソーラーは悲鳴とともに地面に向かって落下していった。

ソーラー「イタタって、アッチー!!」

墜落したソーラーだが、地面に打ち付けた痛みよりもホットプレート顔負けになっている地面の熱さに飛び上がるようになった。

ソーラー「アチチアチチ!! は、早くなんとかしないと!!」

地面の上で踊りはねながら、天空の太陽ドラフターを睨みつけるともう一度飛び上がろうとした。

しかし、それを狙って先ほどの黒い塊が何発も飛来してソーラーの周りで爆発した。

ソーラー「キヤアアア!! ってアッチー!!」

突然の攻撃に戸惑い、地面の熱さに悶えていると、風船玉のように太った男が体当たりを仕掛けてきた。

ソーラー「ぐうっ!! な、何!？」

セーリ「ふん、こうして会うのは初めてだな。俺の名はセーリ。キュア・ソーラー、この世界を暗黒に染めるためにも死んでもらうぞ!!」

そう宣言するや否や、セーリはソーラーにその巨体で飛びかかってきてあっさり馬乗りになって押しつぶした。

ソーラー「な、なんであんなたちみたいなのが、こんな二つも太陽がある中で動けるのよ…」

マウントポジションを取られ、締め上げられたソーラーは苦悶の表情とともに疑問を口にしたが、セーリは嘲るように答えた。

セーリ「けつ、あの太陽だつてドラフターだ。闇の力が降り注いでることに変わりはない。かえって心地よいつてもんだ!!」

そうやって背中を地面に押し付けられたソーラーは完全に鉄板の上のお好み焼き状態であり、溶けたアスファルトがねつとりとまとわりついて来たため、コスチュームはもちろん人工皮膚が焼け始め、妙な音を立てていた。

ソーラー「うあああつ!!」

セーリ「このまま焼けてしまえ!! それと同時にこの世界も焼け落ち暗黒の世界となる」

悲鳴に満足げな笑みを浮かべてそう告げたセーリに、ソーラーは苦しみながらも問いただした。

ソーラー「どうしてあんたたちはそこまでして暗黒世界が欲しいのよ…」

セーリ「そんなものは…」

一拍おいてセーリは怒鳴りつけた。

セーリ「教えてやる義理はない!!」

マウントポジションのまま、ソーラーに対して何発も拳を振り下ろしそれとともにメカが壊れるような音と皮膚の焼けるような音が響いていき、ソーラーの悲鳴もだんだんと小さくなり始めた。

ソーラー（あ…ぐ… この太陽ドラフターの光は、私のエネルギーにならないみたい… 力が入ら…ない…）

セーリ「ふっ、トドメだ!!」

白い肌が黒く焦げかけ、ぐったりしてしまっていたソーラーの首を捕まえて高く持ち上げると、セーリは高らかに笑った。

しかしそこに極太のビームが飛んできてセーリに直撃した。

セーリ「ぐおおおっ!!!」

そのビームの一撃は強烈で、セーリはかなりのダメージを負ってしまいソーラーを手放し自身も膝をついてしまった。

遠藤「ソーラ、大丈夫か？」

そこにいたのは宇宙服のようなごっつい服に身を包み、バズーカのようなレーザー砲を抱えた遠藤博士だった。

ソーラー「な、なんとか… でもそれは…」

遠藤「ようよう完成した冷房スーツと、マイナーガンを対ドラフター用に出力をアップさせたプラスエネルギー砲じゃ。 見とれ今そいつを…」

セーリにさらに攻撃を仕掛けようとした遠藤博士だったが、太陽ドラフターの発する高熱により、凄まじい灼熱地獄となっていたためすでにプラスエネルギー砲はオーバーヒートし煙を吹き始めていた。

遠藤「い、いかん!! これではあと一発撃てるかどうか…」

慌て始めた遠藤博士に、ソーラーは上空の太陽ドラフターを指差した。

ソーラー「あいつより、あっちを!! 太陽ドラフターを狙ってください!!」

遠藤「そ、そうじゃったな。よし!!」

その言葉にハツとなった遠藤博士は太陽ドラフターに向けてプラスエネルギー砲の狙いをつけた。

遠藤「これでもくらえ!!」

プラスエネルギー砲はオーバーヒートしてしまったものの、最後に発射された極太のビームは見事に直撃し、みるみるうちに太陽ドラフターの輝きは弱まっていった。

ソーラー「よ、よし、今だ!!」

ソーラーはいまだに立ち上がれないでいたセーリを捕まえるとそのままジャイアントスイングで太陽ドラフターに向かって投げ飛ばした。

セーリ「うおおおっ!!」

そして全身にエネルギーを集中させ、ソーラーの上半身と横いっばいに伸ばした腕から目も眩むような閃光とともに強烈なビームを発射した。

ソーラー「受けなさい!! プリキュア・ブレストフラッシュャー!!!」

その一撃をセーリはすんでのところで回避して引き上げていったが、弱っていた太陽ドラフターにはとどめとなり、一撃で浄化され消滅した。

ソーラー「や、やった…」

ソーラがエネルギーを使い果たしてへたり込んでいると、ポツポツと雨が降り始めた。ちまちまのうちに土砂降りになっていった。

遠藤「おっと、ゲリラ豪雨か。ずっと熱くなっておつたからな。まあこれで涼しくなるじやろう。引き上げるとするか」

ソーラ「はい…でもまたあいつらの目的を問いただせませんでした。いったいなんでこの世界を…」

遠藤「まあ、あまり焦っても仕方ない。とりあえずあいつらと戦わねばならんことだけは確かじゃ。戦っておればいつかわかるやもしれん」

どこか思いつめたようなソーラを励まして引き上げることになったものの、エネルギーを使い果たしたソーラと、宇宙服のような大掛かりなスーツに身を包んだ遠藤博士が、なかなかスムーズに帰れなかったことだけは言うまでもない。

甲子市上空 静止衛星軌道上 ブルペノン

ソーラーの一撃をかわしてなんとか退却してきたセーリを見て、パーリは心配そうに声をかけた。

パーリ「おい、大丈夫か？」

セーリ「ああ、なんとかな。しかしキュア・ソーラーか、仕留め損なってる間にだんだんと強くなってきていることだけは確かだ」

セーリのその感想にパーリもまた同感だと頷いた。

パーリ「うむ。そこで考えていたんだがな。手駒を少し増やしてみ

ようと思う」

セーリ「手駒？」

パーリ「ああ、端末の一つだがな。この近くの世界で封印されていたやつがいる。闇の王を勝手に名乗った黒き獣だが、そいつが復活しようとしているんでな。所詮は端末の一つだが、まあ使い物にはなるだろう」

セーリ「なるほど、それはいい。やられてもダーククリスタルの残数にも影響はないしな、せいぜい利用してやるとするか。しかし闇の王とはな」

パーリ「ああ、哀れなものだ。自分が俺たちが気まぐれに作ったものとも知らずにな」

そうやって嘲るような事を言いつつ、セーリとパーリは目の前に黒い空間のようなものを広げその自称闇の王のいる世界をこの世界と繋げ始めた。

二日後 遠藤平和科学研究所

気象予報士『本日は冬らしい寒さの一日となるでしょう。それでは皆様、風邪も流行っておりますのでお体には十分お気をつけください』

にこやかに天気予報を終えた気象予報士を見て、ソーラは満足そうに頷いていた。

ソーラ「ウンウン。天気予報が当たらなくて散々な事を言われてストレスが溜まってたんだね。だからドラフターにされたんだろうけど無事に回復してよかったよかった」

するとそこに息も絶え絶えなランの声が弱々しく聞こえてきた。

ラン「ソーラさくん… 氷まだく…」

ソーラ「あつごめんごめん。すぐに行くね」

その声にソーラは用意の途中だった氷嚢と氷枕を作り終え、寝室へと持っていった。

遠藤「うゝ… 今何度あるんじゃ…」

ラン「39℃よ… 私もそれぐらい…」

ベッドの上で横になり真っ赤な顔をしながら弱々しい声で二人が会話をしていたところに、ソーラが氷嚢や氷枕とともに薬を持ってきた。

ソーラ「お待たせ〜!! 氷とあとおクスリ持ってきたよ〜」

遠藤「お、おお… すまんな…」

ラン「ありがとう…」

ソーラ「いいっていいって、いつもお世話になってるんだから。でもどうして急に風邪なんて引いたの？ まさかドラフターの照射してた闇の光の影響かな？」

顎に手を当て真剣な顔で考え始めたソーラだったが、遠藤博士は咳き込みながら解説した。

遠藤「いや、いきなり気温がこれだけ下がれば大抵の人間は体調を崩すじやろうな…」

ラン「学校もみんな風邪で学級閉鎖だつて… あの体力馬鹿の豪がダウンするぐらいだから相当なものだと思っわ…」

ソーラ「ふーん。じゃあこれを簡単に治せる方法ってないの？ このクスリつてのもなかなか効かないみたいだし…」

遠藤「…風の特効薬を開発できれば間違いなくノーベル医学賞ものじゃ。とにかく暖かくして寝ているほかはあるまい」

ソーラ「そうなの？ テレビでやってたよ、アダブライプイバビデブーとか言つて、すぐに風邪が治るやつ」

小首を傾げながらのソーラの言葉にランもため息をつく気力もなく呆れながら返した。

ラン「何の呪文よ。魔法なんてそんな都合のいいものあるわけないじゃない…」

??????

朱色に塗られたドーム型天井を持つ白亜の塔が点在し、それをアーチ橋が結んでいる建物があった。

ここはある学校であり、その校長室に三人の女生徒が呼ばれていた。

「うむ、まずは三人とも突然呼び出してすまんことをしたな。わざわざ魔法界まで来てもらつてありがとう」

見た目は若々しい長髪的美青年がどこか年寄りかがった話し方で、その三人を出迎えた。

「いえ、構いません。それよりどうしたんですか校長先生？ 何か変わったことでも起きたんですか？」

三人のうち紫のロングヘアとマゼンタの瞳をした、真面目そうな少女がそう尋ねると、校長と呼ばれた先ほどの美青年が真剣な面持ちで話し始めた。

校長「うむ、実は奇妙な闇の魔法の波動が感じられてな。それもかなり大きな力があるものかな」

それとともに机の上の水晶もまた何故か言葉を発し始めた。

水晶「私にもお告げが来ました。封じられし闇の魔法が目覚めると」

「闇の魔法… それって…」

ピンクのロングヘアとエメラルドグリーン色の瞳の多少子供っぽい少女が不安そうにそう呟くと、水晶は話を続けた。

水晶「ですが、光輝くダイヤがそれを打ち砕くとも告げています」

「あつ、だから…」

校長「うむ。申し訳ないが君たちに調べて来てもらいたい。ただ、行き先が別の世界になりそうなのでな。魔法の扉でそこに行つてもらうことになるが、もう少し時間がかかりそうじゃ」

別の世界

その言葉に、金髪ショートヘアと紫色の瞳の元気そうな少女が敏感に反応した。

「別の世界!?! 今の別の世界って言いました!?! 魔法界でもなければナシマホウ界でもない世界ってことですか!?!」

興味深そうにキラキラした目でそう詰め寄ると、校長先生は素直に頷いた。

校長「うむ。普段はその二つしか行き来していないが魔法の扉に大きな魔力を込めれば様々な世界に行くことができる。ただ相当に力を使うのでな、そうそう簡単にはできないのじゃ」

その言葉に先の少女は興奮して叫び声をあげた。

「うっわー!! 別の世界なんてわくわくもんだあ!!」

「わくわくもんだしー!!」

「わくわくもんモフウ!!」

それに合わせて、ピンクのロングヘアの少女と三人が連れていたクマのぬいぐるみも興奮した叫びをあげた。

するとそれを紫のロングヘアの少女がたしなめた。

「何言ってるの!! 遊びに行くんじゃないのよ。それにもしかしたら前に突然私たちに襲いかかって来たあのプラチナブロンドの髪の毛の女の子と関係あるかもしれないのよ。あのこのことは未だによくわからないんだから」

その言葉に一気に空気が重くなった。

数週間前、突然自分たちに襲いかかって来た謎のプラチナブロンドの髪の毛の少女。

その時に一度だけ会合し、一方的かつ散々に叩きのめされたきりであり、未だにその正体は分かっていない。

その時のことはかなりのトラウマになっていた。

校長「リコ君の言う通りだ。何かあるかわからない以上、くれぐれも気を抜かないでくれたまえ。いくら伝説の魔法使いといっても、万能ではないのだから。みらい君もことは君もいいね」

「はい!!」

元気よく返事をする、三人は気を引き締めて魔法の扉をくぐっていった。

水晶「大丈夫でしょうか？」

その姿を見送った水晶は不安げにつぶやいたが、校長先生は力強く答えた。

校長「心配はいらんよ、彼女たちならば。それに闇のあるところ必ず光もあるのじゃから」

続く

第19話 まさに奇跡!! 魔法との幸福? な出会い
(前編)

甲子市 アーケード街北側

どこかスツキリしない曇り空が広がる中、三人の中学生ぐらいの少女が、鼻歌を歌いながらそんな暗い空気をふきとばすように楽しそうにアーケード街を歩いていた。

「はーっ、寒い。ここも冬なんだね」

三人のうちピンクのロングヘアの少女が手に息を吹きかけて擦り合わせながら、冬を感じていた。

「そうね。でもまあひやつこい島ほどじゃないし。どうってことはないわ」

強がるようにドヤ顔でそう言った紫のロングヘアの少女だが、直後吹いて来た北風に震え上がった。

それを見て、金髪のショートヘアの少女が心配そうに尋ねた。

「大丈夫? リコったら我慢することないのに、コート忘れて来たんだから」

その言葉にリコと呼ばれた紫のロングヘアの少女は敏感に反応した。

「忘れてないし!! 私ならこれぐらいの寒さなんともないって思ったからなんだ…か…ら… ハーックヨン!!」

と見栄を張ったものの、くしやみをしながらの台詞では全く説得力

がなかった。

「ダメだよ無理しちゃ。 そうだ前の時みたいにおしくらまんじゅうする?」

「そうやって無邪気に提案したピンクのロングヘアの少女だったが、さすがにそれは止められた。」

「ダメだよはーちゃん。 こんな街中でそんなことしちやみんなに迷惑だよ」

「みらいの言うとおりよ。 それに私たちは調査に来たんだからあんまり目立つことをしないようにしないと…」

「うゝつ…」

「そうしてたしなめられたはーちゃんと呼ばれたピンクのロングヘアの少女はしゅんとなってしまった。」

そこに再び北風が吹いて来て、全員震え上がってしまった。

「うゝつ、でも寒い。 せめて何かあったかいもの…」

「みらいと呼ばれた金髪のショートヘアの少女が辺りを見回すと、さすがアーケード街。」

「食べ物のお店が所狭しと並んでおり美味しそうな匂いが漂って来た。」

「あつ、パンケーキだ!! 甘くて美味しそう!!」

「そう言ってみらいはショーウィンドウにへばりついた。」

「はーっ!! ラーメン屋さんだ美味しそうでいい匂い!!」

「寒さも手伝ってフラフラとラーメン屋に入りかけたところでむんずと襟首を捕まえられた。」

「ちよつと二人とも本当にわかってるの!? 私たちは食べに来たんじゃないのよ!! それにお小遣いだって限りがあるし無駄遣いしたらいざという時に困るじゃない。大事に使わないと…」

そうしてお説教が始まったところでふとあることに気がついた。

「あら? みらい、モフルンは?」

「あ、あれ? さつきまで…」

「た、大変すぐに探さないと!!」

「ええ、歩くクマのぬいぐるみなんて大騒ぎになっちゃうわ!!」

以上のようなドタバタ劇を繰り広げて、モフルンというクマのぬいぐるみを探し始めたこの三人の少女。

わかってる人はもうわかってると思うが、朝比奈みらい、十六夜リコ、花海ことはの三人である。

ほぼ同時刻 アーケード街南側

豪「んじゃ、じいちゃんはまだ寝てるの?」

ラン「そつ、思ったより風邪がひどくてね」

ソーラ「でも、なんで博士だけこんなに長引くの? ランちゃんは五日で治ったし、豪くんはそれより早く治ったんだよね」

先日の太陽ドラフターの騒ぎで、ほぼ街中の人間が体調を崩すことになり、遠藤博士や豪とランも例外ではなかったのだが、さすがに一週間も経った今では街にもほぼ以前の活気が戻っていた。

しかし、未だに臥せっている遠藤博士をソーラは心配しており、こうして栄養のあるものを買いに三人で出かけて来ているのである。

ラン「まあ、おじいちゃんもいい歳だしね。普段運動しないから体力も落ちてるのよ」

ソーラ「ふーん。お薬飲んだら元気になるんじゃないんだ」

豪「まあ、心配しなくても所詮風邪だしね。なんかうまいものでも食べて寝てりやすぐに良くなるよ… っと、あれうまそう!!」

漂って来た甘い匂いにつられ、走り出した豪にランは呆れながらあとを追いかけて言った。

ラン「全く、あんたが食べる物買いに来たんじゃないでしょ」

豪「これ甘くてうまいな!! じいちゃんにも買っていこう。じいちゃん甘いもの好きだしな」

移動販売車で売っていたパンを買い、近くのベンチでうまそうにパクつく豪を見て、ランがたしなめた。

ラン「もう、買い食いなんかして!! 知らないわよおばさんに怒られても!!」

豪「平気平気!! パンの一個ぐらい食ったうちに入らねえって!! お前も食うか、うまいぜこのイチゴメロンパンっての」

ラン「バカ!! だったらせめて新しいの差し出さないよ!! そんなあんたの食べかけのじゃなくて!!」

そんな二人の会話を微笑ましく見ていたソーラは、ふと空を見上げてつぶやいた。

ソーラ（先輩… 先輩たちの言ってた素晴らしいもの、なんとか守

れてますよ。まあ、その守るものに助けられてばかりですけど、私
頑張ります)

すると足元で何かが蠢いているのに気がついた。

ソーラ「ん？ 何？」

「クンクン!! 甘い匂いモフ」

目線を下に落としたところにいたクマのぬいぐるみに、ソーラは歓
声をあげた。

ソーラ「うわあ〜っ!! 可愛いぬいぐるみ!!」

その可愛さに思わず抱きかかえたソーラを見て、そのクマのぬいぐ
るみは慌ててジタバタし始めた。

「お、お前は!? は、離すモフ!!」

ソーラ「うわ〜っ!! すごいすごい、動いて喋るぬいぐるみなんて
!! ねえ見て見て二人とも、これすごい!!」

興奮気味に豪とランにぬいぐるみを見せたが、ソーラの興奮とは裏
腹に二人は冷めたものだった。

豪「へえ〜:」

ラン「よくできてるのね。最近のおもちやって」

ソーラ「? あんまり反応ないね。これ可愛くないの?」

冷めた反応に首をかしげつつぬいぐるみを撫で回すソーラに、豪と
ランは今更というように返した。

豪「だってぬいぐるみが動いて喋るぐらい、どうってこと:」

ラン「そりや可愛いとは思うけど、もうそんなに大騒ぎするような

歳でもなし…」

そんな会話をしている間にも、ソーラの手の中のぬいぐるみはなんとかして逃げようともがいていた。

「は、離すモフ!! みらいく、リコく、はーちやくん!!」

豪「誰か呼んでるな、このぬいぐるみ」

ラン「持ち主の認証機能でもついてるんじゃない。ソーラさん、わかりやすいところに置いといてあげて。そのうち取りに来るだろうし」

ソーラ「そうだね。それじゃそのベンチにと…」

そつとぬいぐるみをベンチに座らせたソーラだが、当のぬいぐるみは立ち上がって必死に叫んだ。

「二体モフルンをどうするつもりモフ!? お前が前にみらいやリコにしたこと忘れてないモフ!!」

ソーラ「はあ!?!」

その言葉にソーラは素っ頓狂な声をあげ、豪とランも顔をしかめた。

豪「何言ってるんだこいつ?」

ラン「何度か置き忘れられて、お持ち帰りされかけたんじゃない? 随分そそっかしい持ち主みたいね」

ソーラ「まったく、ちよつとじつとしててね。すーぐ持ち主が来るから…」

「モフウ? (なんか感じが違うモフ。どうなってるモフ?)」

鼻をつつきながらニツコリとした笑顔を向けて来たソーラを見て、そのクマのぬいぐるみは多少戸惑ったようにおとなしくなった。

ことは「見つけた!! モフルン!!」

その声に振り返ると、息急ぎ切っているピンクのロングヘアの少女がいた。

「はーちゃん!!」

ソーラ「あら、これあなたの?」

嬉しそうな声を出したぬいぐるみを掴み上げ、ソーラはその少女になんとも尋ねたのだが、途端にその少女の目が険しくなった。

ことは「あ、あなたは!? なんでこんなところに!」

豪「? ソーラ姉ちゃん知り合い?」

キョトンとしつつ尋ねた豪だったが、ソーラも首を横に振った。

ソーラ「全然。あなた誰?」

ことは「えっ、ああそっか。でも私は知ってる、あなたのこと!!」

ソーラ「はあ…」

一人で盛り上がり始めた少女を冷めた目で見ていたソーラだったが、彼女がスマホを取り出して宝石のようなものをセットしたところで顔色が変わった。

ことは「キュアアップ・ラパパ!! エメラルド!!」

ソーラ「!! 何!? このプラスエネルギーは!」

緑色の光とともに発せられた強力なプラスエネルギーに戸惑った

ソーラをよそに、タッチペンを取り出してスマホに何やら書き始めた。

ことは「フェリーチェ・ファンファン・フラワー!!」

それと同時に呪文を唱えると、まばゆい光とともに現れた緑色の魔法陣とともに光の蔓が彼女を包み込んでいった。

「あまねく生命いのちに祝福を!! キュア・フェリーチェ!!」

豪「なっ、変身した!?!」

ラン「なんなの!?! あの人もプリキュア…」

ソーラ「でもあんな人見たこと… ねえあなたどこの班に配属されてる…」

突然のことに素性を訪ねようとしたソーラだが、フェリーチェはそれを無視して言い放った。

フェリーチェ「あなたが何者かは知りません。ですが、私の大切な人を見らいやリコをまた傷つけようというのなら、容赦はいたしません!!」

ソーラ「…いきなり出てきて何言ってるのあなた?」

わけがわからないと言ったような顔をしたソーラに対して、フェリーチェは続けた。

フェリーチェ「あの時、問答無用で仕掛けて来ておいて、まだ惚けようというのですか!! ならばこちらも行きますよ!!」

その言葉とともに、フェリーチェは大ジャンプしてソーラに飛び蹴りを放って来た。

ソーラ「えっ!? 本気!?!」

事情が飲み込めなかったソーラだが、フェリーチェがどういう意図でいるかを理解した瞬間、手にしていたぬいぐるみを放り投げ自分も飛び上がった。

ソーラ「どういうつもりよ一体!!」

そうしてフェリーチェの蹴りを捌きつつ、反対に空中で回し蹴りを食らわせて地面に叩き落とした。

フェリーチェ「ぐっ!!」

地面に叩きつけられたフェリーチェだったが、放り投げられて同じように地面の上を転がっていったぬいぐるみを見て、着地したソーラを睨みつけた。

フェリーチェ「やはり本性を現しましたね。モフルンをよくもこのような目に…」

しかし、ソーラは当然のようにそれに反論した。

ソーラ「何よそれ!! あんたがいきなり攻撃して来たからじゃない!!」

フェリーチェ「あなたは私の大切なものを目の前で傷つけました。これ以上の狼藉、このキュア・フェリーチェが許しません!!」

ソーラ「よくもまあ、そんなわけのわからない言いがかりをつけてくるわね…。まあいいわ、いくらプラスエネルギーを持ってても、そっちがその気ならこっちだつてねえ!!」

妙な因縁をつけられいきなり喧嘩を売られた格好になったため、さすがのソーラも頭に來始めていた。

ソーラ「くらえ!! クロムステイック・ブーメラン!!」

腰の左右のクロムスティックを取り外し、そのまま二本のスティックを柄の部分でくっつけて一本の棒のようにすると回転させながら投げつけた。

フェリーチェ「なんの!!」

高速で飛んできたスティックを回避したフェリーチェは、丸腰になったソーラを見て隙ありとばかりに飛びかかったが、戻ってきたスティックが後頭部に炸裂した。

フェリーチェ「がっ!!」

体勢を崩したところに、フェリーチェの頭に当たって跳ね上がったスティックをキャッチしたソーラがそのままスティックを二本に分割し、電撃のスイッチを入れて殴りかかった。

ソーラ「とりやあああ!!」

フェリーチェ「ぐううっ!!」

電撃に耐えつつ振り下ろされたスティックをなんとか受け止めたフェリーチェはこのままではまずいと、ソーラを蹴り飛ばした。

ソーラ「くっ!!」

しかし、蹴りが当たる直前後ろに飛んだためか、思ったよりもダメージは浅かったらしくソーラはどうだと言わんばかりに胸を張った。

ソーラ「どんなもんよ!! いい加減答えなさい!! あんた一体なんなの!!」

フェリーチェ「お黙りなさい!! それはごちらのセリフです!!」

モフルン「フェリーチェ!! ちよつと待つモフ、何か変モフ!!」

どうも今フェリーチェと戦っている少女が、前に襲いかかってきた少女と違うようだと感じたモフルンはそう叫んだが、それにもかかわらずフェリーチェは再びソーラに飛びかかった。

今日の前に自分の母親ともいうべき大切な人たちを傷つけた存在がいる。

フェリーチェの頭の中はその思いから戦うことではいっばいであり、モフルンの言葉など全く聞こえていなかったのだ。

ソーラ「ふっ、甘い!!」

ここ数週間、志夜刑事から柔道を習っていたソーラにとって、見境なしに突っ込んできたフェリーチェは格好の餌食だった。

わずかに身をかわすと、フェリーチェの胸ぐらを掴み取り気合いとともに大きく投げ飛ばした。

豪「おーっ、すげえ。特訓の成果つてやつかな…」

ラン「感心してないで!! あの人一体なんなのよ、なんとか話を聞かないと… そうだ、確かおじいちゃんが…」

目の前の戦いに素直に感心していた豪をたしなめると、ランは持っていたバッグの中をゴソゴソと漁り始めた。

みらい「はあはあ… フェリーチェ!」

リコ「!! あの子は!! 今度はフェリーチェに襲いかかっているの!」

そこに箒に乗って飛んできた二人の少女を見て、豪とランは目をゴ

シゴシと擦った。

豪「…今、あの二人箒に乗ってこなかったか？」

ラン「あんたもそう見えた？ あんな箒誰が作ったのかしら？」

モフルン「みらいく、リコく!!」

二人の姿を見るや否や慌てて駆け寄ったモフルンを抱き上げると、みらいは真剣な顔つきになった。

みらい「モフルン!! リコ行くよ!!」

リコ「ええ、フェリーチェを助けないと!!」

モフルン「ちよつ、ちよつと待つモフ!! 何かが変…」

完全にやる気になっている二人を見てモフルンは慌てたが、再びフェリーチェが投げ飛ばされ、マウントを取られている光景を見てやむを得ないと判断した。

みらい・リコ「キュアップ・ラパパ!! ダイヤ!!」

その呪文とともに二人がモフルンの首のリボンに宝石をはめ込み、三人?で手を繋いだ。

みらい・リコ「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!!」

すると虹色の光に包まれながら私服だった二人はそれぞれピンクと紫を基調にした派手な衣装に姿を変えていた。

「ふたりの奇跡!! キュア・ミラクル!!」

「ふたりの魔法!! キュア・マジカル!!」

「魔法つかいプリキュア!!」

続く

第20話 まさに奇跡!! 魔法との幸福? な出会い
(後編)

「ふたりの奇跡!! キュア・ミラクル!!」

「ふたりの魔法!! キュア・マジカル!!」

「魔法つかいプリキュア!!」

変身して名乗りを挙げるや否や、あんぐりと口を開けていた豪とラ
ンをよそに、フェリーチェを押し倒していたソーラを蹴り飛ばした。

ソーラ「うあつ!!」

突然予想外の方向から攻撃を受けたソーラは大きく吹き飛ばされ
る形になってしまった。

ミラクル「フェリーチェ、大丈夫!?!」

マジカル「もう安心して」

フェリーチェ「ええ、お二人ともありがとうございます」

ミラクルとともにフェリーチェを気遣ったマジカルは、そのまま
ソーラを睨みつけた。

マジカル「まさか、本当にまたあなたと会うことになるとはね。あ
の時とは違うって見せてあげるわ!!」

ソーラ「だから、あんたたちは一体なんなのよ!! さつきから訳の
わかんないことばかり言ってる!!」

我慢の限界に来たのかソーラがイラついた様にそう怒鳴ったが、ミラクルもまた怒った様に返した。

ミラクル「何言ってるの!! 前に私たちにいきなり攻撃して来たことと忘れたとは言わせない!!」

ソーラ「はあ!? 知らないわよそんなこと!!」

マジカル「とぼけないで!! プリキュアを破壊するとか言ってたじゃない!!」

ソーラ「:なんでそんなこと私がしなきゃなんないのよ。これ以上変ないちやもんつけるなら:!! (とは言うものの、空がこれじゃ変身できるかどうか: でも黙ってやられるわけにも!!)」

怒鳴り返しつつも、曇り空をちらりと見上げ内心ソーラは不安がっていた。

だが、この一連の会話を聞いて豪とランはようやく事情を察した。

ラン「プリキュアを破壊:って、まさかあの人たちの言ってるのって!!」

豪「完全に人違い、いやロボ違いじゃねえか!! 早く止めねえと!!」

睨み合いに入り、一触即発状態だった四人の間に割って入ろうとした豪だったが、それより早くランがバッグからボールの様なものを取り出した。

ラン「待ちなさい豪!! ソーラさんも伏せて!!」

その叫びとともに四人の前にランの投げつけたボールから、大地が震えるほどの巨大な爆発音が起き、同時に太陽を間近で見た様な強烈な閃光が一带を包み込んだ。

とつさに目をつぶり耳も塞いだ豪とランだったが、それでもキーンと耳鳴りがしている上、目もチカチカして星が飛んでいた。

豪「な、なんなんだよ今の…」

ラン「おじいちゃんが護身用につてくれたこけおどし爆弾よ… 光と音だけで殺傷力はゼロだって言ってたんだけど…」

豪「どこがだよ… さすがじいちゃん、相変わらずどこかズレてる…」

モフルン「み、みらい… リコ… はーちゃん…」

ひっくり返り目を回していたモフルンの先には、突如目の前で起きた爆発の音と光のショックで変身解除してへたり込み、頭の上にひよこを飛ばしている三人の姿があった。

みらい「い、今は…」

リコ「い、一体何が…」

ことは「はー…」

ソーラ「きよ、強烈…」

ソーラもダメージこそなかったものの、アイカメラや集音器に多少なりとも一時的な異常が出たらしく、目の焦点が合っていないかった。

豪「まあとりあえず、戦いは止まったけど…」

ラン「逃げた方が良さそうね…」

とりあえず先ほどの一触即発の状態は回避できたものの、遠くの方からパトカーと消防車のサイレンが聞こえて来たため、ふらつく足取りながらも全員慌てて逃げ出した。

ラン「ハアハア、こ、ここなら…」

豪「ひ、ひとまず大丈夫かな…」

騒ぎになるとまずいとばかりに近くの公園に逃げ込んだところで、ようやく一息ついたため、改めて豪とランはみらい達に向き合った。

豪「あ、あのさあ… ちょっと聞きたいんだけど、さっきあんた達が言ってたプリキュアを破壊するって言ってた人って… 色白で銀色の長い髪した… えーつと、つまりこんな顔して、四季ゆうって名前の…」

ソーラを指差した豪を見て、リコが食ってかかった。

リコ「そうよ、この顔よ!! なのになすつとぼけて!!」

ソーラ「だから何度も言わせないでよ!! 知らないって言ってるでしよ!!」

そんなリコをルビーの様に「赤い両目」で睨みつけたソーラだが、ランに咎められた。

ラン「ソーラさんも落ち着いて。でも思い出してください、多分その人ソーラさんと違って赤と青のオッドアイだったと思うんですけど…」

みらい「へっ?」

その言葉に必死にみらいは記憶を辿り、自分たちに襲いかかって来た少女のことを思い出した。

みらい「そういえばそうだった様な… それにもつと冷たい目だった…」

ことは「…じゃあ人違いなの?」

モフルン「モフウ… やっぱり」

みらい達の言葉を聞いて、豪とランもどこかホツとした様に呟いた。

豪「やっぱしゆう姉ちゃんか…」

ラン「でもよかった。ゆうさんが無事で…」

リコ「よくないでしょ!! 一体どういうことなのよ、何を知ってるのあなた達は!？」

ソーラ「それはこっちのセリフ!! 人違いだったってんなら、いきなり襲いかかられた私の方が先に聞く権利はあるはずよ!!」

リコ・ソーラ「くっ!!!」

今にも噛みつきそうなほどギリギリと歯噛みをしつつ睨み合った二人の間に、豪とランは割って入りなんとかなだめた。

豪「お、落ち着いて。ねっ!!」

ラン「とりあえず自己紹介からしましょう。えーっと、私は遠藤ランって言います。こいつがいとこの…」

豪「あ、ああ。俺、速田豪ね。よろしく」

みらい「あ、はい、こちらこそ。私朝比奈みらいって言います」

リコ「ちよっとみらい!! くっ、十六夜リコよ」

丁寧にお辞儀をして自己紹介したみらいを見て、多少抵抗はあったもののやむを得ないとリコも続けた。

ことは「花海ことは、はーちゃんだよ。よろしくね」

元気よく返事をしたことはに続けてモフルンもにこやかに挨拶し

た。

モフルン「モフルンモフ。よろしくモフ」

リコ「ちよつ、いきなり話したら混乱するんじゃない…」

ラン「ふーん、よくできたぬいぐるみですね」

豪「結構高いんじゃないかね。よく知らないけど」

リコ「へっ？」

普通ぬいぐるみが喋ればほとんどの人間が驚き、事実これまでそういうリアクションばかりだったため、素で接する豪とランにいささか拍子抜けしていた。

ソーラ「でも可愛い。これどこで売ってるの、私も欲しい」

みらい「いや、モフルンは私たちの大事な友達で、売り物じゃなくて… いや売ってただけ…」

モフルン「モフルンはただのぬいぐるみだったモフ。でもみらいとずつとおしゃべりしたくて、みらいが魔法使いになったおかげで喋れる様になったモフ」

ソーラ「魔法使い？」

リコ「オホン。そうよ私達、魔法界の伝説の魔法使い プリキュアなんだから」

咳払いを一つして、自慢げかつドヤ顔で言い放ったリコだったが

ラン「ああ、それでさつき箒で飛んできたの」

豪「随分テンプレートだね、イメージまんまというか。で、他に何ができるの？」

驚きの声ひとつあげない二人に、さらりと流されてしまい、一瞬反応に困ってしまった。

リコ「そ、それは… 水をすぐに凍らせたり、重いものを軽々と持ち上げたりとか…」

それでもなんとか気を取り直して、魔法の自慢を始めたリコだったが、豪とランは顔を見合わせるだけだった。

ソーラ「へえーっ、すごいな!! じゃあこのぬいぐるみが歩いたりできる様になったのも魔法なんだ!!」

リコ「そ、そうよ。魔法ってすごいんだから（ホントはモフルンは少し違うけど…）」

興奮気味にモフルンを抱え上げたソーラとは対照的に、豪とランは冷めたものだった。

豪「それだけ？」

みらい「えっ? ま、まあそうですけど…」

ラン「何それ? 別にそれほど大したものじゃないし、ソーラさんもそんな程度で驚かなくてもいいじゃない」

ことは「そ、そんな程度って…」

さすがにこのリアクションには、みらい達もショックだった様だが、ソーラも不満げに怒っていた。

ソーラ「何言ってるの!! 動くはずもないただのぬいぐるみが動くんだよ、しゃべるんだよ、それにこの子達空だって飛べるんだよ!! すごいじゃない!!」

その言葉に二人は頭を抱えた。

豪「姉ちゃんが言うか、それ…」

ラン「そんなの前からあるじゃない…」

みらい「えっ？ この世界にもモフルンみたいなのがいるの？」

ソーラ「ううん、知らないよ。ねえどこにあるのそなの!!」

興奮気味な質問に大きいため息をついた後、豪とランは揃って指差した。

豪・ラン「(ハッ!!)」

一瞬の沈黙の後、指差されたソーラは考えを巡らせた。

ソーラ「…動くはずのなかったもので」

豪「じいちゃん言ってたじゃん。もともとただの動作確認用のロボットだって」

ソーラ「…喋って」

ラン「ペラペラ喋ってるじゃない」

ソーラ「空も飛べる…よね」

エアークラフトで軽く空を飛びながら呟いたソーラに、豪とランはウンウンと頷いていた。

ソーラ「そういえばそうか。でも、これ可愛いなあ… やっぱり欲しい」

ラン「まあ、そりや可愛いけどね。ダメよちゃんと返さなきゃ」
一応納得はしたものの名残惜しそうにモフツているソーラから、モフルンを取り上げながらランは小さく戒めた。

みらい「あ、あのちよつとすみません。今、ロボットつて言いました!？」

そこに驚きの声とともに割って入ってきたみらいに、説明がまだだったことを思い出した豪はほっぺたをポリポリとかいた。

豪「あ、あく説明まだだっけ。ソーラ姉ちゃんとあんた達の会ったゆう姉ちゃんは、おじさん つまりランのお父さんの作ったロボットでさ…」

ラン「それに宿った精霊の国の特別警備隊員がソーラさんで、その…ゆうさんは…」

豪の説明に目を丸くしているみらい達に対して、ランは多少暗い顔になりつつも、説明せねばならないと意を決してゆうのことを説明した。

リコ「そ、そうなの。もともと正しいことに使うためだったのに、悪い奴らに奪われちゃったってことね…」

ソーラ「先輩達も言ってたけど、やっぱりかわいそうだね…」

暗くなってしまった空気を察し、豪は話題を変えた。

豪「あ、でさ。ゆう姉ちゃんつて今あんた達の世界、えーつと魔法の世界だっけ、そこにいんの？」

みらい「う、ううん。夏休みに入る前に一回会っただけで、今どこでどうしてるかは…」

ことは「みらいとリコをひどい目に合わせたかと思うと、すぐどこか行っちゃったんだよね」

その話を聞いて、ランと豪はなんとなくゆうの行動が読めた。

ラン「ははあ。多分ゆうさんにとって、相手をするまでもなかったってことじゃない。ゆうさん弱いものいじめはしないから」

豪「まあ、ゆう姉ちゃん相手じゃ負けても仕方ねえよな」

だが、元来負けず嫌いなリコが噛み付いた。

リコ「弱くないし!! だいたい負けてもないし!! 向こうが勝

手に戦いやめてどっか行っただけなんだからね!!」

ソーラ「：だからそれが負けたつて言うんじゃない? それよりあなた達、プリキュアだっていうけど、一体何しにここに来たの?」

みらい「えっ!?! あっそうだった。実は…」

?????

城と見間違えるほどの大きな洋館。

どこか不気味な色の空が広がる中、空に浮かんだ岩の上に建っているその洋館の本で埋め尽くされた部屋の中。

赤いトラ模様をした灰色の馬のような姿をした怪物が、巨大な鏡にみらいの姿が映し出していた。

「発見いたしました、あれがプリキュアでございます。いかがいたしまししょう、魔女ソルシエール様」

その怪物の問いかけに、ソルシエールと呼ばれた赤紫色のロングヘアにハートを飾っているカチューシャをつけていた少女は、冷たい目で言い放ちステッキを一振りした。

ソルシエール「聞かれるまでもない。その記憶見せてもらおう」

それと同時に、みらいの目から光が消え黒いモヤのようなものが全身を包み込んだ。

リコ「？ みらい、どうしたの？」

リコが心配そうに問いかけると同時にみらいを包んでいた黒いモヤは離れていき、四つに別れ、だんだんと形を成していった。

ラン「な、何!?!」

豪「どうなってんだ一体!?!」

ソーラ「こ、このマイナスエネルギーは…」

「ふっふっふっ。久しぶりですねえ、プリキュア!!」

続く

第21話 蘇る悪夢、プリキュア絶体絶命（前編）

みらいから離れていった黒いモヤは四つに別れ、だんだんと形を成していった。

ソーラ「こ、このマイナスエネルギーは…何かの怨み？」

「ふっふっふっ、その通りですよ」

その言葉とともに、モヤの一つが貴族のような服装の二足歩行するヤモリといった怪物に変わった。

ことは「あ、あなたは!？」

「お久しぶりですねえ。ドクロクシー様の忠臣ヤモリ、あなた方への怨み、忘れてはいませんよ!!」

みらい「そんな…」

リコ「待って、じゃあまさか…」

ヤモリ「そのまさかです。皆様あなた方にはそれぞれおっしゃりたいことがあるようですよ。そうですね、バツティさん、スパルダさん、ガメッツさん」

その言葉とともに残る三つのモヤの塊も、黒を基調としたマント付きのスーツとロングブーツを履いたコウモリ男。

バツティ「ええ、もちろんですとも」

どこか不良のような姿の蜘蛛女。

スパルダ「決まってるじゃないかい、あん時のお礼はさせてもらおうよ」

古代戦士のような兜と装束を身に付けた巨大な亀の怪物。

ガメツツ「初めて会うものもいるな。我は魔法戦士ガメツツ。プリキュア貴様たちと再び戦うために舞い戻ったぞ」

豪「な、なんだよあいつら!?!」

ラン「どうみても仲良くできるって感じじゃないけど…」

リコ「え、ええ闇の魔法使い。でもどうして…」

「それは、我が主人魔女ソルシエル様の力によるものですよ」

ソーラ「!! 誰!?!」

聞こえてきた声に上空を見上げると、奇怪な魔法陣が描かれていた。

一同が魔法陣を睨みつけるようにしていると、悪魔の羽のようなものがついた馬車に乗った、赤いトラ模様をした灰色の馬のような姿をした怪物がそこから召喚されてきた。

「初めましてプリキュアの皆様。わたくし魔法の伝道師トラウーマと申します」

リコ「トラウーマ…これがあなたのご主人様のものだっというの?」

トラウーマ「その通り。人の記憶を読み取り再現するというすごい魔法です」

ソーラ「つまり、こいつらはこの子達の戦った相手…一体何が目的なの!?!」

四人の怪物が出現した理由に納得のいったソーラが、続けざまに問

い詰めた。

トラウーマ「我が主人の目的。それは究極の魔法を完成させること。そしてそのために必要な材料を調達することです」

リコ「究極の魔法に必要な材料： 何よそれは!?!」

魔法の知識には自信のあるリコだが、全く心当たりがなかったため思わず叫んだ。

トラウーマ「ふっふっふっ。それは伝説の光の戦士プリキュアの涙です」

みらい「涙…」

トラウーマ「皆様には、涙を流していただきますよ!!」

その言葉とともにトラウーマが指を鳴らすと、豪とランの足元の影が意識を持ったように動き出し、ランの抱えていたモフルンごと二人を飲み込んで姿を消し去ってしまった。

ソーラ「なっ!! 豪くんランちゃん!!」

みらい「モフルン!! みんなをどこにやったの!!」

トラウーマ「こちらで預からせていただきますよ。涙さえいただければすぐにお返しいたします。ですが…」

丁寧な口調で告げたトラウーマだったが、彼が約束を守りそうもないこと、そして仮に約束を守っても究極の魔法をろくなことに使わないであろうことは皆容易に想像がついた。

ソーラ「信用できるわけないでしょ!! 早くみんなを返しなさい!!」

リコ「それにこんな形で完成させようとしている究極の魔法がいいことに使われるわけではないわ!!」

それを聞いたトラウーマはやれやれというように首を振ると、虚空に呼びかけた。

トラウーマ「ソルシエール様、交渉決裂ですがいかがいたしましたしょう」

するとその呼びかけに応えるかのように、血の色のようなモヤが現れ、女性の顔になった。

ソーラ「あれがソルシエール…」

ソルシエール「涙を渡せ!!」

その声とともに女性の顔のモヤは巨大な手のような形に変わり、ソーラとみらい達を押しつぶしてきた。

みらい・リコ・ことは・ソーラ「『『キヤアアア!!』』」

その悲鳴とともに四人の姿はその巨大な手とともに地面に飲み込まれるように消えていった。

トラウーマ「ふっふっふっ。どうあつても涙を流していただきますよ」

そうやって不敵に笑ったトラウーマの手には緑色に輝く宝石 エメラルドとリンクルスマホンがあった。

ヤモー「ふっ、色々と意図はおありのようですが、そんなものはどうでもいい!! プリキュア… 目にも物を見せてくれる!!」

その怒りに満ちた声とともに、闇の魔法使い達は頷きあった。

『『オボエテェーロ!!』』

ソーラ「うわ〜っ!! イタタ：… って、えっ? どこよ(こ)!!」

地面に叩きつけられたソーラは痛みに顔をしかめながら立ち上がると目を疑った。

先ほどまで街中にいたはずだったにもかかわらず、周辺は尖った岩だらけの荒野と化していたからである。

ソーラ「まずいわね。空が変な雲で覆われてるし、これじゃエネルギーが補充できるか… 早く豪くんとランちゃんを助けに行かないと…」

空を見上げ舌打ちをしたソーラは、周辺の状況を確認しようと耳の感度を最大限に上げたところ、うめき声のようなものが聞こえてきた。

ソーラ「この声は…」

そのうめき声が聞こえた方へ向かうと、気絶して地面に横たわっていることはがいた。

ソーラ「あーもう。ちよつとしつかりしなさいよ」

気を失っていたことはを見たソーラは、多少のわだかまりがあったものの放つては置けないと、彼女を抱きかかえて揺すり起こした。

みらい「ど、どこな(こ)!!?」

リコ「わからないわ。さっきまで街中にいたのに…」

鬱蒼と茂る不気味な森の中に突然放り出されたみらいとリコは困惑しつつ周辺を見回していると

バツティ「ですが、街中よりはあなた達との決着をつける場所にふさわしいと思いますよ」

ガメツツ「プリキュア、何時ぞやの借りを返させてもらおう」

突然聞こえてきた声に驚くことになった。

リコ「あ、あなた達…」

みらい「一体なんで私達と…」

バツティ「愚問ですね、私達にとつてプリキュアであるあなた達と戦うことに今更理由が必要とでもお思いですか」

ガメツツ「先の戦いでは小賢しい妖精のせいで不覚を取ったが、今度はそうはいかん」

完全に戦闘態勢に入っている旧敵を前にして、二人もやむを得ないと頷きあった。

リコ「みらい!!」

みらい「うん、リコ行くよ!!」

しかし、いつものように呼びかけあい、いつものようにリンクルストーンを取り出し、いつものように手をつなごうとして

みらい「…って!! モフルンは!?!」

初めてそのことに気がついた。

リコ「ぎ、さつきあいつに… ってことは…」

バツティ「おや? どうかしましたか?」

ガメツツ「プリキュアに変身せんのか?」

みらい「う…」

その全てを見透かしたかのような言葉にも、何も言い返せないまま固まってしまった。

みらい(ど、どうしよう、リコ)

リコ(ど、どうしようだったって…)

青い顔のまま小声でボソボソと話し合った後、冷や汗を流しながら二人はゴクリと唾を飲んだ。

そしてそのまま魔法の箒を取り出すと一目散に逃げ始めた。

ガメツツ「逃がさん!!」

バツテイ「ふふ、初めて会った時もこんな感じでしたねえ」

そんな二人を見て、ガメツツは険しい顔をバツテイはどこか懐かしそうな顔をして追いかけていった。

一方

ソーラ「ねえあなた。あの人たちに相当恨まれてない?」

ソーラは凄まじい目つきで自分たちを睨んでくるスパルダとヤモーを前にして、ことはにそう尋ねた。

ことは「う…」

ヤモー「ええ、それはもう。我が主人ドクロクシー様を葬ったにつくきエメラルド。決して許しはしませんよ!!」

スパルダ「あなたがリンクルスMahonの妖精なんだってねえ。私はあなたのせいで一度は死にしまったんだ。そっちのやつもついでだ、ただで済むと思うんじゃないよ!!」

ソーラに揺すり起こされたことは、ポケットに入れていたスマホンとエメラルダが見当たらなかったことに軽くパニックになっていた。

慌ててソーラとともにあちこちを探していたところ、突然出てきたこの二人に真っ青になり後ずさりを始めていた。

ソーラ「く、まずい!! 戦えるか…」

エネルギーの不足は重々承知しており、おまけに空は太陽など望むべくもないほど不気味な闇に覆われている。

変身どころか戦闘も怪しい状態であり、ギリギリと歯噛みしながらも、ソーラはクロスステイツクを一本取り外して片手に構えた。

ヤモー「ふっふっふっ。死ねプリキュア!!」

そうして飛びかかってきたヤモーとスパルダを見て、ソーラはとっさにことは後ろに突き飛ばして前に飛び出したが、スパルダの繰り出してきた糸にステイツクを絡め取られてしまった。

ソーラ「うわっ!! くっ!!」

なんとかそれを振りほどこうとするも、続けざまに大量に放たれた糸に体も絡め取られてしまい、身動きが取れなくなってしまった。

スパルダ「邪魔するなって言ったよねえ。なら、あんたから相手してやるよ!!」

そのままソーラはスパルダの方に引きずられるように引き寄せられて行った。

ことは「はー…」

エメラルドもスマホンもない状態では変身どころか魔法も使えず、

ことははなすすべなくヤモーにマウントを取られて首をギリギリと締め上げられていた。

ヤモー「ふっ、エメラルドもなければあなたなど所詮ただの小娘。ドクロクシー様の仇、取らせていただきますよ!!」

ソーラ「や、やられてたまるもんか:!!」

ステイックはもちろん体も糸に絡め取られた拳句、密着状態にまで引き寄せられてしまったソーラは、諦めることなく気丈にそう言い放ったが、スパルダは鼻で笑い飛ばした。

スパルダ「状況がわからないのかい？ 無駄なあがきだ、このまま死にな!!」

毒の爪を振りかざしてソーラに突き刺そうとしたが、その瞬間鈍い痛みが走った。

スパルダ「がつ:」

ソーラ「:ステイックが二本あるって状況がわからなかったのかなあ?」

もう一本のステイックを肩口に突き立てつつ、皮肉げに語ったソーラはそのままスイッチを操作して電流を流した。

スパルダ「グアアアツ!!」

ソーラ「ぐぐっ!!」

ステイックから流れた電撃は絡め取られた糸を通して、ソーラにも

相応のダメージが入ったが、油断していたスパルダにもかなりのダメージを与えることに成功しどうにか解放された。

そして電撃で痺れているスパルダを間髪入れず蹴り飛ばしたソーラは、地面に転がったもう一本のスティックを拾い上げて、手持ちのスティックと柄の部分でくっつけて一本の棒のようにした。

そのまま振り返ると、ことはを締め上げているヤモーの方に回転させながら投げつけた。

ソーラ「くらえ!! クロムスティック・ブーメラン!!」

しかし、そのスティックは大暴投となり、ヤモーにはかすりもしなかった。

ヤモー「ふふ。どこに投げているのですか」

そうやってソーラを嘲笑った瞬間、戻ってきたスティックが後頭部に炸裂した。

ヤモー「ガッ…」

その隙を見逃さず、ソーラはすかさずマウント状態のヤモーを体当たりで吹っ飛ばして、スティックをキャッチした。

そして解放されたことはを抱えて飛び上がり全力で逃げ始めた。

ソーラ「いい、しっかりつかまってなさいよ!!」
ことは「う、うん!!」

しかし、ことはを抱きかかえたソーラの飛行はかなりよたよたとしたおぼつかないものであり、スピードもほとんど出なかった。

ヤモー「おのれ、逃がしませんよ!!」

そのためみるみるうちに追いつかれそうになってしまった。

ソーラ「くっ、まずい。逃げきれない!!」

ことは「も、もつとスピード出ないの!?!」

ことはのもつともな感想にソーラは悔しそうに歯噛みしながら答えた。

ソーラ「エネルギーをさつき無駄に使っちゃったから… もうこれ以上は…」

ことは「な、なんでもつと大事にしないの？ ダメだよ無駄遣いしちゃ、いざという時に困るんだから…」

リコのしていた注意をそのまま繰り返したことはだったが、それは藪蛇だった。

ソーラ「あんたがいきなり攻撃してきたからでしょう!!」

ことは「はー…」

そんな漫才を繰り広げている間にも、ヤモーとスパルダはぐんぐん距離を詰めてきていた。

ソーラ「ダメ、逃げきれない!!」

ことは「私を離して!! あの二人は私が目当てなんだし、一人ならもつと早く飛べるから、きつとあなただけは助かる」

その言葉通り、ことはを抱えたソーラは今にも墜落しそうであり、ここでことはを見捨てればソーラだけは助かっただろうが、それを了承するソーラではなかった。

ソーラ「何言ってるの!! そんなことできるわけないでしょ!! 人を見捨てるような真似は絶対にしない!! 先輩たちに合わせる顔がなくなるもんね!!」

力強く言い放ったソーラだが、それで現状が回復するはずもなく、おまけにヤモーとスパルダが魔法で攻撃を仕掛けてきた。

絶体絶命かと思われたその時、美しいハミングがどこからともなく聞こえてきた。

そしてその歌の影響か、ヤモーとスパルダの放った魔法も消滅してしまった。

スパルダ「チツ、なんだいこの歌は? 聞いててイライラする」

ヤモー「全くもって気分の悪くなる歌ですね」

ことは「何言ってるのこんな優しい歌… 子守唄みたい…」

不快そうに顔をしかめる二人とは対照的に、ことはとソーラは心が洗われるようであった。

ソーラ「えっ? なに? この歌を聴くと力が湧いてくる…」

多少なりともパワーが回復したため、空中での姿勢は立て直せたソーラだったが、それでもフルパワーには程遠いことはよくわかっていた。

ソーラ「少しはマシになったけど、戦えるだけのエネルギーじゃないし、残ったエネルギーでできることは…」

気分を逆撫でされたのか、先ほどよりも執拗に追ってくるバツティとスパルダを前にして、必死に打開策を考えた結果ソーラはハツと思いついた。

ソーラ「そ、そうだ!! いい、私の方を絶対に見ないで、目をつぶってて!!」

ソーラの有無を言わさぬ感じの言葉にことはもギユツと目を閉じた。

それを確認したソーラは自分たちを追って来るヤモーとスパルダを睨みつけた。

スパルダ「ふっ、観念したかい」

ヤモー「これで終わりですよ!!」

だが、ソーラは手を開き顔の横に添えると、残されたエネルギーを振り絞るように叫んだ。

ソーラ「シャイニング・フラッシュユ!!!」

それと同時にソーラの全身から強烈な光が放たれ、ヤモーとスパルダはそれを至近距離でまともに見ることになった。

ヤモー・スパルダ「「グアアアーツ!!」」

スパルダ「く、くそっ。目、目が…」

ヤモー「やってくれますね…」

目がくらみ、視力を奪われた二人は空中で苦しそうに悶え、それを見たソーラは今のうちにと地上に降り、岩陰に隠れて息を潜めた。

ことは「今何したの?」

ソーラ「なーに、眩しく光ってちよつと目をくらませてやったのよ」

岩陰に身を潜めたもののじつとしてはずぐに見つかること
はは移動しようとした。

ことは「でもここじゃすぐに見つかっちゃう… 早く逃げないと。
みらいとリコも気になるし…」

ソーラ「あなたは行きなさい。私はここで時間を稼ぐから…」

その言葉にことははギョツとした。

ことは「な、何言ってるの!? あなたも一緒に…」

ソーラ「今ので完全にエネルギーはすつからかん。動くこともほと
んどできないわ。囲ぐらいにはなれるからさ…」

力なくそう言ったソーラを、ことはは無言のまま背負って逃げ始め
た。

ソーラ「どうして…」

ことは「何言ってるの!! そんなことできるわけないよ!! 人を見
捨てるような真似は絶対しない!! みらいもリコも絶対にそんなこ
とやわないよ」

その言葉にソーラはぐうの音も出なかった。

続く

第22話 蘇る悪夢、プリキュア絶体絶命（後編）

変身不能の状態でみらいとリコ、そしてソーラとことはが必死に逃げ惑っている中、ソルシエールは厨房のようなどころで、大きな鍋に湯を沸かし様々な材料を入れていた。

ソルシエール「それとドラゴンの爪に猛毒サソリの粉を少々と…あとはプリキュアの涙さえあれば、究極魔法のエキスが完成する。そうすれば私の願いは叶う。この胸の痛みも消える」

そして手の中にあるリンクルスマホンとエメラルドを見やると、くだらないというように呟いて放り捨てた。

ソルシエール「これも伝説の魔法の一つのようだが、それほどのもでもないか。プリキュアの涙に比べればガラクタでしかない」

その厨房にロープで縛り上げられていた豪とランそしてモフルンもこの独り言を聞いていた。

ラン「ちよつとあんた達!! 一体そんなことしてどんな願いを叶えるつもりよ!!」

全く臆することなく気丈に言い放ったランだったが、ソルシエールには通じなかった。

ソルシエール「フツ気の強い娘だ。だがプリキュアでもない貴様には関係のないことだ、そこでおとなしくしておけ。静かにしていれ

ば危害は加えん」

ラン「何言ってるんのよ!! もう十分やってるってのよ!!」

トラウーマ（ふっ、甘いやつだ。秘薬が完成すればどの道世界など暗黒の闇に染まると言うのに）

厨房の様子を別の部屋から鏡で確認し、密かにほくそ笑んだトラウーマは画面を切り替えてプリキュアの状況を確認した。

トラウーマ「チツ。ソルシエール様、プリキュアども、なかなかしぶといですな。痛めつければ手っ取り早いと思いましたが、これでは涙が手に入るのにも時間がかかりそうです。私が直接行ってまいります」

みらいとリコも変身不能ながらも、魔法を駆使しつつお互いに支え合い、必死にガメツツとバツティから逃げ惑っており、このままではラチがあかないと判断したトラウーマは告げた。

ソルシエール「うむ。頼んだぞトラウーマ」

聞こえてきたトラウーマの言葉に頷いたソルシエールに、ずっと考え込んでいた豪が話しかけた。

豪「ああ、やつと思い出した。聞いたことあると思ってたらあんなの言ってる秘薬ってソーラ姉ちゃんが前に言ってたやつだな。でもこれじゃああなたの願いつてのは叶いそうもねえな、なんせ秘薬は失敗するだろうし」

ソルシエール「何？」

モフルン「ど、どういうことモフ？」

ラン「豪、あんた何知ってるのよ？」

全員がその言葉に食いつく中、豪は続けた。

豪「プリキュアってのはさ、光　つまり強力なプラスエネルギーの戦士なわけだろ。当然その涙にも強い力がこもってる。でもさ、こんな風に痛めつけたりして無理やり流させた涙にはマイナスエネルギーが混じっちゃう。そうなたら…」

ラン「そつか!!　込められてる力もなくなる!!」
モフルン「モフ!!」

ソルシエール「何!?　バカなことを言うな、これは秘術中の秘術。知っているものなど限られていると言うのに、なぜあいつはそんなことを知っている!!」

皆が納得する中、凄まじい形相で豪に噛み付いたソルシエールだが、豪はあつけらかなと答えた。

豪「決まってるじゃん、ソーラ姉ちゃんはいろんな次元を守る特別警備隊員だぜ。それぐらい知ってるって当然じゃん」

ソルシエール「ぐっ…」

言い返す言葉を失ったソルシエールに豪はさらに畳み掛けた。

豪「それよりいいのかわよ?　あの馬のやつが下手に姉ちゃん達を傷つけたら、なんもかんもがペアだぜ」

ソルシエール「小僧!!　貴様、何様のつもりだ!!」

上から目線のその言い草にソルシエールは豪の胸倉を掴みあげ拳を振り上げたが、豪は涼しい顔をしていた。

豪「おつと。俺たちに万が一があつたら姉ちゃん達は悲しい涙を流すぜ。マイナスエネルギーがたっぷり詰まった、あんたにとって無意味な涙をさ」

ソルシエール「く、くくっ…」

胸倉を掴んでいた手を離し拳を下ろしたところで、豪はニヤリと笑って告げた。

豪「さあてと、そんなじゃ姉ちゃん達を無事にここまで呼んで来ないといけないよな」

ラン「それと、私達の安全も保証してよね」

モフルン「後、今捨てたスマホンとエメラルドも返して欲しいモフ」

その言葉に歯噛みをしつつも、ソルシエールは要求を飲むしかなかった。

ソルシエール「くっ、トラウーマ。プリキュアを絶対に傷つけるな、無傷で生け捕りにしてこい。肝心の涙が手に入らなくなる」

虚空に向かってそれだけ言い捨てると、ソルシエールは悔しそうに顔をしかめながら豪達を縛っていたロープを解き厨房から連れ出した。

トラウーマ「どういうつもりだ？ プリキュアを傷つけるなどは……
まあ連中に万が一があれば涙が手に入らなくなるのは確かですが……」

ソルシエールの言葉に疑問を覚えつつも、記憶から蘇らせた闇の魔法使い達の怨念の強さは、トラウーマにとっても想定外のものだったため都合が良かった。

トラウーマ「やむを得ません、連中がここに来やすいようにしてやりますか」

不満げに顔をしかめながら、トラウーマはみらいとリコ ことはとソーラのいる場所と洋館とをつなぐ空間を開けた。

リコ「も、もうだめ!! 逃げられないわ!!」
みらい「ま、まだだよ、諦めちゃダメ」

戦うすべもないまま必死に逃げ惑っていたみらいとリコだがついに限界がきてしまった。

バツティ「追いかけてはこれで終わりです。あの時のような奇跡は二度とは起こりませんよ」

ガメツツ「戦いもせずに逃げ惑うとはな。貴様らなどもはや戦う価値もない」

前方のコウモリと後方の亀に完全に逃げ道を塞がれてしまい、袋の鼠となった二人の耳に美しいハミングがどこからともなく聞こえてきた。

みらい「えっ?」

リコ「綺麗な歌… なんだか力が湧いて来る」

勇気付けられ、思わずその歌を口ずさんだみらいとリコだったが、途端にバツティとガメツツは頭を押さえて苦しみ始めた。

バツティ「ぐっ!! この歌は…」

ガメツツ「や、やめろー!!」

そうして悶えながら地面へと落下していき、ついには黒い靄となつて消えていった。

みらい「な、なんで?」

リコ「この歌のせいなの?」

突然のことに目を白黒させていた二人は、耳をすませて歌の出所を探った。

みらい「見てあれ、何か光ってる!!」
リコ「あそこから聞こえて来る…」

それを確認すると力強くうなずき合って上空に輝く小さな星に向かって飛んでいった。

ことは「早く、みらいとリコのところに行かないと…」

ソーラ「あなたたち、すごく仲がいいのね。いつも三人一緒なの？」
背中のソーラの質問にことははにっぴりと笑って答えた。

ことは「うん!! ずーっと一緒!! みらいもリコもモフルンもみくんな私のお母さんの!! みんなで立派な魔法使いになるんだ」
その答えにソーラは少し顔を曇らせた。

ソーラ「そっか… 私も先輩たちとそんな風なことが言えたらよかったんだけどね」

ことは「? あなたもそんな人がいたの? その人はどうしたの?」

ソーラ「行方不明なの。私が未熟だったせいだね」

ことは「そんな…」

ソーラ「プリキュアとしてすごく立派な先輩たちだったの。だから私も負けないように色々頑張ってるんだけど、なかなか上手く行かないものね。ちよつと空が曇っただけで一人じゃ何にもできないでいる」

どこか自虐的なソーラの言葉に、ことははなんともなしに先ほど聞こえてきた歌を口ずさみ始めた。

ソーラ「その歌、さっきの… あれ？」

それとともに再びどこからともなく同じ歌が聞こえてきた。

そしてソーラは、先ほど同様エネルギーが回復してくるのを感じていた。

ソーラ「またこの歌…」

ことは「いったい誰が歌ってるんだろう。優しい声…」

ソーラ「この歌、強いプラスエネルギーが込められてるわ。どういうことかしら？」

ことは「うん、すごいよね。なんだか元気が出てくる」

ソーラ「いや、そういう意味じゃなくてね… ここに私たちの味方がいるってことじゃ…」

ことはに負ぶわれていたソーラは、そのことに気づき耳のセンサーの感度を最大にあげて音源を探った。

ソーラ「!! まずい隠れて、さっきのやつらが!!」

しかし、歌の音源より先にヤモーとスパルダが近づいてきている音が聞こえてきたため、慌てて岩陰に身を潜めた。

スパルダ「チツ、この辺にいるのは確かなのに面倒臭いねえ。こうなったらいつその事…」

そうイラついたようにつぶやくと、適当な岩の真上に魔力を込めた杖を投げた。

スパルダ「魔法、入りました!!」

杖が魔法陣となり、岩が魔法陣に吸い寄せられるのと同時にスパルダが魔法陣の中に入っていった。

そうして岩と一体化したヨクパールになったスパルダは雄叫びをあげて強力な魔法の光弾を頭上に作り上げた。

スパルダ「このまま根こそぎ吹っ飛ばしてやるよ」

ヤモー「ふふふ、以前とは違って制御できていますねえ。プリキュアの苦しむ顔を見れなかったのが残念ですがこれでドクロクシー様もお喜びになられる」

そんなスパルダを見て、ヤモーも満足そうに口元を歪めた。

この光景は岩陰に隠れていたソーラとことにはにも見えており、二人とも真っ青になった。

ソーラ「げげっ!! 冗談じゃない、あんなの今撃たれたら…」

しかし、次の瞬間スパルダとヤモーの周辺をモヤのようなものが覆い始めた。

スパルダ「ん?」

ヤモー「なんですか?」

疑問に思うや否や、そのモヤからトラウーマの声が響いてきた。

トラウーマ「少しやりすぎですね。プリキュアを殺されると迷惑なんですよ。すみませんがここでお役御免です」

次の瞬間、二人を覆っていたモヤは大爆発を起こした。

ことは「な、なんで…」

ソーラ「で、でもとにかく助かったわ。この歌の聞こえてくるところも特定できたし。今は行きましょう」

エネルギーがそこそこ回復したソーラは、ことはを抱きかかえて歌の聞こえてきた場所、上空に輝く小さな星に向かって飛んでいった。

ヤモー「お、おのれ…」

続く

第23話 繋がる絆と受け継ぐ思い（前編）

ソーラ「抜けた!! ここは?」

ことは「みらい、リコ!!」

みらい・リコ「はーちゃん!!」

各々別の場所で見つけた上空に輝く小さな星に飛び込んだ四人は、次の瞬間、本で埋め尽くされた部屋の天井付近にワープしていた。そしてそのまま受け身も取れないまま床に尻餅をついてしまったもののとりあえず全員の無事を確認できたことに安堵していた。

ソルシエール「来たなプリキュア。待っていたぞ、涙をよこせ」

みらい「あなたは…」

ソーラ「ソルシエール…」

しかし、自分たちのいる場所がソルシエールの部屋だと気付いた時、全員の目つきが険しくなった。

豪「姉ちゃん!! よかった…」

モフルン「みらい、リコ、はーちゃん!!」

リコ「っ!! あなた人質なんて卑怯よ!!」

ことは「モフルンを、その子達を返して!!」

険しい表情でそう言い放ったリコとことには、ソルシエールも毅然

とした態度で言い返した。

ソルシエール「解放してやるとも。お前たちが涙さえよこせばな」

みらい「涙… それで究極の魔法が本当にできるの？」

ソルシエール「できる。それさえあれば秘薬が完成し、あの女を蘇らせて今度こそ…」

ソーラ「よ、蘇らせる… どういうこと… いくらプリキュアのプラスエネルギーが強いといっても、命までどうこうできるほど万能じゃ…」

ソーラの疑問の言葉にソルシエールも首を傾げた。

ソルシエール「何を言っている。貴様もこの魔法のことは知っている…」

豪（や、やべ…）

会話をソルシエールの後ろで聞いていた豪とランはモフルンを抱きかかえつつ、冷や汗を流してそーっと移動し始めた。

豪（おい、悪いけどちよつと我慢しろよ）

モフルン「モフ？」

そしてスマホンとエメラルドを大切そうに抱えたモフルンに小さく謝ると、軽く放った。

豪「パース!!」

そのままサッカーボールの要領でモフルンをみらい達の手元に蹴り飛ばすと、突然のことに全員の意識が一瞬上にそれた。

そしてその隙に自分たちもまた転がるようにしてソーラ達のところへと走っていった。

みらい「モフルン!!」

モフルン「みらい、無事でよかったモフ」

ソーラ「二人とも大丈夫そうね」

豪「姉ちゃんもね。フーツ、なんかあったね」

ホツとしたように笑い合っていたが、ソルシエールの目つきは険しくなっていた。

ソルシエール「小僧、どういうことだ？ そのプリキュアはこの秘薬のことを知っていたのではないのか？ 悲しい涙を流すことになれば効果はなくなるという私の知らないことまで知っている!!」

豪に対して怒鳴りつけるようにして叫んだソルシエールだが、豪はキョトンとしてランに尋ねた。

豪「俺、そんなこと言ったっけ？」

そしてランも肩をすくめて返した。

ラン「さあ？ 覚えてないわ」

ソルシエール「っ!! 貴様らーっ!!」

その態度に、全てを察したソルシエールは激昂してハートが二つに割れたようなカチューシャを巨大化させて押しつぶさんとしてきた。

みらい・リコ・ことは「「キュアアップ・ラパパ!!」」

しかしそれより一瞬早く変身したみらい達はその攻撃を受け止めた。

ミラクル「ま、間に合った…」

マジカル「二人とも早く逃げて」

豪「さ、サンキュー!!」

ミラクル達に礼を言っていると、豪とランはモフルンとともに部屋の扉に向かって走り出した。

ラン「しっかしあんた。よくあの状況であんなハツタリとつきにぶちかましたわよね」

豪「まあ普段から色々言い訳してるからな。適当に時間稼ぐのには慣れてんだよ」

モフルン「…すごいことするモフ」

ミラクルとマジカルがソルシエールの攻撃を受け止めている隙に、その背後から飛び出したソーラがスティックを投擲してソルシエールの足をからめとった。

ソーラ「タアアツ!!」

ソルシエール「ぐあっ!!」

バランスを崩して倒れかかったソルシエールに対して、続けざまにフェリーチェが殴り飛ばした。

ソルシエール「く、くそ… 究極の魔法さえあれば… こんな…」

悔しそうなソルシエールの言葉に、マジカルは堂々と言い放った。マジカル「究極の魔法。確かに昔の私なら欲しがったかもしれない。でも今の私にはそれよりもっと大きな力がある」

ソルシエール「何い？」

フェリーチェ「こうして他の世界の人たちともわかりあい、想いは繋がりました。それこそが何者にも勝る魔法です」

ミラクル「その思いがあるかぎり私たちは絶対に負けない!!」

ソーラ「私だって負けられない。先輩達から受け継いだ思いがあるから!!」

ソルシエール「黙れ… 黙れ黙れ黙れ!!」

真つ直ぐな瞳と口調で堂々言い切った四人に対して、ソルシエールはその言葉を必死に否定するかのように叫んで再度巨大化したカチューシャで攻撃を仕掛けた。

フェリーチェ「させません!! リンクル・ピンクトルマリッ!!」

しかし、フェリーチェがフラワーエコーワンドの先端から展開させた花卉状のバリアフィールドに防がれて勢いが弱まった。

ソーラ「しめた!! これぐらいなら、変身してなくたって!!」
拳勢いが落ちたところを、ソーラにステイックでそのまま打ち返された。

ソルシール「何いっ!?!」

自分の攻撃を跳ね返され、まともに受けることになってしまったソルシエールは壁に叩きつけられてダメージとともにへたり込んでしまった。

ソルシール「があっ… うう…」

するとそこに、先ほどから幾度となく聞こえてきた美しいハミングが聞こえてきた。

ミラクル「この歌…」

フェリーチエ「先ほどの…」

四人が振り返ると、いつの間に入ってきたのか小さな少女が一人どこか悲しげな表情でその歌を口ずさんでいた。

ソーラ「これ、さつきからあなたが…」

少女が返事がわりに歌い続けていると、ソルシエールが耳を塞ぎ聞きたくない音だと言うように叫んだ。

ソルシエール「やめろ、やめろやめろやめろ!! そんな歌など聞きたくもない!!」

マジカル「あの子は一体… それにこの歌は…」

マジカルが尋ねると、ソルシエールは悔しそうに床を殴りつけながら話し始めた。

ソルシエール「お前達… 想いは繋がると、受け継げるといったな… だが、私の想いは繋がらず受け継ぐこともできなかつた!!」

ソーラ「えっ?」

次の瞬間、本で覆われていた薄暗い部屋の中は明るい草原へと変わっていた。

ミラクル「ここは…」

そんな中、先ほどの少女が笑顔で老女の元へと駆け寄っていった。

ソルシエール「私は幼くして親を亡くし、ある魔法使いの弟子になった」

フェリーチエ「ではあの少女は、昔のあなたなのですか？」

フェリーチエの問いにコクリと頷いたソルシエールにマジカルは続けて尋ねた。

マジカル「この歌は一体なんなの？」

ソルシエール「あの女に聞かされた子守唄だ」

マジカル「子守唄……」

ソルシエール「あの女は自分の後継者を探していた。だから私は必死に魔法を学んだ。なのに……!!」

ソーラ「あなたも、想いを受け継ぎたくて……」

ソルシエール「あの女は私を認めなかった。私がどれほど魔法を上達させようとも、究極の魔法を教えるはくれなかった。それどころかいつまでたっても子供扱い。拳句が子守唄で寝かしつけようとする始末だ!! そして結局そのまま……」

一面に映し出されていた光景は、墓に参るソルシエールの姿となり、皆はそんな彼女の気持ちが届かないほどにわかった。

ソルシエール「なぜ教えてくれなかったのか、私の記憶の中にその答えはなかった…… だからこそ、死んだものを呼び戻す魔法がいる。だからよこせ、プリキュアの涙を!!」

よろめきながらも立ち上がり、必死に詰め寄ってきたソルシエールにミラクルは悲しげに尋ねた。

ミラクル「あなたは先生を恨んでいるの？」

ソルシエール「当然だ!! あの女は私の想いを踏み躪ったのだ!!」

吐き捨てたように言い放ったソルシエールのどこか悲痛な思いを

感じ取ったかソーラは悲しげな顔で訴えた。

ソーラ「：そうじゃない。究極の魔法なんて、教えるものじゃないかったんだよ」

ソルシエール「何を馬鹿な!! あの女は言った、いつか私にも究極の魔法が使えるようになるよ。だが、どんな書物を見てもそんなものは書いていなかった!! ならばあの女が知って独占していたに決まっている!!」

ソーラ「私もそうだった!! 立派なプリキュアになりたくて、肝心なことを教えてくれなかった先輩達に反発もした。でも、一人で考えるもので戦ってきてわかった。一番大切なものは誰かが教えてくれるものじゃない、自分で見つけるものなの!! それは教えられるようなものじゃない!!」

自分の経験を、想いを必死に訴えたソーラだったが、ソルシエールの怒りは収まらなかった。

ソルシエール「ふざけるなあ!! あの女にそんな高尚な考えなどあるものか!! 人を子供扱いして見下していたような女に!!」

フェリーチエ「そうではありません。憎しみを滾らす前に考えて見てください、なぜ子守唄を歌ったのかを」

その言葉にソルシエールはハッと気がついたように息を飲んだ。

ミラクル「先生はあなたのことを愛していたはずだから歌ったんだよ」

ソルシエール「そんな、そんなことは…」

視線を泳がせながら、否定の言葉を探していたソルシエールだったが、どうしても言葉が続かなかった。

マジカル「いいえ、愛していなければ子守唄なんて歌わないわ。それにあの歌を聴いているとすごく元気が出たわ。そんなすごい歌を、愛してもいない人に歌いはしない」

ソーラ「確かにあの歌にはすごいプラスエネルギーを感じた。あなただつてこの歌を聴いて、気持ちが落ち着いたりしたんじゃない？」

ソルシエール「小さい頃の話だ。それにもう先生の顔もよく思い出せないのだ」

うつむきながら呟いたソルシエールをミラクルは必死に励ました。

ミラクル「諦めないで!! あなたもこの歌をもう一度歌ってみて、そうすれば…」

ミラクルは歌を歌い始め、それを聴いたマジカル達も頷き合い優しく歌い始めた。

それにつられるかのように、ソルシエールも少しづつではあるが口ずさみ始めた。

そうして歌い始めるとソルシエールの脳裏に、優しくかった師匠の笑顔が浮かんできた。

ソルシエール「ああ… ああそうだ。私はただ…初めは先生に喜んで欲しくて…なの…」

大粒の涙を流して泣き崩れてしまったソルシエールの肩に手を置き、フェリーチェとソーラは優しく語りかけた。

フェリーチェ「大丈夫です。あなたは少し道を間違えただけ、もう一度頑張りましょう」

ソーラ「私だつてまだまだもの。一緒に頑張ろう、きちんと想いを受け継げるように」

そんな光景を見てミラクルはウルウルと目を潤ませ始めた。
マジカル「ちよつと、なんであんたまで泣いちやうのよ」
ミラクル「うゝだつてゝ」

そして、大粒の涙がとうとう堪えきれないというようにミラクルの目からこぼれ落ちたその時だった。

ミラクル「えっ?」

待つてましたとばかりにトラウーマがどこからともなく現れて、その涙を小さな壺に受け止めた。

ソルシエール「トラウーマ…?」

ソーラ「あつ!! くそつ!!」

とつさにスティックを投げつけたソーラだったが、それをトンボを切つてかわしたトラウーマは堪えきれないというように高笑いを始めた。

トラウーマ「やった… ついに手に入れたぞ、プリキュアの涙。これで俺が完全復活できる!!」

ソルシエール「どういうことだ、それは!?!」

トラウーマ「ふっ、俺はかつて貴様の師匠に封印された闇の王だ。あの忌々しい女が死んだことでようやく封印の一部が解けたが、まだ不完全でな。そのためにこの秘薬を必要としていたのだ」

その言葉にソルシエールは絶句した。

ソルシエール「なっ!?! ならば、先生が私を憎んでいたのかもしれ

ないというのは… 先生を蘇らせるというのは!!」

トラウーマ「ふん、あんな女の弟子だけあって、間抜けな女だったなあ」

ソルシエールを見下し嘲笑うように嗤ったトラウーマに、全員の怒りが爆発した。

フェリーチエ「あなたという人は…」

マジカル「あんた… 最っ低!!」

ミラクル「許さない… 絶対に!!」

ソーラ「その腐った根性、叩き直してあげる!!」

トラウーマ「なんとも言い!! すでに秘薬は完成した!! 闇よ、プリキュアの涙、光の力を飲み込み解放されよ!!」

開き直ったように叫びながら手にした壺に入った薬を飲み干すと、トラウーマは突如として巨大な漆黒の馬の姿へと変化していった。

ソーラ「なっ!?!」

ミラクル「大きくなっっていく!!」

さらにそれだけにとどまらず、部屋をぶち破りながら巨大化を続け、ついには屋敷そのものが崩壊し始めた。

フェリーチエ「建物が崩れる!!」

トラウーマ「ついに復活の時だあー!!」

ミラクル「きゃあああ!!!」

マジカル「あああっ!!」

四人が崩壊に巻き込まれていくのを満足げに見下ろしながら、トラ

ウーマは屋敷そのもの一体化し始めていた。

トラウーマ「まずは手始めにこの世界を暗黒の闇に染め尽くしてくれる。そしてやがてはあらゆる世界をもなあ!!」

続く

第24話 繋がる絆と受け継ぐ思い（後編）

甲子市

突如として甲子市の上空に曇り空というのもおこがましいどす黒い雲が発生し、巨大な魔法陣が浮かび上がった。

そしてその中から屋敷と一体化し全身に砲塔を生やした最終形態となったトラウーマが辺りのビルを押しつぶしながら現出した。

トラウーマ「全てを闇に染め上げるのだ!!」

そしてそればかりか、全身から生やした砲塔から四方八方にどす黒い光線を発射した。

その光線に触れたものは次々に闇に包まれ消滅していき、市内はパニツクになっていた。

魔法のほうきを取り出し、なんとか屋敷の崩壊に巻き込まれることを逃れたミラクルとマジカル、そしてフェリーチェに助けられたソーラだったが、その砲撃に破壊されていく街を見て愕然とした。

マジカル「な、何よあれ…」

ミラクル「こ、こんな…」

フェリーチェ「街が…」

「助けてくれー!!」

「うわあーっ!!」

人々が警察のパワードスーツ隊の誘導の元、必死に逃げ惑う姿を見てミラクルは真剣な表情でトラウーマを睨みつけた。

ミラクル「平和な街を破壊するなんて許さない!!」

だが、そんな彼女たちを嘲笑うかのようにトラウーマは全身の砲塔を発射してきた。

フェリーチェ「なっ?!」

マジカル「う、嘘!!」

巨大なニンジンのような弾頭を必死にかわしていた四人だったが、尽きることのない攻撃をついにかわしきれず直撃を食らってしまった。

「「「キャアアアア!!!」」」

きりもみ状態で全員が落下していく中、砲撃の流れ弾が空を覆っていた黒雲の一部を吹き飛ばし、そこから太陽が顔を出し暖かな光が降り注いだ。

ソーラ「しめた!! 太陽だ」

太陽光線を浴びたことで、ソーラのプラチナブロンドの髪にセットされているナノマシンサイズの太陽電池が稼働し、ぼんやりと光り始めるとともにエネルギーとダメージの回復がたちまちのうちに終わった。

ソーラ「よっしゃー!! ソーラーエネルギーチャージ完了。モードプリキュア、ウェイクアアップ!!」

掛け声とともに頭上で交差させた両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにしたかと思うと、ミラクル達を抱きかかえて無事に地面に着地した。

マジカル「あなた、その格好…」

フェリーチエ「やはりあなたも…」

深緑のフリルのついた黒光りのするドレスのようなコスチュームに変身したのを見て、ミラクル達がやっぱりというような表情を浮かべる中、ソーラ いやキュア・ソーラーは力強く頷いた。

ソーラー「話は後、まずはあいつをなんとかしないと。力を貸してくれる?」

ミラクル「もちろんだよ。同じプリキュア同士だもの」

うなずき合い、四人が固く手を握る中トラウーマの下劣な笑いが響いてきた。

トラウーマ「はっはっはっ!! 笑わせてくれる、たった四人で闇の王たる私に勝てるとても思っているのか!!」

その言い様にミラクルは当然の様に反論した。

ミラクル「勝ってみせるよ、絶対に!!」

トラウーマ「無駄だ、戦う前からすでにお前達は負けている。これを見る!!」

その声にトラウーマの体になっている屋敷を見上げた四人は絶句した。

なんとちやうどトラウーマの首の真下部分に牢屋のようなものがあり、その中には

モフルン「モフウ…」

ラン「ソーラさん…」

豪「くそっ、逃げ損ねた…」

ソルシエール「おのれトラウーマ」

この四人？が閉じ込められていたのだ

トラウーマ「下手に動いてみる。この檻ごと押しつぶすからな」

フェリーチエ「そんな…」

マジカル「モフルン、ソルシエールさん!!」

ソーラー「豪くん、ランちゃん!!」

マジカル「あんた、どこまで卑怯なの!？」

その光景にさすがのマジカルもトラウーマを罵ったが、どこ吹く風
と言うような返事をしてきた。

トラウーマ「効率的に戦っていると言ってもらおうか。まあこんな
ことをせずともお前たちごとき敵ではないが、な」

その言葉通り、再び絶え間なく砲撃が行われ、四人のプリキュアは
大爆発に吹っ飛ばされた。

「「「キャアアアア!!」」」

モフルン「ミラクル!! マジカル、フェリーチエ!!」

ラン「ソーラさん!!」

吹っ飛んだ四人を見て思わず悲鳴を上げる中、豪はなんとかして檻
を破ろうとしていた。

豪「クツソ、叩いても蹴ってもビクともしねえ。なんとか逃げない
と…」

ソルシエール「小僧、なぜ貴様はそこまで抗おうとする？ 魔法も

なく特別な力もないただの子供なのに…」

捕らえられていたにもかかわらずハツタリと口八丁だけで挑み、そして今尚必死に脱出手段を考えている豪にソルシエールは疑問が拭えないというように尋ねた。

豪「へへっ、んなことあ前の方に十分思い知ったぜ。でもさ、だからって諦めていい理由にならねえじゃん」

ソルシエール「何？」

豪「確かに俺はガキさ。でもそれに甘えたくはねえんだ。姉ちゃんたちが必死に戦ってるのにただ助けてくれなんて言うのかっこ悪いし。どうせならよく頑張ったとか言っただけ欲しい。あんただってそうだったんだろ」

ソルシエール「!! それは… だが…」

豪の言葉に詰まってしまったソルシエールにランが優しく語りかけた。

ラン「あなた、魔法の先生に会って究極の魔法を知りたいって言ってたわよね。そんなものなくてもあなたはすごい魔法使いになってたじゃない。それでもそれを求めたのって…」

ソルシエール「…私は、素直にそれを口に出していいのか？」

弱弱しい口調でぼつりと呟いたソルシエールに、豪たちは力強く答えた。

豪・ラン「当然」

モフルン「モフウ!!」

一方、トラウーマの砲撃により、地上には砂煙がもうもうと巻き上がり、一寸先もろくに見えなくなっていた。

そんな中、四人のプリキュアはひとまず物陰に隠れて一息ついてい

た。

ミラクル「ゲホゲホ、みんな大丈夫？」

フェリーチェ「は、はい。ですが、人質がいる以上攻撃もできませんし…」

マジカル「おまけに何にも見えない。これじゃ次の攻撃がどこから来るか…」

顎に手をやりじつと考え込んでいたソーラーが突如指を鳴らした。

ソーラー「そうだ。向こうだつてこつちが見えないんだし、今のうちに一気に近づいて豪くんやランちゃん達を助けよう!!」

マジカル「いや、でもどうやって近づくのよ。下手なことしたら攻撃にやられちゃうわ…」

不安げなマジカルに対して、ソーラーはどんと胸を叩いた。

ソーラー「ふつ、私にまーかせなさい!! 突破口は開くからついてきて!!」

自信満々に告げたソーラーは、腰の左右のクロムスティックを取り外して両手に構えた。

一面に砂煙が立ち込める中、ソーラーの言葉通りトラウーマもまたプリキュアの姿を見失っていた。

トラウーマ「チツ、少しはしやぎすぎたか。奴らを見失った」

止むを得ず一旦砲撃を中断し、砂煙が晴れるのを待っていたが、ふと異変に気がついた。

トラウーマ「ん？ 奴らめどこに行った？」

地上を見回してもプリキュアの姿はどこにも見えず、上空に飛び上がっていないことは確認していた。

トラウーマ「いない…プリキュアめ敵わないと見て逃げたのか？それとももうくたばったか…ん？」

次の瞬間、トラウーマの真下で地鳴りが聞こえてきたことに、全てを理解した時にはすでに遅かった。

トラウーマ「しまった!!」

ソーラー「プリキュア・ドリルドライバー!!」

次の瞬間、スティックを両手に構えてドリルのように高速きりもみ回転しながら地面の下を掘り進んできたソーラーがミラクル達と共に飛び出してきたのだ。

フェリーチェ「なるほどこれなら一気に近づけますね」

ミラクル「すごい技…」

マジカル「やるわね」

ソーラー「つおりやあああ!!」

そしてその勢いのまま、ソーラーはスティックに光のエネルギーを注入して、トラウーマの首の一部と豪達が閉じ込められていた檻を下から上に切り上げた。

トラウーマ「ギニャアア!!」

悲鳴と共に悶えたトラウーマのために、破壊された檻から放り出される格好になった豪達はなんとかミラクル達に助けられた。

ミラクル「モフルン!!」

マジカル「ソルシエルさん!!」

フェリーチェ「お二人とも大丈夫ですか？」

モフルン「ミラクル、ありがとうモフ」

豪「サンキュー」

ラン「助かったわ」

ソルシエール「すまない、恩にきる」

そんなミラクル達を怒りを込めた目で見つめると、トラウーマは砲塔の狙いを定めた。

トラウーマ「やつてくれたな、死ね!!」

しかし発射されたミサイルは、光のエネルギーを注入し鞭のような形状に変化させたソーラーのクロムステイクに絡め取られた。

ソーラー「こんな物騒なもの、返してあげるわ!!」

そしてミサイルの勢いを利用して、ハンマー投げの要領でソーラーはトラウーマに叩きつけた。

トラウーマ「グオオオツ!!」

ミサイルを叩きつけられたことで体の一部が爆発と共にえぐり取られた格好になったトラウーマは、大ダメージと共に受けて動きが止まってしまった。

モフルン達を抱えて一旦地上に着地したミラクル達は、皆に避難を促すと共にトラウーマの姿を見てチャンスと判断した。

ミラクル「よし、みんな今だよ!!」

そのミラクルの言葉にマジカルとフェリーチエは力強くうなずき、ソーラーも負けられないとばかりに全身に力を集中し始めた。

トラウーマ「舐め…るなあ!!」
しかし、当のトラウーマも負けじと凄まじい形相で睨み返してき
た。

続く

第25話 輝け!! シャイニーダイヤモンド(前編)

ミラクル「マジカル、フェリーチェ、行くよ!!」

マジカル・フェリーチェ「「ええ!!」

ミラクルの呼びかけに頷きあうと、一つの宝石を取り出しモフルンの胸元にセットした。

ミラクル・マジカル・フェリーチェ「「キュアアップ・ラパパ!! アレキサンドライト!!」

その掛け声とともにモフルンを含めた四人が手を繋ぐと、Aの文字が自動的に描かれたリンクルスMahonとモフルンの胸元の宝石からまばゆい光が発せられた。

それと共に三人のコスチュームは大きく変化していた。

ミラクルとマジカルは全身のフリルが増量し、翼状のマントが背中に装着され、頭には大きなとんがり帽子を被っていた。

そしてフェリーチェはコスチュームがロングドレスのようになり頭頂部に巨大なお団子ヘアが作られ、魔法使いというより妖精の女王のようになっていた。

ミラクル・マジカル・フェリーチェ「「魔法つかいプリキュアオーバーザレインボー!!」

豪「うおっ、スッゲー!! かつこいい!!」

堂々名乗りを上げたミラクル達を見て、ソーラーも負けていられないとばかりに気合を込め始めた。

ソーラー「すごいプラスエネルギー… こりゃ負けられないな。いっくぞー!!」

モフルン「レインボーキャリッジ、モフォー!!」

それと同時に車体部分は半球型になったガラスの馬車のミニチュア
ア レインボーキャリッジをモフルンが呼び出した。

ミラクル「巡り会う奇跡よ!!」

マジカル「繋がる魔法よ!!」

フェリーチエ「育まれし幸せよ!!」

ミラクル・マジカル・フェリーチエ「今私たちの手に!!」

その口上とともにレインボーキャリッジにアレキサンドライトを含むリンクルストーンの力を結集させプレシヤスブレスを召喚した。

ミラクル・マジカル・フェリーチエ「プレシヤスブレス!!」

さらに続けてレインボーキャリッジを操作して魔法陣を呼び出し、呪文を唱え始めた。

ミラクル・マジカル・フェリーチエ「フル・フル・フルフルリンクル!!」

ソーラー「ソーラーエネルギーフルチャージ!!」

そしてソーラーもまた、上半身に全エネルギーを集中させてトラウーマに狙いを定めた。

ミラクル・マジカル・フェリーチエ「プリキュア・エクストリー

ム・レインボー!!」

ソーラー「プリキュア・ブレストフラッシュャー!!!」

その掛け声とともに二筋の強烈な光線が発射された。

ミラクル・マジカル・フェリーチエ「キュアアップ・ラパパ!! 虹

の彼方へ!!」

「ギィァァァ!!!」

その途端、まるでヤモリを押しつぶしたかのような悲鳴が響き、大爆発とともに爆煙が上がった。

フェリーチェ「えっ?」

ミラクル「この声、トラウーマと違う?」

トラウーマとは明らかに違う、それでいて聞き覚えのある悲鳴に驚きの声を上げた一同は、閃光が収まって行くとともに目を見開いた。

ヤモー「がっはあ…」

ソーラー「あ、あいつはさっきの!!」

二つの必殺技の直撃をくらい、ボロボロになると同時に闇の力が浄化されたか、小さなヤモリへと戻っていったヤモーを見てトラウーマは嘲るように言い捨てた。

トラウーマ「ふん、思ったよりも怨念が強かったからか先ほど少し損ねた。用もなくなつたから放っておいたが、意外に役に立ったな」
マジカル「そ、そいつを盾がわりにしたの!?!」

フェリーチェ「あ、あなたという人は…」

その言葉に怒りに満ちた目で四人はトラウーマを睨みつけたが、トラウーマはいけしやあしやあと返した。

トラウーマ「何をいう、そもそもこいつはお前達の敵だったのでう。むしろ感謝してもらってもいいぐらいだ」

ミラクル「だからって… そんなこと許されない!!」
トラウーマ「誰が許せとிட்டた!!」

その怒声とともに、トラウーマの口から強烈な闇の波動が四人に向かって放たれた。

「!!!」
「!!!」

必殺技を無駄撃ちした形になってしまい、力を大きく消耗していた四人にとってこの一撃はたまったものではなく、声にならない悲鳴をあげて大きく吹き飛ばされた。

豪「ああっ!!」

ラン「ソーラさん!!」

ソルシエール「プ、プリキュア…」

みらい「う、うあ…」

リコ「く…」

ことは「み、みんな、だ、大丈夫?」

変身解除してしまい、ボロボロになり地面に大の字になっていたみらいとリコに声をかけたことはだったが、同じようにソーラに声をかけようとして絶句した。

ソーラ「あ、ぐ… しまった… エ、エネルギーが…」

必殺のブレストフラッシュャーを放ってしまったため、エネルギーを使い果たして変身が解除されていたソーラに今の一撃は耐えられなかったらしく、全身の人工皮膚が至る所で破れ、傷口から見える機械はバチバチと火花をあげていた。

ことは「ほ、本当にロボットだったんだ…」
みらい「き、傷口を見ないと信じられない…」

リコ「い、今はその話を後にして。あなたもしっかりして…」

力を使い果たした挙句大ダメージを受け、身じろぎすらまともにできなくなったソーラを必死に抱き起こそうとしたみらい達だったが

リコ「く、み、みらい… 立てる…?」

みらい「な、なんとか…」

モフルン「みんな、しっかりするモフ」

ことは「で、でも…」

当の自分たちも大きく消耗してしまっており、立ち上がることさえ困難になっている状況ではどうにも動きが緩慢にならざるを得なかった。

トラウーマ「ふっ、終わりだ。何もかもがな!!」

その叫び通り、トラウーマの砲撃で街は闇に包まれていき何もかもを飲み込み始めていた。

豪「や、やべえ!! 街が消える!!」

ラン「でも、どうすれば…」

ソルシエール「これも私が招いたことか… しかし、どうすればいい…」

豪「でえい、こうなりやヤケクソだ!!」
ラン「ええい、どうにでもなんなさい!!」

豪とランは街を覆っていく闇に対して、アンチマイナーガン改めプラスエネルギーガンを乱射しまくったが、そんなものは溶岩を氷で冷やそうとするものであり何の効果もなかった。

ソルシエール「…どこまでも、お前達は抗うのだな」

豪「ああ、姉ちゃん達だつてそうさ。絶対に諦めてねえ!!」

ラン「そうよね。こんな程度で諦める人達がプリキュアやってるワケわよね!!」

ソルシエール「しかし…もう」

うつむきながらソルシエールは、プリキュアの状況を手のひらの中に映し出した。

リコ「お願い… 動いて…」

ことは「こんなので… 終われないよ…」

必死に立ち上がるうとしていたリコとことはだったが、膝はガクガクになりどうしてもいうことを聞かなかった。

ソーラ「こんなこと… してられないのに…」

エネルギーは使い果たしボディは中破状態になってしまっていたソーラもまた必死に足掻いていたが起き上がることさえ困難になってしまい、悔しそうに歯噛みをしていた。

そんな中、倒れ伏していたみらいがハミングを口ずさみ始めた。

リコ「みらい…」

ことは「はー… その歌…」

ソーラ「一か八かか…」
フツと微笑みながら皆で絶え絶えになりながらもハミングを口ずさみ始めた。

ソルシエール「なぜ諦めない。こんな状況で歌っていられる…」
絶望的な状況にもかかわらず歌を歌い、必死になって立ち上がろうとしてくる四人を見て、ソルシエールは先ほどマジカルに言われた言葉を思い出していた。

マジカル（それにあの歌を聴いているとすぐく元気が出たわ）
ソルシエール「確かにそうだ…」

肩を貸し合い必死に立ち上がった四人だったが、力及ばず跪いてしまったが、それでも諦めることなく励まし合い、もう一度立ち上がるうとしていた。

リコ「も、もう一度…」

みらい「うん!!」

フェリーチェ「が、頑張ろう」

ソーラ「諦められないよね…」

そんな彼女達が歌い始めるより早く、どこからともなく歌が風に乗って流れてきた。

みらい「えっ?」

ソーラ「この声、ソルシエールさん?」

豪「あんた、その歌…」

ラン「綺麗な歌… そんな歌詞なのね」

トラウーマ「なんだ？ どういうつもりだ？」

贖罪か激励かそれとももつと別の想いなのか、ソルシエールは溢れ出てくる想いを歌い続けていた。

歌が進んでいくにつれて、ソルシエールの黒色のゴシッククロリータの冷たい印象のドレスは白く優しい印象を与えるものへと変化していった。

みらい「傷が…治っていく…」

リコ「力が…湧いてくる」

ことは「はー…」

歌声を聴いていたみらい達の傷はたちどころに癒えていき、ソーラのボディも修復を完了していた。

ソーラ「すごい、太陽も出てないのにエネルギーまで回復した!!」

完全に力を取り戻したことを確認した四人は力強く頷きあった。

みらい・リコ「キュアアップ・ラパパ!! ダイヤ!!」

その呪文とともに二人がモフルンの首のリボンに宝石をはめ込み、手を繋ぎあった。

みらい・リコ「ミラクル・マジカル・ジュエリーレ!!」

すると虹色の光に包まれながら二人はそれぞれピンクと紫を基調にした派手な衣装に姿を変えていた。

ことは「キュアアップ・ラパパ!! エメラルド!!」

タッチペンを取り出してエメラルドをセットしたスマホンにFの文字を書くペンを一振りした。

ことは「フェリーチェ・ファンファン・フラワー!!」

それと同時に呪文を唱えると、まばゆい光とともに現れた緑色の魔法陣とともに光の蔓がことはを包み込んでいった。

ソーラ「ソーラーエネルギーチャージ完了!!」

エネルギーが完全回復したソーラは両腕を頭の上でクロスさせ力の限り叫んだ。

ソーラ「モードプリキュア、ウェイクアアップ!!」

掛け声とともに頭上で交差させた両腕を大きく開くと万華鏡のような幻想的な光のオーロラが発生し、ソーラはそれを身に纏った。

ミラクル「ふたりの奇跡!! キュア・ミラクル!!」

マジカル「ふたりの魔法!! キュア・マジカル!!」

フェリーチェ「あまねく生命に祝福を!! キュア・フェリーチェ!!」

「魔法つかいプリキュア!!」

「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

続く

第26話 輝け!! シヤイニーダイヤモンド(後編)

トラウーマ「無駄なことを!! 何度立ち上がろうとも貴様らなど!!」

変身し立ち向かってくる四人に対して、イラついたように砲撃を雨あられと行ったトラウーマだが、全てことごとくかわされてしまった。

トラウーマ「な、何? どういうことだ!」

つい先ほどとはまるで動きが違うプリキュアを見て驚愕したトラウーマにマジカルは堂々と言い放った。

マジカル「この歌が私たちに力をくれるのよ!! もうあんたなんかに負けないわ」

トラウーマ「歌だと!? こんな子守唄に何の力が!!」

バカにするように吐き捨てたその言葉とともに放たれた巨大なエンジンのような弾頭を片手でさばいて跳ね返すとともに、フェリーチエは毅然として言い返した。

フェリーチエ「いいえ、ただの歌ではありません。人を思いやる優しき、受け継ぎたい思い、自分の弱さを認める強き、諦めない心。それ以上の想いのこめられたものです。これほどに素晴らしいものはありません!!」

トラウーマ「黙れ!! あんなくだらん女に育てられた右も左もわか

らんバカな女の歌にそんな力があるはずがない!!」

目の前の現実を受け入れられないのか、必死に否定するように叫びながらどす黒い光線をミラクルとソーラーに向けて発射した。

ミラクル・ソーラー「!!」

光線によって闇に覆われていったミラクルとソーラーを見て、ニンマリといやらしげな笑みを浮かべたトラウーマだったが

ミラクル・ソーラー「くっ!! ハアツ!!」

ただの気合だけでかき消されてしまい愕然とすることになった。

トラウーマ「な、なぜだ? こんなことがあつてたまるか!! 闇の王たるこの俺が、貴様らなんぞに!!」

ミラクル「人の想いを利用して踏みじろうとするような人に、私たちは絶対に負けない!!」

ソーラー「大切な人との思い出を歪めたような人を絶対に許すもんか!!」

トラウーマ「ほぎけー!!」

激昂とともにミサイルが乱射されてきたため、さすがに捌き切れなかった四人はとっさに身を伏せた。

マジカル「くっ、さすがにやるわね。なら…」

マジカルはリンクルストーン・ペリドットをはめたステッキを振りかざした。

マジカル「リンクル・ペリドット!!」

その呪文とともに葉の吹雪を放ち、トラウーマを包み込もうとした。

ミラクル「私も!! リンクル・ガーネット!!」

ミラクルも負けじとリンクルストーン・ガーネットをステツキにはめ、地面に大きな波を起こした。

トラウーマ「甘いわー!!」

しかし、葉の吹雪は一息で吹き消され、大地の揺れも力づくで抑え込まれてしまった。

マジカル「ああっ!!」

フェリーチェ「こちらの力が上がっていても向こうの強さには変わりはない… こちらの攻撃も通じないとは…」

歯噛みをしたフェリーチェにミラクルは心折られることなく告げた。

ミラクル「諦めちゃダメ。周りからみんなで攻撃すれば…」

ソーラー「周りからみんなで… それに宝石… そうだ!!」

何かを考えていたソーラーだが、ついに点と点とが繋がったというように声をあげた。

マジカル「どうしたのよ、急に?」

ソーラー「いい手があるの。少しだけ時間を稼いで」

フェリーチェ「何か、有効な手立てがあると?」

フェリーチェの質問に、ソーラーは力強く頷いた。

ミラクル「よし、わかった。お願い、ソーラー!!」

ソーラーに全てを託すと、ミラクルたち三人は三方に散らばりトラウーマを牽制し始めた。

トラウーマ「何をやろうと無駄だ!! この闇の王たる俺に小手先の技など無意味だ!!」

ソーラー「やってみなきやわかるもんか!! 幾ら何でもバラバラになればおしまいでしょう!! 今考えた私の新必殺技を見せてあげる!!」

マジカル「えっ? い、今考えた?」

不安しかないその言葉に皆が戸惑う中、ソーラーは意識を集中させて叫んだ。

ソーラー「行くよ!! モードデイヴィジョン!!」

その掛け声とともにソーラーは立体映像投影装置を起動させ、髪の色が赤と青と黒になっている三体の分身を作り出した。

そして分身完了するとともに、四人になったソーラーはトラウーマに四方から組みついた。

ソーラー「エネルギー全開、フルパワー!!」

そのままトラウーマを上空まで持ち上げていった後、トンボを切つて距離をとった。

フェリーチエ「あの人、一体何を…」

続けてソーラーはクロムスティックを二本とも取り外し、先端から光のビームを発射した。

ソーラー「ビームライン・シユート!!」

トラウーマの四方に陣取った四人のソーラーが同じようにビームを発射した結果、ビーム同士がちょうど正方形を描いた。

トラウーマ「な、何をやる気だ!?!」

さらにソーラーは今度はスティックをそれぞれ上下に向けてビームを放ったため、トラウーマを閉じ込めるようにビームを辺にした正八面体が完成した。

ソーラー「インフィールドゾーン完成!!」

そのビームの正八面体 インフィールドゾーンの頂点からは閉じ込められていたトラウーマに対して強烈なプラスエネルギーが電撃の嵐のように降り注いでおり、相当のダメージを与えていた。

マジカル「す、すごいエネルギーだわ。おまけにあの空間から外にそれがまるで漏れないなんて…」

ソーラー「プリキュア・シャイニーダイヤモンド…」

地面に着地したソーラーが腕を構えているのを、ダメージを受けて歪んでいる視界の端に捉えたトラウーマは、この先どうなるかがわかり必死に懇願した。

トラウーマ「ぐあああ… や、やめろ…」

しかし、ソーラーは無情に指をパチリと鳴らした。
ソーラー「フィニッシュ!!」

次の瞬間、インフィールドゾーンの中で目もくらむばかりの強烈な閃光とともに大爆発が発生し、トラウーマの末期の悲鳴が盛大な爆発音の陰でかすかに聞こえた。

トラウーマ「ギャアアア!!!」

ソーラー「や、やった… うまくいった…」

緊張の糸が切れたか、分身も消滅しソーラーはがっくりと膝をついてしまっていたが、どこかやりきったというような充実した笑みを浮かべていた。

ミラクル「すごい…」

フェリーチェ「もしかすると今のが…」

マジカル「ええ、水晶さんのお告げの光のダイヤモンド…」

凄まじい光景に半ば呆然としていたミラクルたちはそうするだけでやっとなんかというようにポツリとつぶやいた。

そんな中、かろうじて燃え残ったらしいトラウーマのシルクハットがひらひらと舞い落ちてきた。

そのシルクハットをそっと受け止めたソルシエールは、悲しそうな顔をして一撫でした。

ソルシエール「トラウーマ…」

ソルシエール「皆すまなかった。私の弱さゆえに迷惑をかけてしまった」

申し訳ないというように深々と頭を下げたソルシエールに皆は明

るく告げた。

フェリーチエ「いえ、頭を上げてください」

ミラクル「いいんだよ、もう」

マジカル「あなたの思いは伝わったから」

ソルシエール「思い…そうか…」

フツと笑みを浮かべるとソルシエールは澄み渡った青空を眺めてつぶやいた。

ソルシエール「もし、許されるのなら… 私も先生のように子供に魔法を伝えるような仕事がしたい。先生ほどうまくできるかわからないが…」

豪「へー、いいじゃんそれ」

ラン「頑張ってください」

ソーラー「きつとできますよ。私にだって、なんとかかんとかできてるんですから」

ソルシエール「何!？」

大団円となった次の瞬間、ソルシエールの手にしていたシルクハットが突如として黒い光を放ち飛び上がった。

ミラクル「えっ?」

マジカル「何?」

突然の事に皆が戸惑う中、シルクハットは圧縮されていき黒い水晶となっていた。

ソーラー「!! あれはまさか、ダーククリスタル!」

ソーラーが驚愕の声をあげるとダーククリスタルは飛んでいき、上空に浮かんでいたセーリの手に収まった。

セーリ「ダーククリスタル生成完了…と。もう少しはやれるかと思ったが所詮は不良品か」

ソーラー「セーリ!! それはどういう意味!」

フェリーチエ「強大な闇の力を感じます。一体あの方は…」

豪「姉ちゃんや俺たちが戦ってる相手だよ。でもそれより…」

ラン「ええ、今の言葉どういう意味なの？」

セーリの言葉に疑問が浮かぶ中、あざ笑うかのような言葉が響いた。

パリー「どうもこうもねえ。こいつはもともと俺たちがいろんな次元にばら撒いた自立プログラムの一つ。世界を暗黒に染めるための端末。ただの道具だ」

マジカル「なっ!」

セーリ「まあそれなりに性能はいい方だったはずだが、愚にもつかん女にあつさり封印され、何も為すことのできなかつた失敗作さ。恥ずかしい限りだ」

ミラクル「し、失敗作… あれで…」

トラウーマは今まで自分たちが戦った相手の中でも最強に近かつた。

それを失敗作と言い捨てられたことでミラクルは愕然とした。

パリー「いや、そうでもないな。ダーククリスタルが一つ作れると思っただのが、あいつが作ったヤモリと合わせて二つできたからな。十分期待以上の働きはしてくれたよ」

全く感謝の念を感じさせないその言葉に、ソーラーとフェリーチェは噛み付いた。

フェリーチェ「あなた方は… 一体あの人たちをなんだと思っただのですか!？」

セーリ「ん？ ただの道具だ。あちこちに同じようなものをばらまいたからどんなのがあるかもほとんど覚えていないがな」

パリー「こいつもたまたま思い出したただけだ。それでなければいちいち覚えていられるか」

なんの感傷もなく淡々と語る二人にソーラーの怒りが爆発した。

ソーラー「あんたら… 覚えられないほどそんな奴らを作ってあちこちにばらまいて… どうしてそこまでして世界を暗黒に染めたいのよ!!」

パリー「なぜ俺たちが世界を暗黒に染めようとしているか、か。おいなんでだ?」

セーリ「さあな? なんでなんだろうなあ、わかるか?」

パリー「おいおい俺が質問しているんだ。俺に聞くなよ」

バカにするような笑いととも告げた二人について全員我慢の限界がきた。

ミラクル「許せない… そんな軽い気持ちで多くの人を苦しめて!!」

ソルシエール「よくもぬけぬけと!!」

セーリ「許してもらおうつもりもない。じゃあな」

その怒りをさらりと流し、ソルシエールの繰り出してきた魔法もあっさりと防ぐと、もう用はないとばかりにセーリは姿を消した。

パーリ「はっ、そういえば魔法で思い出したが、ずっと昔に作ったやつがいたなあ。確か終わりなき混沌、デウスマスとかいう」

マジカル「!! それは!？」

パーリ「まあ、何もできないまま宇宙の彼方に封印されたやつだ。今更復活しようと興味はないが、この失敗作よりは出来がいいかもな。せいぜい気をつけな」

忠告というより嘲笑するように言い捨ててパーリもまた姿を消した。

豪「今のデウスマスとって…」

マジカル「終わりなき混沌… 私たちが戦ってるやつよ」

ミラクル「うん。もしかしたら…」

フェリーチェ「早く戻らなければ!!」

モフルン「大変モフウ!!」

ミラクルたちは慌てて魔法の水晶を取り出して、魔法学校と連絡をつけた。

ミラクル「校長先生、聞こえますか!!」

校長『どうしたのじゃ? そんなに血相を変えて突然。何かあった

のか?』

ソーラー「わあすごい。あんなボールに人が映ってお話ができるなんて!! 魔法ってすごいんだね」

その光景を見て無邪気にはしゃいだソーラーだが

ラン「どこが…」

豪「ただのテレビ電話じゃん…」

この二人は冷めたものだった。

マジカル「い、いえ。こっちはなんとかなつたんですけど。そつちに…」

フェリーチェ「デウス・マストが、その眷属が何かをしようとしているかもしれませんが。私たちはすぐに戻りますので!!」

慌てた口調で必死に状況を説明したミラクルたちだったが、水晶に映る校長は難しい顔をしていた。

校長「うむ、だが君たちをその世界に送り込んだ時にも説明したように別の世界に行くには魔法の扉に相当の魔力がかかる。回復するにはまだあと一週間ほどかかるぞ」

マジカル「そんな… もしその間に何かあつたら…」

青い顔したマジカルだったが、ソーラーが優しく肩に手を置いた。

ソーラー「大丈夫だよ。あなたたちがいないぐらいですぐに闇に染められちゃうようなヤワな世界じゃないでしょ。ねっ」

校長「ん? そなたは?」

ソーラー「あつ、はい。キュア・ソーラーって言います。この三人

には色々助けてもらって…」

校長『なるほど、その世界のプリキユアということか。うむ、彼女のいう通りじゃ。たとえ君たちがいなくとも、わたちでできる限りのことはする。心配はしないでくれ』

諭すような校長の言葉に、ミラクルたちも納得し少し落ち着いた。

ミラクル「わかりました」

マジカル「でも出来るだけ早くそっちに戻ります」

フェリーチェ「それまで、よろしくお願いします」

校長『うむ、任せておくのじゃ』

そうして通話は切れ、皆も一息つくように変身を解除した。

ことは「はーっ： 取りあえず落ち着いたね」

みらい「うん。校長先生を信じよう」

リコ「そうね。今はそれしかないか…」

豪「でもさあ」

そこに豪がふと話を振ってきたため、全員振り返った。

豪「元の世界に帰るのに一週間かかるってことですよ。その間あなたたちどうすんの？」

みらい「へっ?」

素っ頓狂な声をあげたあと、みらいたちは改めてそのことに気がついていた。

リコ「そうよ。私たち一週間帰れないってことじゃない。その間どうするの!!」

ことは「ど、どこか魔法で寝るところを作るとか」

みらい「こんなに寒いのに外で寝たら風邪ひいちゃうよ」

慌て始めたみらいたちを見て、豪とランは顔を見合わせた。

豪「うちは無理だぜ。女三人も四人も泊めるのに、さすがに親ごまかせねえよ」

ラン「…ま、当然そうなるわよね」

仕方ないというようにため息をついたランが、パニックになりかけていたみらいたちに声をかけた。

ラン「あく…うちでよかったらどうぞ。どくせ一週間だけですし、おじいちゃんと私とソーラさんだけで多少持て余してますから」

リコ「ほ、本当？ 本当にいいの？」

ラン「ええ。状況が状況ですし」

みらい「よかった。でも他の世界のお友達のところ泊まるなんてワクワクもんだあ!!」

ことは「わくわくもんだしー!!」

モフルン「わくわくもんモフウ!!」

ソーラ「ウンウン。ランちゃんてばやっぱり優しいね」

ホッとしたように喜びの声をあげたところで、ランが口調を強めた。

ラン「ただし!! その代わり」

リコ「え、っ?」

遠藤平和科学研究所

豪「しっかし、今年はまた派手に飾ったなあ」

研究所全体に張り巡らされたクリスマスイルミネーションを見て豪は感心したように呟いた。

ラン「まあね。いつペンやってみたかったんだけどさ、私だけじゃ無理だから今までできなかつたのよね」

ソーラ「それで、みらいさん達に魔法で手伝ってもらったんだ」
みらい「そうだよ。ちよつと大変だったけど、こういうのって楽しいよね」

ことは「うん。すつごく綺麗だし」
リコ「まあお世話になつてゐるわけだし、これぐらいわね。それに私たちにしてみれば簡単なことなわけだし」

ソルシエール「迷惑をかけたせめてもの詫びだ。それに昔先生と一緒に飾り付けをしたことを思い出す」

苦勞しながらも楽しみつつ、無邪気に笑いつつ、どや顔をしつつ、昔を懐かしみつつ飾り付けを続けていく子供達を見ながら遠藤博士はぽつりと呟いた。

遠藤「しかし水臭いのう。一言言ってくればこれぐらいしてやったのに」

どうして今まで言わなかったというような遠藤博士の言葉に、ランはあっけらかんと告げた。

ラン「決まってるじゃない。おじいちゃんなんかこんなこと頼んだら家全体が打ち上げ花火になりかねないもの」

遠藤「あのなあ!! お前はいつになつたらわしを信用するんじや!!」

ラン「そうね。柄物の服が綺麗に「真っ白」になるような洗濯機を作らないようになってからかしら。あれは本当に驚きの白さだったわ」

ぐうの音も出なくなってしまうた遠藤博士を慰めるようにみらいがとつさに声をかけた。

みらい「あく…元氣出してください。そ、そうだリコだって昔は失敗ばかりだったけど、最近はうまく魔法が使えますし」

リコ「なんでそこで私が出てくるのよ。まあ努力の賜物だから当然だけど」

ことは「また、いろいろお手伝いしますよ」

それを聞いて遠藤博士は即座に立ち直った。

遠藤「おお、そうじゃ!! 七転び八起き、失敗は成功のもと。またお主達の魔法というものを研究させてくれ。いやあ科学者冥利につきるわい」

やる気を取り戻した遠藤博士は、今にもスキップしそうな勢いで研究所内に準備をしに行った。

みらい「優しいおじいさんだね」

ラン「まあね、ちよつと変わってるけど」
豪「俺たちの自慢のじいちゃんさ」

自慢げに遠藤博士を語る豪とランを見て、ソルシエールは憧れるようにな目つきをした。

ソルシエール「優しくも厳しさと正しさを兼ね備え、常に前を見ている素晴らしい人だ。私もああいう人間になればいいが…」

ことは「なれるよ、きつと」

リコ「校長先生もあなたを是非とも教師として魔法学校に招きたいって言ってたわ。頑張ってください」

ソルシエール「ふっ、ありがとう」

ソーラ「会ったばかりの人にもこんなに褒めてもらえるなんて、やっぱり先輩達が言ってた通りの立派な人達だよ。ウン」

その通りだというように頷きながらソーラは想いを馳せた。

ソーラ（先輩、私は今でも先輩達は無事だって信じてます。この人達みたいにもう一度三人で戦える日まで、あんなやつらにこの世界を闇に染めさせません）

甲子市上空 静止衛星軌道上 ブルペノン

パーリ「さてとダーククリスタルも予定より増えたわけだし、そろそろ次のドラフター候補を探すか」

セーリ「じゃ俺はそれと並行してあの男を探してくるとしよう。あいつも役立たずよりはマシなもんになりそうだしな」

パーリ「ああ、パーフェクトって名乗っていた自称次元皇帝の使いつ走りか。まあそれなりのものにはなりそうだし、しばらく利用してやってもいいな」

他人事のように会話を続けたセーリとパーリだったが、ふと真剣な顔つきになった。

パーリ「しかし、あいつら最近よく尋ねてくるが、なぜ俺たちはここまでして世界を暗黒に染めようとしているんだ？」

セーリ「さあな？　なんでなんだろうなあ、わかるか？」

パーリ「おいおい俺が質問しているんだ。俺に聞くなよ」

続く

第27話 暗黒学習教室（前編）

速田家

例年になく賑やかになったクリスマスが無事に終え、魔法つかいプリキュアも元の世界に帰って行き、平和に年が明け三が日も過ぎようかという頃、豪の悲痛な叫びが響いた。

豪「いいっ!! 塾!? 年明け早々!?!」

豪母「そつ。一年の計は元旦にあり。あなたも今年から中学生になるんだからいつまでもお父さんのところで遊んでないでまともな勉強して来なさい!!」

豪「いや、別に遊んでるわけじゃないんだけどさ…」

確かに、再び始まった戦いに豪も大なり小なりもう一度参加しており、決して遊んでるわけではない。

しかし、遠藤博士の評判は世間的にはまだともかく、親類特に博士の娘であり豪の母親の中では決して芳しいものではなかった。

豪母「おんなじようなものです。お父さんってばたまたまうまくいった発明の特許のせいでより遊びに熱中してるんですから。もっと一般的なことに役立つ勉強をきなさい!! いいわね!!」

豪「うゝ… わかった…」

豪自身は祖父である遠藤博士が立派な人間だと思っているし、尊敬もしている。

とはいえ、信頼しているかと言われるばまた別問題であるため、母

親の迫力もあり了解するしかなかった。

豪母「はいよろしい。では早速三ヶ月特別コースに明日から行っ
てらっしゃいね。新年コースで一ヶ月分無料なのよね」

ニコニコしながら申し込みの電話を始めた母親を見て、豪はぽつり
と呟いた。

豪「ああゆうとこランそつくりだけどさ。いかねえほうが金かかん
ないってワカンねえのかな…」

豪「とまあ、そういうわけで。しばらくそつちに行けそうもねえよ。
無料期間中は週に3回必ず来てくれてっていうことだから」

自室でがつくりと肩を落として電話をしていた豪に、その電話の相
手であるランがぴしやりと言いつ放った。

ラン『自業自得よ。最近あんた成績落ちてるじゃない。いい機会だ
からしつかり勉強して来なさい』

豪「チエ〜ツ、厳しいなあ…。こんなことしてる間にあいつらが攻
めて来たらどうしようって考えないのかよ」

思わず愚痴った豪だったが、その途端電話の相手が変わった。

ソーラ『ダメだよ豪くん。そりや私だって不安はあるけど、世界を
守るためにはまずきちんと足場を固めなきゃ。気持ちだけが先走っ
てちゃ何にもできないよ』

豪「ソーラ姉ちゃん…。わかった、頑張ってみるよ」

ソーラ自身の体験談でもある言葉に、彼女がどれほど努力している
かを知っている豪は何も言えなくなってしまう。

ソーラ『うん。その意気その意気。頑張ってね』

翌日

未だどこか正月気分の抜けない世間とは裏腹に、どこか重い足取りで母親に指定された学習塾へと向かっていた。

豪「はあく… こんなことなら冬休みの宿題さつきと終わらせんじゃなかったなあ。そうすりや適当な言い訳作れたのに」
ブツブツと文句を言いつつも周りを見回してみるとやはり同じように暗い顔をした子供が何人も同じ方向に歩いていた。

豪「これもみんな犠牲者かよ。全く勉強ができないってそんなにダメなことなのかよ」

そんなこんなで暗く顔ばかりの子供達が総勢約20名前後、そこそこの広さの小屋を改装したような教室に座っていると、一人の若い男性講師が入ってきた。

講師「うむ、みんな思った通りあまり明るい顔をしていないな。だが心配することはない、なぜならば諸君は何も悪いことをしていないからだ」

その言葉に子供達は皆えっ？ というような顔をした。

講師「おそらく諸君達は成績が悪いことを理由にして、かなり格下に見られてきたのだろう。だが、それは決して諸君のせいではない。教え方の悪い親や学校の教師のせいなのだ」

興奮気味に大仰な身振り手振りを交えて語られていく講師の言葉

に生徒達はだんだんと耳を傾け始め、真剣な顔つきになっていった。

講師「だがもはや心配はいらない。なぜならば諸君は今ここにきたからだ。諸君達を無責任にも見下してきた者達を見返すことができるのだ!! さあ、私と共に世の中を見返してやろう!! この私の作ったFLY HIGHスクールならそれが可能なのだ!!」

その演説が終わった時には、轟々たる拍手が教室中に巻き起こっていた。

豪「ちよつと極端だけど割といいこと言うじゃん。こりゃひよつとして当たりだったかな…」

そんなこんなで冬休みも終わり、3学期が始まったところである事件が起きた。

童夢小学校

「おおく!! すげえじゃんかよ豪。全科目満点なんてよ」

「テメエ冬休み全然連絡がないと思ってたらずっと塾行ってたんだってな。ずりいぞ!!」

普段決して成績がいいと言うわけではなかった豪が冬休み明けの総まとめテストで見事満点をとっていたのだ。

廊下に張り出された成績を見て、悪友達がやつかみ半分に褒め称える中、豪は少し澄ましたような顔で答えた。

豪「ふっふっふっ。これが実力さ、本気だしやあこんなもんよ」

担任「本当にすごいわね。これなら中学校に行っても心配はいらないわ。みんなも速田くんを見習いなさい。卒業まであつという間なんですからね」

担任の先生までもが豪を賞賛する中、ランは一人呆然としていた。

ラン「わ、私が豪に負けた… そんなことが…」

ランと豪は同じ学年でもあったが、六年間一度たりとも成績で負けたことがなかったため、ランは信じられないというような顔をした。

家事や家計のやりくり等で日頃奔走しているが宿題に加えて予習復習はきちんとして通っていたランにとって、この事實は受け入れられないものがあつた。

豪「どーだーラン。俺の実力を見たか!!」

その自慢げな豪の言葉に、ランはものすごい顔とともに屈辱に齒噛みしていた。

ラン「ご、豪の分際で…」

遠藤平和科学研究所

遠藤「おーいラン。夕飯じゃぞ、早く出てこんか」

ラン「後で食べるから置いといて!!」

部屋に閉じこもりっぱなしで勉強を続けているランに、ノックと

もに呼びかけた遠藤博士だったが、当のランは聞く耳を持たなかった。

ソーラ「ダメだよ。せつかく博士が作ってくれたインスタントラーメンなんだから、あつたかいうちに食べないと」

ラン「のびてからでも十分食べられるわよ。見てなさいよ豪、今度こそ…」

遠藤「根を詰めすぎじゃ。そんな簡単に成績が伸びるはずがなからう」

実のところ豪にテストで負けて以来早三日、ランは家事を一切放棄して勉強に励んでいた。

ソーラはもちろん遠藤博士に家事を代わりにこなすスキルがあるうはずもなく、食事はインスタントやレトルト、洗濯物は溜まりっぱなし、部屋中は埃っぽくなり始めていた。

ラン「何言ってるの!! 実際豪のやつ一週間ちよつとであんなに成績あげたのよ!! またバカにされてたまるか…」

ソーラ「しよーがないなあ。頑張るのはいいけどご飯はちゃんと食べないとダメだよ。エネルギーはきちんと取らないと」

ソーラの言葉の説得力には勝てず、渋々というように部屋から出てきたランは、ブツブツいいながらも今へと向かって行った。

ラン「…でも時間が惜しいなあ。もつともつと勉強しないと…」

そんなランの言葉を聞いて遠藤博士は大きくため息をついた。

遠藤「そりや、勉強するに越したことはないがな。テストでいい点数を取るためだけに勉強するっちゅうのは、ちよつと違うんじゃない…」

さらに三日後

ラン「ねえおじいちゃん。ちょっと相談があるんだけど…」

遠藤「うむ、わしもじゃ。こんな事を言うのもなんじやが、勉強の前にそろそろ掃除と洗濯のやり方をソーラに教えてやってくれんか。このままではお前も着る服がなくなる上、我が研究所が崩壊しかねん」

ランが勉強に集中しているため、ソーラが日頃の恩返しとばかりに家事をやっているのだが、悲惨の一言でしかなかった。

洗濯をすれば服をビリビリに破いてしまい、掃除をすれば物が壊れて却ってゴミが増える始末である。

料理に関してはさすがに死活問題だと判断した遠藤博士がインスタントやレトルト果ては店屋物でなんとかしているのだが、研究所内の秩序は限界に近かった。

事実、現在洗い物をしているはずの台所から絶え間なく何か割れる音がしているぐらいである。

ラン「いや、それもあるんだけどね… どうも豪のやつおかしいのよ」

遠藤「おかしいとは？ ここに来んようになってはいるが、成績は上がつとるようじゃし、特に問題はないじゃろう」

ラン「いやね、なんかこう、なんとというか成績は上がってるのは悔しいけど認めるとしても、それ以外が無関心だというか…」

遠藤「というと？」

ラン「あの体力馬鹿が一番得意な体育の時間でさえなんかブツブツ言ってる身が入ってないし。何より給食の時間にくらぶにお代わりもしないでさっさと食べては本読んでんのよ」

遠藤「うーむ、あの豪がなあ…」

ラン「よれより何より、なんか周りに対して冷たいのよね。呼ばれても無視したり、頼みごとを無表情に断ったりして。馬鹿だけどあんなんじゃなかったのに…」

どこか寂しそうに呟いたランのところに、両手を泡だらけにせず濡れになったソーラがニコニコしながら話しかけてきた。

ソーラ「でもさ。ランちゃんって豪くんのことよく見てるね。別のクラスなのになんでも知ってるみたい」

ラン「そ、そんなんじゃないわよ!! あいつが目立つだけなのよ!! っ、それよりそんなびしょびしょのまま部屋の中歩かないでよソーラさん。えっと雑巾雑巾」

何かを誤魔化すように雑巾を探しに言ったランを尻目に、遠藤博士は考え込んでいた。

遠藤「ふーむ。一度直接豪に会ってみたほうがいいかもしれんな…」

速田家

豪の様子がおかしいということで遠藤博士とランは早速速田家に向かっていった。

なお、その際にソーラも一緒に行くとかかなり食い下がったが、話がややこしくなりそうだというところで、なんとかなだめて研究所の留守番となった。

ラン「おばさんお久しぶりです」

遠藤「しかし翔子。同じ町内に住んどるんじやし、正月に挨拶ぐらい来ても良かろうが。たまには顔をみせい」

自分の娘でもある豪の母に対して軽く愚痴った遠藤博士だったが、藪蛇だった。

豪母「何言ってるんですか!! 最近また変な事件が起きてるっていうのに、お父さんのことだし懲りもせずに変に首突っ込んでるんじゃないんですか? 危なくておちおちあそこに顔が出せますか」

ラン「ははは… それより豪は…」

乾いた笑みを浮かべつつ豪のことを尋ねたランだったが、豪の母は満面の笑みを浮かべた。

豪母「それがね。世の中を変える人間になるんだって言って、ここんところずっと勉強してるのよ。あの塾にやって正解だったわ」

遠藤「うゝむ、変われば変わるもんじやのう…」

感心したようでありながら、どこことなく疑問を浮かべているような遠藤博士に対し、豪の母は皮肉げに続けた。

豪母「お父さんも少しは見習ってくださいな。たまたまあんなパワードスーツがうまくいっただけなんですから。もっと広く世の中の役に立つ物を考えたらどうです」

遠藤「ああ、わかつちよるよ。それでな、ちょっとランもその塾に行かせてやろうかと思ってるな」

ラン「えっ?」

豪母「あら？」

突然の言葉に驚きの声上がる中、遠藤博士は続けた。

遠藤「ランのやつ、豪に成績で負けたと言って悔しそうにしとつてな。だったら同じ条件で勉強させれば、もっと伸びるじやろう。豪の行つとる塾を紹介してくれんか」

豪母「はいはい。ちよつと待つてね」

その言葉に機嫌をよくした豪の母は、いそいそとチラシを取りに行つた。

ラン「あく… そういうことね」

続く

第28話 暗黒学習教室（後編）

FLY HIGHスクールにて眼鏡をかけたランが、新しく机を並べていた。

講義を聞きながら、ランは遠藤博士の言葉を思い出していた。

遠藤「どう考えてもあの塾に問題があるのは確かじゃ。そのメガネには超小型カメラと録音装置が内蔵されとって、リアルタイムでソーラに中継される。中の様子を調べて来てくれい」

ラン「まあ、こればかりは私じゃないとできないか。に、しても…」

さつと周りを見回しても、この塾の異常さにランは気がついていなかった。

受講中の子供たちは、ノートを取ることもせずただ講師の話を集音して聞いていた。

おまけにささやき声一つ聞こえず、皆人形のように身じろぎすらしていないかった。

ラン「絶対怪しいわよこれ。不気味通り越してるもん」

全く光のない目で無表情に椅子に座っている子供たちの中で、ランは一人薄ら寒いものを感じていた。

講師「はい、ではこの世界の問題は何かわかる人」

講師が問いかけると、ランを除いた全ての生徒が一糸乱れることなく手を挙げ、ランも一瞬遅れたもののつられて手を挙げた。

講師「はい、それではあなた答えて」

指さされた豪は立ち上がると、気をつけの姿勢で淡々と話し始めた。

豪「はい。この世界を支える最も大切なもの、それは教育ですが、最近ではそれが大きく歪みその結果世界が軋みだしています」

講師「はい、その通りです。ではそのために何が必要ですか」

豪「もはや世界は、修理が不可能になっています。ですからここで学んだことを生かし世界を一度崩壊させます」

ラン「えっ？ あいつ何言ってる？」

唐突に語られた物騒な言葉に、ランはギョツとなった。

豪「破滅した世界は暗黒に染まりますが、それもまた産みの苦しみ。そんな暗黒世界の中でもきつと素晴らしい未来を僕たちなら作っていきます」

盛大な拍手が巻き起こる中、ランは青い顔をしながらメガネのマイクに小声で必死に訴えていた。

ラン「ソーラさん、おじいちゃん!! 聞こえてる!?! 本気でやば

いわよここ!!」

遠藤平和科学研究所

居間のマイナスエネルギー検知器が警報を鳴らしている中、この状況をリアルタイムで確認していた遠藤博士とソーラも真剣な顔つきになっていった。

遠藤「あの講師、何処かで見た顔だと思ったら、前に生徒を厳しく指導していたら体罰だとかマスコミに煽られた先生じゃ。そのスト

レスをやつらに利用されたな」

ソーラ「こうしちやいられません。私行ってきます」

遠藤「うむ。しかし無理押しだけはするな。豪やランを含めて大勢の子供達が人質になっていることをくれぐれも忘れるな」

ソーラ「了解!!」

一方、一人だけ違う行動をとっていたため目立ってしまったランは講師に取り押さえられ、メガネも取り上げられてしまっていた。

講師「どういうつもりですか？ こんなことをして」

ラン「そ、そりゃこつちのセリフよ!! あんた一体豪たちに何したのよ!!」

気丈に言い返したランに多少戸惑いつつも、講師はゾツとするような笑みを浮かべてきた。

講師「おやおや、なかなか気の強い人ですね。ですがそんな人ほど私の生徒にふさわしい」

豪「でしょ。俺のいとこなんですから、それぐらい当然ですよ」

講師の言葉に同調するように、豪がランのことを自慢げに紹介してきたが、そんなものが嬉しかろうはずもなかった。

ラン「あんたまで何言つてのよ!! しっかりしなさい!! 一体なんのために勉強してるかわかってんの!?!」

豪「しっかりしてるよ。頭が良くなって、成績あげて、いつかこの世界を本当にすごいものに変えるんだぜ。俺たちの目指してる目標じゃん」

ラン「どこがよ!! 何もかも壊しちゃったら何にもなんないでしょ!! リーフさんとダイーダさんが命がけで守ってくれた世界を、ソーラさんが必死になって守ってる世界を、壊していいわけないで

しよう!!」

必死に呼びかけると同時に出てきた最後通牒に等しいその名前に、豪は頭を押さえて苦しみ始めた。

豪「ううつ、で、でも、だからこの世界をよくするために…でも、暗黒に染めたら…」

そして周りの生徒たちも皆同じように混乱し始めた。

生徒「そうだよ。俺はもともと馬鹿にするやつを見返したくて…」

生徒「お母さんがテストが悪いつていつつも怒るから…」

生徒「先生が成績いいやつばかり褒めて、俺も好きな先生に褒められたくて…」

そんな生徒たちを見て、講師は苦虫を噛み潰したような顔で吐き捨てた。

講師「チツ、どいつもこいつもどうして私の理想の教育についてこない!! こんな世界なんか…」

ラン「何言ってるの!! そんなのあいつと、D r．フライとやってること変わらないじゃない!!」

D r．フライ

かつてコズミックプリキュアと戦った史上最悪のテロリスト。

わずか二年前のこととはいえ、今や子供でも知っている極悪人とごっちゃにされた講師は怒り狂ってランの首を絞めあげた。

講師「ふざけるな!! 私ほど優秀な教師はいない!! 子供の頃から成績はトップ、私に知らないことは何もなかった!! だからこの知識を子供らにも分け与えてやろうとしたのに!! それを世間の馬鹿どもは!!」

ラン「ぐ…」

ランの意識が遠くなりかけたとき、部屋の壁をぶち破ってソーラが飛び込んできて講師を突き飛ばした。

ソーラ「ランちゃん!! 大丈夫!？」

ラン「な、なんとか…」

咳き込みながらもどうにか助かったランを見て、ソーラは講師を睨みつけた。

ソーラ「話は全部聞こえてたよ!! 自分の伝えたいことがわかってもらえなかったことを、相手のせいにしてるだけじゃない!!」

講師「黙れ!! 私は秀才だった!! なのに周リノ奴ラ、私ヲ認めようトモしないデ… 私を認めない世界ナド、すベテヲあんコクにく…」

ソーラ「まずい!! ドラフターになろうとしてる、ランちゃん。みんなを早く避難させて!!」

だんだんと口調がおかしくなっていく講師を見て、ソーラはまずいと判断し頭を抱えて苦しんでいた子供たちを避難させようとしたが、講師の全身から黒い蒸気のようなものが噴き出すと同時に、床が大きく揺れたことで部屋から放り出されてしまった。

ソーラ「うわぁーっ!!」

次の瞬間、黒い火花のようなものがスパークすると、塾に使っていた小屋は姿を変えていた。

ソーラー「くっ、ドラフター…」

巨大な黒板に手足のついたような形のドラフターを見て、ソーラーも両腕を頭の上でクロスさせ力の限り叫んだ。

ソーラー「ソーラーエネルギー全開!! モードプリキュア、ウェイクアップ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラーの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りするドレスのようなコスチュームに変身していた。

そしてルビーのような真つ赤な瞳で、黒板ドラフターを一睨みすると堂々たる名乗りを上げた。

ソーラー「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

黒板ドラフターは、雄叫びを一つあげるとチョコクのような弾丸をマシンガンのように連射して攻撃を仕掛けてきた。

ソーラー「こんなもの!!」

しかし、今のソーラーにしてみればそんなものを避けながら突っ込んでいくのは容易いものであった。
しかし

ソーラー「えっ? 消えた?」

予想以上に濃い白煙が辺り一面に立ち込め、ソーラーのセンサーもろくに聞かなくなりドラフターを見失った。

ソーラー「うわっ!!」

辺りを見回していると後ろから強烈なパンチが飛んできて、ソーラーは殴り飛ばされた。

ソーラー「こんのー!! クロムステイク!!」

ステイクを構えて飛び上がったソーラーだったが、黒板に礫にされているものを見て目を見開いた。

ソーラー「なっ?!? ランちゃんに豪くん!? それにみんなも!!」

先ほど教室にいた生徒たちが全員、盾代わりとでも言うように配置されており、攻撃ができなくなったソーラーは空中でワタワタと姿勢を崩した。

それを狙って今度は巨大な黒板消しミサイルがソーラーに直撃して大爆発を起こした。

ソーラー「ぐ、グウウ… こ、これじゃ攻撃が…」

地面に叩きつけられたソーラーが痛みに顔をしかめていると、遠藤博士がようやく到着した。

遠藤「遅れてすまん!! 大丈夫か? 簡易パスワードスーツも持つて

きたし、わしも援護するぞ」

ソーラー「ありがとうございます。それより博士、お願いがあり

ます!!」

ひととき大きな、勝ち誇ったような雄叫びをあげ街への侵攻を開始した黒板ドラフターだったが、腕に何か光のロープのようなものが絡みついて動きを止められた。

鬱陶しそうに先を見やると、ソーラーがクロムスティックに光のエネルギーを注入し鞭のような形状に変化させたもので腕を絡みとっていた。

怒りの叫びをあげ、もう一本の腕でソーラーを叩き潰そうとした黒板ドラフターだったが、ソーラーは大ジャンプしてそれを避け、もう一本のスティックを同じように変化させて、もう一本の腕も搦め捕り動きを封じた。

ソーラー「よ、よし。うまくいった!! 博士お願いします!!」

遠藤「よ、よし!! 待つとれよ!!」

なんとか動きを封じた黒板ドラフターの体を、簡易パワードスーツを着込んだ遠藤博士は必死により登っていった。そして、礫にされていた豪とランを含む子供たちを救出していった。

遠藤「ヒイヒイ。こりや手間じゃぞ!!」

そうしていると、同じパワードスーツを着込んだレスキュー隊も到着して、同じように子供たちを助け始めた。

「大丈夫ですか?」

「我々も援護します!!」

「ご尽力感謝いたします!!」

遠藤「お、おお!! ありがたい、なんと頼もしい言葉よ!!」

ソーラー「く、くくっ!! まだですか…」

ソーラーも必死だったが、黒板ドラフターもまた必死に足掻いていたため、動きを封じるのは一苦勞であり、だんだんと限界に近づいてきた。

遠藤「もう少しじゃ、頑張ってくれ… よし、これで最後の一人じゃ!!」

ソーラーを励ましつつ、パワードスーツ隊とともに子供たちを全て救出した遠藤博士は、大きく呼びかけた。

ソーラー「よし、離れてください!!」

皆が黒板ドラフターから離れたことを確認すると、ソーラーはスティックを大きく振り回して黒板ドラフターを投げ飛ばして何度も地面に叩きつけた。

地響きとともに地面に叩きつけられた黒板ドラフターは悲鳴をあげて苦しみ、その隙にソーラーは、太陽光線の補充を行いエネルギーの回復をした。

ソーラー「よっしゃ、エネルギーチャージ完了!! 一気にとどめだ!!」

ソーラーは気合をいれると、意識を集中させて叫んだ。

ソーラー「行くよ!! モードデイヴィジョン!!」

その掛け声とともにソーラーは立体映像投影装置を起動させ、髪の色が赤と青と黒になっている三体の分身を作り出した。

ソーラー「フルパワー!!」

そして分身完了するとともに、四人になったソーラーは未だ動けな
いである黒板ドラフターに四方から組みつき、そのまま上空まで持ち
上げていった後、トンボを切って距離をとった。

ソーラー「タアツ!!」

続けてソーラーはクロムステイツクを二本とも取り外し、先端から
光のビームを発射した。

ソーラー「ビームライン・シュート!!」

ドラフターの四方に陣取った四人のソーラーが同じようにビーム
を発射した結果、ビーム同士がちょうど正方形を描いた。

さらにソーラーは今度はステイツクをそれぞれ上下に向けてビー
ムを放ったため、ドラフターを閉じ込めるようにビームを辺にした正
八面体が完成した。

ソーラー「インフィールドゾーン完成!!」

そのビームの正八面体 インフィールドゾーンの頂点からは閉じ
込められていたドラフターに対して強烈なプラスエネルギーが電撃
の嵐のように降り注いでおり、相当のダメージを与えていた。

ソーラー「プリキュア・シャイニーダイヤモンド…」

ソーラーは着地すると同時に腕を構えた。

ソーラー「フィニッシュ!!」

その掛け声とともに指を鳴らした瞬間、インフィールドゾーンの中
で目もくらむばかりの強烈な閃光とともに大爆発が発生し、ドラフ
ターの末期の悲鳴が爆発音の陰でかすかに聞こえた。

そして、刺々しい金属の玉のようなものがゴトリと降ってきて地面に転がり

浄化の完了した若い男性へと姿を変えていった。

ソーラー「ふくつ、一件落着」

遠藤平和科学研究所

豪「やれやれ、えらい目にあつたぜ」

ラン「何言つてんの!! 一番大変だったのはこっちよ、もうちよつとで殺されるかと思つたんだから」

豪「ああ、わりわり。でもなあ」

しばらくぶりに研究所に来ていた豪がくつろいでいると、乱暴にドアをノックする音が響いた。

豪母「豪、いるんでしょ!! 出て来なさい!!」

豪「げっ、母さん!!」

逃げ出す暇もなく突入して来た母親に豪はがっしりと捕まってしまった。

豪母「さあ、捕まえたわよ。こんなところで油売つてないで、帰つて勉強しなさい。やればできるつて証明されたんだから」

豪「い、いや。ちよつとタンマ!!」

正論とともに嫌がる豪を連れ帰ろうとしたところ、庭から遠藤博士がたしなめて来た。

遠藤「待たんか、翔子。嫌がるもんは無理やり勉強させても仕方な
かろう。それにテストの点を取るためだけに勉強しても何にもなら
ん」

その言葉に、母は噛み付いた。

豪母「何言ってるんです!! 勉強なんて結果が全てです、それ以外
になんの意味があるんですか!!」

遠藤「あのなあ。本来学ぶというのは自分の興味のあることを知る
ためのものであって、押し付けるものではない。そもそもその試験
だって、手段や過程の一つで目標そのものではなからう」

豪母「知った風なことを!! それじゃあ、今お父さんは何をしてる
んです?」

その質問に、妙な形のヘッドホンのようなものを頭につけた遠藤博
士は胸を張って答えた。

遠藤「よくぞ聞いてくれた。これは植物との会話ができるための装
置じゃ。まだまだ実験段階じゃが、もしこれがうまくいけば農業や林
業に対して多大な貢献ができるぞい。なんせ植物の声が聞けるの
じゃからな、どうして欲しいかを簡単に理解できる。おい、いったい
どんな塩梅じゃ」

そうして足元の花に話しかけた遠藤博士を見て、豪の母は呆れたよ
うにそっぽを向いた。

豪母「馬鹿みたいなことを。それでよく教育論を語れるもんですこ
と」

そうして当てつけのように窓の近くに立っている木に向かって話
しかけた。

豪母「まったく… あなた元気?」

「はい、初めまして!!」

目を回してぶっ倒れてしまった豪の母をよそに、日向ぼっこをしていたソーラが木の上からスルスルと降りて来た。

ソーラ「どうかしたの？ 私変な挨拶した？」

ラン「いえ、なんでもないわ…」

動悸の激しい胸をおさえて尻餅をつきながらランは、必死にそう絞り出した。

豪「でも確かに母さんの言う通り、あの塾はちよつと惜しかったなあ。簡単に成績上がったのは確かだったんだし」

塾で学んだことはドラフターの能力の影響が多分にあつたようで、あそこで得た知識はドラフター浄化に伴い、綺麗さっぱり生徒たちの頭から抜け落ちてしまい、豪は残念そうに呟いたが

ソーラ「ダメだよ、あんな力で強引に頭が良くなるうなんて考えちゃ。毎日コツコツやって行くことが一番」

ソーラの言葉に反論ができなくなつた。

遠藤「まあ、ソーラの言う通りじゃな。しかし、あの塾の講師もここで歯止めをかけることができたのは彼にとつてもよかつたじやろう。あやつのようにならずに済んだのじゃからな…」

遠い目をした遠藤博士にソーラはなんとなく尋ねた。

ソーラ「あやつつて誰ですか？ お知り合いに何かあつたんですか？」

豪「あ… まあね」

ラン「リーフさんやダイーダさんから聞かなかつた？ Dr. フライって言つてね、おじいちゃんの昔の友達なのよ」

甲子市上空 静止衛星軌道上 ブルペノン

パーリが何かの機械に組み込まれた老人に対して、ぞんざいな口を聞いていた。

パーリ「おい、俺たちよりはこの世界について詳しい分、まあそれなりに使えるかと思っただがこの程度でしかないのか」

「だ、黙らんか… わしを誰だと思つとる。わしこそ史上最高の…」

そんなパーリを睨みつけて何かを言おうとした男だったが、言い終わる前に顔面を殴られた。

パーリ「耳障りだから黙つてろ。マイナスエネルギーの影響で得た頭脳だろうが。自慢げに語るんじゃねえ」

セーリ「そもそも貴様はただの端末を取り込んだだけ。もともと大したものではない。今こうして意識を生かしてやっているのもただの気まぐれだ。本来なら解剖して脳だけを取り出してやつても良かったんだぜ。いるのはそこだけだしな」

嘲笑い見下すような目の前の二人の男を見て、機械に組み込まれた老人は今にも殺しそうな目つきで睨みつけた。

(おのれ… どいつもこいつもこのワシの偉大さをわからんアホばかりか… この史上最高の天才にして次元皇帝D r. フライをなめるでないぞ…)

続く

第29話 太陽が消える日（前編）

ソーラー「タアアア!!」

街中で暴れている手足の生えた自動車といった姿のドラフターに
対して、ソーラーはクロムスティックを手に飛びかかって行った。

光のエネルギーが注入されと電撃をまとったスティックの一撃は
ボディを切り裂き、ドラフターにかなりのダメージを与えていた。

悲鳴にも似た雄叫びをあげた自動車ドラフターは、お返しとばかり
にライトの部分からレーザーを発射して攻撃してきた。

ソーラー「当たるもんか!!」

ソーラーは得意そうに言う、見事なフットワークで攻撃をかわし
ていった。

ソーラー「どんなもんよ、ん？」

胸を張ったソーラーだったが、目の前のドラフターとは別の方向か
ら爆音が響いてきたことに気がつき振り返った。

すると巨大なオートバイというようなドラフターが猛スピードで
突っ込んできた。

ソーラー「なっ、もう一体!?!」

ソーラーは同じようにかわそうとしたが、オートバイドラフターは
小回りが効く上、ソーラーが切り返したところを狙ってミサイルを発
射してきたため、少しずつだがソーラーを追い詰めていった。

ソーラー「くっ、こいつも早い!!」

悔しそうに歯噛みをしてオートバイドラフターの突撃とミサイルを避けることにとらわれていたソーラーは、自動車ドラフターのことを失念してしまった。

ソーラー「うわっ!! 何これ!?!」

自動車ドラフターの射出してきたタイヤを頭から何個も被せられ、全身を締め付けられたソーラーは身動きが取れなくなってしまった。

そしてそこを狙ってオートバイドラフターが突撃し、ソーラーを跳ね飛ばした。

ソーラー「お、おく… 効いたあ…」

受け身も取れないまま、頭から地面に激突したソーラーは、目から星を出してフラフラになってしまった。

当然、その隙を二体のドラフターが見逃すはずもなく追撃を加えてきた。

ソーラー「ギャフン!! うぎやく!!」

ビームとミサイルの連続攻撃を受けて妙な悲鳴とともに吹っ飛んだソーラーに対して、トドメに押しつぶしてやると言わんばかりに地響きを立てつつ猛スピードで突っ込んできた。

ソーラー「ま、まだまだあ!!」

フラフラになりつつも、太陽光線が降り注いできたことも相まってパワーを回復したソーラーは気合いとともに自分を拘束していたタイヤをぶつちぎり、二体のドラフターの突撃もギリギリのところで大ジャンプしてかわした。

その結果突っ込んできた二体のドラフターは鉢合わせし、お互いに誤爆しあって逆にダメージを受けてしまった。

ソーラー「今だ!! クロムスティック・ブーメラン!!」

隙ありとばかりに腰の左右のクロムスティックを取り外し、そのまま二本のスティックを柄の部分でくっつけて一本の棒のようにして光の力を込めて投げつけた。

光輪のように投げつけられたスティックに、二体のドラフターのボディを大きく切り裂かれ、甲高い悲鳴とともに倒れ込んでしまった。

ソーラー「よし、一気にトドメだ!! モードデイヴィジョン!!」

その掛け声とともにソーラーは立体映像投影装置を起動させ、髪の色が赤と青と黒になっている三体の分身を作り出した。

ソーラー「フルパワー!!」

そして分身完了するとともに、四人になったソーラーは二体のドラフターに四方から組みつき、そのまま上空まで持ち上げていった後、トンボを切って距離をとった。

直後上空に閃光が走ったかと思うと、光り輝くダイヤモンド インフィールドゾーンが完成していた。

ソーラー「プリキュア・シャイニーダイヤモンド…」

ソーラーは着地すると同時に腕を構えた。

ソーラー「フィニッシュ!!」

その掛け声とともに指を鳴らした瞬間、インフィールドゾーンの中で強烈なプラスエネルギーが電撃の嵐のように降り注ぎ、閉じ込めら

れた自動車ドラフターとオートバイドラフターを一撃のもとに葬り去った。

そして、刺々しい金属の玉のようなものが二つ、ゴトリと降ってきて地面に転がった。

ソーラー「ふくつ、一件落着つと」

戦いに勝利し、ドラフターにされていた人たちが浄化されたことを確認したソーラーは、満足げな笑みを浮かべて飛んで行った。

パーリ「ふん。プリキュアめ、いい気になるなよ」

セーリ「まったくだ。しかし、あの男の作戦をあてにすることになるとは情けないものだ」

近くのビルの屋上でそんなことを呟いているこの二人に気づくこともなく。

遠藤平和科学研究所

ソーラー「たっだいま〜!!」

遠藤「おお帰ったか。ご苦労じゃったな」

元気よく研究所に帰還したソーラーを遠藤博士も機嫌よく出迎えた。

ソーラー「はっはっはっ!! ご苦労だなんて、そーんなことありませ

んですよ!! この体の使い方も完璧に覚えましたが、何より完璧な必殺技のシャイニーダイヤモンドフィニッシュまで開発しましたからね。もう怖いもんなしですよ」

自慢げに踏ん返り返ったソーラを見て、遠藤博士は引きつりながらたしなめた。

遠藤「こちらこちら。あんまりお調子にのるんじゃない。完璧などというものはこの世に存在せんのだからして、くれぐれも気を抜かんようにせんか」

ソーラ「なーに、大丈夫ですよ。連中もかなり追い詰められてきますしね」

しかしそんな注意などなんのそのというように、ソーラはかんらんらと笑い飛ばした。

遠藤「ん? 追い詰められとる? なんでそんなことがわかる?」

ソーラ「だって、連中ドラフターを二体も同時に出してきたんですよ。元々ドラフターが究極成長させればいいだけなんだから一体出せばそれでいいんですよ。おまけに下手に同じ場所に複数出したりしたら共食いの可能性だってあるのに、あえてそれをしたってことは、そうしなきゃいけないほどになってるってことですよ」

実に得意そうにドヤ顔で説明をしたソーラだったが、遠藤博士はだんだんと真剣な顔つきになっていった。

遠藤「…本当にそうなのか? なんらかの理由で複数出したんじやなかるうか? あるいは…」

じつと何かを考えていた遠藤博士だったが、仕掛けていたタイマーが鳴ったことで正気に返った。

遠藤「おっとイカンイカン、約束の時間じゃ。ソーラ、一仕事した

後にすまんが、前々から頼んでいた通りに頼むぞ」

ソーラ「まつかさつれよー!!」

自信満々に胸を叩いて踏ん返り返りながら研究所を出て行ったソーラに、遠藤博士は一抹の不安を覚えたため息をついた。

遠藤（どーもあやつはイマイチ不安なところがあるな。油断大敵火がボウボウという言葉を教えてやったほうがよかったか…）

科警研

ここ科警研から、嚴重な警備の元あるものが運び出されようとしていた。

研究員「では河内警部お願いします。くれぐれも万が一のことがないようにお願いします」

河内「うむ、お任せください」

志夜「警部殿、では私は前方の護衛車に同乗しますので」

河内「うむ、頼むぞ」

見事な敬礼とともに、前の車両に向かっていった志夜刑事を見て、河内警部もまた気を引き締めた。

河内「よし。こいつがあれば、あのドラフターとかいうやつらとも互角に戦えるかもしれないからな。絶対に守らなければ…。そのためにも保険も用意したんだしな」

河内警部がちらりと近くのビルの屋上を見ると、ソーラが小さく手

を振っているのが目に入った。

数日前

ソーラ「トリプルP？ なんですかそれは？」

突然真剣な顔で遠藤平和科学研究所を訪ねてきた河内警部と志夜刑事だったが、聞いたことのないその単語にソーラは質問した。

遠藤「ああ、去年の暮れじゃったか。科警研から極秘にということ
で相談を受けたやつじゃな。新型の液体爆薬じゃったな」

河内「うむ、小さなカプセルに詰まったものでも十分な破壊力が
あつて、実にニトログリセリンの約30倍程度の威力があるやつだ」

志夜「危険なものではありませんが、うまく取り扱えば強力な武器
になります。それを今度科警研から警視庁に輸送するのですが…」

そこまで話を聞いてソーラは納得したように頷いた。

ソーラ「なるほど。もしかしたらあいつらが襲ってくるかもしれない
ない」と

河内「まあ情けないがそういうことだ。こつちでも護衛はつける
が、普通の人間相手ならともかく、あいつらが攻めてきたら俺たちだ
けではどうにもならん」

自分たちの力不足を痛感していた河内警部は悔しそうにため息を
つけたが、ソーラは首をかしげた。

ソーラ「普通の人間って？ あいつら以外にもそんなことをしよ
うって考えるやつらがいるんですか？」

志夜「…言わないでください。それが人間の弱さと情けなさです

よ。こんなご時世なのに自分のことしか考えない人というのはいるんです。これを奪って金儲けしてやろうとか…」

遠藤「まあなんにせよじゃ。妙なことを仕掛けてくる奴がおらんとも限らず、人類のための発明を悪用されたりしたらことじゃ。ソーラ、当日は陰ながら護衛を頼めるか」

ソーラ「了解しました!!」

河内「あゝ… じゃあすまんが当日はよろしく頼む」

よく言えば明るく元気よく、悪く言えば能天気そうに敬礼をしながらのソーラの言葉になんとなく不安を覚えつつも、とりあえずソーラに護衛を頼んで河内警部たちは引き上げて行った。

現在

パトカー数台に先導され、新型液体爆薬 トリプルPを積んだ護送車が道を進んでいく中、近くのビルの屋上をジャンプに次ぐジャンプで後を追いかけてながら護衛をしていたソーラは一人ぼつりとつぶやいた。

ソーラ「今の所異常なし。というか、考えてみれば連中はドラフトーを成長させるのが目的なんだし、わざわざ襲ってくることもないよね。普通の人間ならむしろ私が戦わないほうがいいかも…」

そうして気を抜いてソーラがよそ見をした瞬間、爆発音とともにもうとうとした煙が巻き起こり、護送車やパトカーを包み込んでしまった。

河内「敵襲!! 総員持ち場を離れるな!!」

真っ白な煙にあたり一面が覆われ、一寸先もろくに見えない中、護衛に当たっていた警官は皆少なからず混乱していたが、河内警部の一括により冷静さを取り戻し、各々拳銃を構えて臨戦体制に入った。

しかし次の瞬間、煙を切り裂いて襲ってきた存在にさしもの河内警部も度肝を抜かれた。

河内「なっ!? こいつらは!!」

志夜「資料で見た、マイナー!?!」

全身を黒いタイツで包んだような人間、先の戦いにおいて嫌という程活動していた戦闘員　マイナーだった。

警官隊はとっさに拳銃を乱射したが、このマイナーに対して通常兵器はほとんど役に立たず、一方的に捌られていった。

河内「くっ!!　いかん、このままでは…」

さしもの河内警部も焦り始めた時、マイナーたちが片っ端から殴り倒され始めた。

ソーラ「大丈夫ですか!?　こいつらは私がなんとかします。早くトリプルPを運んでください!!」

クロムステイックを両手に構え、見事なステイックさばきで次々とソーラはマイナーを打ち倒していつており、それを見た志夜刑事も力強く頷いた。

志夜「わかりました。私が運転して運びます!!」

そうして護送車に駆け寄って行ったものの、時すでに遅く本来の運転手はズタズタにされて道路に打ち捨てられており、護送車はマイナーの運転によりもはや追いつくどころか影も形もないところに

行ってしまったっていた。

ソーラ「く、くっそー!! 油断した!!」

マイナーを全て打ち倒したものの、勝負には負けてしまったため、ソーラを始め河内警部たちも皆悔しそうに歯噛みをしつつ、地面を殴りつけていた。

遠藤平和科学研究所

遠藤「何!? マイナーが出現して、しかもトリプルPが奪われた!」
ソーラ「はい、すみません。完全に油断してました。まさかドラフトじゃなくてあんなのが出てくるなんて…」

志夜「いや、それはこつちもです。人間の暴力団関係者やテロは想定していましたが、まさか…」

河内「あまり思い詰めるな。もともと責任者は俺だ。なら俺の判断ミスということだ。処分はいくらでも受けてやる。しかし…」

うつむき、唇を悔しそうに噛み締めていた二人の肩に手を置き、慰めるように声をかけた河内警部だったが、拭えない疑問を口にした。

河内「なんで今更、あんなのが出てきたんだ? それに連中の目的から考えても、トリプルPなんぞ奪っても何にもならんだろうに…」

ソーラ「そ、そうそう。私もそれ疑問に思ってた」

尻馬に乗るように相槌を打ったソーラに、志夜刑事も続いた。

志夜「こちらに対する戦略方針を変えたんでしょうか? 先日の塾の件といい何かこう、以前の力押しというより、こちらの心理につけ込んでいるような…」

遠藤「わしも同感じゃ。変なブレインでもついたか？ フライのやつのような…」

「そこまで考えを進めたところで、全員の頭に嫌な予感がよぎった。

河内「志夜、急いで戻って確認だ」

志夜「はい!! ではすみませんがこれで」

それだけ言い残すと二人は慌てて引き上げていった。

遠藤「まさかとは、思いたいが…」

続く

第30話 太陽が消える日（後編）

「甲子市上空 静止衛星軌道上 ブルペノン

機械に組み込まれていたD r・フライだったが、作戦の提案があるということであろう解放されていた。

D r・フライ「よしよし。この次元皇帝の情報収集力をなめるなよ。これで面倒なものが一つ減った」

そんなD r・フライは強奪してきたトリプルPを見て、悦に浸っていた。

パーリ「おい、そんなものを奪ってきてどうするつもりだ」

セーリ「ただでさえ貴重なダーククリスタルを浪費したんだ。これ以上無意味なことをするな」

D r・フライ「黙らんか!! あれは無駄ではない。新しいプリキュアとやらの能力の分析用に使ったままでのことじゃ!!」

そう叫んだ瞬間、D r・フライの首にはめられた枷から電流のようなものが流れた。

パーリ「口の聞き方に気をつける。貴様はこっちの質問に答えていればいい」

電撃のショックで倒れこんでしまったD r・フライは憎悪に満ちた目でパーリを睨みつけつつも、作戦の概要を説明した。

D r・フライ「い、いいか… ドラフターとやらを破壊できる可能性のある液体爆薬は奪った。あとはプリキュアさえ仕留めれば世界を暗黒に染めるのも容易い。そのためには奴の能力さえあらかじめ

分析しておく必要がある」

セーリ「ほう。で、勝算の方は？」

D r. フライ「ドラフターにするやつ候補は目星をつけとる。だが、あやつの能力も想像以上じゃな。勝率はせいぜい五分五分といったところか」

そこまで告げた瞬間、D r. フライの土手っ腹に蹴りが突き刺さった。

セーリ「馬鹿が!! それじゃ意味がねえんだよ!!」

D r. フライ「話は最後まで聞かんか!! ボーイの性能が互角ならば、それをうまく使えんようにしてやればいい。簡単なことじゃ!!」

童夢小学校

一日の授業が終わり、生徒たちが下校を始める中、豪とランが話し合いながら通学路を歩いていった。

豪「なあ、ラン。もうすぐ節分でじいちゃんの誕生日だけど、プレゼントどうする?」

ラン「そうよね。おじいちゃんつてば難しい年頃なのよ。年寄り扱いしたら怒るし、かといって若い人向けのものなんてね…」

豪「だよなあ。一応商店街行って色々見てみようぜ」

節分でもある遠藤博士の誕生日も近くなっており、プレゼントをどうしたものかと考え事をしながら商店街の方に向かっていった二人だったが、大通りにさしかかろうとした時だった。

豪「えっ？」
ラン「何？」

突如車のエンジン音が聞こえたかと思うと、猛スピードで突っ込んでくる車が視界いっぱい広がった。

直後二人の体は宙に一転した。

甲子市立病院

遠藤「翔子!! 豪は、ランは!?!」

下校途中に二人が車にはねられたとの連絡を受け、転がるようにして病院に飛んできた遠藤博士とソーラは、手術室の前で京香先生に励まされている豪の母に息急ぎ切って尋ねた。

豪母「幸い、人通りの多い道で発見と通報が早かったんですけど、二人ともかなりの重態で… 助かる確率は五分五分だと…」

ソーラ「そんな… なんで」

京香「あの、博士、ソーラさん。ちよつとこちらへ…」

京香先生は遠藤博士とソーラを別の場所に通して小さな声で話し始めた。

京香「実は、ただの事故じゃないみたいなんです。先ほど警察からも連絡があったんですが…」

遠藤「と、いうと？」

京香「現場を何度調べて見ても、プレーキ痕がなかったそうです。つまり始めから…」

遠藤「二人を轢き殺す気だったと!? 馬鹿な!!」

ソーラ「まさか、これもあいつらが:!!」

ソーラは先ほどの襲撃時に犠牲になった人のことも含め、怒りをこらえきれないというように拳を握りしめた。

直後、巨大な地響きとともに揺れが病院を襲った。

ソーラ「こ、これは。ドラフター!!」

マイナスエネルギーを感知したソーラは、怒りの形相で病院を飛び出そうとした。

遠藤「ま、待たんか!! どうする気じゃ!!」

そんなソーラを見て、遠藤博士はとっさに肩を掴んで呼び止めた。

ソーラ「決まってるじゃないですか!! あいつら、絶対に許すもんか!!」

肩の手を振りほどきソーラは、怒りに身を任せて怒鳴り走り出した。

遠藤「いかん!! 冷静になれ!! 戻ってこい、これは命令じゃ!!」

しかし遠藤博士の静止に耳を貸そうともせず、ソーラは病院を飛び出すと両腕を頭の上でクロスさせ力の限り叫んだ。

ソーラ「モードプリキュア、ウェイクアップ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りのするドレスのようなコスチュームに変身して市街地のドラフターに一直線に向かって行った。

遠藤「ば、馬鹿モンが!! 今朝のドラフターの戦いで消耗したエネルギーとて完全には回復しとるまい。おまけにもう陽も傾きかけとるんじゃぞ!!」

市街地では何本も砲塔をつけた巨大な戦車とでもいうドラフターが、その巨体を利用してビルや民家を押しつぶし、絶えることのない砲撃を行っていた。

ソーラー「ダアアア!!」

そんな戦車ドラフターに対して、上空からソーラーがドロップキックの体勢で猛スピードで突っ込んできた。

空気との摩擦で足先が赤熱するほどのスピードではあったが、戦車ドラフターの装甲はそれをはじき返してしまった。

ソーラー「うわっ!!」

地面に転がったソーラーに対して、戦車ドラフターの砲撃が次々と行われ、彼女は必死になってそれをかわそうとしたが

ソーラー「えっ!? キャアアア!!」

回避行動を読まれてしまい、直撃を受けることになった。

ソーラー「な、なんの!!」

爆発に吹っ飛ばされながらも、ソーラーは空中で姿勢を立て直しなんとか戦車ドラフターの上部に取り付いた。

ソーラー「この!! この!!」

ソーラーは怒りに任せて何発も拳を振り下ろしたが、戦車ドラフターにはまるで通じなかった。

ソーラー「許さない!! あんたたちを絶対に許すもんか!! 倒す、絶対に!!」

怒りのあまり状況が判断できず無駄な攻撃をしていることにも気がつかなかったソーラーに、戦車ドラフターはワイヤーのようなものを射出してソーラーを縛り上げてしまった。

ソーラー「くっ、こんなもの… うあああっ!!」

とっさに引きちぎろうとしたソーラーだったが、そのワイヤーを通じてエネルギーが一気に吸い取られていった。

ソーラーが苦戦している光景をセーリとパーリは満足そうに眺めていた。

セーリ「ふふっ、あいつの調べたデータもなかなか役に立つじゃないか」

パーリ「ああ、プリキュアのデータを全て覚えこませたやつをドラフターにするとはいい判断だ。おまけに奴が取り乱すように関係のある人間を始末しておくとはな。勝負は見えたな」

今回ドラフターにされているのは、中年のミリタリーオタクであつた。

趣味を周りから白い目で見られ、近所づきあいや職場でもうまくいかずストレスが溜まっていたところに目をつけられたのだ。

エネルギーを吸い取られぐったりとし始めたソーラーを見て、セーリとパーリは力強く頷いた。

セーリ「頃合いはよし、行くぞ!!」

パーリ「ああ!!」

ソーラー「あ、ぐ…」

エネルギーを失い、自分を拘束しているワイヤーを振りほどくこともできなくなったソーラーの目に、セーリとパーリが高笑いしている光景が映った。

パーリ「いいざまだな」

セーリ「貴様の最期だ!!」

そうして拘束されたソーラーに対して、日頃の恨みとばかりに一方的に殴る蹴るの暴行を加えて行った。

ソーラー「ガハツ!! ゲボツ!!」

うめき声をあげながら、ソーラーは必死に懇願するように叫び出した。

ソーラー「太陽エネルギーを、もっと光を!! 私はここで負けるわけには!!」

その叫びも虚しく、太陽は地平線の彼方へと刻一刻と沈んでいき、それとともにソーラーのエネルギーも急速に失われ、ついに変身解除してしまった。

パーリ「トドメだ!! やれ!!」

そのパーリの命令に応えるように、戦車ドラフターはワイヤーを大きく振り回して変身の解けたソーラーを投げ飛ばし、一斉砲撃を行った。

京香「ああっ!!」

遠藤「ソーラー!!」

ソーラー「あ、うあ…」

大爆発の爆煙が収まった時には、見るも無残なほどにボロボロになったソーラーが横たわっていた。

戦車ドラフターは戦闘機のような形に姿を変えると、ズタボロになり動けなくなったソーラーを十字架に磔にして、日の沈んだ市内上空を旋回し始めた。

遠藤「ソ、ソーラー…」

その光景に凄まじい絶望感を覚えていると、上空のドラフターから聞き覚えのあるダミ声が響いてきた。

D r. フライ『愚かな人間の諸君久しぶりじゃな。わしの名は貴様らの足りない脳みそにも残っておるじやろう。史上最高の大天才にして次元皇帝D r. フライ様じゃ』

遠藤「なつ、フライ!? やはりあやつ…」

D r. フライ『この世界の守護者にして唯一の脅威、プリキュアはたった今わしの作戦により完全に敗北した。よって本日深夜0時、プリキュアの処刑を執り行う』

京香「何ですって!?!」

D r. フライ『今日をもって諸君らの世界は終わりを告げる。プリキュアの死を持って、新しい暗黒の世界の日々が始まるのじゃ!!
ヒャーッハッハッハッ!!』

その声が月はもちろん星ひとつない真っ暗な夜空に響き渡った…

続く

第31話 絶望からの大逆転（前編）

節子「テレビをご覧の皆様。お久しぶり、突撃レポーターの甲斐節子です。先ほど電波ジャックされ、全国に行き渡った映像をご覧になられたかと思えます。何と、あの忌々しいテロリストDr.フライが脱獄したのです。そしてそれだけならまだしも…」

そこまでレポートを行なったところで、節子は悔しそうに俯いてしまったが、すぐに気を取り直してレポートを続けた。

Dr.フライの流した映像のため今現在市内どころか日本中がパニックになっており、そんな中でも冷静にレポートを行えるのはさすがベテランといった貫禄があった。

節子「何と、この世界を守り続けてきてくれたプリキュアが完全敗北し、今まさに処刑されんとしているのです。無論、警察や自衛隊と黙って見ているわけではありませんが…」

一刻も早くプリキュアを救助に向かいたい。

それは節子のみならず国民全ての願いだったが、市街地では全高約30メートルといったサイズにまで巨大化した戦車ドラフターが傍若無人に砲撃を行なっており、そちらの対処を最優先にせざるを得なくなっていた。

しかし、自衛隊の戦闘機も正確かつ強力な砲撃の次々と撃ち落とされており、かろうじて命中したミサイルでも傷一つつくことがなく、もはや敵はなしといった状態だった。

そんな光景を、市内の高層ビルの屋上から礫にしたソーラの前で見下ろして眺めながら、Dr.フライは一人悦に浸っていた。

Dr. フライ「ヒヤッハッハッ!! アホどもが。プリキュアも敗北し、対抗できるだけの力もわしに奪われたというのに、無意味な抵抗を続けおるわ。無力なものが無意味に足掻く姿を見るのは痛快じゃない」

人々の必死の抵抗も、Dr. フライにとっては嗜虐心を煽るものではなく、下劣な嗤い声をあげていた。

ソーラ（なんてやつ。頑張ってる人たちを嘲笑うなんて絶対に許せない!!）

そんなDr. フライをソーラは怒りを込めた目で睨みつけて、何とかして脱出しようと足掻いていた。

ソーラ（ダメだ… エネルギーが全然ないんだ。逃げるどころか指一本動かすことも喋ることもできない…）

しかしエネルギーを全て使い果たしてしまったこの状況では、もはやどうすることもできなかった。

Dr. フライ「ん？ お前も無駄な抵抗をしとるのか？ やはり遠藤のところにおるだけあってアホじゃのう。あやつも才能ならわしに劣らぬ物を持ちながらアホのために使うなどという無意味なことをしとる。わしと組めば世界を自由にすることもできたというのに」

その言葉にソーラはDr. フライを怒りの形相で睨みつけた。

Dr. フライ「おお、怖い怖い。そう睨みつけんでもいいじゃろ。わしは哀れみ深い性格でな。ちゃんとお前の最期は華々しく飾ってやるわ」

いやらしいな笑みを浮かべつつ、D r. フライは全身からマイナーを生成すると強奪してきたトリプルPをソーラの足元にセットし始めた。

D r. フライ「後一時間。人類の希望とやらの新兵器が、人類の希望のプリキュアを吹っ飛ばす。それと同時に暗黒世界となる記念すべき一日が始まる。実に素晴らしい、最高の記念日じゃ!!」

大仰なポーズとともに、プリキュアが処刑を待つ以外どうすることもできなっている状況に、こみ上げてくる嬉しさが我慢できないというように興奮して叫んだD r. フライだったが、セーリとパーリは離れた場所から冷めた目で見ていた。

パーリ「ふん。無意味なことをしているのはどっちだ。やつを捕まえたのならさつさと破壊してしまえばいいものを」

セーリ「まあいいさ。どうせプリキュアが消えればやつも用済みだ。最期ぐらい好きにさせてやればいい。俺たちは哀れみ深くい性格だからな」

パーリ「違うない」

そうして皮肉げな笑みを浮かべ笑いあった。

遠藤平和科学研究所

遠藤「よし、準備はできた。もう時間がない、急がんと…」

地下の研究室でずっと製作していたものを車に詰め込み、遠藤博士

が今まきに出発しようとしていた。

するとそこに猛スピードで一台の覆面パトカーが突っ込んできた。

河内「遠藤!! お前こんなところで何をやっとするんだ!!」

志夜「警部殿のおっしやる通りです。あなたにはするべきことがあるでしょう!!」

覆面パトカーから飛び降りるや否や、凄まじい形相で怒鳴りつけてきた。

遠藤「何とは何じゃ!! お主らこそこの非常時にこんな何をやっとするか!!」

河内「非常事態はどつちだ!! 京香先生から聞いたぞ、お前の孫たちが重体だとな!! こんなところで油を売つとらんで病院に行かんか!!」

至極真つ当なセリフを叫んだ河内警部だったが、遠藤博士もまた真剣な表情で返した。

遠藤「行っつてどうなる!!」

志夜「なあっ!!? あなたはどういう…」

遠藤「怪我をしとるのは豪とランじゃ。医者でもないわしが行っつておつても何にもできん。合理的に考えれば、最優先ですべきはあいつらが生き延びられる可能性が少しでも高まるよう世界を守つてやることじゃ!!」

遠藤博士の迫力に押し黙りつつも、河内警部も言い返した。

河内「う、うむ。一理はある。で、何をしようとしとるんだ」

遠藤「ソーラが抵抗できんまま捕まっつとるところを見ると、ボデイのエネルギーが完全にゼロになつとるんじやろう。こんな真夜中に太陽電池は期待できんから、以前開発したものを応用した太陽光線スペクトル砲でエネルギーを照射してやるんじや」

志夜「彼女のエネルギーを回復させられるんですか？ それなら…」
まだ希望があるというよう志夜刑事はホツとしたような表情を浮かべた。

遠藤「じゃが急ごしらえなもんでな。有効射程がせいぜい百メートルといったところじゃ。今から現地まで車を飛ばして間に合うかどうかギリギリじゃな」

河内「そういうことならこっちに乗れ。パトカーなら一番早い」

河内警部の言葉に最もだというように頷くと、光線砲を急いで積み替えた。

遠藤「よし、いいぞ!!」

志夜「飛ばしますよ!!」

志夜刑事がアクセルを思い切り踏み込むと、猛スピードで覆面パトカーは走り始めた。

戦車ドラフターの攻撃を受けないよう、多少遠回りしつつ市内を猛スピードで進み、何とか目的のビルの近くまで遠藤博士たちはたどり着いた。

河内「よし、何とかここまでたどり着いたな。しかし流石に見張りぐらいいるか…」

河内警部の言葉通り、目的のビルの周辺や入口にはマイナーが陣

取っており、猫の子一匹入れそうもなかった

遠藤「うむ。じゃが危険は承知。0時まで後15分じゃ。急がんと!!」

トランクに積み込んだ光線砲を取り出しながらの呼びかけに、志夜刑事はふと今更のようなことに気がつき、不安そうに返した。

志夜「しかし、大丈夫でしょうか。もし行動を早めるようなことがあれば、ソーラさんは…」

遠藤「いや、それは心配いらん。フライは自己顕示欲とプライドの塊みたいなやつじゃからな。0時ちょうどにソーラを破壊することで暗黒の日が始まるということを是が非でも強調したいじやろうしな」

河内「確かにな。あいつのやりそうなことだ」

善かれ悪しかれDr.フライのことをよく知っているこの二人は、苦笑いをしつつ準備を進めて行った。

遠藤「よし、準備できたぞ」

河内「ならば突撃あるのみ。覚悟はいいな!!」

遠藤博士から受け取ったアンチマイナーガンを構えつつ、河内警部は志夜刑事に呼びかけた。

志夜「一生分なら!!」

河内「上等!!」

そうして今まさに飛び出そうとした瞬間、後ろから三人は肩を掴まれた。

遠藤・河内・志夜「!!!」

慌てて振り返り銃を構えた三人だったが、後ろにいた存在に叫び声をあげるとともに心臓が飛び出しそうになった口を塞がれた。

Dr. フライ「ヒヤハツハツ!! 後1分で暗黒の世界となる日が始まる。それを貴様に見せてやれんのが残念じゃが、記念のカウトダウンダウンは聞かせてやるわ」

勝利を確信しソーラを見下すように高笑いをしていたDr. フライだったが、セーリとパーリが口を挟んだ。

パーリ「おい、いい加減にしろ。とつとつを破壊してしまえ」
セーリ「何かがこのビルに侵入してきたようだ。万が一があったらどうする」

Dr. フライ「ふん。大天才のわしに抜かりはない。ビルの中にはマイナーを多数配置してある。凡人以下のアホどもにあれを蹴散らしてここまで来れるはずがないわ」

二人の忠告を自信満々な態度で切り捨てると、ソーラに向かって下劣な笑みを向けた。

Dr. フライ「さーて、あと30秒。エネルギーがあれば遺言も聞けたのじゃが、残念残念」

ソーラ（くっ…）

その自分を嬉しくて仕方がないというような、無念さのかけらもない言葉にソーラの怒りは頂点に達していたが、睨みつけることしかできない自分の無力さも嫌という程わかっていた。

もし彼女が人間ならば流した血の涙で顔は真っ赤になっていたで

あろうことは想像に難くないことが、ソーラの表情からは感じ取れた。

D r. フライ「さあカウントダウンじゃ。10、9、8…」
ついに読み上げられたカウントダウンにソーラは硬く目をつぶった。

ソーラ（これで終わり… 私には守りきれませんでした。先輩、すみません!!）

ソーラが心の底から詫びたと同時に、D r. フライのカウントダウンは終わりを告げた。

D r. フライ「3!!、2!!、1!!、ゼロ!!」

D r. フライがゼロカウントをした瞬間、大爆発が起きた。

続く

引きつった顔のまま声のした方に振り返ると、そこにはソーラを抱きかかえた一人の少女がいた。

その少女はボリュームのある濃いピンクの髪にフリルのついた赤を基調にしたドレスのようなものを纏い、小さなロケットが装備された黄色の腕をしていた。

「闇を吹き消す光の使者 キュア・リリーフ!!」

セーリ「キュ、キュア・リリーフ… 貴様、生きて… と、すれば…」

あることに思い当たった瞬間、強烈な火炎が降り注ぎ三人は火だるまにされた。

「うおおおっ!!」

そして同時に飛び出してきた白い影は華麗に空中を回転しつつ、リリーの横に着地した。

その白い影は腰まで伸びた五本の金色のポニーテールを翻した、フリルのついた純白を基調にしたドレスのようなコスチュームの少女であり、何かの噴射口のようなものついた緑色の腕をしていた。

「悪を蹴散らす光の使者 キュア・ダイダー!!」

リリース・ダイダー「ピンチ一発、大逆転！ コズミックプリキュア!!」

Dr. フライ「ぬあつ… コ、コズミックプリキュア… なぜじゃ!? 貴様らは溶岩の中に飛び込んだと」

驚愕の表情とともに湧き上がってきた当然ともいう疑問を口にする、二人は凜とした声で言い放った。

リリース「忘れたの？ 私たちはプラスエネルギー生命体とでもいべき光の精霊だよ。休眠状態になって全身をそれで包み込んでボディを維持するぐらいはできる」

ダイダー「最も、全ての力を使ったから身動きもろくに取れなくてね。おまけに溶岩の対流に流されたから、今まで帰ってこれなかっただけよ」

Dr. フライ「お、おのれ… それにしてもよりによってこのタイミングで…」

悔しそうに歯ぎしりをしたDr. フライに、続けて飛び込んできた遠藤博士の嬉しそうな声が聞こえてきた。

遠藤「どうじゃ、正義の生み出す奇跡に恐れ入ったかフライ!! 恐れ入ったと両手をつけい!!」

Dr. フライ「くうつ… 遠藤、貴様性懲りも無く邪魔を!!」

そんな遠藤博士を見て憎々しげに歯噛みをしたDr. フライだったが、河内警部の怒声が飛んだ。

河内「懲りとらんの貴様だ、この極悪人が!! もう一度逮捕して

くれる!!」

D r. フライ「ほぎくな、愚かな人間の分際で!! わしを誰だと思っておるか!!」

相も変わらぬ口癖とともに、D r. フライの体からは黒いモヤのようなものが吹き出し、やがて黒づくめの男たちといった姿のマイナーとなっていた。

志夜「くつ、マイナー!?!」

D r. フライ「ヒャハハハ。これがわしが人を超えた証じゃ。行け、奴らを八つ裂きにしろ!!」

D r. フライの命令一下マイナーの大群が遠藤博士たちに襲い掛かっていったが

ダイダー「させない!! 超低温冷凍ガス発射!!」

ダイダーがすかさず左腕から真っ白いガスを噴射しマイナーを一瞬で凍りつかせてしまった。

リリーフ「こつちも!! チェンジハンド・タイプブルー!! エレキ光線連続発射!!」

続けてリリーフが両腕を稲妻模様の走った青い腕に換装し、電撃光線を連続で打ち出すと、直撃を浴びたマイナーは感電しつつ次から次に浄化されていた。

中には、攻撃を免れリリーフとダイダーに飛びかかって行ったマイナーもいるにはいたが、相手にもならないというようにあっさり叩きのめされていた。

ソーラ（先輩… やっぱりすごいな…）

リリーフに抱きかかえられながら、ソーラは二人の強さに改めて尊敬の念を抱いていた。

パーリ「チツ、この場は撤退だ」

セーリ「ああ、もうここにいる必要もない。ドラフターは最終段階にまで成長しているしな」

元々ソーラの最期が見られるならばといった程度の感覚でしかなかったため、明らかに旗色の悪くなった今ここに止まる理由はない。そう判断したセーリとパーリはあつさり引き上げて行った。

Dr.フライ「ま、待て!! わしを置いて行く気か!!」

一人取り残されたDr.フライは、軽いパニックになりかけたがマインナーを盾がわりに出現させてなんとか逃げ出して行った。

ダイダー「逃したか。でも今はそれどころじゃないわ」

リリーフ「うん。博士、ソーラを頼みます。私たちはあのドラフターを!!」

こうしている間にも街中で砲撃を続け破壊の限りを尽くしている戦車ドラフターを放っておけないと、ソーラを遠藤博士に託すとビルの屋上をジャンプに次ぐジャンプでドラフターへと立ち向かって行った。

遠藤「気をつける!! 奴は相当手強いぞ!!」

その見送りの言葉に力強くサムズアップを返しながら。

河内「ハハツ、帰ってきやがったな。あいつらが」

遠藤「まったくじゃ、これで鬼に金棒。おっとソーラ、待つとれよ。すぐにエネルギーを…」

嬉しそうな笑みを浮かべつつ、太陽スペクトル光線砲をソーラに向けて照射すると、ゼロだったソーラのエネルギーはフルパワーとは行かないまでも回復した。

ソーラ「先輩… よーし私も行きます。情けないとこばっかり見せられない」

志夜「その意気です。頑張ってください!!」

志夜刑事の励ましにソーラはどんと胸を叩いたが、それだけでふらついてしまった。

河内「おいおいおい、無理をするな。現地まではパトカーで送ってやる。それと、プレゼントも詰め込まないとな」

遠藤「そうじゃな。目にももの見せてくれるわ」

一方、市街地では戦車ドラフターの猛攻が続く中、人々は我先にと避難しており、刻一刻と廃墟と化していく町並みと相まって地獄絵図と言う言葉がぴったりとききていた。

そんな状況下でも節子は誰一人立候補しなかった現場レポートを単身行なっていた。

節子「皆様、こちらは実況放送中の突撃レポーター甲斐節子です。巨大な戦車の怪物は現在この近くまで迫ってきております。プリキュアの処刑場からの映像は現在途絶えてしまい、状況は絶望的です」

そのレポートをした直後、背後に砲撃が着弾し、夜中だと言うのに一瞬昼のように明るくなった。

カメラマン「ちよつと、これやばいよ。早く逃げない!!」

この状況を撮影していたカメラマンもさすがにやばいと感じたか逃げるよう青い顔で促したが、節子は頑として首を縦に振らなかつた。

節子「テレビをご覧の皆様、ただいまの映像をご覧になりましたでしょうか。今からではもはや退避する時間もないでしょう。ですが、それでも私は本望です。こんな残虐な行為を平然と行われることがあっていいはずありません。それを訴え、決してテロに屈しないことを伝えるためここで捨て石になる覚悟であります」

その力強く語られた言葉をマスコミの鏡とるか、命知らずの馬鹿野郎ととるかは意見の別れるところであろうが、少なくとも覚悟を決めて撮影に付き合っているカメラマンだけは前者ととるべきであろう。

そうしている間にも、戦車ドラフターは地鳴りのような音ともに現場に近づいてきており、ついには彼女たちの背後にその巨体を現した。

節子「皆様、これが私の最後の映像となるでしょう。ですが悪を憎み平和を望む心は不滅です。さようなら、皆さんさようなら」

その覚悟を決めたレポートを行なった瞬間、何かが猛スピードで突撃したため戦車ドラフターは砂煙をあげて後退することになった。

節子「えっ？」

その何かとはもちろん

リリース「間に合った!!」

ダイダー「無事なようですね」

節子「コ、コズミックプリキュア… い、生きてたの!？」

驚きの声とともにあんぐりと口を開けた節子だったが、すぐに気を取り直した。

節子「み、皆さま。今私は奇跡を目の当たりにしました。数ヶ月前怪物とともに富士山の火口に消えたはずのコズミックプリキュアが今ここに復活したのです!!」

嬉しさを堪えきれないというような興奮気味のレポートを背中であ聞きながら、リリーフとダイダーは戦車ドラフターに立ち向かっていった。

そんな二人に対して戦車ドラフターは砲撃を行おうとしたが、縦横無尽かつ猛スピードのフットワークに翻弄され照準をまともに定めることができなかった。

結果、砲撃を一発放つこともできないままダイダーに足元の死角に潜り込まれた。

ダイダー「行くわよ、チエンジハンド・タイプレッド!!」

その掛け声とともにダイダーの両腕は一回り大きなゴツゴツした赤い腕に変わった。

ダイダー「ヌウオオオリヤアアア!!」

ダイダーのレッドハンドは本来、災害時における瓦礫等の撤去を迅速に行うためのものであり、その超パワーで戦車ドラフターにパンチを浴びせると、続けて軽々と持ち上げて地面に叩きつけた。

リリーフ「タアアアア!!」

そこにリリーフの飛び蹴りが炸裂し装甲が陥没したが、そこまでであつた。

リリーフ「えっ?」

戦車ドラフターには大したダメージにはなっておらず、イラついたように雄叫びをあげると全身から何本も砲塔を生やしてきた。

ダイダー「!! まずい!!」

次の瞬間、戦車ドラフターは全身の砲塔から四方八方に無差別乱射を行い、あたり一面を火の海にしてしまった。

ダイダー「くっ、チェンジハンド・タイプグリーン!! 超低温冷凍ガス噴射!!」

その掛け声とともにダイダーの両腕は噴射口のようなものついた緑色の腕に換装され、左腕から真っ白いガスを噴射して周辺の消火を行なった。

だがそんなものは焼け石に水であり、あっという間にリリーフとダイダーは炎の渦に閉じ込められてしまった。

ダイダー「くっ、まずいわ。このままじゃいつまで耐えられるか…」
リリーフ「でも飛び出したらそれこそ狙い撃ちだよ。どうしたら…」

突破口が見当たらず苦戦をしているコズミックプリキュアだったが、彼女たちの耳に車が猛スピードで突っ込んでくる音が聞こえてきた。

遠藤「リーフ、ダイーダ、無事か!?!」

河内「今助けてやる、もう少しの辛抱だ!!」

リリーフ「博士!？」

ダイダー「河内警部!? 無茶です!!」

しかし、そんな二人の叫びなど御構い無しに河内警部の覆面パトカーはスピードを一層あげた。

河内「志夜!! よく狙えよ!!」

志夜「任せてください、運転は得意なんです。遠藤さん、そちらは？」

遠藤「バツチリじゃ!!」

ソーラ「よし、みんな捕まって!!」

そしてソーラが三人を抱えて飛び出したが、車はついた勢いそのままに戦車ドラフターに特攻した。

その直後

大地が大きく揺れ、昼間と見紛うほどの火柱が上がり、戦車ドラフターは大きく吹き飛び自慢の装甲もボロボロになっていた。

河内「くうっ、すげえなこりや…」

遠藤「どうじゃみたか!! 新型爆薬トリプルPの威力じゃ!!」

志夜「連中に使われなくてよかったですよ。もし悪用されてたらと思うと…」

戦車ドラフターが吹っ飛んだことで、炎の渦から解放されたリリーフとダイダーの二人も、いまの大爆発には呆然としていた。

リリーフ「す、すごい…」

ダイダー「やっぱりこの世界はすごい… 自分たちの力でどこまでも進んでいこうとする…」

ソーラ「先輩、大丈夫ですか!!」

そのソーラの呼びかけに二人は正気に戻った。

ダイダー「はっ、こうしちゃいられないわ」

リリーフ「うん、チャンスだよ!!」

二人は頷きあうと必死にボディの修復をしようとしている戦車ドラフターを睨みつけた。

リリーフは大きく振りかぶると手の中に、虹色の光の玉を輝かせ始めた。

リリーフ「受けなさい!! プリキュア・レインボール!!」

その叫びとともに、リリーフは虹色の玉を亜音速で投げつけ、戦車ドラフターのボディを貫通させた。

するとその貫通した穴から、黒い靄のようなものが溢れ出し始め、苦しみの叫び声をあげた。

それを見たダイダーは、光のスティックのようなものを取り出した。

ダイダー「もう一丁、プリキュア・シャイニングスイング!!」

そう叫びながら、ダイダーはスティックを野球のスイングのように一振りした。

すると光の斬撃が飛んでいき、戦車ドラフターのボディを真っ二つに切り裂いた。

その切り裂かれたところから、さらに大量の黒い霧のようなものが溢れ出し、ついに復元が間に合わなくなり、装甲がボロボロと崩れ始めた。

ソーラ「よし、トドメだ!! モードプリキュア、ウェイクアツプ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りのするドレスのようなコスチュームの姿 キュア・ソーラーに変身し、リリーフとダイダーに遅れを取るまいと気合を込めて叫んだ。

ソーラー「行くよ!! モードデイヴィジョン!!」

その掛け声とともにソーラーは立体映像投影装置を起動させ、髪の色が赤と青と黒になっている三体の分身を作り出した。

ソーラー「フルパワー!!」

そして分身完了するとともに、四人になったソーラーはボロボロになり始めた戦車ドラフターに四方から組みつき、そのまま上空まで持ち上げていった後、トンボを切って距離をとった。

ソーラー「タアツ!!」

続けてソーラーはクロムステイクを二本とも取り外し、先端から

光のビームを発射した。

ソーラー「ビームライン・シュート!!」

ドラフターの四方に陣取った四人のソーラーが同じようにビームを発射した結果、ビーム同士がちょうど正方形を描いた。

さらにソーラーは今度はスティックをそれぞれ上下に向けてビームを放ったため、ドラフターを閉じ込めるようにビームを辺にした正八面体が完成した。

ソーラー「インフィールドゾーン完成!!」

そのビームの正八面体 インフィールドゾーンの頂点からは閉じ込められていたドラフターに対して強烈なプラスエネルギーが電撃の嵐のように降り注いでおり、相当のダメージを与えていた。

ソーラー「プリキュア・シャイニーダイヤモンド…」

ソーラーは着地すると同時に腕を構えた。

ソーラー「フィニッシュ!!」

その掛け声とともに指を鳴らした瞬間、インフィールドゾーンの中で目もくらむばかりの強烈な閃光とともに大爆発が発生し、ドラフターの末期の悲鳴が爆発音の陰でかすかに聞こえた。

そして、刺々しい金属の玉のようなものがゴトリと降ってきて地面に転がり

浄化の完了した中年男性へと姿を変えていった。

ソーラ「や、やった…」

エネルギーが不十分だったこともあり、変身解除するや否や再びふらついて倒れかけたソーラを、リリーフとダイダーが優しく受け止めていた。

ダイダー「よく頑張ったわね」

リリーフ「強くなったねソーラ。 見違えたよ」

その温かい言葉に、ソーラは満足げな笑みとともに力強く返事をした。

ソーラ「はい、ありがとうございます!!」

甲子市立病院

戦車ドラフターの被害もあり、野戦病院の様相を呈したこの病院の集中治療室に豪とランが運び込まれていた。

まともに車にはねられたため、機械の音が規則的に鳴り響く中二人は半死半生のままうなされていた。

豪「うゝ…」

ラン「うん…」

そんな夢うつつ状態二人の耳に聞き覚えのある懐かしい声が響いてきた。

(豪くん)

豪「この声… リーフ姉ちゃん？」

(ラン、しっかりしなさい)

ラン「ダイーダさん…」

(こんなところで諦めちゃダメだよ)

(叶えたい夢が、なりたいものがあるんでしよう)

豪「そ、そうだよ…!!」

ラン「私は…!!」

看護師「あつ、京香先生!! すぐ来てください、二人とも気がつき
ましたよ!!」

目を見開いた二人を見て、付き添っていた看護師が驚きの声をあげるとともに京香先生を大声で呼んだ。

京香「ふむ。気が付いたのはまずは良かったわ。とりあえず峠は越したようですし。あとは安静にしていれば大丈夫でしょう」

その京香先生の言葉にずっと付き添っていた豪の母親は嬉しさのあまり崩れ落ちた。

豪母「よ、良かった…」

遠藤「うむうむ。何はともあれ良かった良かった」

河内「まったく。犯人も必ず逮捕してやるからな」

見舞いに来ていた面々が口々に二人の無事を喜ぶ中、豪とランは酸素吸入機越しながら笑顔を見せた。

豪「へへっ、ありがとう。でもこんなことでくたばれねえよ、せっかく励ましてくれた姉ちゃんたちに申し訳ねえしな」

ラン「あら、あんたも？ 私もダイーダさんとリーフさんが励ましてくれる夢見たのよね」

そんな二人の言葉を聞いて、遠藤博士たちは顔を見合わせると微笑みあつた。

河内「はっはっはっ、夢か。とんだ夢を見たもんだなあ」

京香「そうね。あんまりいい夢じゃないですね」

リーフとダイーダのことをよく知っているはずのこの二人のそんな態度に、豪とランも多少不快そうな顔をした。

豪「なんだよそれは」

ラン「何がおかしいんです?」

しかし、その直後集中治療室に入って来た二人の少女を見て、豪とランは目を疑った。

豪「嘘… だろ…」

ラン「夢じゃ… ないの?」

リーフ「ふふっ、ほんとだよ」

ダイーダ「二人とも。安静にして、早く元気になりなさいね」

病室内からの嬉し泣きの声を聞きながら、力を使い果たし、廊下の椅子で横になったソーラは嬉しそうに微笑んだ。

ソーラ「さっすが先輩。よく慕われてるなあ」

そんなソーラに付き添いつつ、志夜刑事はどこか不満げな声で問いかけた。

志夜「いいんですか？　あなただって相当ひどい目にあっただのに、なんかほったらかしみたいで」

ソーラ「いいんですよ。私のは自業自得だし、何より豪くとランちゃんが元気になってくれればそれが一番です」

なんの不満も感じないような声でソーラが返すと、ようようにして朝日が昇り始めて来たらしく、窓から陽の光が差し込んで来た。

ソーラ「やれやれ、これでエネルギーも回復できるか。こうしてまた明るい明日を迎えられたのも、先輩やみなさんのおかげです。ありがとうございます」

ソーラの感謝の言葉に、志夜刑事もまた優しい笑みとともに感謝の言葉を返した。

志夜「そんなことないわ。あなたが昨日頑張ったからこそ、こうして今日を迎えられた。ありがとう」

続く

第33話 死を招くメロデー（前編）

遠藤平和科学研究所

リーフ「それじゃ、私と博士でランチちゃんの退院を迎えに行くね」
ダイーダ「頼むわねリーフ。私はこの留守番と掃除と洗濯をやっておくから、ソーラあなたは…」

ソーラ「はい、買い物に行ってきます。博士のご飯とランチちゃんの退院祝いですよ、このスーパーで安売りしてるレトルトカレーとか冷凍食品とか…」

先回りして自分のやることを言い当てたソーラに、リーフもダイーダもウンウンと頷いていた。

ダイーダ「そうそう。あなたもわかってるじゃない」

リーフ「いろいろここで勉強できたんだね。すごいよ」

ソーラ「いえ、まだまだですよ。もつともつと勉強しなくちゃ…」

目の前でかわされる三人の会話を聞いて、遠藤博士は切実な思いで呟いた。

遠藤「そうじゃな、是非ともインスタント以外の料理が簡単なものでいいからできるようになってほしい。いい加減飽きてきた」

ランと豪がDr.フライのけしかけた車にはねられて入院してから、早一ヶ月。

なんとかかかるとか経過は良好であり、豪は体力と打ち所の問題もあ

り先日退院し、本日ランも無事に退院を迎えることになっていた。

しかし、この研究所の家事を一手に担っていたランが入院してしまったため、家事はこの三人が分担してやっているのだが、お世辞にもまともにはできていたとは言い難かった。

遠藤「まあ、お主達プリキュアが三人揃ったことで連中のことをほとんど気にせんでもよくなったのはありがたいがな…」

この一ヶ月、何度かドラフターが出現しておりその度に三人で対処していた。

しかし、ソーラの戦闘力が大幅に増強したことに加え、リーフとダイダも揃った今の状況では苦戦らしい苦戦もすることなくあっさり浄化できるほどになっていた。

ソーラ「当たり前じゃないですか。先輩達が帰ってきたらこんなに頼りになる人たちはいませんよ」

リーフ「そんなことないよ。あなただってもう立派なプリキュアだよ」

ダイダ「プリキュアが三人揃えば、怖いものなんてないわ」

二人の言葉にソーラは満面の笑みを浮かべた。

ソーラ「はい、ありがとうございます。じゃ買い物行ってきまーす」

元気良く飛び出して行ったソーラを見て、リーフとダイダも満足げに笑みを浮かべた。

ダイダ「博士ありがとうございます。本来あの子の指導は私たち

がしなくちやいけなかつたのに」

リーフ「うん、また迷惑かけちゃったよね」

深々と頭を下げた二人に、遠藤博士も笑いながら返した。

遠藤「なーに気にするな。お主達にはこの世界を守ってもらつとるんじやからな、持ちつ持たれつじや。しかし…」

そこで真剣な顔になって尋ねた。

遠藤「本当にお主達にも心当たりがないのか？ 連中がどういう理由で世界を暗黒に染めようとしているのか？」

リーフ「…はい、私たちも言われて気がついたぐらいで」

ダイーダ「マイナスエネルギーの塊みたいな奴らだから、暗黒世界を好むのかと思ってたけど、確かにそれだけじゃないみたいで…」

遠藤「うーむ。フライのやつに問い詰めるというのも手じやが、他に何か手がかりがあればなあ」

ダイーダ「手がかりですか… 他の可能性といえば…」

リーフ「うん、あの子だよね…」

どこか暗い顔をした二人に遠藤博士は興味を持った。

遠藤「ん？ あてがあるのか？」

リーフ「はい、あの子ならたぶん…」

遠藤「あの子？ ああ…」

甲子市内 某スーパー

ソーラ「えーつと、インスタントラーメンに、インスタントお味噌汁にレトルトカレーに、カップうどんとカップそばと、冷凍コロツケと焼売と餃子と…」

ソーラは店内を物色することもなく、インスタント食品をかたづけしから買い物カゴに詰め込んでいた。

周りにはそんなソーラを見てヒソヒソと何かを話し合っていたが、そんなことは御構い無しに棚のほとんどのものをカゴに詰め込むとレジへと向かっていった。

ソーラ「これだけあれば色々博士やランチちゃんにもご飯を楽しんでもらえるよね。でも他に何かあればなあ…」

買い占めたインスタント食品を持ってきたエコバッグに詰めながらソーラも、何か他にできることはないかと考えていた。

「い〜しやく〜きいも〜 甘くておいしくいお芋だよ〜」

そんな折、スーパーの外から多少調子の狂ったスピーカーの音が聞こえてきた。

ソーラ「美味しいもの!? これだ!!」

いいものを見つけたと指を鳴らしたソーラは一直線に販売トラックに駆け寄った。

ソーラ「すみませーん。これください」
にこやかにそう告げたソーラの笑顔に、焼き芋売りも気分が良くなった。

「へい毎度。お嬢ちゃん可愛いからちよつとおまけだ。1,000円でいいよ」

その言葉にソーラも嬉しくなり満面の笑みを浮かべた。

ソーラ「わあ、ありがとうございます」

そうしてホクホク顔で気分良く帰路に着いたソーラだったが、その焼き芋売りに対する通行人の評価は散々だった。

「今時焼き芋なんてダサイよなあ」

「そうそう、それにあのスピーカーなんか調子が狂っててうるさいし」

「おまけに見ろよ。1,500円？ 高いにもほどがあるよ」

そんな通行人の陰口に対して、焼き芋売りはイラついていた。

「けっ、こちとら芋から厳選してるんだよ。名産地のいい芋を使ってるから高いんだ!!」

とはいうものの、今日は多少温かいのも相まって、朝からずっと売り歩いているにもかかわらず先ほどのソーラが初めての客だった。

そういう事情もあって、だんだんと不満が溜まってきていた。

そんな中、どこからか突然黒づくめの太った男が現れて焼き芋のト
ラックに近づいていった。

セーリ「俺も一つもらおうか。代金は貴重なこのクリスタルで支
払ってやる」

「い、いえ、け、結構です!! きよ今日はもう店じまいで!!」

本能的に危険を察したか、慌てふためいた焼き芋屋だったが

セーリ「遠慮するな。滅多にない貴重な経験もおまけに体験させて
やる」

そう嘯きながらセーリは手にしたダーククリスタルを焼き芋屋に
対して押し付けた。

セーリ「闇よ、解放しろ!!」

「うわああああ!!!」

一方、退院するランを迎えに車を飛ばしたりーフと遠藤博士だった
が、道路が大渋滞を起こしてしまい立ち往生していた。

リーフ「全然動かないね。何があったのかなあ?」

遠藤「フウむ。この先にある踏切で事故でもあったようじゃな。こ
りやしばらく動かんぞ」

タブレットで交通情報を調べた遠藤博士は、渋い顔で呟いた。

この大渋滞にドライバーは皆イライラし始めていたが、それだけで
はなかった。

「ただいま、踏切内で発生した事故によりダイヤが大幅に乱れており

ます。お急ぎのところお客様には大変ご迷惑をおかけ致します」

駅のホームでもお詫びのアナウンスが繰り返し流れていたが、それで皆が皆納得するわけもなかった。

「まったく、こっちや急いでるのによ」

「いつになったら次の電車が来るのよ、まったく」

ホームでイライラしている客を見て、アナウンスを行っていた駅員もイラつき始めていた。

「別に俺のせいじゃないってのに、どいつもこいつも勝手ばかり言いやがって」

実際、何度か客にいつになったら動くのかと当たり散らされるように怒鳴りつけられており、立场上強く物が言えなかったこともあって、かなり不満が溜まっていた。

そんな中、黒づくめのガリガリの男が音もなくその駅員の後ろに立った。

セーリ「気に食わんのなら、溜め込むことはない。もっと当たり散らしてみろ」

ニヤリと笑うと、セーリはダーククリスタルを駅員に対して押し付けた。

セーリ「闇よ、解放しろ!!」

「ぎゃああああ!!!」

遠藤「ふあくあ。しっかし全く動かんわ。ランのやつ待ちくたび

れとるじやろうなあ」

リーフ「そうですね。またランちゃんに怒られちゃいそう」

大アクビをしながらの遠藤博士の言葉にリーフもまた退屈そうな調子で返した。

そんな中、遠藤博士のタブレットが一発で目も冷めるような呼び出し音をけたたましく鳴らした。

遠藤「な、なんじやいきなり!? ん、これはマイナスエネルギー検知アプリか!!」

突然のことに一瞬慌てたものの、状況を理解した遠藤博士は真剣な顔になってリーフに即座に指示を飛ばした。

遠藤「リーフ、直ちに周辺を索敵しろ!! ドラフターじゃ!!」

リーフ「はい、ダイーダちゃんからも連絡が来ました。こつちに向かつてるそうです。ソーラにも連絡はしたと」

返事をするやいなや、リーフは車から飛び降りマルチハンドを換装した。

リーフ「チェンジハンド・タイプイエラー!!」

その掛け声とともに、リーフの両腕が小さなロケットが装備された黄色の腕に変わった。

リーフ「センサーアイ、発射!!」

そう叫ぶと、リーフは右腕を空にかざしセンサーアイを発射した。

イエローハンドに搭載されたセンサーアイには、半径10km四方の情報を詳細にリーフの電子頭脳に送り届ける機能がある。

リーフ「この先の駅です。すぐに行って来ます!!」

遠藤「うむ、頼んだぞ!!」

ビルの谷間をジャンプに次ぐジャンプで飛び跳ねていき、駅にたどり着いたリーフは巨大な拡声器とでもいうようなドラフターを発見した。

リーフ「あれか。周りの避難は完了してるみたいだけど…」

警察のパワードスーツ隊が周辺の避難誘導を迅速に行ったため、周囲には人っ子一人おらず静かなものだったが、リーフは疑念を深めた。

リーフ「どうということなんだろう。全く動きを見せていない…」

迂闊に近づかないように警戒していたリーフの元に、修復されたライナージェットが風を切って飛んでくる音が聞こえて来た。

ダイーダ「リーフ、状況は？」

ライナージェットをサーフボードのように操って飛来したダイーダが上空からリーフに状況を尋ねた。

リーフ「わかんないよ。攻撃どころかじつとしたまんまで…」

その言葉通り、雄叫び一つ上げることなく鎮座している拡声器ドラフターに、リーフもダイーダも薄ら寒さを感じ始めていた。

そんな折、二人の元にソーラからの通信が入った。

ソーラ『先輩、聞こえますか!!』

ダイーダ「ソーラ、あなたどこにいるの？ 早くこっちに…」

ダイーダの声を遮るかのようにソーラが焦ったように声を張り上げた。

ソーラ『それが、こっちにもドラフターが出現して、そっちに飛んで行っています』

ダイーダ「なんですって!？」

ダイーダが驚きの声をあげるとともに、背後からもう一体巨大なスピーカーとでもいうようなドラフターが出現した。

リーフ「まずい、挟み撃ちだ」

ソーラ「す、すみません。抑えきれなくて…」

スピーカードラフターの出現とともにソーラもまた現着したものの、二対のドラフターに挟み撃ちになってしまった。

ダイーダ「しっかりしなさい。あいつらがまだ何も仕掛けて来ないなら、一気に叩くまでよ」

その言葉に三人は力強く頷きあった。

リーフ・ダイーダ「「ゴー!!」」

リーフとダイーダはジャンプしてトンボを切ると、全身が光に包まれ、着地した時には姿が大きく変わっていた。

ショートカットだったリーフは、ポリウームのある濃いピンクの髪に変化し、着用している服も、ごく普通の服からフリルのついた赤を基調にしたドレスのようなものになっていた。

ダイーダのポニーテールは、一本から五本にまで増え、背中にかか

るかかからないかだったそれも、腰まで伸びて金色になっていた。

そしてリーフ同様のデザインの純白を基調にしたフリルのついたドレスを着用していた。

ソーラ「モードプリキュア、ウェイクアツプ!!」

ソーラもまた掛け声とともに頭の上でクロスさせた両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りするドレスのようなコスチュームに変身していた。

リリーフ「闇を吹き消す光の使者 キュア・リリーフ!!」

ダイダー「悪を蹴散らす光の使者 キュア・ダイダー!!」

ソーラー「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

リリーフ・ダイダー・ソーラー「ピンチ一発、大逆転! コズミツ
クプリキュア!!」

続く

第34話 死を招くメロデー（後編）

リリーフ・ダイダー・ソーラー「コピンチ一発、大逆転！ コズミツ
クプリキュア!!」

変身し名乗りを上げた三人だったが、それを待っていたかのように
二体のドラフターが音波のようなものを発し始めた。

リリーフ「何この音…」

ダイダー「なんとなく耳障りのする音ね…」

ソーラー「でも、それだけでどうってことないですよ。今のうちに
…」

クロムステイツクを構えて、ドラフターに飛びかかろうとしたソー
ラーだったが、突如として近くに止まっていた車が爆発した。

ソーラー「えっ?」

突然のことに驚いていると、続けて周辺のビルの窓ガラスが次々と
割れ始めガラスのかけらが降り注いで来た。

リリーフ「わわわっ!!」

ダイダー「くっ、これは超音波」

ダイダーの分析通り、二体のドラフターが発生した音波が共鳴しあ
い、強烈な破壊音波となっていた。

そしてその影響は二体のドラフターの中心にいた三人のプリキュ

アにも影響を及ぼし始めた。

リリーフ「うわああああ!!」

ダイダー「音波で体がバラバラになりそう…」

ソーラー「せ、先輩大丈夫で… ああっ!!」

強烈な破壊音波を全身に浴び、三人は全身が砕けそうな苦痛を味わっていた。

パーリ「くつくつくつ。いい様だな、コズミックプリキュア。死の子守唄の味はどうだ」

ソーラー「パ、パーリ…」

苦しみもだえている三人を見下すようにドラフターの上からパーリとセーリが下劣な笑いを投げかけて来た。

セーリ「なまじつか機械の体なんて持つてるもんだから、そういうことになるんだよ。そんなものに憑依した自分たちの判断ミスを呪いな」

それとともに、二体のドラフターの発する音波は一層激しくなっていく、三人は地獄の苦しみを味わい始めた。

リリーフ・ダイダー・ソーラー「あああっ!!!」

セーリ「ふふっ、もう一息だ。プリキュアは間も無く破壊される」

パーリ「最後のダーククリスタルを惜しみなく投入した甲斐があったな。あとはこいつらが究極成長するのを待つだけだ」

その言葉通り、二体のドラフターは少しずつ巨大になっていき、それと同時に発する音波も大きく、そして強力なものになっていき、ついに周辺のビルまでもが共鳴を起こして揺れ始めた。

ソーラー「えっ?」

リリーフ「この音…」

必死に耳を塞ぎ、音波攻撃に耐えていたところで、周辺から聞こえ出した異質な振動に三人は気がついた。

ダイダー「まさか!!」

そしてそれに気がつくと同時に、周囲のビルが轟音とともに倒壊し三人の上に瓦礫がガラガラと崩れ落ちて来た。

だが、その轟音により二体のドラフターによる音波攻撃は一部が吹き消され、崩れて来た瓦礫により音波が乱反射した結果、三人は気力を取り戻した。

セーリ・パーリ「しまった!!」

リリーフ「よし、チェンジハンド・タイプブルー!! エレキ光線発射!!」

チャンスと見たリリーフは両腕のマルチハンドを稲妻模様の走った青い腕に換装し、電撃光線を拡声器ドラフターに浴びせた。

ソーラー「こつちも!! クロムステイック・ブーメラン!!」

ソーラーもまた負けじと二本のステイックを柄の部分でくっつけて一本の棒のようになると、力を込めて光を纏わせてスピーカードラフターに向かって投げつけた。

電撃光線を浴びたことで拡声器ドラフターはショートしてしまい、

スピーカードラフターもまたボディを切り裂かれたことで、各々音波を発生させられなくなった。

ダイダー「今だ!! チェンジハンド・タイプグリーン!! 超高温プラズマ火炎、超低温冷凍ガス、同時発射!!」

右手から噴射したプラズマ火炎によってショートしていた拡声器ドラフターは炎上してしまい、左手からの冷凍ガスによりスピーカードラフターはボディを切り裂かれた状態で凍りついてしまった。

セーリ「くっ、こうなったら」

パーリ「ああ、やるしかない」

セーリとパーリは覚悟を決めたように頷きあうとボロボロになっていたドラフターにそれぞれ飛び込んでいき一体化した。

ソーラー「なっ、あいつら何を!」

驚くソーラーをよそに、さらに二人が一体化したドラフターは重なり合うように移動していくとともに合体し、全身から拡声器を生やしたより巨大なドラフターとなった。

リリーフ「合体した!? まずい!!」

リリーフの懸念通り、合体ドラフターは全身に生やした拡声器からより強力な破壊音波を今まさに発車しようとエネルギーを溜め始めた。

ダイダー「発射される前に一気に決めるしかないわ。リーフ、ソーラ、いくわよ!!」

ソーラ「はい!!」

リリーフ「よし、ライナージェット!!」

そのリリーフの呼び寄せの呼びかけに応えるように、ライナー
ジェットが降下してきた。

そしてゆっくりと降下してきたライナージェットを、リリーフとダ
イダーが両翼を肩に担いだ。

するとライナージェットの左右からトリガーのついた小さなグ
リップが飛び出すと同時に、機首が開き何かの発射口のようなものが
現れた。

リリーフ「ライナージェット、カノンモードスタンバイ!!」

ダイダー「ターゲットロック!! プラスエネルギーチャージ!!」

そしてソーラーもまたライナージェットを後方で支えると、リリー
フとダイダーがチャージを始めたプラスエネルギーに負けじと自身
のソーラーエネルギーをチャージし始めた。

ソーラー「ソーラーエネルギーフルチャージ!!」

セーリ「負けるかー!!」

パーリ「コズミックプリキュアー!!」

こちらも合体ドラフターの一部となりながらも凄まじい形相をそ
のボディに浮かび上がらせ、コズミックプリキュアを破壊せんとマイ
ナスエネルギーを充填し始めた。

そして双方のエネルギーがフルチャージを迎えた。

セーリ・パーリ「消えろー!!」

その叫びとともにどす黒いマイナスエネルギーの本流とでもいう
ような破壊音波が放たれたが、それと同時に三人も発射トリガーを引
いていた。

リリーフ・ダイダー・ソーラー「ゴプリキュア・シャイニング・グランドスラム!!!」

三人分のプラスエネルギーとソーラーエネルギーとを充填、圧縮・増幅した上でライナージェットから放たれた、辺り一面を光に染め上げるのではないかというほどの極太の強烈なビームは、同時に放たれた破壊音波をすべて打ち消しながら合体ドラフターへと向かって行った。

セーリ・パーリ「なにい!?!」

驚きの声を上げた時にはすでに遅く、発射されたビームは一体化していたセーリとパーリごと合体ドラフターを飲み込んだ。

セーリ・パーリ「ぎゃああああ!!!」

その攻撃を受けた合体ドラフターは一撃で消滅し、同時にドラフターにされていた人たちも完全に浄化完了していた。

リリーフ「ふうっ、やった」

ダイダー「ドラフター浄化完了っ。よくやったわソーラー」

ソーラー「はい!! 一件落着ですね。あいつらもこれでひとたまりもないですよ」

勝利した喜びを噛み締めると同時に、ふと三人は思い出した。

リリーフ「おっと、早くランチちゃんを迎えに行つてあげないと」

ソーラー「あつ、そうだった。美味しいって評判のもの見つけたんだった」

ダイダー「それはいいことだわ。ランや豪を傷つけたのは私たちみたいなものだし、せめてものお詫びと日頃のお礼をきちんとしましよ

う」

すっかり陽も沈み夜の帳が降りた街中で、ボロボロになった黒づくめの二人の男が体を引きずるようにして路地裏を歩いていった。

セーリ「く、くそ… コズミックプリキュアめ…」

パーリ「こんなところで終わらんとぞ。必ずこの世界を暗黒に染め上げて… ん?」

そんな二人の背後から静かに足音が聞こえてきたため、思わず振り返るとそこにいた存在に目を見開いた。

そこにいたのは、透けるような白い肌をしたプラチナブロンドのロングヘアの少女であり、それを見た二人は一気に頭に血が上った。

セーリ「てめえ、キュア・ソーラー… さつきはよくも…」

パーリ「だが、バカなやつめ。太陽も沈み、こんな場所では光線の補充もきくまい。しかも一人だけでくるとはな」

たとえばダメージを受けていても今ならば勝てると踏んだ二人は、先ほどのお返しとばかりに雄叫びをあげて突っ込んで行った。

そしてその少女はそんな二人を「赤と青のオッドアイ」で静かに睨みつけた。

遠藤平和科学研究所

リーフ「ランちゃん。退院おめでとう」

ダイーダ「大事にならなくて何よりだったわ」

まだ松葉杖は手放せない状態ではあるものの、久しぶりにこの二人のいる自宅に帰ってきたランは嬉しそうに微笑んだ。

ラン「心配かけちゃってごめんなさい。リーフさんもダイーダさんもありがとう」

遠藤「よし、準備ができたぞ。退院祝いのパーティじゃ」

台所から紅茶を持ってきた遠藤博士に続いて、嗅いだことのある甘い香りが漂ってきた。

ラン「ん？ この匂いは…」

遠藤「ははっ、ソーラのやつうまいものを見つけたと言っておったが、確かにこれはうまそうじゃ」

遠藤博士が微笑むとともに、ソーラが温め直した焼き芋を持って台所から出てきた。

ソーラ「はい。あつたかいうちに食べてね」

皿の上に山盛りにされた焼き芋を見て、ランは多少引きつったよう

な笑みを浮かべた。

ラン「あ、ありがとう、ソーラさん。すごく美味しそうだわ…」

「ルビーのように赤い両目」で悪気などなくニコニコと笑うソーラを見て、ランはむげに断ることもできずに、焼き芋にかぶりついた。

ラン「…甘くて美味しい」

そんなこんなで、研究所内には久方ぶりに明るい空気が戻っていた。

パーリ「グハア…」

セーリ「ゲボォ…」

惨殺という言葉がしつくりくるほどにズタズタにされ、地面に叩きつけられてしまったセーリとパーリはうめき声をあげていた。

自分たちを赤子の手をひねるかのように一方的に叩きのめした目の前の少女は、近くに山積みにされていた段ボールに腰掛け、二人に興味をなくしたかのように背負っていたハーブを弾き始めた。

パーリ「う、うああ…」

セーリ「ひ、ヒイ…」

その冷たいメロディーは死神の奏でるレクイエムのようにも聞こえたか、二人はそこ知れぬ恐怖を感じ、もはやプライドもなく地面を

這いずり、少しでも遠くに逃げようとしていた。

パーリ「し、死んでたまるか… 俺たちは世界を…」

セーリ「そ、そうだ… 暗黒に… あれ？」

パーリ「なんのために… だ…」

セーリ「そもそも… 俺たちは… 何… だ…」

しかし、二人の体はグズグズと崩れ落ち始めており、ついにはただの泥のようになって溶け落ちた。

「嘲笑する。己が何者かもわからんとはな、くだらん奴らだ」

そんな光景を何の感慨もないように横目でチラリと一瞥だけした少女は、静かにハープを奏で続けた。

「認識する。破壊ターゲット、キュア・ソーラー…」

続く

第35話 強く、気高く、恐ろしく（前編）

次元皇帝パーフェクトと名乗る連中が侵略に来て二年。

そして今なおドラフターが出現し、街を破壊するといった状況下にもかかわらず、人々はたくましく生きていた。

しかし、その生き方にも多種多様あり、真面目に生きている人間ばかりではない。

悲しいかなそれが人間の強さであり愚かさでもある。

甲子市内

「オラオラ、もっと手早く金をつめろってんだよ」

「変なことすんなよ。ぶつ殺されたくなかったらな」

とある銀行に覆面をした三人組の男が押し入り、銃やマシンガンで行員を脅していた。

「けっ、これで全部かよ。しけた銀行だ」

「まあいいさ、ずらかるぞ!!」

「いただいた金を使ったらまた来てやるよ。じゃあな!!」

そして挨拶がわりだともいうように、マシンガンを乱射してから立ち去って行った。

この三人組の銀行強盗は浮かれながら車を飛ばして逃走していた。

「いやっほーっ!! うまく行ったな」

「ああ、これで一年は遊んで暮らせるぜ!!」

「おい、もっと飛ばせ。面倒くさいのが来たぞ」

バックミラーを確認した運転手の言葉に、後部座席にいた二人も後ろをのぞいてみると、当然とでもいうかパトカーが何台もサイレンを鳴らして追跡して来ていた。

『その車、直ちに停車しなさい!! 繰り返す、その車…』

スピーカーでがなりたててくるパトカーにうるさそうに顔をしかめて銀行強盗は窓から身を乗り出してマシンガンを撃ち始めた。

「チツ、ウルセエんだよ」

「くたばりやがれ!!」

信号など知ったことかと逃走劇を続ける中、何軒か別の事故も発生していた。

そうして交差点に何度目かに差し掛かった時だった。

「ん? おら、どきやがれ!! 轢き殺すぞ!!」

一人の色白の少女が、周りのことなど御構い無しに、交差点を一人静かに渡ろうとしていた。

強盗の方も一切アクセルを緩めることなく交差点に突っ込んでいき、周りの通行人も含め誰もがその少女が跳ね飛ばされるであろうことを確信し、何人かは思わず目を覆ったて。

しかし直後、雷鳴のような轟音とともに車は急停止した。

「な、なんなんだよ!? 急に止まるな!!」

車が急停止し、後部座席から外に放り出されてしまった強盗は打ち付けた全身の痛みに悶えつつも運転手を罵ったが、目の前の光景に目を疑った。

自分たちの乗っていた車は間違いなく100キロ近い速度で走っていた。

しかし一人の少女がその車を片手で受け止めていたのだ。そうしている間にも車のアクセルはふかしたままであり、ギヤリギヤリと音を立てながら回転しているタイヤが、車が停止したわけではないことを雄弁に語っていた。

「な? な? なあ!」

あまりにも常識はずれな光景に強盗たちは泡食ってしまったが、ややあつて正気に戻ると持っていた銃を乱射した。

「こ、この化け物が!!」

しかし、その少女は受け止めていた車を軽々と放り投げてひっくり返すと同時に、右手を目の前で高速で動かした。

「へっ?」

狙いには自信のあつた強盗だが平然と立っているその少女に素つ頓狂な声をあげた。

「確認する。それで全弾撃ち尽くしたな」

その淡々とした言葉とともに開かれた右手からはバラバラと弾丸がこぼれ落ちてきた。

「ヒイツ!!」

目の前にいるものが自分たちの理解を超えた化け物であると判断した強盗たちは一目散に逃げようとしたが、ちょうどそこにパトカーが追いついてきたため全員御用となった。

もつとも

「お、おまわりさん!! 助けてくれ!!」

「あ、謝る!! 金は返す!! これからは真面目に働く!! なんでもする!! だから助けてくれ!!」

いつのまにか姿を消した得体の知れない少女への恐怖から、半ばパニック状態になっており、自分から捕まりに行つたと言つた方がしつくりきたが。

一時間後 遠藤平和科学研究所

居間の電話のベルが鳴り響く中、ダイーダが地下の研究室から駆け上がってきた。

ダイーダ「もしもしもしお待ちせしました。遠藤平和科学研究所です」

河内『おお、その声ダイーダか』

電話の向こうから聞こえてきた嬉しそうな声にダイーダもまた、嬉しそうに声をあげた。

ダイーダ「あつ、河内警部。どうしたんですか今日は」

河内『ああいやな。ソーラのやつにちよつと礼を言つときたくてな』

ダイーダ「ソーラに？ あの子が何か？」

河内『ああ、一時間ほど前に銀行強盗をとつ捕まえてくれてな。名前も名乗らず去って行つたっていうが、まあ彼女に間違いないだろうからな。銀髪に色白の髪の子で、ちよつと着崩してたがモデルが着るようなセンスのいい服着てたっていうんでな』

その河内警部の言葉にダイーダは首をかしげた。

ダイーダ「変ですね。ソーラなら今日はランの検診の付き合いで病院に行つてるんですけど」

河内『？ そりや確かに妙だな。事件現場は病院とは正反対のはずだしな』

ダイーダ「ただの人違いじゃないんですか？」

河内『いや。犯人たちが言うには色白で銀髪の中学生ぐらいの女の子だったそうだ。化け物みたいなパワーで車をひっくり返したり、弾を手づかみにしたとか言つててな。誰も信じちやいないが、まあそんな女の子なんて一人しかいないだろうと思つてな』

ダイーダ「まあそうかもしれませんな」

そんな会話をしていると居間に備え付けてあつたマイナスエネルギー検知器が尋常でないレベルの警報を鳴らした。

河内『な、なんだあ!?!』

その音は電話口の河内警部の耳にも伝わるレベルであり素っ頓狂な声をあげた。

リーフ「なにになにどうしたの？」

遠藤「何事じゃ!! このマイナスエネルギーは!!」

この強烈なマイナスエネルギーと先ほどの河内警部の話から、ダイダはあることを連想し青くなった。

ダイダ「!! ま、まさか… あの子が!! 警部すみません切ります」

リーフ「? どうしたのダイダちゃん？」

慌てて電話を切ったダイダにリーフはキョトンとして尋ねたが、ダイダの表情はいつになく真剣だった。

ダイダ「リーフ、急いで準備して!! すごく嫌な予感がする」

甲子市 市民病院

未だ松葉杖をついているランの定期検診に一緒に来たソーラだったが、検診を終え、病院から出たところでもたまたま同じように検診に來ている豪とその母親と鉢合わせしていた。

ソーラ「えーっと、こんにちは。私ソーラって言います。豪くんにはいつも…」

人懐っこい笑顔とともにお辞儀をしたソーラだったが、豪の母は険しい表情でそれを切って捨てた。

豪母「挨拶は結構です。もうウチの子と関わらないでください!!」
豪「なっ、母さ…」

絶句している豪をよそに、さらにまくしたてて言った。

豪母「成績が落ちるだけぐらいならまだしも、こんな大怪我して死にかけるなんて。これもそれもみんなあなたたちみたいなのと関わったからでしょ!! ランちゃんまでこんな目に合わせて… もう私達と関わらないでください!!」

豪「ちよつ、ちよつと!! 別に俺たちが怪我したのって姉ちゃんたちのせいじゃ…」

それだけ言い捨てるともうソーラと同じ空間に豪を置いておきたくないというように、必死に言い訳をしている豪を連れて病院へと入って行った。

豪の母親に言われたことが堪えたかソーラは病院を出たところで扉にもたれかかっとうなだれていた。

ラン「げ、元気出してよソーラさん。ソーラさんは何にも悪くないって私も豪もわかっているし、ああいう考えをする人もいるってことだけわかっておけば…」

ソーラ「…でもさ。あの時は他に助けられなかった人が大勢いることも確かだし。頑張ってきたうまくやれてたつもりだったけど、本当にもつりだったのかなあ…」

ラン「あゝ…（おじいちゃんならうまく言えるんだろうけど…）」

ずっとソーラのことをそばで見ってきたランには、彼女がどれだけ必死になって戦ってきたかよくわかっている。

しかし、自虐のスパイラルに陥りかけているソーラを説得するには、ランではまだまだ力不足であり何とも言えない沈黙があたりを支

その何者かは、透けるような白い肌をしたプラチナブロンドのロングヘアの少女であり、何より自分に瓜二つの姿をしていたからである。

ソーラ「わ、私そっくり… あ、あなたは…」

「…確認する。お前がキュア・ソーラーか。コズミックプリキュアもくだらんものを」

ソーラ「にやにやいゝ!!」

だが、そんなソーラを嘲笑うと、その少女は無表情ながらも小さくランに向かって微笑みかけた。

「久しぶりだなラン。こうして会合するのはこの世界の経過時間で1年と9ヶ月と16日ぶりか」

ラン「ゆ、ゆうさん… い、いつ帰って…」

「回答する。3日と9時間18分前だ。何者かがこの世界をよその次元と繋げた跡を辿って帰って見たが、データにあった町並みと随分様変わりしていたのでな。検索に時間がかかった」

ソーラ「ね、ねえ。この人ランちゃんの知り合い？ どうして私にそっくりなの？」

そのソーラの質問に、ランは青い顔で絞り出すように必死に説明を始めた。

ラン「こ、この人は四季ゆうさんって言って… お、お父さんの作ったロボットで…」

ソーラ「!! それって魔法つかいプリキュアが戦ったことがあるっ

て言ってた!!」

ゆう「肯定する。二人でなければ戦うこともできず、いざ戦っても相手にもならんやつらだったがな」

共に戦ったこともある魔法つかいプリキュアを、みらい達のことを吐き捨てるように悪し様に告げたゆうにソーラはカチンときた。

ソーラ「ふざけないで!! あなたに間違えられて私ひどい目にあつたかだからね!! いい迷惑だったんだから!!」

しかし熱くなつていくソーラとは対照的に、ゆうは冷めたようにそれでいて不満げに返した。

ゆう「否定する。私が貴様に似ているのではない。貴様が私を模して作られているだけだ」

ラン「ふ、二人とも落ち着いて!! ゆ、ゆうさんもソーラさんのお姉さんになるんだし… あのドラフターを作ってくるセーリやパリとかいうやつらもいるから」

ヒートアップしだした会話をなんとか落ち着かせようとしたランだったが、完全に逆効果になった。

ゆう「妹? 否定する。そんなものなど私を模しただけのガラクタ人形でしかない」

ソーラ「なっ!?!」

いきなりの侮辱の言葉に驚きカッツとなったような声をあげたソーラだが、ゆうはそれを無視してさらに続けた。

ゆう「それにあんな程度の連中なら既に私が処分した。そんなこともまともにできんとは、貴様程度など多様な世界にいた有象無象のプリキュアの一人でしかない。いや、ランや豪を傷つけた時点で貴様な

どそれ以下だ。薄汚い偽物が」

ソーラ「い、言いたい放題言って…」

ゆう「宣告する。私は一人でいい。消えろ、偽物」

その淡々とした宣告とともに、ゆうは一瞬で距離を詰めソーラを殴り飛ばした。

ソーラ「ガハツ、な、なにすんのよ!!」

突然のことに当然の声をあげたソーラだったが、ゆうもまた当然と言うように返した。

ゆう「回答する。私はプリキュアを破壊する死神である。貴様が曲がりなりにもプリキュアを名乗っているならば、それもまた破壊する理由になる」

ソーラ「ふざけたことを!! もう我慢できない、やってやろうじゃないの!!」

ゆうの態度に完全に頭にきたソーラは、両腕を頭の上でクロスさせた。

ソーラ「モードプリキュア、ウェイクアツプ!!」

掛け声とともに両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りのするドレスのようなコスチュームに変身していた。

ソーラー「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

ソーラーは変身と同時にステイックを両手に構えて突っ込んで行った。

ソーラー「クロムステイク!! ウオオオオリアア!!」
しかし、ゆうはそんな攻撃をあつさりいなし、ソーラーを地面にはたき込み、そのまま蹴り飛ばした。

ゆう「嘲笑する。やはり偽物、この程度か」

ソーラー「ば、バカにすんな!! 今のは準備運動よ!!」

激昂したソーラーを見て、ゆうもまた完全に戦闘態勢に入った。

ゆう「了解した。ならばこちらも対抗のため、武装の安全装置を解除する。偽物が、本物の強さを見せてやる」

淡々と告げると、ゆうは左手を親指・人差し指・中指の三本を立てて前に突き出した。

ゆう「チェインジ!!」

そう叫ぶと、突き出した左手の指を立てたまま、手の甲を内向きにして顔の前へと横向きに持って行き、人差し指と中指の間から赤い右目を光らせた。

ゆう「スイッチ・オン!!」

次の瞬間、黒い電流のようなものが火花をあげてゆうの全身を走り、一瞬ののちにその姿は変わっていた。

彼女の姿は、フリルのない落ち着いたデザインのロングスカートの黒一色のドレスとなっており、同じく黒一色の肘まである手袋とブーツを着用していた。

その黒さは抜けるような色の白い肌やプラチナブロンドのロングヘアと相まってより一層黒く、そしてどこか美しく光を放っていた。

死神という形容がしつくりくるその姿と、以前にも増しての強烈なプレッシャーにランもソーラーも気圧された。

ラン「あ… う… キュ、キュア・デッド…」

ソーラー「くっ、それがあんたの本気ってこと」

「肯定する。バトルスタイルコードネーム、キュア・デッド」

その静かな名乗りとともに左手に黒い霧のようなものを纏わせると、それを大鎌へと変化させ、冷たく宣告した。

デッド「破壊する。ターゲット、キュア・ソーラー」

続く

第36話 強く、気高く、恐ろしく（後編）

ソーラー「こ、このこの!!」

バカにされた憤りもあって、ソーラーは躍起になって飛びかかりステイツクを振り回したが、デッドは表情一つ崩すことなく小さく左右に揺れたり半歩下がったりしただけで、完全に攻撃をかわしていた。

デッド「質問する。本気でかかってくるのではなかったのか？」

ソーラー「くうっ!!」

まるで攻撃がかすりもしないことからの焦りか、ソーラーはさらにながむしやらに攻撃を仕掛けたが、それに伴って攻撃が単調かつ雑になり始めていた。

そして気合を込めて大振りをしようとした瞬間を見逃さず、デッドは一瞬で懐に入り込み膝蹴りを食らわせた。

ソーラー「ガハッ!!」

腹部にまともに攻撃を受けたソーラーはよろめいてしまった。

そこに続けざまにデッドが大鎌を棒術のように振るい、幾度となくソーラーを叩きのめした。

そしてある程度ダメージを与えると続けて回し蹴りが炸裂し、ソーラーは大きく吹き飛ばされた。

ソーラー「キャアアア!!」

悲鳴とともにビルの壁を突き破りながら吹き飛んで行ったソー

ラーを見て、デッドは見下したように呟いた。

デッド「唾棄する。その程度の実力でよくぞプリキュアを臆面なく名乗れるものだ」

ソーラー「く、くっそく…」

ビルの瓦礫を押しつけてなんとか這い出してきたソーラーは、その言葉を聞いて悔しそうに顔をしかめた。

ソーラー「こ、これでもくらえ!! クロムスティック・ブーメラン!!」

ソーラーはこのままでは終われないと二本のスティックを柄の部分でくっつけて一本の棒のようにして光の力を纏わせてデッドに投げつけた。

光輪となって飛んでいくスティックを見て、デッドのボディを切り裂くであろうことを期待したソーラーだったが、即座にその考えが甘かったことを思い知った。

デッド「貧弱な」

デッドは光輪と化したスティックを事も無げにキャッチし、あろうことか投げ返してきた。

ソーラー「ぎゃいん!!」

自分が投げた時よりもはるかに勢いを増して飛んできたスティックが脳天に突き刺さり、ソーラーは悲鳴とともにひっくり返った。

デッド「通達する。飛び道具はこのレベルのものだ」

そんなソーラーに対して、デッドは眉一つ動かさないまま右手を向

け指先から弾丸をマシンガンのように発射して攻撃した。

ソーラー「うあああつ…」

追撃を受けたことによるソーラーのダメージは大きく、自分を抱きかかえるようにして膝をついてしまった。

ソーラー「こ、こいつ… 強い… 言うだけのことはある…」

その小さな呟きが聞こえたか、デッドは回答をしてきた。

デッド「否定する。所詮偽物は偽物、お前が弱いだけだ。私の姉やいとこすらまともに守れなかったほどにな!!」

ソーラー「くうっ…」

ご丁寧に自分の呟きを否定してきたデッドに対して、さつき豪の母親に言われたことが頭によぎり、ソーラーは歯ぎしりをした。

ソーラー「く!! こんのく!!」

迷いを吹っ切るかのように拳を握りしめて突撃し、渾身の力を込めたパンチをデッドの顔面に炸裂させた。

が

ソーラー「え…?」

デッドは表情一つ歪めるどころか微動だにしていなかった。

ソーラー「あ… あ…」

愕然としたソーラーに対して、デッドは軽く拳を振り抜いてソーラーを大きく殴り飛ばした。

ソーラー「うあーっ!!」

勢いよく地面を転がっていき、ようやく止まったところでなんとか立ち上がったソーラーだったが、顔をあげた瞬間恐怖に凍りついた。

すでに眼前に迫っていたデッドが躊躇なく大鎌を振り下ろしてきたからである。

ソーラー「ギイヤアアア!!!」

とつさに多少なりとも後ろに下がったのか、寸断されることだけは免れたようだったが、確実に斬撃はソーラーのボディを切り裂いていた。

それを証明するかのように、切り口から火花とともに偽装用の人工血液が吹き出し、一瞬のうちに周辺に赤い水たまりを作っていた。

そして悲鳴をあげたソーラーをやかましいとばかりに、デッドはマシンガンもかくやと言うレベルで拳を連続で叩き込んだ。

ソーラー「ガハッ…」

そうして第ダメージとともに倒れこみかけたソーラーだったが、それすら許さないというようにデッドは顔面を鷲掴みにして持ち上げた。

ソーラー「うがあ…」

メキメキといった音がし始めた中ソーラーは必死にあがいたが、デッドの手はビクともせず、あろうことかそのまま思いつきり頭部を地面に叩きつけてきた。

ソーラー「がべっ…!!」

おかしな悲鳴をあげたソーラーに対して、デッドは冷たい目で見下した

デッド「唾棄する。雑魚が!!」

そう吐き捨てる時、もはや触つてすらいたくない汚いものだとも言おうようにソーラーを大きく投げ飛ばした。

ソーラー「ぐうあつ…」

一度も攻撃を当てることもできず、一方的にボロボロにされて投げ捨てられたソーラーだが、まだ最後の意地が残っていた。

ソーラー「ま、まだだ… こっちは… 切り札があるんだから…」
ヨタヨタながらもなんとか立ち上がると、最後の賭けと言わんばかりに残ったエネルギーを集中させた。

ソーラー「行くよ!! モードデイヴィジョン!!」

その掛け声とともにソーラーは立体映像投影装置を起動させ、髪の色が赤と青と黒になっている三体の分身を作り出した。

デッド「ほう。評価する。そんな機能は私にはないな」

ソーラー「くっ!! フルパワー!!」

何か言いたげに顔を歪めるも、四人になったソーラーはデッドに四方から組みつき、そのまま上空まで持ち上げていった。

ソーラー「タアツ!!」

そしてトンボを切って距離をとった次の瞬間、ソーラーの足は何かに掴まれた。

ソーラー「えっ?」

ギョツとして自分の足に目をやるとワイヤーにつながった左腕だけがそこにあった。

ソーラー「こいつ、左手を飛ばせ… うわっ!!」

驚いたのもつかの間、その左手はデツドの方に戻っていき、当然つかまれていたソーラーも引き寄せられた。

デツド「理解不能。ダメージも碌に与えていない相手に通用する技でもあるまいに」

バカにするように言い捨てるとソーラーの足を掴んだまま大きく一回転して、空中で見事なまでの一本背負いを決めて、勢いよく地面に向かって頭から叩きつけた。

直後轟音とともに砂煙がもうもうと巻き起こり、地面には底が見えないほどの深い穴ができていた。

その穴の底では手足が変な方向に折れ曲がり身動きすらできなくなつたソーラーがいた。

ソーラー「だ、だめ、ここで私が負けたら… ドラフターが… この世界があいつらに…」

デツド「否定する。その心配は無用だ」

うわごとのように眩き必死にあがいていたソーラーの言葉が聞こえたか、デッドはそれをバツサリ切り捨てると、容赦のかけらもなく左太もものミサイルを穴に向けて発射した。

直後、大地が震えると同時に発生した爆発音とともに巨大な火柱が穴から吹き上がり、何かがボロ雑巾のように上空に舞い上がった。

火柱が収まったのを見計らうように、デッドはなにもなかったかのように平然と着地すると、落下してきた「それ」を手にしていた大鎌で突き刺して受け止めた。

デッド「ん？ 熱源確認、来たな」

先ほどまでのソーラーとの戦いの中ではずっとつまらなさそうな仏頂面をしていたデッドだが、何かが風を切り裂いて飛んでくる音を聞いて嬉しそうに口角を上げた。

ランからの緊急電話のこともあり、ライナージェットで至急現地に駆けつけたリーフとダイーダだったが、現地で展開していた光景に絶句するしかなかった。

リーフ「!! ソーラ!! デッド、あなた一体何をしたの!？」

デッド「回答する。薄汚い偽物を処分しただけだ。これで当面の間邪魔はない、私と勝負しろコズミックプリキュア」

それだけ告げると、手足が今にももげ落ちそうになりボディやら首やらからバチバチと火花を噴き出し始めていたソーラのボディをなんの感慨もなく、大鎌にまわりつく汚いゴミのように放り捨てた。

ダイーダ「あなた： 相変わらずそれが目的ってこと」

デッド「肯定する。私は死神、コズミックプリキュアを破壊するためだけのものだ」

以前にも増して凄みを感じるキュア・デッドにもはや言葉は通じないと判断したリーフとダイーダは腹を括った。

しかもそれ以前の問題として自分たちの大切な後輩を傷つけたデッドを二人は許せなかった。

リーフ・ダイーダ「「ゴー!!」」

リーフとダイーダはジャンプしてトンボを切ると、全身が光に包まれ、着地した時には姿が大きく変わっていた。

ショートカットだったリーフは、ポリウムのある濃いピンクの髪に変化し、着用している服も、ごく普通の服からフリルのついた赤を基調にしたドレスのようなものになっていた。

ダイーダのポニーテールは、一本から五本にまで増え、背中にかかるとかかからないかだったそれも、腰まで伸びて金色になっていた。

そしてリーフ同様のデザインの純白を基調にしたフリルのついたドレスを着用していた。

リーフ「闇を吹き消す光の使者 キュア・リリーフ!!」

ダイーダ「悪を蹴散らす光の使者 キュア・ダイーダ!!」

リーフ・ダイーダ「ピンチ一発、大逆転！ コズミックプリキュア

!!」

変身した二人の姿を認めたデッドは、待ち望んでいた恋人にようやく会えたかのように嬉々としながら大鎌を振りかざして宣言した。

デッド「破壊する。最優先ターゲット、コスミックプリキュア」

遠藤平和科学研究所

先ほどの戦いの映像を指令室のモニターで確認していた遠藤博士だったが、ランからの連絡も含めデッドの言葉にふと疑問を感じていた。

遠藤「四季ゆう… 相変わらずの戦闘力… しかし、あやつがあのドラフターを生み出すやつを始末したというのは本当か？」

ラン『本当よ。ゆうさんが嘘つくわけないじゃない』

遠藤「いや、わしもあやつを疑つとるわけではないが、フライのやつがまだおるわけじゃし… それにどうも嫌な予感がする…」

どうにも拭えない不安を覚えつつも、今はそれどころではないとソーラ達を救うべく慌てて準備を始めた。

甲子市上空 静止衛星軌道上 ブルペノン

セーリもパーリも消えたことを確認した今、Dr. フライは一人上機嫌にシステムをいじっていた。

Dr. フライ「ひゃっはっはっはっ!! わしほどの男をないがしろにした報いじや。やはりわしこそが次元皇帝にふさわしいということの証左。どくれ、この円盤のシステムを解析するとするか。まずはそれからじゃな…」

そうしてシステムをチェックし続けることしばらく、ふと何かに気がついた。

Dr. フライ「ん? 妙なスペースがあるな。なにか嚴重なロックがかかっているが…」

それを調べようとした瞬間、どこからともなく声が響いて来た。

(触れるな… それに触れるな…)

Dr. フライ「な、なんじゃ!?!」

突如聞こえて来たドスの効いた声に思わず辺りを見回すも、そこには誰もいなかった。

Dr. フライ「で、出てこい!! わしを誰だと思っておるんじゃ!!」
その声から感じる得体の知れない不気味さを振り払うように叫んだDr. フライだったが、それに対する返事はなかった。

(消えろ… ここはお前の居場所ではない…)

D r. フライ「な、なに!？」

(ここは我が主人の世界… 消え失せろ!!)

その怒声とともに足元が抜けてD r. フライは声にならない悲鳴とともに外へと放り出された。

(…防衛端末からの定時連絡なし、消失したと判断する。 最終防衛システム起動…)

地上にてリリーフとダイダーがデッドとの戦いを開始しようとしている中、ブルペノンにおいて低い音とともに何かが起動し始めようとしていた。

続く

第37話 ライバル大激突（前編）

ソーラとゆうの戦いを止めようと、松葉杖を突きつつ必死に現場へと向かったランだったが全ては手遅れだった。

ソーラは四季 ゆうことキュア・デッドに完膚なきまでに叩きのめされ破壊されてしまった後だった。

ラン「ソーラさん!! しっかりして!! ソーラさん!!」

ランは必死に呼びかけるも、手足がもげ落ち完全に達磨状態になってしまっていたソーラは、機能停止寸前になってしまっておりなんとか絞り出すといったように答えた。

ソーラ「ラ…ランちゃ…ん… ご…ごべ…んね… 私… 何に…でき…くて… 怪…までぎ、て… 豪くん、ぼ、アヤバ…お、て…」

ラン「何いつてるの!! 私もちろん豪だつてそんなこと気にして無いわよ!! 変な遺言みたいなこと言わないで!!」

ソーラの意識を保たてようと必死になって呼びかけていると、けたたましいブレーキ音とともに一台の車が突っ込んできた。

遠藤「ラン!! ソーラは無事か!?!」

ラン「あっ、おじいちゃん!! 早く!! ソーラさんが今にも壊れちゃうから!!」

車から飛び降りてきた遠藤博士だったが、ソーラの惨状を見て言葉を失った。

遠藤「こ、こりゃひどい!! せめて応急修理だけでもせにや…」

遠藤博士が持ってきた工具箱から各種の道具を取り出し、ソーラの応急修理を始めたのを確認すると、ランは松葉杖のおぼつかない足取りで立ち上がった。

遠藤「ま、待て!! どこに行くつもりじゃ!？」

ラン「止めなきや… リーフさんとダイーダさんを… ゆうさんを… こんな戦いどっちが勝っても虚しいだけだもの!!」

そう言い放ったランの見据えた先には、ビルの屋上や壁を足場にして飛び交う三人のプリキュアの姿があった。

リリーフ「チェンジハンド・タイプブルー!! エレキ光線発射!!」

ビルの間を飛び交いながらリリーフは両腕のマルチハンドを稲妻模様の走った青い腕に換装し、電撃光線をデッドに向けて連射した。

だが、デッドもまた三次元的な動きを駆使した回避行動を取り見事なまでに避け切った。

リリーフ「くっ、さすが…」

敵ながらあっぱれと舌を巻いていると、デッドはエアークラフトの力を利用して猛スピードで大鎌を振りかざして突っ込んできた。

ダイダー「リーフ、危ない!! チェンジハンド・タイプレッド!!」

すかさずダイダーは両腕を一回り大きなゴツゴツした赤い腕に換

装し、その攻撃をなんとか受け止めに入った。

ダイダー「ぐ、ぐうっ…」

このレッドハンドは片手でも大型トラックを持ち上げるほどの怪力があり、全長十数メートルあるドラフターをも軽々と振り回せる。

だがそれほどのパワーのある腕を持つてしても、デッドの一撃はなんとか受け止められるというレベルのものであった。

デッド「賞賛する。さすがは私の叔母だ。数多の世界を回ったがやはり貴様達でなければ戦い甲斐がない」

嬉々としてそう告げると、デッドは罅迫り合いをしていたダイダーを蹴り飛ばした。

ダイダー「うあっ!!」

そうしてバランスを崩したところを目掛けて、デッドの右手のマシンガンが火を吹いた。

ダイダー「ぐうううっ!!」

とつさに防御こそしたものの、デッドのマシンガンは普通の人間が浴びれば一瞬で肉塊になるレベルの威力がある。

いかにダイダーといえどもただでは済まず、ダメージを受けて縮こまってしまった。

それを見たデッドは隙ありとばかりに再び飛びかかっていった。

リリーフ「ああっ!! させるもんか!! プリキュア・レインボー
ル!!」

ビルの屋上に着地したりリリーフは、ダイダーの危機にそうはさせじ

と虹色の玉を亜音速で投げつけた。

デッド「!!」

その虹色の玉の直撃を受けたデッドは大きく吹き飛ばされたものの、空中でくるくると回転して姿勢を立て直し、地上に難なく着地した。

リリーフ「ダイーダちゃん、大丈夫!？」

ダイダー「ありがとう、なんとかね。にしても…」

こちらもまた、なんとか着地して体勢を立て直したものの、いっばいいっばいに近かった。

ダイダー「あんたね!! こんなことしてなんの意味があるの!？」

自分たちと違って余裕綽々といったように大鎌を構えているデッドを見て、ダイダーは我慢の限界というように叫んだ。

デッド「愚問に回答する。私はプリキュアを破壊する死神。そしてお前たちがプリキュア。それ以上の意味も理由もない」

相も変わらない、よくいえば一本気 悪くいえば身も蓋もない答えに二人は悔しそうに顔を歪めた。

ダイダー「全く変わらないわね、そう言うところは…」

リリーフ「悔しいなあ… あんな立派な人たちがこの世界のために作ったものが、この世界の役に立たないなんて… もしもセーリやパリーたちドラフターと戦ってくれたら…」

デッド「肯定する」

二人のつぶやきにデッドは淡々と返事をした。

ダイダー「えっ？」

リリーフ「今なんて…」

デッド「再度回答する。あの端末ならば既に私が処分した」
リリーフ「なっ!？」

予想外の展開に驚きの声をあげたりリリーフだったが、ダイダーには今のセリフが引っかけなかった。

ダイダー「ま、待ちなさい!! あれが端末… あなた何か知ってるのね!!」

何かデッドは知っている。

そう判断して問い詰めようとしたが

デッド「肯定する。だがそんなことに意味はない。貴様らとの勝負の邪魔にならないようにしただけだ、行くぞ」

聞く耳持たないと言わんばかりにデッドは大鎌を振りかぶって飛びかかるようにした。

ラン「やめて、ゆうさん!! リーフさんもダイーダさんも!!」
そこに松葉杖をつきながらもなんとか駆けつけたランの、悲痛な叫びが響いた。

ダイダー「ラン？」

リリーフ「ダメだよ!! そんな体で出てきちゃ!!」

よたよたとしたおぼつかない足取りのランを見て、危険だというように二人は叫び

デッド「同意する。ランここを離れろ。お前をそれ以上戦いに巻き込みたくはない」

デッドもまた淡々とした口調ながらも、ソーラやリーフ、ダイーダに対する態度とは全く別人のように優しくランに対して避難を促した。

ラン「離れるもんですか!! 戦いをやめるって約束してくれなきゃテコでも動かないからね!!」

リーフ・ダイダー「:...」

固い決意の表情とともに言い放ったその言葉にリーフとダイダーは何も言えなくなり顔を見合わせ、デッドもまた攻撃をためらうことになった。

ひとまず止まった戦いを見てランは安堵したように小さく息を吐いたが

ラン「ふう... とりあえず止まったけど... これからどうしよう...」

一体これからどうしたものかと考えていたところ、急に空が暗くなってきた。

リーフ「何?..」

ダイダー「さっきまで晴れてたのに!?!」

突然のことに皆が戸惑う中、デッドは空を見上げつつ淡々と呟い

た。

デッド「…起動確認。もう少し時間に余裕があるかと思っただが」

ラン「えっ、ゆうさん何か知って…」

次の瞬間、空を覆わんばかりに巨大な円盤が上空に出現した。

ラン「な、何あれ？」

あんぐりと口を開けたランだったが、リリースとダイダーの表情は険しいものになっていった。

リリース「デッド、まさか!? あれが!!」

ダイダー「連中の本拠地…」

デッド「肯定する。連中の本拠地ブルペノンだ」

変わらぬ簡潔な答えだったが皆の疑問は膨れていった。

ダイダー「な、なんであんたそんなこと知ってるのよ!!」

デッド「回答する。私に取り付けられたマイナスエネルギーの波動を解析した結果だ。パーフェクトの一派を含めD r. フライに取り付けられたものの源流はあそこで作られたものだ」

リリース「D r. フライ!? 待って、セーリもパーリもあなたが破壊したって… じゃあ今あれを動かしているのは!!」

デッドが嘘を口にするような存在でないことは、皆知っている。ならばあの円盤を操縦している存在がなんなのかも簡単に予測がついた。

ラン「あいつ、全く進歩してないのね。何が天才科学者よ!!」
そうして吐き捨てたところに怒声が響いてきた。

D r・フライ「黙らんか!! ケツの青いガキンチョが、わしを誰だと思っておるか!!」

その聞き覚えのある台詞回しの怒声にみんなして思わず振り返ると、そこにいたのは案の定だった。

ダイダー「D r・フライ!! そんなボロボロでのこのこ出てくるとはいい度胸ね」

リリーフ「あんなので一体何をするつもりなの!?!」

怒りの表情で詰め寄ったりリリーフとダイダーだが、傷だらけでやっとな立っているといった様子のD r・フライもまた、負けず劣らずの怒りの声で言い放った。

D r・フライ「それはこつちが聞きたいわ!! 何者かは知らんがわしを成層圏から放り捨ておって!! 不死身のこのわしじゃからこそ、こうして生きておるといふのに!!」

リリーフ「えっ…?」

ラン「あれ、あんたじゃない…の…」

ダイダー「じゃあ一体誰が…」

皆がキョトンとする中、上空からドスの効いた声が響いてきた。

(闇を… もつと闇を…)

リリーフ「!! 誰!?!」

D r・フライ「ヌウツ!? この声は!!」

(光… プリキュア… 闇を払うもの… 我が主人の天敵… 抹消する)

その宣告とともに、円盤の下部からはボロボロとミサイルが降り注いできた。

ラン「えっ?」

ダイダー「いけない!!」

突然の物騒な言葉とともに投下されてきたミサイルに皆は一瞬反応が遅れ、特に走り出すことのできないランは完全に逃げ遅れてしまった。

だが、

リリーフ「うわっ!!」

ダイダー「デッド!?!」

ミサイルが着弾するより早く、デッドの右手のマシンガンが火を吹き全弾暴発させた。

ラン「ゆ、ゆうさん…」

デッド「ラン、再度警告する。直ちにここを離脱せよ」

それだけ言いおくとデッドは上空の円盤を睨みつけた。

デッド「警告する。プリキュアを破壊するのは私の使命だ。邪魔をするならば容赦はせん!!」

そう宣告するとデッドは大鎌を携えて飛び上がり投下されてきたミサイルを片っ端から切り刻んで突撃していった。

リリーフ「ああっ!!　ダイーダちゃん!!」
ダイダー「ええ!!　ライナージエーツト!!」

それを見たりリーフとダイダーも放っては置けないと、ライナー
ジエーツトを召喚してブルペノンに立ち向かっていった。

続く

第38話 ライバル大激突（後編）

（抹消… 光…）

だがそんな彼女たちを邪魔だというようにブルペノンからは雨あられとミサイルが投下され続けてきた。

ダイダー「くっ、かわしきれない!!」

ライナージェットは右左の機敏な動きができず、どうしても直線的な飛行になってしまう。

ひっきりなしに飛んでくるミサイルをかわして近づくのは困難であり、少しずつではあるが追い詰められていていた。

おまけにそのミサイルを無下に見過ごせば地上に影響が出るのは目に見えていた。

リリーフ「ミサイルを撃ち漏らしたら… チェンジハンド・タイプブルー!! エレキ光線発射!!」

そのためそちらの方にも対処せざるを得ず、完全に膠着状態になっていた。

そして、単身戦っていたデッドもまた

デッド「!!! 活動時間限界、強制スリープまであと30秒…」

デッドにはAIの最適化機能として、一定量の活動をするると3時間ほど強制的にスリープ状態に陥ってしまうようにセットされている。

これが彼女の数少ない弱点であり、なかなか決着をつけられない要

因ではあるのだが、ここに至っては最悪の事態でもあった。

自分の行動が間もなく停止すると判断したデッドは戦線を離脱しようとしたが、ミサイルの雨にそれを阻まれてしまった。

結果、空中で動きの止まってしまったデッドはミサイルの直撃をくらひ地面に叩き落とされた。

ラン「ゆ、ゆうさん!! しっかり!!」

目の前に落下してきたデッドに必死に声かけを行なっているランを見て、思わずリリーフは叫んだ。

リリーフ「ランちゃん危ない!! 早く逃げて!!」

ダイダー「いけない!! こっちも!!」

リリーフ「えっ、ああっ!!」

驚きの声をあげたのもつかの間、戦力が減ったことによりこう着状態は一気に崩れたこともあり、リリーフとダイダーの操るライナージェットにもミサイルが直撃した。

リリーフ・ダイダー「きゃあああ!!」

結果、きりもみ状態で地面に向かって突っ込んでいき、大爆発を起こした。

当面の脅威であるプリキュアを排除したと判断したか、ブルペノンは辺り一面に向かってどす黒い弾を発射し始めた。

その弾の着弾とともに街は闇に包まれて消滅していき、昼間だというにもかかわらず、一寸先も見えないような闇が一面を覆い尽くし始めた。

ラン「こ、これって…」

Dr. フライ「暗黒世界の招来か… じゃが…」

プリキュアが破れ、周りが闇に覆われていく光景を見て唾然としていたランたちだったが、そこに向かってどす黒い弾の一つが飛んできた。

ラン「えっ？ あっ!!」

逃げ損ね思わず目をつぶってしまったランだったが、そこに極太のビームが飛んできて弾を消しとばした。

遠藤「ラン!! 無事か!？」

ソーラ「先輩はどうしたの!？」

ラン「おじいちゃん!! ソーラさんも!!」

なんとか動くぐらいは可能になったソーラを乗せ、プラスエネルギー砲を携えた遠藤博士の車が突っ込んできたのを見て、Dr. フライは驚愕の声をあげた。

Dr. フライ「ヌアっ!! 遠藤!!」

遠藤「フライ!! 貴様どうしてここに!!」

仇敵ともいうべき相手が目の前に突然現れたことに、遠藤博士もDr. フライもお互いに睨み合いになってしまった。

ラン「そんなのいいから!! リーフさんとダイーダさんを!! ゆうさんを!! ほらあんたもよ!!」

一触即発の空気の中、ランがDr. フライを松葉杖で小突きつつ必死の思いで叫んだ。

Dr. フライ「な、何!？」

遠藤「お、おい待たんかラン。其奴は…」

ラン「私は医者になるのよ!! こんなんでも怪我人をほっとけな

いわ!! それに人手も足りないだし、つべこべ言うな!!」

その迫力には勝てず、Dr. フライを始め、スリープ状態になったゆうと遠方でボロボロになっていたリーフとダイーダを拾いあげた遠藤博士は、ブルペノンの無差別攻撃をなんとかかんとかわわしにかわして研究所まで引き上げていった。

速田家

突如発生したこの異常事態に市内はもちろん、日本中がパニックになっっており情報が錯綜していた。

節子『突撃レポーターの甲斐節子です。この事態を皆様はどうお考えでしょう? 突如出現した謎のUFO。ここ数ヶ月に渡る怪物の侵攻はあの宇宙人の侵略の先兵だったのでしょうか? 頼みの綱のプリキュアも敗れてしまったらしい今、我々はどうなってしまおうのでしょうか?』

豪母「さっ、急いで避難するわよ。少しでも遠くに逃げないと…」
そんな中、真剣な顔でじつと放送を聞いていた豪は母親のそんな促しも聞かずに腕を釣っていた包帯を解くときっぱりと言いつつ放った。

豪「じいちゃんとか行ってくる。姉ちゃんたちのことも心配だし、なんか手伝えることがあるだろうから」

そんな豪を母は慌てて捕まえて言い聞かせるように叱りつけた。

豪母「バカなこと言わないの!! あんな危ないことはやりたくない人

だけが勝手にしてればいいの!! 子供のあなたがしていいことじゃありません!!」

事実として一度死にかけたこともあり母が自分のことを心配してくれているのは嫌という程わかる。

だが、先の戦いを経て今回の戦いの中多くの経験を積んできた豪も譲る気はなかった。

豪「子供だからやんなくつていいってなんだよ。じゃあ母さんは大人だから何やってんだよ。何でもかんでも人任せにしてそれでいいわけねえじゃん!! 大事な人が一生懸命やってんのに、何にもしないでいるのが大人だったらそんな糞食らえだ!!」

豪母「ご、豪…」

豪「それに俺は将来刑事になるんだ!! 自分のことしか考えない奴が警官なんてなれるわけねえよ!!」

それだけ言うとうぐうの音も出なくなつた母親を置いて、豪は研究所へと駆け出して行つた。

遠藤平和科学研究所

遠藤「ふうふう… とりあえずは一息つけるが…」

なんとかかかんとか研究所まで逃げ帰ってきた一同だったが、状況は最悪と言つてもよかつた。

デッドに破壊されたソーラはもちろんのこと、リーフとダイーダの

ボデイも爆発に巻き込まれて半壊状態になっており、当のデッドこと四季ゆうもまたボデイの一部がショートして自己修復を兼ねたスリープ状態になっていたからである。

リーフ「く、くく…」

ダイーダ「やってくれるわね… あいつ…」

ソーラ「でも、何とかしないと…」

かろうじてと言った感じで何とか動いている三人だったが、窓から見える光景に悔しそうに顔を歪めた。

邪魔者のいなくなったブルペノンが我が物顔で上空を闊歩し、無差別にどす黒い光弾を発射していたからである。

それに伴い街は闇に飲み込まれ消滅し続けていた。

無論、何とか対抗せんと自衛隊の戦闘機も飛び交っていたが、攻撃以前にブルペノンから放たれるミサイルに次々と撃墜されていた。

今まさに世界は暗黒に飲み込まれようとしていた。

豪「じいちゃん!! 姉ちゃんたちは!」

そんな重い空気の中、豪が研究所に勢いよく駆け込んできた。

ラン「豪!? あんた大丈夫なの!? おばさんは?」

豪「へっ、こんな怪我ぐらいでヘコタレてられるかって!! それよりどうなの!」

リーフ「ごめん… 私たち負けちゃってね…」

ソーラ「すみません… 私がゆうって人に負けなかったら…」

その名前を聞いた豪はギョツとした。

豪「いつ!? ゆう姉ちゃん帰ってきたの!? い、今どこに…」
ダイーダ「地下室でスリープ状態よ… もっともあいつもあの円盤に結構派手にやられてたけど…」

それを聞いて最悪の事態だけは何とか避けられそうだとホッと胸をなでおろした豪だったが、直後に街の方から聞こえてきた爆発音と振動にひっくり返った。

慌てて研究所から飛び出した一同の目には、ブルペノンによって全滅したらしい自衛隊の戦闘機と瓦礫と化した街並み。

そして闇に覆われていく世界そのものだった。

豪「や、やべえぜこれ…」

ソーラ「早く… 何とかしないと… 博士、修理を急いでください!!」

リーフ「一刻も早く、あれを何とかしないと…」

ダイーダ「世界そのものが…」

三人に懇願された遠藤博士は真剣な顔でじっと考えていたが、ややあつて口を開いた。

遠藤「…ダメじゃ。修理はできん」

豪「な、何で!?!」

ラン「そ、そんなに壊れちゃってるの!?!」

予想外の言葉に慌てふためいている皆をなだめるように遠藤博士は静かに答えた。

遠藤「そういうわけではない。だが、修理をしたとしてお主達はど

うする気じゃ？」

リーフ「ど、どうって…」

ダイーダ「そりゃ、あいつと戦いに…」

ソーラ「私だつて行くよ、あれを止めないと…」

遠藤「そういうと思った。だから修理できん」

豪「どうしてだよじいちゃん!!」

リーフ「何でそんな…」

遠藤「はつきり言つて、今の状態では全くもって勝算がない。敵の正体も皆目わからんし、当然にして戦力の計算もできん。立ち向かったところでやられる可能性が極めて大きい」

ラン「だからって諦めていいわけじゃない!! いつもいつも絶対に諦めないって言つてた元気はどうしたのよ!!」

ダイーダ「確かにそうかもしれないませんが、博士らしくありません!! 一体どうしたんです!? 前の時は最後まで諦めなかつたじゃありませんか!!」

遠藤「あの時とは状況が違う!! 今戦いに行くのは無謀以外何者でもない!!」

ソーラ「でもだからって… いくら無謀だからって、私たちは覚悟はできてます!!」

遠藤「だからじゃ!! 豪やランも一度は死にかけた。そして今またお主達を死ぬかもしれん状況には送り込みたくない。普段世界平和を口にしておきながらエゴだと笑わば笑え。じゃがわしの本心でもある」

その言葉に皆は遠藤博士の気持ちが届くほどにわかり何も言えなくなつてしまった。

D r. フライ「だったらわしが修理してやるわ」

その言葉に皆ギョツとして振り返ると、そこには全身に包帯を巻きつけたD r. フライがいた。

豪「D r. フライ!? 何でここに!? それよりどういうつもりだよそれ!!」

D r. フライ「ふん。何やかんやでその嬢ちゃんに助けられたかな。受けた借りはきちんと返すまで。特別サービス、タダでやってるわい」

その言葉にソーラ達は顔を見合わせたものの力強く頷いた。

ダイーダ「この際仕方ないわ」

リーフ「修理してもらえるならね」

ソーラ「お願いします」

その言葉とともにD r. フライの元に三人が行こうとしたところ、当然のように遠藤博士が割って入った。

遠藤「待て待て待て!! フライ、貴様何を考えとる!!」

D r. フライ「何とはどういうことじゃ? わしは其奴らが修理してほしいというから望み通りにしてやろうというだけじゃ」

遠藤「なくにをいけしやあしやあと!! おのれがそんな殊勝な人間か!? え!?!」

D r. フライ「ヒヤヒヤヒヤ、バレたら仕方ない。わしは受けた借りは必ず返すタチでな。あのU F Oにいる奴がどんなやつかは知ら

んが、このわしをぞんざいに扱ったことだけは確か。じゃからこそ目にもを見せてやりたいだけじゃ」

遠藤「黙れ!! それだけではなからう、そうしてこいつらがあのUFOと相打ちになれば万々歳というところか」

さすがというべきか、D r. フライの思考を読みきったように遠藤博士が怒鳴りつけると、当の本人は全く悪びれず返した。

D r. フライ「ほう、よくわかった… いや、さすがにそれぐらいはわかるか」

豪「お前ってやつは!!」

ラン「どこまで性根が腐ってるのよ!!」

この二人も怒りの目で睨みつけたが、そんなものなど屁とも思わずD r. フライは続けた。

D r. フライ「わしが何か変なことを言っておるか？ 其奴らは戦いたいから直してほしい。わしは其奴らとUFOが戦って相打ちにでもなつてほしい。利害が完全に一致しとるだけじゃろうが」

遠藤「ふざけたことをぬかすな!! 自分に都合よくこいつらを利用しようとするだけじゃろうが!! この極悪人のエゴイストが!!」

ついに我慢の限界に達したか、D r. フライの胸ぐらを掴みあげて怒鳴りつけた遠藤博士だったが、D r. フライもまた負けじと低い声で言い返した。

D r. フライ「その言葉、そっくり返すぞ」

遠藤「何い!?!」

D r. フライ「貴様とてプリキュアと一緒にいたのはこの世界を守るとかいうくだらん理想がこいつらの利害と一致したからじゃろう

が!! それに今自分のくだらんエゴで、こやつらの意思を無視しているのはどこのどいつじゃ、え!!」

遠藤「くく!!!」

そのセリフに反論の言葉に詰まったか、遠藤博士は苦悶の表情とともにギリギリと歯ぎしりをした。

そしてややあって、D r. フライを突き飛ばすようにして開放するとビシツと指差して叫んだ。

遠藤「ええい、貴様がこいつらを修理するならば勝手にせい!!」

豪「えっ!? ちょっとじいちゃん…」

遠藤「ただし、妙な改造や装置でも組み込まれたらかなわん!! だからわしがメインで修理しておのれが手伝いじゃ!! そもそも貴様だけでまともな修理ができるわけではないからな!!」

D r. フライ「なめるなよ!! わしを誰だと思っておるか!!」

憎まれ口をたたき合いながらも、三人のプリキュアの修理の準備をすべく遠藤博士とD r. フライは地下の研究室へと向かって行った。

ラン「なんか変な感じね。おじいちゃんとD r. フライと一緒にいるなんて」

豪「それも一緒になって姉ちゃん達を修理しようってんだぜ。妙な光景だよなあ…」

そんな二人の後ろ姿を見送ったランと豪は、想像したこともなかった光景に違和感を感じていた。

リーフ「そんなことないよ… あの二人、初めは友達だったんでしょ…」

ダイーダ「変な感じなのは私もだけどね。これも絆で繋がっていかくってことじゃないかしら…」

ソーラ「絆…か。あの人先輩たちと戦った人なんですよね。私もひどい目に遭わされたし、やっぱり複雑」

ソーラが思いつめたような表情でぼつりと呟いた。

豪「だよね… 俺だってそうだけ。前ん時散々やりたい放題やったんだし」

ラン「今回だつてこの怪我あいつのせいだし… 助けといてなんだけど、ちよつとねえ…」

ソーラ「でも、もしかしたら… 今戦ってる人とも分かり合えるのかもしれないな… そうなったら、戦わなくて済むし…」

そんな会話をしていると、スリープから回復したらしいゆうが淡々とした口調で割り込んできた。

ゆう「嘲笑する。所詮は偽物、勝算がないと見ての懐柔策に出るとはな」

豪「げげっ!! ゆう姉ちゃん!?!」

驚きの声を上げた豪とは対照的にソーラはムツとしたように返した。

ソーラ「そんなんじゃないよ!! 戦う理由がないのに、戦わなくてもいいじゃない!!」

ゆう「否定する。今現在侵攻してきている存在に対して、戦闘以外の選択肢はない」

ソーラ「そんなことない!! きちんと話し合う機会さえあれば…」
そこまで叫んだ瞬間、ソーラはゆうに殴り飛ばされた。

ソーラ「な、何よいきなり!?!」

当然のように抗議をしたソーラだが、ゆうはそんなことなど御構い無しに無表情に殴り続けた。

豪「ちよつ、姉ちゃんストップ!!」

ラン「やめてゆうさん!!」

ダイーダ「くつ、なんなのよ一体!?!」

リーフ「やめて、ゆう!!」

皆が必死に割って入ったことでなんとか距離を取れたソーラは、怒りに満ちた目でゆうを睨みつけた。

ソーラ「なんだか知らないけど、そっちがその気なら!!」

そうして頭上で両腕を交差させた瞬間、ゆうが無表情ながら嘲笑うように告げた。

ゆう「確認する。一方的に侵攻してくる相手にも機会があれば対話するのではなかったのか?」

ソーラ「!!!」

その言葉に何も言い返せなくなったソーラはがつくりとうなだれた。

ゆう「通達する。所詮貴様の言い分などは現実を見ていない妄言ではない。戦う力がないという事実から目をそらしているだけのな。そうでもなくとも奴に話し合おうという意味など初めからない」

リーフ「うゝ…」

ダイーダ「確かにそうかもしれないけど…」

ゆうの言い分も極論ではあるが正論である。

事実、以前の敵パーフェクトとも最後には力任せに戦う道を選んできてしまっていた以上、この二人も反論の言葉がなかなか出てこなかった。

ソーラ「…確かに私は弱いよ。でも、誰もかれもが強いわけじゃないでしょ!!」

ゆう「何!?!」

ソーラ「ドラフターにされてた人たちだって、みんな弱いところがあつたからあいつらに利用された。でも、それを乗り越えて強くなつていった人たちだっていっぱいいた!! そんな風に一生懸命な人たちを私は守りたい!! そのためなら、戦つて勝つことだけが全部じゃない!!」

ダイーダ「ソーラ…」

リーフ「立派になったよね…」

その堂々たるソーラの言葉に、ゆうもややあつて口を開いた。

ゆう「…了承した。私にも死なせたくない姉やいとこや祖父がいる。まがい物、貴様の言い分を証明してみせろ」

ソーラ「よくし、見てろよく!!」

そうして気合が入ったところで、遠藤博士とDr.フライが修理の準備が整ったと告げにきたため、ゴズミックプリキュア三人を始め豪とランも手伝いをすべく地下の研究室へと向かっていった。

そんな皆を見送ったゆうは静かに口にした。

ゆう「…だが、奴も全力で生きようとしているものを守ろうとしているだけ。説得が通じる相手ではあるまいが、な」

続く

最終話 闇の滅ぶ日

節子「世界一命知らずな突撃レポーターの甲斐節子です。謎のUFOの前に町が闇に覆われていくという危機の中、私は最後の瞬間までこの状況をレポートしようと思います。この世界が闇に消えるのもはや時間の問題かもしれません。しかし、最後の瞬間までみなさんが諦めないことを祈りつつ、私はレポートを続けさせていただきます!!」

このレポート通り、刻一刻と闇に覆い尽くされていく空により、昼過ぎだというのに一面はほとんど一寸先も見えない状況であった。

あちこちにあつたネオンや街灯はブルペノンの発射したミサイルによつてことごとくが破壊し尽くされており、かろうじて残ったわずかな明かりがぼんやりと光っているだけであった。

闇に覆われた世界では、木々や草花も次々と力を使い果たしたように枯れていき、虫や小動物も耐えられないというように力尽きていった。

市民は皆避難し街中には人一人姿が見えていなかったことと相まって、まさに世界の終末という空気が漂っていた。

絶え間なくブルペノンの放つミサイルやどす黒い弾によつて、物理的超常的な現象的にも街が消滅していく中、同じく報道に命を賭けて： いや捨ててるようなカメラマンとともに、節子がまともに聞いているかどうか怪しいレポートを続けていた。

そして案の定そんな彼女達に向かって無差別乱射によつて放たれたミサイルの流れ弾が飛んでいった。

節子「ああつ!! くっ!! (ここまでか… しかしレポーター冥利につきる終わり方)」

もはや回避不可能と判断したか覚悟を決めた節子だが、決して逃げることも伏せることもしようとせず毅然とした態度を崩さなかった。

するとどこからともなく飛んできた電撃と火炎が直撃し、どす黒い弾は爆発とともに対消滅した。

リーフ「大丈夫ですか!？」

ダイーダ「危険ですからあなたも早く避難を!!」

到着したこの二人の有無を言わせぬ迫力に押し負けたか、節子とカメラマンは現場を離れていった。

もつとも

節子「皆様、コズミックプリキユアが来てくれました。あの凜とした姿、まさしく人類最後の希望!! 私も及ばずながら全力で応援したいと思います」

少しばかり距離をとっただけであり、変わらぬレポートを続けるところはさすがであった。

ソーラ「やっぱりすごいな… こんな状況でも諦めずにいるなんて…」

どうにかボデイの修復が終わり、エネルギーの方も太陽スペクトル光線砲によりなんとか戦闘可能状態にまで回復したソーラがそんな節子を見て呟いた。

ダイーダ「ええ、ここで終わっていい世界じゃないわね」

リーフ「でもこっちも万全じゃない。一気に突っ込んでいくのかな

い… ソーラ行ける!？」

その問いかけにソーラは力強く頷いた。

ソーラ「はい!! そのためにエネルギーを温存してここまで来たんですから!!」

ダイーダ「上等!! いくわよ!!」

その言葉に三人は力強く頷きあつた。

リーフ・ダイーダ「ゴォ!!」

リーフとダイーダはジャンプしてトンボを切ると、全身が光に包まれ、着地した時には姿が大きく変わっていた。

ショートカットだったリーフは、ポリウムのある濃いピンクの髪に変化し、着用している服も、ごく普通の服からフリルのついた赤を基調にしたドレスのようなものになっていた。

ダイーダのポニーテールは、一本から五本にまで増え、背中にかかるとかかからないかだったそれも、腰まで伸びて金色になっていた。

そしてリーフ同様のデザインの純白を基調にしたフリルのついたドレスを着用していた。

ソーラ「モードプリキュア、ウェイクアツプ!!」

ソーラもまた掛け声とともに頭の上でクロスさせた両腕を大きく開くとソーラの全身は万華鏡のような幻想的な光のオーロラに包まれていった。

その光のオーロラを身にまとうかのようにすると、彼女は深緑のフリルのついた黒光りするドレスのようなコスチュームに変身していた。

リリーフ 「闇を吹き消す光の使者 キュア・リリーフ!!」
ダイダー 「悪を蹴散らす光の使者 キュア・ダイダー!!」
ソーラー 「光り輝く太陽のかけら キュア・ソーラー!!」

リリーフ・ダイダー・ソーラー 「ピンチ一発、大逆転！ コズミックプリキュア!!」

その変身の光を敏感に察知したか、無差別に攻撃をしていたブルペノンはプリキュアに狙いを定めた。

(消えろ、光!!)

そのドスの効いた言葉とともにコズミックプリキュア目掛けて、ミサイルやどす黒い弾が雨霰と発射されて来た。

リリーフ 「くっ!!」

ダイダー 「負けるか!!」

見事なフットワークでその砲撃をかわした三人だが、ひっきりなしに襲ってくる攻撃にだんだんとジリ貧になって行った。

ソーラー 「まずい、このままじゃこっちのエネルギーが先に無くなっちゃう!!」

闇に覆い尽くされている空では、エネルギーの補充など望むべくもないため、この前哨戦であまり派手な行動をするわけにいかないソーラーはかなり焦り始めていた。

リリーフ 「確かに、でもこの状況じゃ… せめて急所がわかれば…」

その時、研究所から通信が入った。

遠藤『急所か… リーフ、イエローハンドで奴の内部をスキャンするんじゃ!!』

リリーフ「博士？ あてがあるんですか？」

遠藤『ああ、不本意じゃが一応な』

それを聞いたリリーフはすかさずマルチハンドを換装した。

リリーフ「チェンジハンド・タイプイエロー!! センサーアイ、発射!!」

掛け声とともに換装された黄色の腕から、小さなロケットセンサーアイが発射された。

それからもたらされたブルペノンの情報はリリーフを通して研究所の面々にも伝わった。

遠藤平和科学研究所

Dr. フライ「ここじゃ!! ここにある妙なスペースを調べようとしたらわしは放り出されたんじゃ」

リリーフのイエローハンドからもたらされたスキャン映像を指令室のモニターで見ながら、Dr. フライは叫んだ。

遠藤「間違いなかろうな!？」

Dr. フライ「当たり前じゃ!! わしを誰だと思つとる!! 一度見ただけじゃが絶対に忘れんわ!!」

遠藤「信じられんのはお前の記憶力ではない、お前自身じゃ!! 変なことを教えてあやつらを嵌める気ではあるまい!？」

相も変わらないセリフを吐いたD r. フライに対して、さしもの遠藤博士も当然だともいうように疑いを投げた。

D r. フライ「ふん!! 今回ばかりは本当じゃ!! 悔しいがあこのUFOに仕掛けをする時間がなかったものでな。あやつらプリキュアに負けてもらっては困る!!」

ラン「今回ばかりは… って」

豪「自分で言ったりや世話ねえよ」

豪とランも今の言葉には引きつっていたが、それは現場も同じであった。

リリーフ「:D r. フライ、私たちの体も修理してくれたけど本当に信用できるのかなあ」

ダイダー「確かに。畏じやないと断言できないのがね…」

D r. フライは一度戦った相手であり、人間性もよく知っている。やはりどうしても割り切れないところが今一つあり、信用しているものかどうか躊躇していた。

ソーラー「私は信じます!! …というより信じて賭けてみるしかないじゃないですか!!」

そんな空気を払うかのようにきっぱりと言い切ったソーラーの言葉に、リリーフとダイダーもフツと笑った。

リリーフ「そうだよ。それじゃ一丁行きますか」

しかし、決意を新たにしたところでブルペノンからの攻撃が止むわけではなく、それどころか一層激しくなってきた。

ダイダー「くっ… これじゃ攻め込むどころか、まともに攻撃も…」

そうして防戦一方になっている中、極太のビーム砲が次々と発射され、どす黒い弾を消滅させて行った。

リリーフ「えっ!？」

ソーラー「これは…」

河内「無事か!? コズミックプリキユア!!」

ダイダー「河内警部!? なぜここに!？」

志夜「避難誘導に時間を取られてくるのが遅くなりました。援護しますから思いっきりやってください」

その言葉とともに、河内警部と志夜刑事の二人は小脇に抱えたプラズエネルギー砲を乱射した。

ソーラー「いや、答えになってませんって。危険ですから早くあなたたちも避難を!!」

そこに河内警部の怒声がすかさず飛んできた。

河内「馬鹿野郎!! この世界と本来無関係な奴が全力で戦ってるのに、この世界を守らなにやならん警察官がおめおめ避難できるか!!」

ダイダー「ふっ、そうでしたね」

リリーフ「じゃあ、早くあいつをなんとかしないと大変だね」

ソーラー「志夜刑事ありがとうございます。じゃあ遠慮なくお言葉に甘えて」

その言葉にもつともだというように苦笑いをする、ソーラーは腰

の左右のクロムスティックを取り外して両手に構えた。

ソーラー「行つくぞー!!　プリキュア・ドリルドライバー!!」
次の瞬間、スティックを両手に構えてドリルのように高速きりもみ回転しながらソーラーは弾幕の中を一直線にブルペノンに突っ込んで行った。

リリーフ「私たちも!!」

ダイダー「負けてられないわ!!　来なさいライナージェット!!」

そのダイダーの呼びかけに応え、空を切り裂いてライナージェットが飛来してきた。

二人は大ジャンプしてそれに飛び乗ると、ソーラーの後に続くようにブルペノンへと突っ込んで行った。

もちろんそんな彼女たちに対して一層激しい攻撃が行われたが、

ダイダー「チェンジハンド・タイプグリーン!!　超高熱プラズマ
火炎発射!!」

リリーフ「チェンジハンド・タイプブルー!!　エレキ光線連続発射
!!」

各々マルチハンドを換装し、それを迎撃しひるむことなく突撃して行った。

河内「頼むぞ…　コズミックプリキュア…」

志夜「お願いします。この世界を…」

そしてそんな光景を近くのビルの屋上で見ていた存在がいた。

ゆう「…賞賛する。さすがは私の叔母だ。臆することなく立ち向かうとはな。あの紛い物もそれなりにはやるか」

小さく呟くとゆうは左手を親指・人差し指・中指の三本を立てて前に突き出した。

ゆう「チェインジ!!」

そう叫ぶと、突き出した左手の指を立てたまま、手の甲を内向きにして顔の前へと横向きを持って行き、人差し指と中指の間から赤い右目を光らせた。

ゆう「スイッチ・オン!!」

次の瞬間、黒い電流のようなものが火花をあげてゆうの全身を走り、彼女の姿は、フリルのない落ち着いたデザインのロングスカートと黒一色のドレスとなっており、同じく黒一色の肘まである手袋とブーツを着用していた。

バトルスタイル キュア・デッドにチェンジしたゆうもまた、何かを確認したいというように単身ブルペンへと飛んで行った。

ソーラー「とりやあああ!! よし、突入成功!! って、え?」
ブルペンにどうにか接近し、外壁をドリルのようにぶち抜いて中に侵入したソーラーだが、そこで目を疑った。

ソーラー「な、なにこれ? 真っ暗じゃない」

ブルペノンの中は真の闇というのがふさわしい空間であり、ソーラーのアイカメラでもやっと見えるかどうかといったレベルだった。ソーラー「一体、こんな中でどんな人がいるの…」

(近づくな… 光…)

どこからともなく声が響いたかと思うと、周辺から銃弾が次々とソーラーを襲い始めた。

ソーラー「う、うわっ!!」

侵入を必死に拒み、何とかして追い出そうと四方八方から執拗に仕掛けられる攻撃にソーラーは苦戦していた。

ソーラー「くっそー!! これじゃ進めない」
攻撃をかわしつつステイクを振り回して、攻撃を防いでいたソーラーだがじりじりと後退せざるを得なくなっていた。

その時、隔壁をぶち破ってライナージェットに乗ったりリリーフとダイダーが飛び込んできた。

リリーフ「こんなもの!! エレキ光線連続発射!!」

ダイダー「ソーラ、あなたは行きなさい!! 超低温冷凍ガス発射!!」

ソーラー「はい!! ありがとうございます!!」

マルチハンドをフル活用して、一面の銃口を破壊し突破口を開いてくれた先輩に感謝しつつ、ソーラーは奥へ奥へと進んでいった。

ソーラ「なんとしても、相手の本当の正体を知りたい。それがわかれば、この戦いの理由も、そうすればきつと…」

その思いから全力で突き進んでいたソーラだったが、一層激しくなっていく攻撃は如何ともし難かった。

ソーラー「私はここで負けられない!! こうなったら…」

ソーラーは目の前で両腕を組み全身に力を溜めると、全身が輝き始めやがて光の塊になった。

ソーラー「行くぞ、プリキュア・フラッシュダッターシュ!!」

その掛け声とともにソーラーは、隔壁を破壊しつつ一直線に突っ込んでいった。

ソーラー「ふう、なんとかさつき指示されたところまで来たぞ…」

ここに来るまでに相応のエネルギーを消耗してしまっており、どうにか変身を維持できている状態になったソーラーに、遠藤博士から通信が入った。

遠藤『ソーラ、聞こえるか!? その扉の奥が中心ブロックじゃ』

今ソーラーの目前には一際立派かつ頑丈そうな扉があり、いかにも玉座への入り口といった雰囲気があった。

ソーラー「この先に…」

ソーラーが力を込めて扉を押すと、鈍い音ともにゆっくりと開いていった。

扉の開いた先にあったのは、手狭ではあったものの闇の中でもわかるほど立派な部屋であった。

石でできた壁や床、そして部屋のサイズには不釣り合いなほど巨大な椅子があり、そこにはフードをかぶった何者かが鎮座していた。

ソーラー「あなたが、こここの主人。全ての元凶…」

ソーラーを見ても身じろぎひとつしないその存在を見て、ソーラーは意を決して駆け寄った。

ソーラー「あなたは一体誰!?　なんでこんなことを、世界を闇に染めようとするの!?!」

心からの叫びとともに詰め寄ったソーラーだったが、その存在は声ひとつ発しようとしなかった。

ソーラー「聞く耳も持たないっていうの…　だったら!?!」

自分を完全に無視するかのような態度に、ソーラーはイラついたように椅子に飛びかかった。

ソーラー「正体を見せなさい!!」

その叫びとともにフードを剥ぎ取るとそこにあつたものに驚愕した。

ソーラー「!!!」

そのソーラーの見たものは遠藤平和科学研究所にもリアルタイムで送信されており、皆は言葉を失った。

ラン「きゃあああ!!」

豪「嘘だろ!?!」

D r. フライ「な、何い!?」
遠藤「こ、これは!!」

ソーラー「なっ!? ど、どういうこと!?!」

そこにあつたものはすでにミイラと化した死体であり、フードを剥ぎ取られた勢いで椅子から転がり落ちた。

そしてその衝撃で粉々に砕けてしまった。

ソーラー「これは完全に死んでる… よね… じゃあ…」

リリーフ「ソーラー!!」

ダイダー「どういうことこれ!?!」

防衛システムをなんとか突破して駆けつけたリリーフとダイダーだったが、この二人にも事態が飲み込めないでいた。

リリーフ「これ、とつくに死んでる人を守ってたってことなの?」
ダイダー「そんなはずは… 死体を守るためだけにこれほどのことをするなんて… 何か他に守りたいものがあるはず…」

ソーラー「で、でも、生きてる人なんてどこにも…」

部屋の中を見回したソーラだったが、全く人の気配がしておらず、薄気味悪さを感じ始めていた。

ソーラー「誰か!! 誰かいないの!! 隠れてないで出て来なさい!!」

あたりに大声で呼びかけるものも、返事はどこからも帰ってこなかった。

そんな異常極まりない空気の中、コツコツと足音を響かせてデッドが部屋の中にゆっくりと入ってきた。

デッド「質問する。まがい物よ、この者と対話をするのではなかったのか」

ソーラー「う、うるさいな!! 話をしようにも相手が見当たらないんだから仕方ないでしょ!!」

そのどこか小馬鹿にしたような言葉にイラついたように怒鳴りつけたソーラーだったが、デッドは静かに腕を持ち上げて指差した。

デッド「回答する。この生命維持システムが総力を挙げて守ろうとしていた最後の生物はそこにいる」

ソーラー「…えっ?」

その言葉に怪訝な顔をしつつ、デッドの指差したもの 手にしていたフードをソーラーはまじまじと見つめた。

リリーフ「それがどうかしたの?」

ダイダー「ただのフードじゃない。少し汚れてるだけの…」
そこまで考えて、三人はハツと気がついた。

ソーラー「ま、まさか…」

言葉を失いわなわなと震えながら、ソーラーは手元にある小さな黒ずみを見つめた。

そのソーラーの見たものは遠藤平和科学研究所のモニターにもアップで映っていた。

豪「なんだってんだよ。ダイーダ姉ちゃんという通りちよつと汚れてるだけじゃん」

ラン「ん？ 待って、ソーラさんの手のところもう少しアップにできてる？ ほらあの指の爪ぐらいの大きさの黒ずみのところ!!」

遠藤「お、おお。待つとれ」

機器を操作してランの指摘した部分を大写しにしたところ、その黒ずみがモニター一面に映し出された。

ラン「やっぱり… ただの汚れじゃないわこれ」

Dr. フライ「ん？ 確かに… いやしかし、これは…」

豪「う、嘘だろ… あれってまさか…」

遠藤 「カビ…か？」

ダイダー 「まさか…このカビを生かしておくために…」
リリーフ 「世界を… 闇に…」
あまりの事実の皆が愕然とする中、全く動じることなくデッドは
淡々と回答した。

デッド 「肯定する。それは光のあるところでは死滅してしまうほど
脆いものだからな」

ソーラー 「あ、あなた… こ、このこと、初めから知ってて… な

んで… 教えて…」

デッド「回答する。無意味だからだ。そいつはただ生きようとしていただけ。このシステムはそれを守ろうとしていただけ。お前たち同様にな。生存環境が相反するものである以上、決して相容れないことなどわかっていた」

ソーラー「で、でも…」

デッド「言ったはずだ。相手に対話の意思などないと」

ソーラー「くくくっ!!!」

感情のぶつけどころがなく、思わず手に力が入ったソーラーは手にしていたフードを握りつぶしてしまった。

そしてその瞬間、何かの警告ブザーのような音が鳴り響いた。

(全生命体死滅確認。全システムおよび機能停止…)

その言葉とともにブルペンは大きく揺れ、ソーラーたちは一瞬浮き上がった。

リリーフ「こ、これは!? 落下し始めてる?」

ダイダー「まずい、これが落下したら街が!!」

デッド「状況確認、撤収する」

このままではまずいとリリーフとダイダーは飛び出していき、デッドもまた壁を突き破って飛び出して行った。

一人残ったソーラーは、肩を震わせながら手にしていたフードをし

ばらく見つめていた。

ソーラー「…こんな、こんなことって…」

リリーフ『ソーラ、どうしたの？ 早く脱出して!!』

ダイダー『これを落下させるわけにいかない。破壊するから早く!!』

その通信が入ったところで、ソーラーは声にならない絶叫を上げて飛び出した。

そして外に飛び出すや否や立体映像投影装置を起動させ、髪の色が赤と青と黒になっている三体の分身を作り出した。

ソーラー「モードデイヴィジョン!!」

そして分身完了するとともに、四人になったソーラーはブルペノンの四方に陣取り、取り外したクロムスティックの先端から光のビームを発射した。

ブルペノンを閉じ込めるようにビームを辺にした正八面体 インフィールドゾーンを生成した。

ソーラー「プリキュア・シャイニーダイヤモンド…」

ソーラーは悔しそうに歯噛みをしていたが、何かを振り切るように叫んだ。

ソーラー「フィニッシュ!!」

指を鳴らした瞬間、インフィールドゾーンの中で目もくらむばかり

の強烈な閃光とともに大爆発が発生しブルペンは木っ端みじんに
砕け散った。

その爆発を見上げながら河内警部と志夜刑事の二人は感慨深げに
眩いた。

志夜「…終わったんですね」

河内「ああ… 長い長い戦いが…」

そして侵食されていた闇は瞬く間に消滅していき、澄み渡る青空と
ともに太陽が眩しく輝き始めると、実に嬉しそうなレポートが繰り広
げられた。

節子「テレビの前の皆様!! この光景をご覧になられていますで
しょうか。地球はプリキュアの手によって救われたのです。この感
激、この感動、もはやなんといいていいかわかりません!! ただひた
すら感謝感激を述べるだけでございます!!」

その後…

遠藤平和科学研究所

河内「D r. フライ。逮捕する」

全てが終わったのち、再び逮捕されることにもなんの抵抗もせず、

D r. フライは連行されていった。

D r. フライ「おうおう、好きにせい。どうせわしは不死身じゃからな。愚かな人類が滅亡しても生き延びて、その愚かっぷりを未来永劫語り継いでやるわ!!」

その捨て台詞だけを残して

遠藤「全くフライのやつめ。捨て台詞だけは立派じゃな。しかし…」

D r. フライの態度に辟易しつつも、遠藤博士はソーラたちに感謝を込めて頭を下げた。

遠藤「お前たち、よくやってくれた。ありがとう」

深々と頭を下げての礼にもかかわらず、ソーラの表情は曇ったままだった。

リーフ「ソーラ、もつと胸を張りなさい」

ダイーダ「あなたは立派に務めを果たしたわ。もう見習いじゃない、一人前のプリキュアよ」

豪「そうだけ。俺たちがこうして生きてるのも姉ちゃんのおかげだぜ」

ラン「ありがとう。プリキュア」

そんなソーラをリーフとダイーダは褒め称え、豪とランも感謝の意を表した。

ソーラ「見習いじゃない…ですか…」

ポツリとつぶやいたソーラは悔しそうに拳を握りしめた。

ソーラ「結局私は何にもできなかつた。相手を理解することも助けることも… ただ破壊しただけ…」

リーフ「ソーラ…」

ソーラ「力を物を壊すことにしか使えなかつたなんて… 私はまだまだ…」

俯いたままのソーラに皆は何も言えなくなってしまうていたが、やがてソーラは意を決したように顔を上げた。

ソーラ「先輩、私もつと、色々なものを見て、色々なことを知って、色々な人に会ってみたいんです… 自分がしたこと、これからできること、いっぱい考えてみたいです。だから…」

ダイーダ「この世界にしばらく残るってことかしら」

遠藤「しかも、ここに残るつもりもないな」

二人の言葉にソーラはこくりと頷いた。

ソーラ「すいません。この体、もうしばらくお借りしていいですか？」

リーフ「ただプリキュアに憧れてた頃のあなたとは大違いだね」

ダイーダ「こんなことを言い出すとはね。いいわ、報告は私たちがしておくから、あなたが納得できる時が来たら連絡をしなさい」

ソーラ「はい!!」

そうして、リーフとダイーダはアンドロイドのボディから分離し、

光の玉となって空高く去っていった。

それを見届けた後、ソーラもまた研究所の面々に深々と頭を下げた。

ソーラ「すみません。最後の最後までわがまま言って迷惑かけて」

豪「へへっ。いいっていいって」

ラン「ソーラさんにはそれぐらい言う権利はあるもの」

遠藤「ソーラ。目一杯勉強して立派になるがいい。ただ世界は狭いように広い。多くを学ぶにあたって辛いことや苦しいことも山のようにあるじやろう。じゃがな…」

優しい笑みを浮かべつつも険しい表情とともに、遠藤博士は言い置いた。

遠藤「どんな困難や絶望が迫って来ても決してくじけるでないぞ。諦めることも立ち止まることもせず前に進むんじや。おそらくそれが…」

一拍置き、ソーラもまた真剣な顔で次の言葉を待った。

遠藤「生き残り勝ち残ったものが、滅ぼしたものに対する唯一の責任の取り方じやろうからな」

その言葉に、皆真剣な顔で頷くと最後のあいさつを交わした。

ソーラ「私もっともつと強く立派になるよ。 本当に、ありがとう

ございました!!」

豪「うん!! …またね!!」

ラン「元気だね!!」

その言葉に見送られソーラは何処ともなく飛び去っていった。

そしてその光景を遠くから見つめる存在がいた。

ゆう「賞賛する。もっと強くなれ、いつかまた会おう」
フツと口角を優しく上げるとゆうはポツリとつぶやいた。

ゆう「私の、妹…」

その言葉とともにゆうもまた目の前に黒い空間のようなものを広げてその中に消えていった。

終